

当向遺跡 2 青木北原遺跡

北関東自動車道(協和～友部)建設
事業地内埋蔵文化財調査報告書 XV

平成 19 年 3 月

東日本高速道路株式会社
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第271集

とう むかい
当 向 遺 跡 2
あお き きた はら
青 木 北 原 遺 跡

北関東自動車道(協和～友部)建設
事業地内埋蔵文化財調査報告書 XV

平成 19 年 3 月

東日本高速道路株式会社
財団法人 茨城県教育財団

序

茨城県は、県土の均衡ある発展を念頭におきながら地域の特性を生かした振興を図るために、高規格幹線道路などの根幹的な県土基盤の整備とともに、広域的な交通ネットワークの整備を進めております。北関東自動車道建設事業も、その目的に添って計画されたものです。

このたび、東日本高速道路株式会社（旧日本道路公団）は、桜川市（旧岩瀬町）本郷、同（旧大和村）青木両地区において、北関東自動車道（協和～左部）建設事業を決定しました。この事業地内には埋蔵文化財包蔵地である当向遺跡と青木北原遺跡が所在します。

財団法人茨城県教育財団は、東日本高速道路株式会社から埋蔵文化財発掘事業について委託を受け、平成15年10月から平成17年8月まで発掘調査を実施しました。

本書は、当向遺跡と青木北原遺跡の調査成果を収録したもので、学術的な研究資料はもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である東日本高速道路株式会社から多大なる御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、桜川市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、感謝申し上げます。

平成19年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 人 見 實 徳

例 言

1 本書は、東日本高速道路株式会社（旧日本道路公団）の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成15年度から17年度にかけて発掘調査を実施した、茨城県桜川市（旧西茨城郡岩瀬町）本郷1,044番地の1ほかに所在する当向遺跡と、同市（旧真壁郡大和村）青木1,100番地の2ほかに所在する青木北原遺跡の発掘調査報告書である。

2 発掘調査期間及び整理期間は以下の通りである。

調 査

当向遺跡 平成15年10月1日～平成16年1月31日

平成17年5月1日～平成17年6月30日

青木北原遺跡 平成16年8月1日～平成16年11月30日

平成17年7月1日～平成17年8月31日

整 理 平成18年4月1日～平成19年3月31日

3 発掘調査は、調査課長川井正一のもと、以下の者が担当した。

当向遺跡

平成15年度

首席調査員兼班長 村上 和彦 主任 調査員 長谷川 聡

主任 調査員 青木 仁昌

平成17年度

首席調査員兼班長 川又 清明 主任 調査員 青木 亨

副主任 調査員 片野 靖久

青木北原遺跡

平成16年度

首席調査員兼班長 江幡 良夫 主任 調査員 石川 武志

主任 調査員 大塚 雅昭 平成16年10月1日～平成16年11月30日

副主任 調査員 片野 靖久 平成16年8月1日～平成16年9月30日

平成17年度

首席調査員兼班長 川又 清明 主任 調査員 寺内 久永

副主任 調査員 片野 靖久

4 整理及び本書の執筆、編集は、整理第二課長大森雅之のもと、以下の者が担当した。

主任 調査員 片野 靖久 第1章～第3章、第4章3節・4節

主任 調査員 青木 亨 第4章1～3節2・5

凡 例

- 1 地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標を原点とし、当向遺跡はX軸＝＋40880.000m、Y軸＝＋19440.000mの交点を、青木北原遺跡はX軸＝＋39600.000m、Y軸＝＋22960.000mの交点をそれぞれ基準点(A1a1)とした。なお、当向遺跡2の抄録の北緯、東経の()欄には、世界測地系座標に基づく緯度・経度を()に付して併記した。

この基準点を基に、遺跡範囲内を東西南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C・・・、西から東へ1、2、3・・・とし、「A1区」「B2区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa、b、c・・・、西から東へ1、2、3・・・とし、名称は「A1a1区」「B2b2区」のように呼称した。

- 2 実測図・一覧表・遺物観察表で使用した記号は次のとおりである。

遺構 SI-住居跡 SB-掘立柱建物跡 SH-方形竪穴遺構 SA-柵列跡 SK-土坑 SD-溝跡

SE-井戸跡 SF-道路跡 PG-ピット群 P-柱穴

遺物 P-土器・陶磁器 TP-拓本記録土器 DP-土製品 Q-石器・石製品 M-金属製品

G-ガラス製品 T-瓦

土層 K-擾乱

- 3 土層観察と遺物における色調の判定には『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。

- 4 遺構及び遺物の実測図中の表示は、次のとおりである。

	焼土		炉床面・火床面
	竈・粘土・黒色処理		柱痕・抜き取り痕・煤・墨
●	土器	○	土製品
□	石器・石製品	△	金属製品
■	瓦	----	硬化面

- 5 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は400分の1、遺構は60分の1または80分の1に縮尺して掲載した。

(2) 遺物は原則として3分の1に縮尺した。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては各々に縮尺をスケールで表示した。

- 6 「主軸方向」は、竈(炉)をもつ竪穴住居跡についてはそれらを通る軸線とし、他の遺構については長軸(径)を主軸とみなした。「主軸・長軸(径)方向」は、主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で示した(例 N-10°-E)。

- 7 遺構一覧表・遺物観察表の記載方法は次のとおりである。

(1) 計測値の単位はm、cm、gで示した。なお現存値は()、推定値は[]を付して示した。

(2) 備考の欄は、残存率や写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号については、土器、拓本記録土器、石製品、金属製品、ガラス製品、瓦ごとに通し番号とし、挿図、観察表、写真図版に記した番号は同一とした。

なお「当向遺跡2」の遺構・遺物番号は、「当向遺跡1」からの継続である。

- 8 「当向遺跡」では平成14年度調査区を第Ⅰ区とし、平成15年度調査区を第Ⅱ区、平成17年調査区を第Ⅲ区とした(図2参照)。青木北原遺跡は平成16年調査区を第Ⅰ区、平成17年調査区を第Ⅱ区とした(図80参照)。

抄 録

ふりがな	とうむからいせきに あおききたはらいせき								
書名	当向遺跡2	青木北原遺跡							
副書名	北関東自動車道(協和～友部)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書								
巻次	XV								
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告								
シリーズ番号	第271集								
著者名	片野清久 青木 亨								
編集機関	財団法人 茨城県教育財団								
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587								
発行日	2007(平成19年)年3月23日								
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因	
当向遺跡2	茨城県桜川市本郷 1,044番地の1ほか	08231 - 324082	36度 21分 54秒	140度 3分 22秒	55 ～ 65m	20031001 ～ 20040131	2,027.6㎡	北関東自動車道(協和～友部)建設事業に伴う事前調査	
			(36度 22分 05秒)	(140度 3分 21秒)		20050501 ～ 20050630	1,424.0㎡		
青木北原遺跡	茨城県桜川市青木 1,100番地の2ほか	08231 - 504031	36度 21分 22秒	140度 05分 24秒	43 ～ 45m	20040801 ～ 20041130	1,759.0㎡		
						20050701 ～ 20050831	1,756.0㎡		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物				特記事項
当向遺跡2	集落跡	古 墳	竪穴住居跡 4軒		土師器, 鉄製品(轡・刀子・鎌), 土製品(支脚), 石器(砥石)				
		奈良・平安	竪穴住居跡 22軒		土師器, 須恵器, 石器(砥石), 鉄製品(鎌・刀子・釘), 椀状滓, 瓦				
		中・近世	溝跡 3条 土坑 2基		古銭				
		時期不明	竪穴住居跡 1軒 掘立柱建物跡 1棟 溝跡 4条 土坑 32基 ピット群 3か所						
	生産跡	中・近世	炭焼窯跡 4基						

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
青木北原遺跡	集落跡	古 墳	竪穴住居跡 40軒	土師器、須恵器、土製品（小玉・支脚）、石器（磨石・砥石）、石製品（管玉・白玉・紡錘車・有孔円板・双孔円板・剣形模造品）、鉄製品（刀子・鏃・鎌・釘）、ガラス製品（小玉）		
			土坑 8基			
		奈良・平安	竪穴住居跡 23軒			土師器、須恵器、土製品（支脚・土玉）、石器（砥石）、石製品（紡錘車）、鉄製品（刀子・鎌・釘・鏃）、鉄滓、瓦
			土坑 2基			
		中 世	方形竪穴遺構 3軒			
墓坑 2基						
時期不明	竪穴住居跡 4軒	弥生土器、土師器、須恵器	掘立柱建物跡 2棟 柵列跡 4か所 溝跡 13条 井戸跡 3基 道路跡 1条 土坑 69基 ピット群 8か所 不明遺構 1基			
掘立柱建物跡 2棟						
柵列跡 4か所						
溝跡 13条						
井戸跡 3基						
道路跡 1条						
土坑 69基						
ピット群 8か所						
不明遺構 1基						
その他	弥 生	土坑 6基	弥生土器			
要 約	<p>当向遺跡は、古墳時代後期から平安時代にかけて断続的に営まれた複合遺跡である。また、平安時代の竪穴住居跡の中には竪の補強材として瓦片を使用したものがあり、近くの新治郡衙跡や新治廃寺との関連が考えられる。</p> <p>青木北原遺跡は、弥生時代から中世にかけての複合遺跡であり、近接する辰海道遺跡や犬田神社前遺跡との関わりが考えられる。</p>					

目 次

序	
例言	
凡例	
抄録	
目次	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 当向遺跡2	9
第1節 遺跡の概要	9
第2節 基本層序	9
第3節 遺構と遺物	10
1 古墳時代の竪穴住居跡と遺物	10
2 奈良・平安時代の竪穴住居跡と遺物	19
3 中・近世の遺構と遺物	63
(1) 炭焼窯跡	63
(2) 溝跡	68
(3) 土坑	69
4 その他の遺構と遺物	71
(1) 竪穴住居跡	71
(2) 掘立柱建物跡	72
(3) 溝跡	74
(4) 土坑	76
(5) ビット群	81
(6) 遺構外遺物	83
第4節 まとめ	86

第4章 青木北原遺跡	95
第1節 遺跡の概要	95
第2節 基本層序	95
第3節 遺構と遺物	97
1 弥生時代の土坑と遺物	97
2 古墳時代の遺構と遺物	102
(1) 竪穴住居跡	102
(2) 土坑	187
3 奈良・平安時代の遺構と遺物	193
(1) 竪穴住居跡	193
(2) 土坑	241
4 中世の遺構と遺物	243
(1) 方形竪穴遺構	243
(2) 墓坑	246
5 その他の遺構と遺物	247
(1) 竪穴住居跡	247
(2) 掘立柱建物跡	251
(3) 柵列跡	253
(4) 溝跡	255
(5) 井戸跡	262
(6) 道路跡	265
(7) 土坑	265
(8) ビット群	275
(9) 不明遺構	281
(10) 遺構外遺物	282
第4節 まとめ	285

写真図版

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

東日本高速道路株式会社（旧日本道路公団）は、常陸那珂港と北関東の各主要都市を結ぶ北関東自動車道の早期完成を目指している。

平成10年11月4日、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、北関東自動車道建設事業内における埋蔵文化財の所在の有無とその取扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成10年12月15～18日に当向遺跡の現地踏査を、平成12年7月28日に試掘調査を実施した。また、平成11年2月17日に青木北原遺跡の現地踏査を、平成12年12月13日、平成15年10月16・17日、11月17・18日に試掘調査を実施し、遺跡の所在をそれぞれ確認した。平成12年9月11日及び平成15年11月19日、茨城県教育委員会教育長は日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長あてに事業地内に当向遺跡及び青木北原遺跡が存在する旨を回答した。

日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、平成13年7月12日に当向遺跡、平成16年2月9日に青木北原遺跡について文化財保護法第57条の3第1項（現 94条）の規定に基づき、土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長あてに、平成13年7月13日に当向遺跡、平成16年2月23日に青木北原遺跡について、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

日本道路公団東京事務局水戸工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、北関東自動車道建設に係わる埋蔵文化財発掘調査の実施について、当向遺跡について平成15年2月26日、及び平成17年1月25日、青木北原遺跡については平成16年3月10日、及び平成17年1月25日にそれぞれ協議した。

茨城県教育委員会教育長は、日本道路公団東京事務局水戸工事事務所長あてに、当向遺跡について平成15年2月27日、及び平成17年2月14日、青木北原遺跡について平成16年3月15日、及び平成17年2月14日に発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、日本道路公団東京事務局水戸工事事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、当向遺跡は平成15年10月1日から平成16年1月31日、平成17年5月1日から平成17年6月30日まで、青木北原遺跡は平成16年8月1日から平成16年11月30日、平成17年7月1日から平成17年8月31日まで発掘調査をそれぞれ実施することとなった。

第2節 調査経過

当向遺跡は平成15年10月1日から平成16年1月31日、平成17年5月1日から平成17年6月30日まで実施した。青木北原遺跡は平成16年8月1日から平成16年11月30日、平成17年7月1日から平成17年8月31日まで実施した。その概要を表で掲載する。

当向遺跡

月 作業工程	平成15年度				平成17年度	
	10月	11月	12月	1月	5月	6月
調査 表遺 査土 構準 除確 備去 認	■				■	
遺 構 調 査	■	■	■	■	■	■
遺 注 写 物 記 真 洗 作 整 浄 業 理		■	■	■	■	■
補 足 調 査 撤 収						■

青木北原遺跡

月 作業工程	平成16年度				平成17年度	
	8月	9月	10月	11月	7月	8月
調査 表遺 査土 構準 除確 備去 認	■				■	
遺 構 調 査	■	■	■	■	■	■
遺 注 写 物 記 真 洗 作 整 浄 業 理		■	■	■		■
補 足 調 査 撤 収					■	■

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

当向遺跡は桜川市（旧西茨城郡岩瀬町）本郷1,044番地の1ほか、青木北原遺跡は同市（旧真壁郡大和村）青木1,100番地の2ほか

に所在している。茨城・栃木・福島の3県に連なる八溝山地は、八溝・鷲の子・鷗足・筑波の山塊からなり、なだらかな山並みを形成している。遺跡周辺の地勢は三方を山に囲まれ、旧岩瀬町を中心に盆地状の地形を形成している。

北は鶴足山塊から派生する支脈が仏頂山（430m）、高峯（520m）、雨巻山（533m）、富谷山（365m）と連なり、西側は小貝川の沖積地が広がっている。南は御嶽山（231m）、雨引山（409m）、燕山（701m）と筑波山の山々がそびえている。東は棟峰（263m）を中心に、溜沼川水系との分水嶺となっている。岩瀬盆地の中央を流れる桜川は、鏡ヶ池を水源として西に流れて盆地の南西部で支流の泉川と合流し、流れを南に変えながら筑波山の西側をめぐる霞ヶ浦に注いでいる。

盆地の周縁部は、浸食により開折をうけた根根とそれに続く台地が広がっている。盆地の内部は、長辺寺山（142m）をはじめとする独立丘が点在し、桜川とその支流によって形成された沖積地が広がっている。

当向遺跡は、旧岩瀬市街地から西に5kmほど離れた盆地の外縁部に位置している。背後に標高約280mの丘陵をひかえ、そこから南に緩やかに延びる標高55～65mの根根上に立地している。遺跡の南側には桜川に続く沖積地が広がり、東と西はこの沖積地から山裾に向かって延びる谷となっている。

青木北原遺跡は、岩瀬盆地西部に立地し、この盆地を流れる桜川左岸の標高43～45mの台地上に立地している。調査前の現況は当向遺跡が宅地、青木北原遺跡が畑地及び宅地である。

第2節 歴史的環境

旧岩瀬地域は、北関東の内陸部から太平洋へ至る交通路と、霞ヶ浦を北上して那須方面に至る交通の要所である。起伏が緩やかな山々の恵み多い沖積地のため、古来より人々の生活の場として営まれ、数多くの遺跡が確認されている。ここでは、当向遺跡が立地している岩瀬盆地の西部から桜川左岸にかけての台地上に所在する遺跡を中心に述べることにする。

縄文時代には、台地や山麓付近に集落が営まれるようになる。当向遺跡の北西側に隣接する山ノ入古墳群<7>では第2号墳下より竪穴住居跡や炉穴跡が検出されている¹⁾。また、当遺跡の東麓の金谷遺跡<3>や「当向遺跡1」の調査において縄文時代の陥し穴が検出されている²⁾。桜川右岸の犬田神社前遺跡<11>では、中期中葉の竪穴住居跡や陥し穴が検出されている³⁾。盆地中央には長辺寺山の西側斜面に長辺寺遺跡<38>が、桜川右岸には高森遺跡<29>、高森西遺跡<30>が点在している⁴⁾。

弥生時代には、後期になると当向遺跡、辰海道遺跡<9>、犬田神社前遺跡などで竪穴住居跡が検出され、集落が営まれていたことが確認できた。また、盆地北部の大泉地区から中期の特徴を持つ壺形土器が出土している⁵⁾。

古墳時代では、後期の遺跡が多く検出されている。特に辰海道遺跡は、集落の規模が拡大し、拠点的な集落としての様相を持っている。同遺跡では豪族の居館跡と考えられる方形の環濠遺構や9mを超える大形の住

居跡も確認され、有力な豪族がこの地に基盤を置いていたことが明らかにされている⁹⁾。有力者の墓である古墳は、遅くとも前期末までには岩瀬地域に築かれている。長辺寺山の山麓に位置する狐塚古墳〈39〉(全長36m, 前方後円墳)は、岩瀬地域で最初に築かれた首長の墓である。盆地中央部に位置する青柳古墳群〈37〉では、第2号墳から墳頂下に粘土層が2基確認され、さらに古墳の裾部に箱式石棺5基が確認された。青柳古墳群に近い長辺寺山古墳〈36〉(全長120m, 前方後円墳)は標高130mの長辺地山の山頂に位置しており5世紀後半に築かれたと思われる。県内でも早い段階に埴輪を伴う古墳の一つで、岩瀬地域最大の前方後円墳である。また盆地東部に所在する松田古墳群〈31〉では、全長40mの前方後円墳から直刀・銅鏡(五獣形鏡)・銅剣その他が出土している¹⁰⁾。これら岩瀬東部周辺の古墳は、当地域古墳文化の成立を考える上で重要な古墳といえよう。盆地西方の桜川沿いには高森古墳群〈27〉、青木古墳群〈28〉、犬田山上古墳群〈10〉など多く築造されている。特に、山ノ入古墳群は古墳時代末期の古墳群で、前方後円墳である第2号墳を中心として23基の古墳・石室が確認されている¹¹⁾。

奈良・平安時代の岩瀬地域は、東部が常陸国新治郡大幡郷に、西部は同じく坂門郷に編入される¹²⁾。一方、犬田など旧岩瀬町南部及び青木地区を含む旧大和村北部は、真壁郡伴郷に属し、新治郡との境界線に位置していた¹³⁾。

これに伴い、この地に勢力を持っていた新治国造も、新たに郡の大領として律令制下の地方官に組み込まれている。「当向遺跡1」の調査において、堅穴住居跡や土坑から石製の巡方や、「新大領」と書かれた須恵器の蓋が出土しているなど、郡の支配力が強かったことがうかがわれる¹⁴⁾。

新治郡衙跡〈12〉や新治院寺跡〈13〉などの郡の主な施設は、新治郡に比定されている筑西市(旧協和町)古郡地区に設けられている。これに伴って上野原瓦窯跡〈18〉、本郷瓦塚遺跡〈6〉、などの瓦窯が整備され、特に間中遺跡〈32〉では製鉄が行われるなど、盛んに生産が進められている¹⁵⁾。また須恵器の生産が盛んとなり、堀ノ内古窯跡群〈17〉は、益子町西山・本沼釜跡群などの窯跡とともに周辺の集落に製品を供給している¹⁶⁾。「続日本記」に掲載されている新治郡大領新治直子公が、銭二千貫と布布一千反を献納する記事も、こうした生産性の高い地域を掌握したことが多額の献納を可能にした背景と考えられる¹⁷⁾。

律令制の衰退は、各地の荘園形成に見られ、岩瀬地域でも蓮華王院を領主とする中郡荘が成立している。大和地域では青木地区が中郡荘の一部に、大国王地区が小栗御厨になっている¹⁸⁾。

中世以降、中郡庄の地頭職は中郡氏が任命された。その後は安達氏、北条得宗家が当地を支配した。室町時代になると幕府の直轄地として中郡庄は、幕府の政所執事職の伊勢氏が支配した。

室町時代中期には幕府と鎌倉府との対立が起こり、反鎌倉府側で、鎌倉公方足利持氏に抵抗する京都扶持衆小栗満重に呼応し、坂戸城主〈5〉小宅高国は兵を挙げ、鎌倉府と激しい戦いを行った(坂戸合戦)¹⁹⁾。

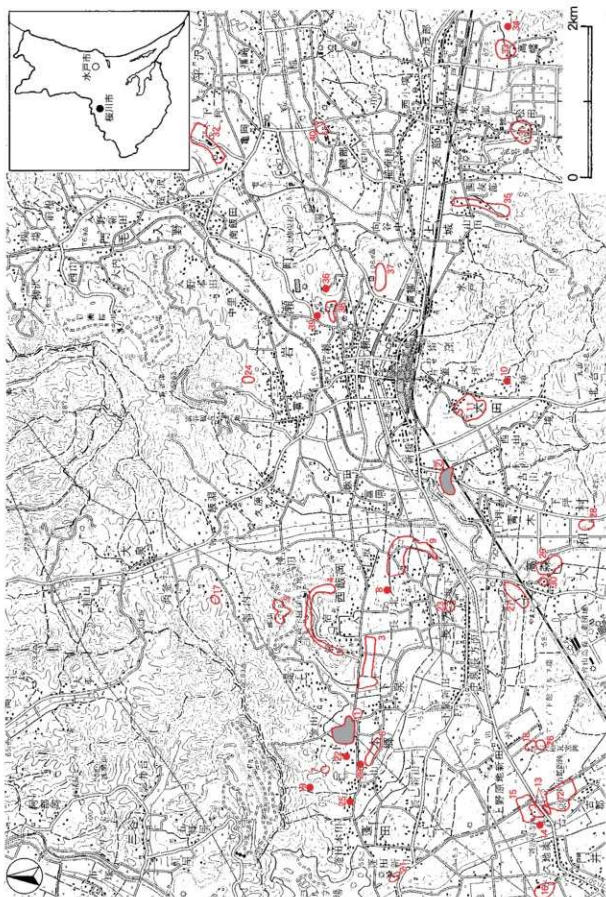
近世では幕藩体制が確立するとともに、岩瀬および大和地域は空閑藩の一部となる。しかしながら、大和地域は、諸藩の飛び地も存在し、さらに天領、旗本領、寺社領等が錯綜して散在していたため、近隣百姓の団結力を弱めることとなった。

19世紀に入り、天明・天保の大飢饉において青木村は、村落滅亡の危機に陥った。この危機を救ったのが二宮尊徳で、荒田畑の開発や桜川に堰を設ける工事を施すなど短期間で疲弊した村落を回復させた²⁰⁾。

* 文中の〈 〉内の番号は、第1図及び周辺遺跡一覧表の該当番号と同じである。

註

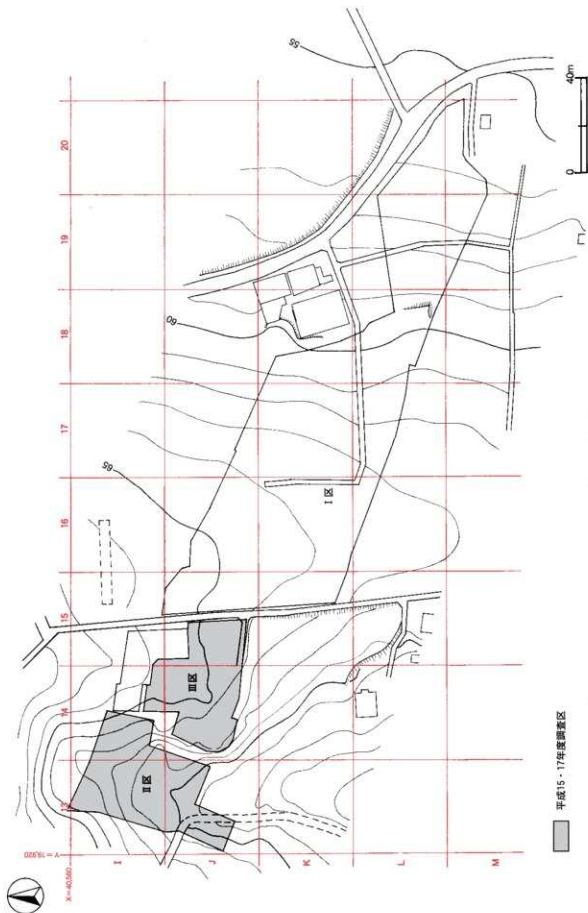
- 1) 小澤重雄「山ノ入古墳群 大日下遺跡 北関東自動車道（協和～友部）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書XIII」『茨城県教育財団文化財調査報告』第255集 2005年3月
- 2) 大塚雅昭・小松崎和治「金谷遺跡1 北関東自動車道（協和～友部）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書IV」『茨城県教育財団文化財調査報告』第225集 2004年3月
- 3) 石川武志・榎 雅彦「大田神社前遺跡1 北関東自動車道（協和～友部）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書VII」『茨城県教育財団文化財調査報告』第229集 2004年3月
- 4) 飯島光宏「大和村史」1974年11月
- 5) 岩瀬町史編さん委員会「岩瀬町史 通史編」1987年3月
- 6) 中村浩一郎他「浜海道遺跡1 北関東自動車道（協和～友部）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書I」『茨城県教育財団文化財調査報告』第222集 2004年3月
- 7) 横倉要次「松田古墳群 北関東自動車道（協和～友部）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書V」『茨城県教育財団文化財調査報告』第226集 2004年3月
- 8) 註1に同じ
- 9) 註5に同じ
- 10) 註4に同じ
- 11) 小澤重雄・小野克敏「当向遺跡1 北関東自動車道（協和～友部）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書III」『茨城県教育財団文化財調査報告』第224集 2004年3月
- 12) 岩瀬町教育委員会『茨城県 岩瀬・間中 - 茨城県西茨城郡岩瀬・間中遺跡の発掘調査報告 -』1976年5月
- 13) 栃木県教育委員会「栃木県生産遺跡分布調査報告書」『栃木県埋蔵文化財調査報告』第89集 1988年3月
- 14) 協和町史編纂委員会「協和町史」1993年3月
- 15) 註4に同じ
- 16) 註5に同じ
- 17) 註4に同じ



第1図 当向遺跡・青木北原遺跡周辺遺跡位置図（国土地理院5万分の1「真岡」）

表1 当向遺跡・青木北原遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代					番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平			中世	近世	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平
①	当向遺跡	○	○	○	○	○	21	上中台南遺跡	○	○	○	○			
②	青木北原遺跡			○	○	○	22	内山古墳				○			
3	金谷遺跡	○		○	○	○	23	星の宮古墳群				○			
4	坂戸古墳群				○		24	富谷古墳群				○			
5	坂戸城跡					○	25	遠越古墳				○			
6	本郷瓦塚遺跡					○	26	鎌倉古墳群				○			
7	山ノ入古墳群	○		○	○		27	高森古墳群				○			
8	大日下遺跡	○		○	○	○	28	青木古墳群				○			
9	辰海道遺跡	○	○	○	○	○	29	高森遺跡	○						
10	犬田山神古墳			○			30	高森西遺跡	○			○	○		
11	犬田神社前遺跡	○	○	○	○	○	31	松田古墳群				○			
12	新治郡衙跡				○		32	間中遺跡				○	○		
13	新治廃寺跡				○		33	加茂A古墳群				○			
14	久地楽長町窯跡				○		34	加茂B古墳群				○			
15	新治廃寺北遺跡				○	○	35	花園古墳群				○			
16	協和の杜公園遺跡				○	○	36	長辺寺山古墳				○			
17	堀の内古窯跡群					○	37	青柳古墳群				○			
18	上野原瓦窯跡					○	38	長辺寺遺跡	○	○					
19	二門塚古墳				○		39	狐塚古墳				○			
20	塚本古墳				○		40	裏山遺跡	○	○	○	○			



第2図 当向遺跡2調査区設定図

第3章 当向遺跡 2

第1節 遺跡の概要

当向遺跡は、南に緩やかに延びる標高55～65mの尾根上の丘陵地に立地している。調査前の現況は宅地で、調査面積は3451.6㎡である。

今回の調査では、古墳時代後期から平安時代にかけての複合遺跡であることが確認され、検出された遺構は古墳時代の竪穴住居跡4軒、奈良・平安時代の竪穴住居跡22軒、中・近世の炭焼窯跡4基、溝跡3条、土坑2基、時期不明の竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟、溝跡4条、土坑32基、ピット群3か所である。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20）に21箱出土している。主な遺物は、土師器（坏、碗、高台付碗、甕、甗、甌、手捏土器）、須臾器（坏、高台付坏、蓋、皿、高盤）、土製品（支脚、焼型）、石器（砥石）、鉄製品（櫛、刀子、鎌）、鉄滓、瓦などである。

第2節 基本層序

L17f8区にテストピットを設定し、基本土層の観察を行った。

土層は、色調・構成粒子・含有物・粘性などから10層に分層された。土層の観察は以下の通りである。

第1層は、黒褐色を呈する腐食土層で、耕作土である。赤色粒子を少量含み、粘性・縮まりが共に弱い。層厚は23～30cmである。

第2層は、暗褐色を呈するソフトローム層で、原生植物の根が見られ、粘性・縮まりが共に弱い。層厚は7～14cmである。

第3層は、褐色を呈するハードローム層で、粘性が弱い。層厚は7～15cmである。縦の割れ目（クラック）が発達している。

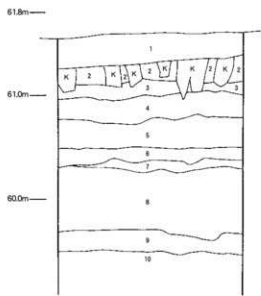
第4層は、暗褐色を呈するハードローム層で、粘性は弱い縮まりは強い。層厚は20～25cm、クラックが発達している。

第5層は、暗褐色を呈するハードローム層で、粘性は弱い縮まりは強い。層厚は25～34cmである。

第6層は、鈍い黄褐色を呈するローム層で、粘土化した鹿沼バミスを少量含む。層厚は9～15cmで、クラックが発達している。

第7層は、鈍い黄褐色を呈するローム層で、粘土化した鹿沼バミスを中量含む。層厚は3～10cmで、クラックが発達している。

第8層は、黄褐色を呈する鹿沼層で、2～5mmの粘土化していない鹿沼バミスからなり、粘性が弱い。層厚は55～70cmである。



第3図 基本土層図

第9層は、黄橙色を呈する鹿沼層で、2～3mmの鹿沼バミスからなり、粘性が弱い。層厚は12～22cmである。
第10層は、黄橙色を呈する鹿沼層で、2～3mmの鹿沼バミスからなり、粘性が強い。下層が未掘のため本来の厚さは不明である。

なお、遺構は第3層上面で確認された。

第3節 遺構と遺物

1 古墳時代の竪穴住居跡と遺物

竪穴住居跡4軒が確認された。以下、確認された竪穴住居跡及び遺物について記述する。

第224号住居跡（第4・5図）

位置 調査区Ⅲ区のJ15f4区で、標高64mほどの尾根状の台地平坦部に位置している。

重複関係 南西コーナー部が第226号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.79m、短軸5.61mの方形で、主軸方向はN-21°-Wである。壁高は18～34cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、竪前面から南壁にかけて踏み固められている。壁溝が竪の左側から西壁にかけて周回し、断面形は逆台形状である。

竪 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで110cm、袖部幅は124cmである。袖部は床面と同じ高さの地山に粘土粒子を含んだローム土で構築されており、内側は火熱を受けて赤変している。火床部は床面を皿状に掘りくぼめ、火床面は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ20cm掘り込まれ、ほぼ直立している。煙口が確認されている。竪土層断面図の第1・2・5層が天井部の崩落土に該当する。

竪土層解説

1 に深い赤褐色	焼土ブロック・粘土粒子少量、ローム粒子微量	10 に深い赤褐色	焼土粒子・粘土粒子中量、ローム粒子微量
2 に深い黄褐色	粘土粒子中量、焼土粒子少量	11 褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・粘土粒子少量
3 赤褐色	焼土粒子中量、粘土粒子少量	12 に深い黄褐色	ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
4 極暗赤褐色	焼土ブロック・炭化粒子中量、粘土粒子少量	13 暗褐色	焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
5 暗赤褐色	焼土ブロック・粘土粒子中量	14 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子少量
6 暗赤褐色	焼土粒子中量、ローム粒子・粘土粒子少量	15 に深い黄褐色	焼土粒子・粘土粒子中量
7 に深い赤褐色	焼土粒子中量、炭化粒子少量	16 褐色	ローム粒子・粘土粒子・粘土粒子少量
8 暗赤褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子少量	17 灰黄褐色	ローム粒子・粘土粒子中量、炭化ブロック少量
9 暗赤褐色	焼土粒子中量、粘土粒子少量、ローム粒子微量		

ピット 5か所。P1～P4は深さ38～44cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ20cmで、規模と位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

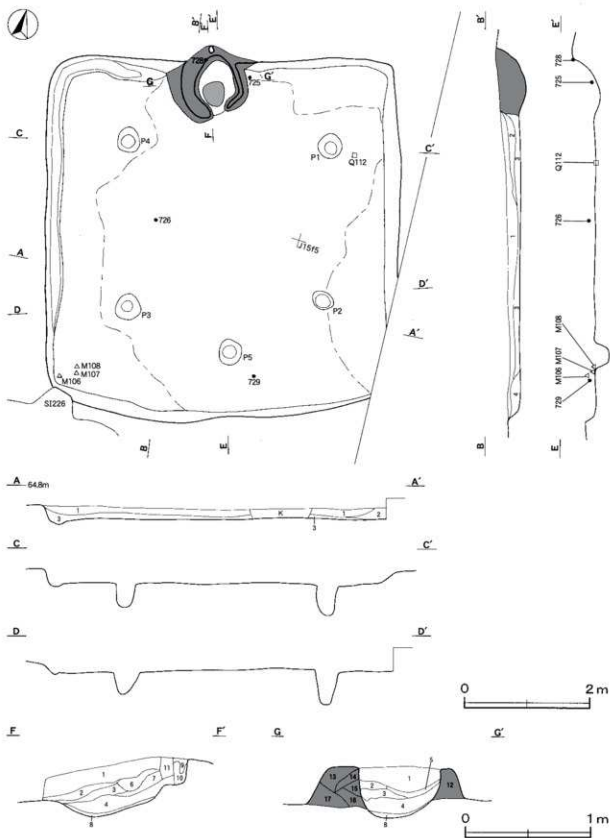
覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

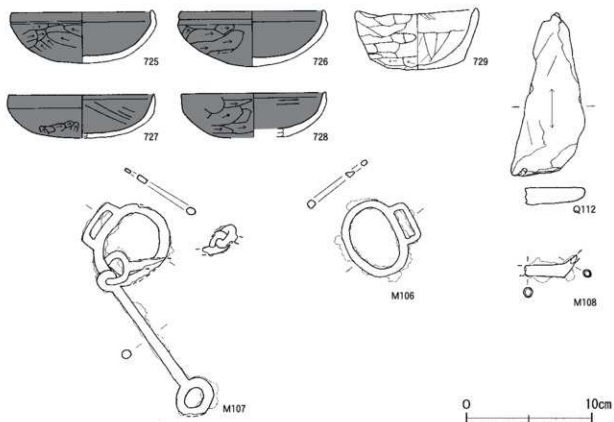
1 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	3 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	4 暗褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片324点（坏類83，高坏4，甕類236，手捏土器1），石器1点（砥石），鉄製品3点（釵2，不明1）が北側を中心に出土している。また、流れ込んだ縄文土器片2点（深鉢）も出土している。725は竪の右袖脇，726は中央部，729は南部の覆土下層から，728は竪の覆土上層からそれぞれ出土している。M106・M107は南西壁際の覆土下層と床面から出土し、形状から同一個体のもと思われる。M108は南西壁際，Q112はP1付近の床面からそれぞれ出土している。727は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から7世紀前葉と考えられる。轆や手握土器が出土していることから、集落内における有力者の住居と推測される。



第4図 第224号住居跡実測図



第5図 第224号住居跡出土遺物実測図

第224号住居跡出土遺物観察表（第5図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
725	土師器	坏	11.0	4.1	-	赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部外面へラ削り	覆土下層	95% PL.9
726	土師器	坏	11.3	4.4	-	雲母	灰褐	普通	体部外面へラ削り	覆土下層	60% PL.9
727	土師器	坏	11.5	3.5	-	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部内・外面へラナゲ 外面へラ削り	覆土中	45%
728	土師器	坏	11.4	(4.0)	-	雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナゲ 体部外面へラ削り	覆理土上層	40%
729	土師器	手捏土器	9.4	4.8	7.4	石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部外面へラ削り 内面へラナゲ	覆土下層	100% PL.9

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q112	砥石	13.0	6.0	1.4	113.0	片岩	砥面1面	床面	PL.14
M106	巻	(7.3)	(6.7)	0.6	(28.9)	鉄	板状立開扉環鐵板	覆土下層	PL.15
M107	巻	(18.2)	(8.2)	0.8	(78.5)	鉄	二連巻	床面	PL.15 M106と同一
M108	不明	(4.1)	(1.9)	-	(7.0)	鉄	内部空洞	床面	

第237号住居跡（第6・7図）

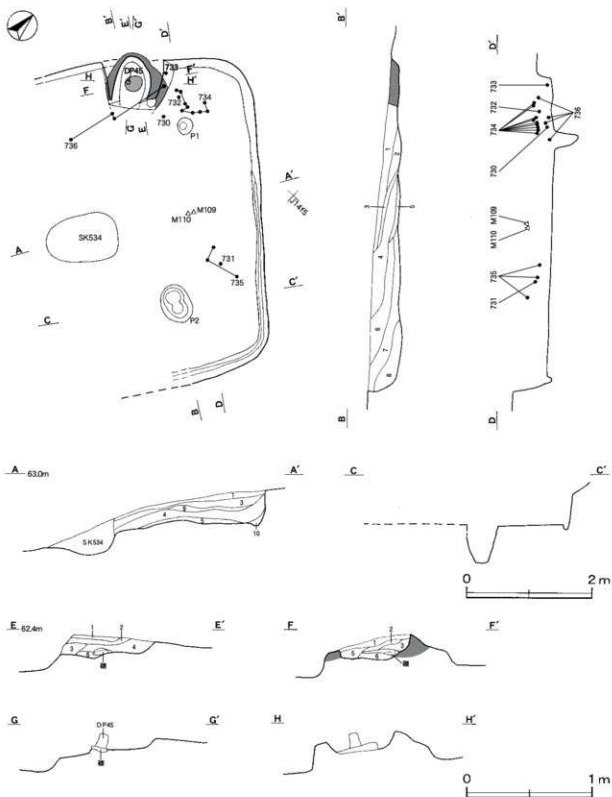
位置 調査区Ⅲ区のJ14f4区で、標高63mほどの尾根状の台地端部に位置している。

重複関係 第534号土坑に掘り込まれている。

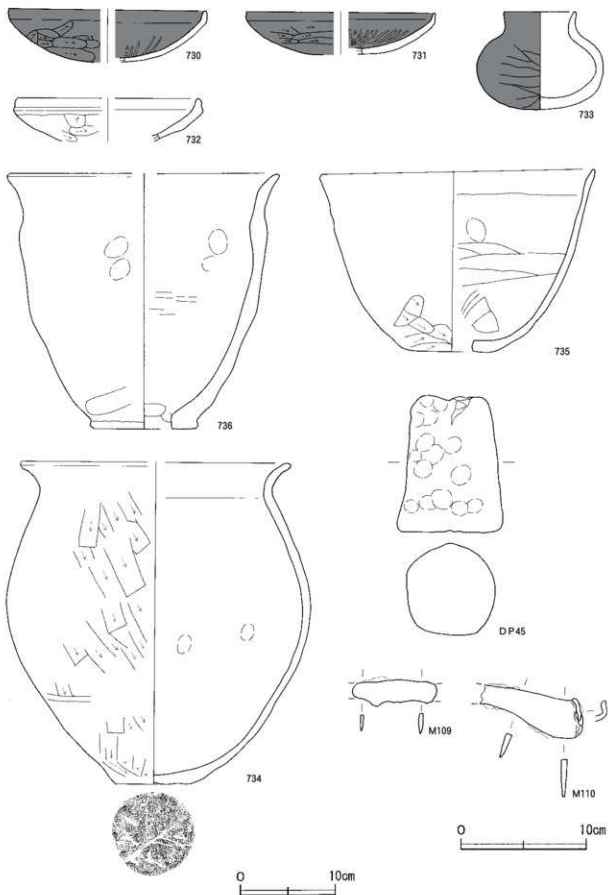
規模と形状 南西部のほとんどが削平されているため、確認できた範囲は南北軸3.14m、東西軸5.15mの方形又は長方形と推定され、主軸方向はN-55°-Wである。壁高は23~55cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁溝は東コーナー部の壁際を周回し、断面形はU字状である。

竈 北西壁のほぼ中央部に付設されている。焚口部及び袖部の一部は削平されており、確認できた袖部幅は98 cmである。袖部は、床面と同じ高さの地山面に粘土粒子を含んだローム土で構築されている。右袖部には構築



第6図 第237号住居跡実測図



第7图 第237号住居跡出土遺物実測図

材として礫が使用されている。火床部は床面をわずかに掘りくぼめ、火床面は火熱を受け赤変硬化している。煙道部は、壁外へわずかに掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。竈土層断面図第1・2層が天井部の崩壊土に該当する。

竈土層解説

- | | |
|-----------------------------|----------------------------|
| 1 赤褐色 焼土ブロック・粘土粒子少量、ローム粒子微量 | 4 暗赤褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子微量 |
| 2 赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック・粘土粒子少量 | 5 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・粘土粒子微量 |
| 3 赤褐色 焼土粒子中量、炭化粒子微量 | 6 暗赤褐色 焼土粒子中量、粘土粒子少量 |

ピット 2か所。P1・P2は深さ38cm・62cmで、規模と配置からそれぞれ主柱穴と考えられる。

覆土 10層に分層される。周囲から流れ込んだ堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- | | |
|-------------------------|------------------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量 | 6 明褐色 ローム粒子中量、炭沼バミス少量 |
| 2 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 7 褐色 ローム粒子中量、炭沼バミス少量、焼土粒子微量 |
| 3 褐色 ローム粒子中量、粘土粒子少量 | 8 明褐色 ローム粒子中量、炭沼バミス少量、炭化粒子微量 |
| 4 明褐色 ローム粒子中量 | 9 暗褐色 ローム粒子・炭沼バミス少量 |
| 5 にごり褐色 ローム粒子・炭沼バミス少量 | 10 明褐色 ローム粒子中量、炭沼バミス微量 |

遺物出土状況 土師器片574点（環類129、小壺1、甕類414、瓶30）、須恵器片2点（環）、土製品1点（支脚）、鉄製品2点（刀子1、鎌1）が竈付近を中心に出土している。731・735・M109・M110は東部、732・734は竈付近の覆土中層からそれぞれ出土している。730・733・736は竈付近の覆土下層からそれぞれ出土している。DP45は竈の支脚として使用されたと考えられ、平礫を台座とし、その上に置かれていた状態で出土している。

所見 時期は、出土土器から7世紀前葉と考えられる。

第237号住居跡出土遺物観察表（第7図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
730	土師器	環	[15.6]	(4.2)	-	赤色粒子	にごり橙	普通	体部外面へラ削り 内面ヘラミガキ	覆土下層	45%
731	土師器	環	[15.3]	(3.3)	-	長石・雲母・赤色粒子	にごり橙	普通	口縁面積ナデ 体部外面へラ削り 内面ヘラミガキ	覆土中層	40%
732	土師器	環	[14.2]	(3.4)	-	石英・長石・赤色粒子	にごり黄橙	普通	体部外面へラ削り	覆土中層	30%
733	土師器	小壺	5.5	7.8	-	雲母	橙	普通	体部外面へラナデ	覆土下層	100% PL.9
734	土師器	甕	[28.2]	34.3	8.2	石英・長石・雲母	にごり赤褐色	普通	体部外面へラ削り 内面指頭痕 底部木炭痕	覆土中層	20% PL.9
735	土師器	瓶	21.6	14.6	6.8	石英・長石・赤色粒子	橙	普通	体部内面へラナデ 指頭痕 外面下端へラ削り	覆土中層	60% PL.9
736	土師器	瓶	[21.2]	20.3	8.0	長石・赤色粒子	にごり黄橙	普通	底部内・外面へラナデ 指頭痕	覆土下層	30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP45	支脚	10.9	8.5	8.7	733.0	土製（石英・長石・雲母）	指頭痕	竈内	
M109	刀子	(6.7)	1.6	0.3	(9.0)	鉄	基部欠損 断面三角形	覆土中層	PL.15
M110	鎌	(8.1)	3.0	0.4	(26.1)	鉄	先端部欠損	覆土中層	PL.15

第238号住居跡（第8図）

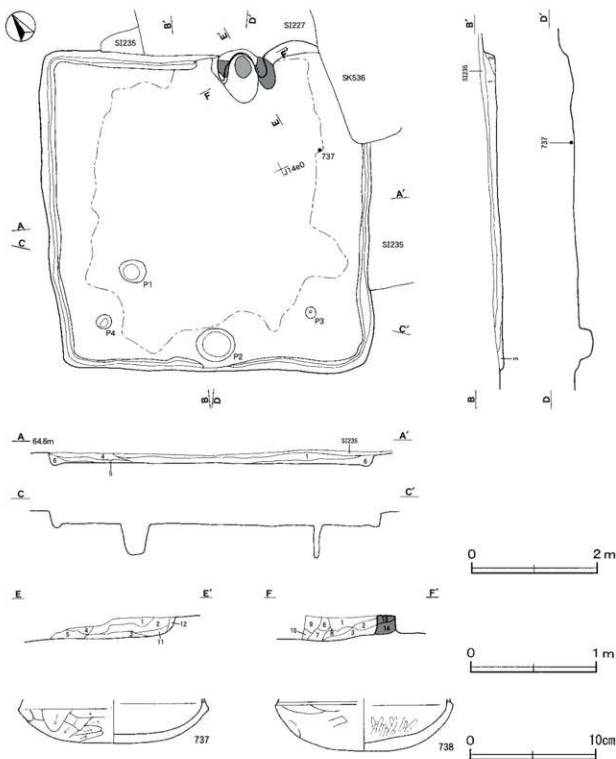
位置 調査区Ⅲ区のJ14d9区で、標高64mほどの尾根状の台地平坦部に位置している。

重複関係 第227・235号住居、第536号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.29m、短軸5.05mの方形で、主軸方向はN-31°-Wである。壁高は5～20cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、竈前から南壁にかけて踏み固められている。壁溝がほぼ全周し、断面形はU字状である。

竈 北壁のやや東寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部先端まで90cm、袖部幅は101cmである。袖部は床面と同じ高さの地山に粘土粒子を含んだローム土で構築されている。火床部は平坦で、火床面は火熱を受けて赤変している。煙道部は壁外へ10cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。竈土層断面図第1・2層が天井部の崩落土に該当する。



第8図 第238号住居跡・出土遺物実測図

覆土層解説

1	にぶい褐色	粘土粒子中量, 焼土粒子少量, ローム粒子微量	8	褐色	ローム粒子・焼土粒子少量, 粘土粒子微量
2	にぶい褐色	粘土粒子中量, ローム粒子・焼土粒子微量	9	褐色	焼土ブロック中量, ローム粒子少量
3	褐色	ロームブロック・粘土粒子少量, 焼土粒子微量	10	灰黄色	粘土粒子多量, 焼土粒子微量
4	にぶい褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子微量	11	暗赤褐色	焼土粒子中量, ローム粒子微量
5	灰褐色	粘土粒子中量, ローム粒子少量, 焼土粒子微量	12	暗赤褐色	焼土粒子中量, 焼土ブロック・ローム粒子微量
6	褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量, 炭化粒子微量	13	褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量
7	褐色	ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子少量	14	灰褐色	粘土粒子多量, 焼土粒子少量

ピット 4か所。P1は深さ49cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P2は深さ24cmで、規模と位置から出入り口に伴うピットと考えられる。P3・P4の性格は不明である。

覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

1	褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子微量	4	褐色	ローム粒子中量
2	明褐色	ローム粒子中量	5	褐色	ロームブロック少量
3	明褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子少量	6	明褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片125点(坏环38, 高坏1, 甕型86), 須恵器片13点(甕型)が出土している。土器は覆土上層から下層にかけて全体的に広がっている。また、流れ込んだ縄文土器片2点(深鉢)も出土している。737は東部の覆土下層, 738は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器から7世紀前葉と考えられる。

第238号住居跡出土遺物観察表(第8図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
737	土師器	坏	-	(3.6)	-	石灰・灰石・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	体部外面へラ削り	覆土下層	40%
738	土師器	坏	-	(4.2)	-	石灰・赤色粒子	明赤褐色	普通	体部外面へラ削り 指頭直 内面へラ削り	覆土中	30%

第246号住居跡(第9図)

位置 調査区Ⅲ区のJ14c9区で、標高65mほどの尾根状の台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸3.60m, 短軸3.39mの方形で、主軸方向はN-1°-Eである。壁高は5~23cmで外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、竈前面から南壁にかけて踏み固められている。中央部東寄りの床面から粘土塊(長径66cm, 短径59cm)が確認されている。壁溝が出入り口付近の一部を除いてほぼ全周し、断面形はU字状である。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで100cm, 袖部幅は90cmである。袖部は床面と同じ高さの地山に粘土粒子を含んだローム土で構築されている。火床部は床面をわずかに掘りくぼめ、火床面は火熱を受け赤変している。煙道部は壁外へ16cm掘り込み、外傾して立ち上がっている。竈土層断面図の第14層が天井部の崩落土に該当する。

覆土層解説

1	褐色	ローム粒子多量, 焼土粒子微量	12	にぶい赤褐色	ローム粒子・焼土粒子少量
2	にぶい赤褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子微量	13	褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子少量
3	暗赤褐色	ローム粒子少量, 焼土ブロック微量	14	にぶい褐色	焼土ブロック・粘土粒子中量
4	褐色	ローム粒子多量, 焼土粒子・粘土粒子微量	15	褐色	ローム粒子・焼土粒子少量
5	褐色	ローム粒子中量, 粘土ブロック微量	16	にぶい赤褐色	焼土ブロック・ローム粒子微量
6	赤褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量	17	明褐色	焼土粒子・粘土粒子微量
7	赤褐色	ローム粒子・焼土粒子少量	18	明褐色	粘土粒子中量
8	暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子少量	19	褐色	粘土ブロック少量, 焼土粒子微量
9	にぶい赤褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量	20	褐色	粘土粒子中量, 焼土ブロック少量
10	褐色	ローム粒子少量, 粘土粒子微量	21	褐色	粘土粒子中量, 焼土ブロック・ローム粒子少量
11	にぶい褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量			

ピット 2か所。P1・P2は深さは41cm・46cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。

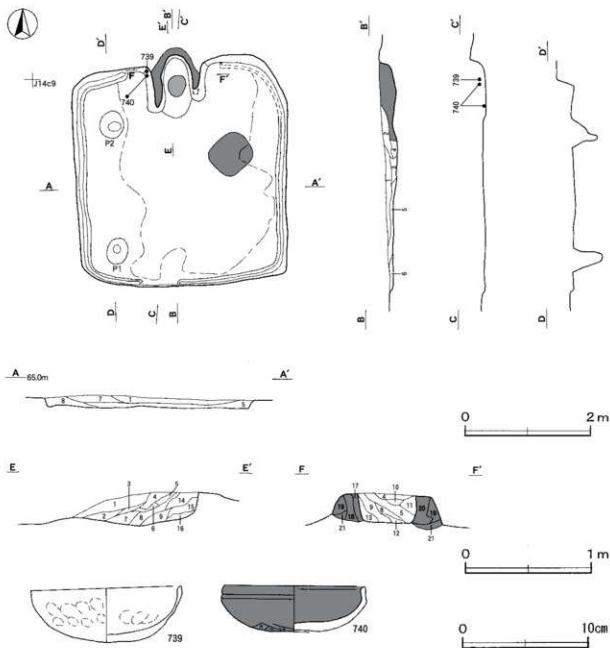
覆土 8層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

1	明褐色	ローム粒子中量	5	褐色	ローム粒子中量
2	褐色	ローム粒子中量、炭化粒子少量	6	褐色	ロームブロック少量
3	明褐色	ローム粒子多量	7	褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
4	褐色	ローム粒子中量、焼土粒子微量	8	褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片11点(坏類10, 甕類1)が竈周辺を中心に出土している。739・740は竈左袖の覆土下層と床面にかけてそれぞれ出土している。床面から出土している粘土塊については不明である。

所見 時期は、出土土器から7世紀前葉と考えられる。



第9図 第246号住居跡・出土遺物実測図

第246号住居跡出土遺物観察表(第9図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
739	土師器	環	11.9	4.4	-	雲母	浅黄	普通	体部内・外面用痕	覆土下層	60%
740	土師器	環	11.2	3.1	4.1	石灰・長石・雲母	橙	普通	体部外面へつくり	覆土下層・ 床面	70% PL.9

表2 古墳時代竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設				覆土	主な出土遺物	時期	備考(旧→新)	
								柱穴	土間	土間	伊電					
224	J15f4	N-21°-W	方形	5.79 × 5.61	18~24	平坦	一部	4	1	-	竪1	-	自然	土師器、曹、砥石	7世紀前半	本跡→S1226
237	J14f4	N-55°-W	方形・ 長方形	5.15 × (3.14)	23~55	平坦	一部	2	-	-	竪1	-	自然	土師器、支脚、刀子、 鏝	7世紀前半	本跡→SK534
238	J14d9	N-31°-W	方形	5.29 × 5.05	5~20	平坦	11層 全周	1	1	2	竪1	-	自然	土師器	7世紀前半	本跡→S1227・ 235 SK536
246	J14e9	N-1°-E	方形	3.60 × 3.29	5~25	平坦	11層 全周	2	-	-	竪1	-	自然	土師器	7世紀前半	

2 奈良・平安時代の竪穴住居跡と遺物

竪穴住居跡22軒が確認された。以下、確認された竪穴住居跡及び遺物について記述する。

第216号住居跡(第10図)

位置 調査区Ⅲ区のJ15C3区で、標高65mほどの尾根状の台地平坦部に位置している。

重複関係 南側を第23号溝に掘り込まれている可能性がある。

規模と形状 掘乱のため確認できた範囲は南北軸3.20m、東西軸2.75mの方形又は長方形と推定され、主軸方向はN-3°-Eである。

床 ほぼ平坦である。壁溝が、西壁際の一部を周回している。

竪 2か所。竪1は平成14年度の調査で、北壁の中央部に付設されていることが確認されている。今回の調査では、南東コーナー部に粘土塊及び、火床部が確認されたため、竪2が付設されていたと考えられる。竪2の規模は焚口部から煙道部まで106cmである。袖部は、後世の掘乱により確認することができなかった。火床部は床面をわずかに掘りくぼめ、火床面は火熱を受けて赤変している。

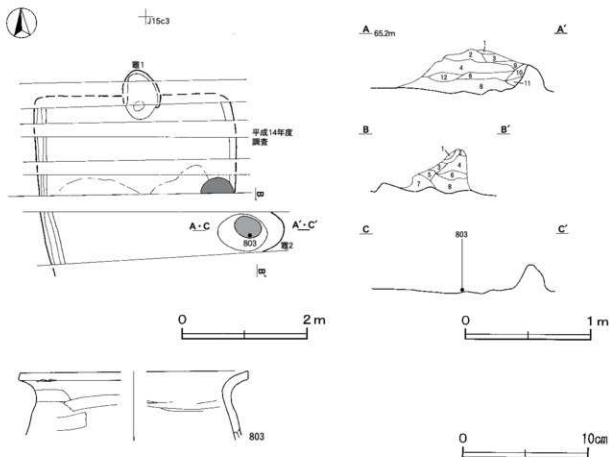
竪2土層解説

1	にぶい褐色	ローム粒子・粘土粒子・粘土粒子少量	7	褐色	ロームブロック少量、粘土粒子・粘土粒子微量
2	赤褐色	粘土粒子中量、ローム粒子・粘土粒子少量	8	暗赤褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック、炭化粒子微量
3	にぶい褐色	粘土粒子中量、粘土ブロック・ローム粒子微量	9	褐色	ローム粒子・粘土粒子・粘土粒子微量
4	にぶい褐色	粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量	10	褐色	ローム粒子少量、粘土粒子・粘土粒子微量
5	褐色	粘土粒子中量、粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量	11	褐色	ロームブロック・粘土粒子・炭化粒子微量
6	にぶい赤褐色	粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	12	にぶい褐色	粘土ブロック中量、粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量

覆土 後世の掘乱により、確認することができなかった。平成14年度の調査では、8層に分層され、ブロック状の含有物を多く含む人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片51点(環類4、高台付環1、甕類46)が竪2を中心に出土している。803は竪2の火床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から10世紀後半と考えられる。平成14年度調査から出土した遺物や隣接する住居跡の形態から、竪1・2が同時期に使用されていたと考えられる。



第10図 第216号住居跡・出土遺物実測図

第216号住居跡出土遺物観察表（第10図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
803	土師器	甕	18.0	(5.5)	-	石英・長石・雲母・砂礫	灰	普通	内・外面ヘラナデ	竈2火床面	5%

第222号住居跡（第11図～14図）

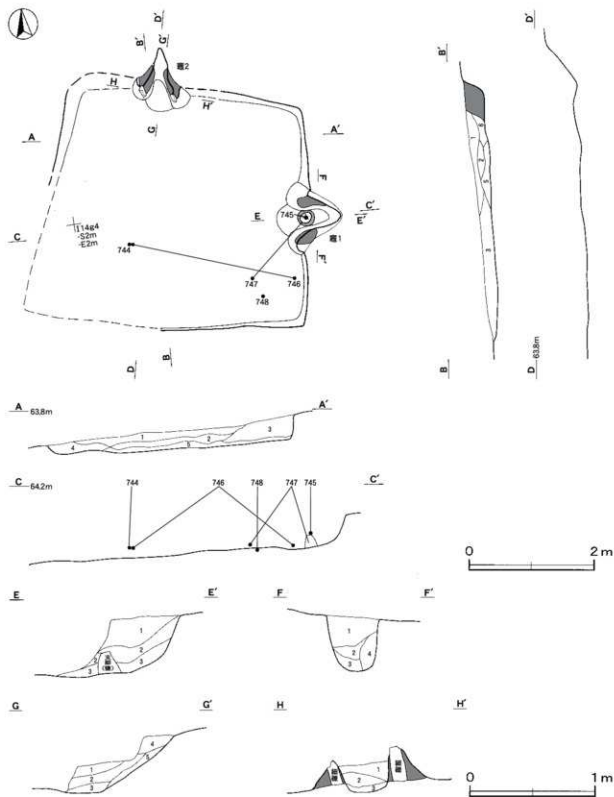
位置 調査区Ⅱ区のI14g4区で、標高64mほどの尾根状の台地端部に位置している。

規模と形状 南西コーナー一部のほとんどが削平されているため、確認できた範囲は南北軸3.87m、東西軸4.10mの方形又は長方形と推定され、主軸方向はN-20°-Eである。壁高は8～36cmで、外傾して立ち上がっている。

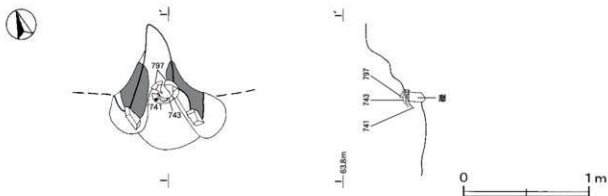
床 ほぼ平坦であるが、南西部に向かって緩やかに傾斜している。

竈 2か所。東壁中央部に竈1、北壁のやや西寄りに竈2が付設されている。竈1は焚口部から煙道部まで108cm、袖部幅は116cmである。袖部は、床面と同じ高さの地山に粘土粒子を含んだローム土で構築されている。火床部は、床面をわずかに掘りくぼめ、火床面は火熱を受けて赤変硬化している。土師器の甕が逆位で出土しており、支脚として使用されていたと考えられる。煙道部は、壁外へ44cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。竈2は焚口部から煙道部まで96cm、袖部幅は92cmである。竈2は袖部が床面と同じ高さの地山に粘土粒子を含んだローム土で構築され、構築材として細礫が使用されている。火床部は床面を皿状に掘りくぼ

め、火床面は火熱をあまり受けていないことから、使用期間は短いと推測される。火床面に礎が埋め込まれており、支脚として使用されたと考えられる。煙道部は壁外へ51cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。竈土層断面図の第1・2層が天井部の崩落土に該当する。



第11図 第222号住居跡実測図(1)



第12図 第222号住居跡実測図(2)

竪1土層解説

- | | | | |
|------|--------------------------------------|--------|--------------------------------|
| 1 褐色 | ロームブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子・粘土
土粒子微量 | 3 暗赤褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック少量, 炭化物
微量 |
| 2 褐色 | ロームブロック多量, 粘土粒子少量, 焼土ブロッ
ク・炭化粒子微量 | 4 暗赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子中量, 炭化粒子
微量 |

竪2土層解説

- | | | | |
|--------|--------------------------------|-------|---------------------------------|
| 1 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック中量, 炭化物微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック多量, 焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量, ロームブロック少量, 炭化物
微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子中量, 焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒
子少量 |
| 3 暗赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子中量 | | |

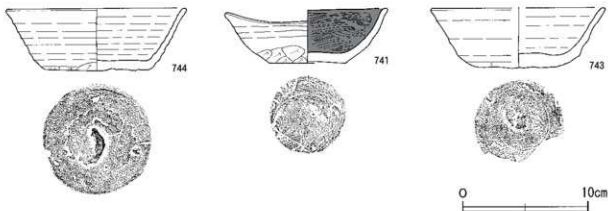
覆土 6層に分層される。ロームブロックを多く含む不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

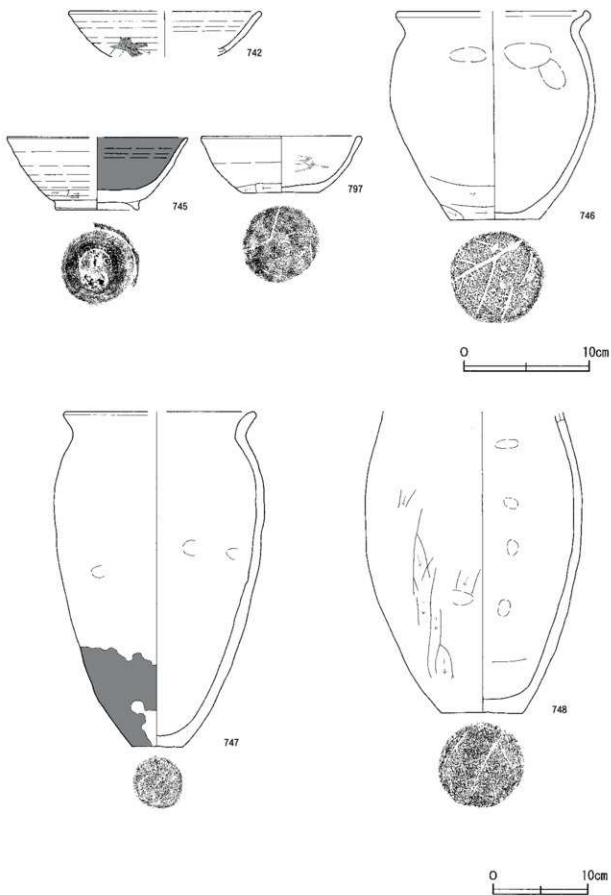
- | | | | |
|-------|----------------------------------|---------|------------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子 | 4 暗褐色 | ロームブロック中量, 粘土粒子少量, 焼土粒子・
炭化粒子微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量, 焼土ブロック・炭化物微量 | 5 褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子・粘土
粒子少量 |
| 3 褐色 | ロームブロック多量, 焼土ブロック・炭化物・粘
土粒子微量 | 6 濃い赤褐色 | ロームブロック・焼土粒子中量, 炭化物微量 |

遺物出土状況 土師器片268点(坏類38, 甕類230), 須恵器片19点(坏類15, 蓋1, 甕類3)が南東部を中心
に出土している。744は中央部, 746は中央部から東部にかけての覆土下層からそれぞれ出土している。742は
覆土中, 748は南東部の床面, 747は竪1の火床面, 745は747の上, 741・743・797は竪2の礎の上に逆位の状
態で重なってそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器から9世紀中葉と考えられる。竪1・2は, 使用頻度に違いは見られるが, 竪の保存
状態から, どちらも同時期に使用されたと考えられる。



第13図 第222号住居跡出土遺物実測図(1)



第14図 第222号住居跡出土遺物実測図(2)

第222号住居跡出土遺物観察表 (第13・14図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
741	土師器	坏	12.7	4.4	6.0	雲母	橙	普通	外面ロクロナデ 体部下端手持ちへう割り 内面へう置き 底部の底土切り	竈2内	80% PL10
742	土師器	坏	[15.0]	(3.6)	-	石英・長石・赤色 粒子	にぶい橙	普通	内・外面ロクロナデ	覆土中	15% PL11 墨書「上」
743	須恵器	坏	[13.6]	4.8	7.1	石英・長石・雲母	橙	普通	外面ロクロナデ 体部下端回転へう割り 底部回転へう割り	竈2内	15%
744	須恵器	坏	14.0	5.0	8.2	長石・砂礫	橙	普通	内・外面ロクロナデ 体部下端手持ちへう 割り 底部回転へう割り	覆土下層	70% PL10
749	土師器	坏	12.5	4.5	6.0	長石	橙	普通	外面ロクロナデ 体部下端手持ちへう割り 内面へう置き	竈2内	95% PL10
745	土師器	高台付椀	[14.2]	5.8	[6.6]	長石・雲母・赤色 粒子	橙	普通	内・外面ロクロナデ 体部下端回転へう割り 底へう割り 高台付け	竈1内	40%
746	土師器	甕	[15.0]	16.5	7.0	石英・雲母・赤色 粒子	橙	普通	体内外面へう割り 内面へうナデ 内・外 面指頭痕 底部木葉痕	覆土下層	70% PL12
747	土師器	甕	[19.7]	35.7	5.2	石英・長石・雲母 ・砂礫	橙	普通	内・外面ナデ 指頭痕	竈1火床面	70% PL12 甕部材付着
748	土師器	甕	-	(32.2)	8.8	雲母・砂礫	明暗橙	普通	体内外面へう割り 内・外面指頭痕 武 部木葉痕	床面	60% PL12

第223号住居跡 (第15・16図)

位置 調査区Ⅱ区のI14f3区で、標高63mほどの尾根状の台地端部に位置している。

規模と形状 西部が削平されており、確認できた範囲は南北軸4.60m、東西軸1.50mの方形又は長方形と推定され、主軸方向はN-68°-Eである。壁高は25~30cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

竈 東壁のやや南寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで112cm、袖部幅は111cmである。袖部は床面と同じ高さの地山に、粘土粒子を含んだローム土で構築され、右袖部は土師器甕を芯材としている。火床部は、床面と同じ高さの平坦面を使用しており、火床面は火熱を受けて赤変している。煙道部は壁外へ28cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。竈土層断面図の第1層が天井部の崩落土に該当する。

竈土層解説

- | | |
|--------------------------------------|---|
| 1 灰褐色 粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子少量、炭化
粒子微量 | 4 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 暗赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック中量、炭化物・粘土粒
子微量 | 5 にぶい赤褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量、炭化粒子・
粘土粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子少量、粘土プロ
ック微量 | |

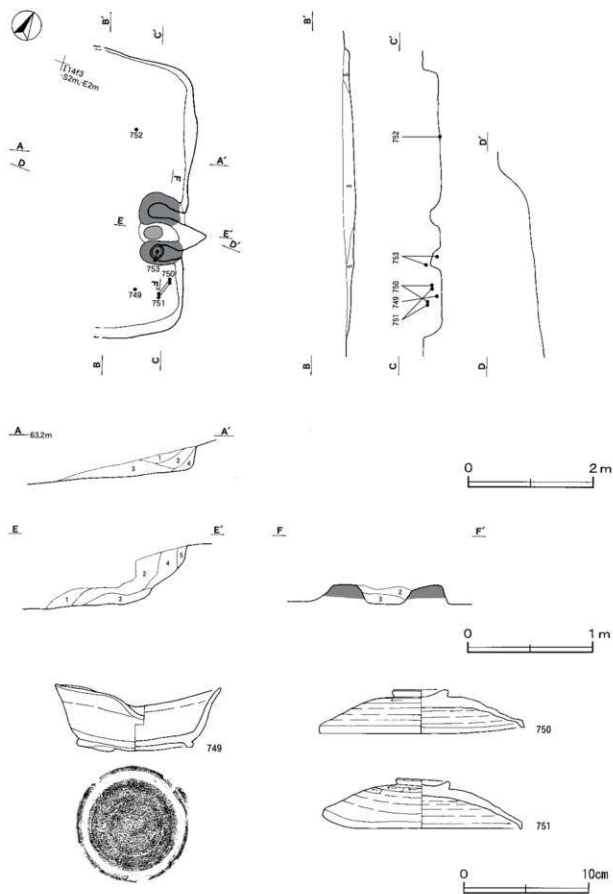
覆土 5層に分層される。ブロックを多く含む不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

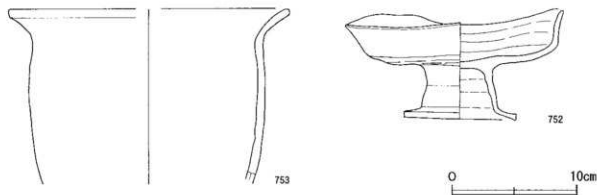
- | | |
|-------------------------------------|---------------------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック多量、焼土ブロック・炭化物微量 | 4 褐色 ロームブロック多量、粘土粒子少量、焼土粒子・
炭化粒子微量 |
| 2 褐色 ロームブロック・粘土粒子中量、焼土粒子・炭化
粒子微量 | 5 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物微量 |
| 3 褐色 ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子・粘土
粒子微量 | |

遺物出土状況 土師器片154点(坏類20, 甕類134), 須恵器片42点(坏類20, 高台付坏7, 蓋12, 高盤1, 甕類2)が竈付近の覆土中層から下層を中心に出土している。749~751は南東部の覆土中層から下層にかけて、752は北部の床面、753は竈の右袖部内からそれぞれ出土している。

所見 竈之内窯産と考えられる歪みがある須恵器が数点出土している。時期は、出土土器から8世紀中葉と考えられる。



第15图 第223号住居跡・出土遺物実測図



第16図 第223号住居跡出土遺物実測図

第223号住居跡出土遺物観察表 (第15・16図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
749	須恵器	高台付杯	13.0	5.3	9.1	石英・長石・黒色粒子	灰黄	普通	内・外面ロクロナデ 底部回転へつ切り成高台貼り付け	覆土下層	80% PL.11 自然堆積層
700	須恵器	蓋	16.2	3.5	-	長石	黄灰	普通	天井部上部回転へつ削り	覆土中層・下層	80%
751	須恵器	蓋	15.8	4.0	-	長石・雲母・小礫	灰	普通	天井部回転へつ削り	覆土中層・下層	90% PL.12
752	須恵器	高盤	17.2	9.0	8.8	石英・長石・黒色粒子	灰	普通	内・外面ロクロナデ	床面	95% PL.12
753	土師器	甕	[22.2]	[14.0]	-	石英・赤色粒子	明赤褐	不良	内・外面ナデ	覆土袖部内	40%

第225号住居跡 (第17・18図)

位置 調査区Ⅲ区のJ15f2区で、標高64mほどの尾根状の台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸4.37m、短軸3.14mの長方形で、主軸方向はN-93°-Eである。壁高は12~22cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、竈前面から西壁にかけて踏み固められている。壁溝がほぼ全周し、断面形はU字状である。

竈 東壁の南寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで104cmである。袖部は削平され、確認できなかったが、竈の近辺には瓦片が散乱しており、構築材として使用された可能性がある。火床部は床面をわずかに掘りくぼめ、火床面は火熱を受けて赤変している。煙道部は壁外へ60cm掘り込まれ、緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土層解説

1 明褐色	ローム粒子中量	5 褐色	ローム粒子・粘土粒子少量
2 に近い褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック・粘土粒子微量	6 に近い褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック・粘土粒子微量
3 褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子微量	7 極暗赤褐色	焼土ブロック・粘土粒子少量、ローム粒子微量
4 暗赤褐色	焼土粒子・炭化粒子中量、ローム粒子微量	8 暗赤褐色	焼土ブロック中量、粘土粒子少量

ピット 24か所。P1は深さ34cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P2は深さ43cmで、規模と配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P3・P4の性格は不明である。壁際下に穿たれた20か所の小ピットは、配置から壁柱穴と考えられる。

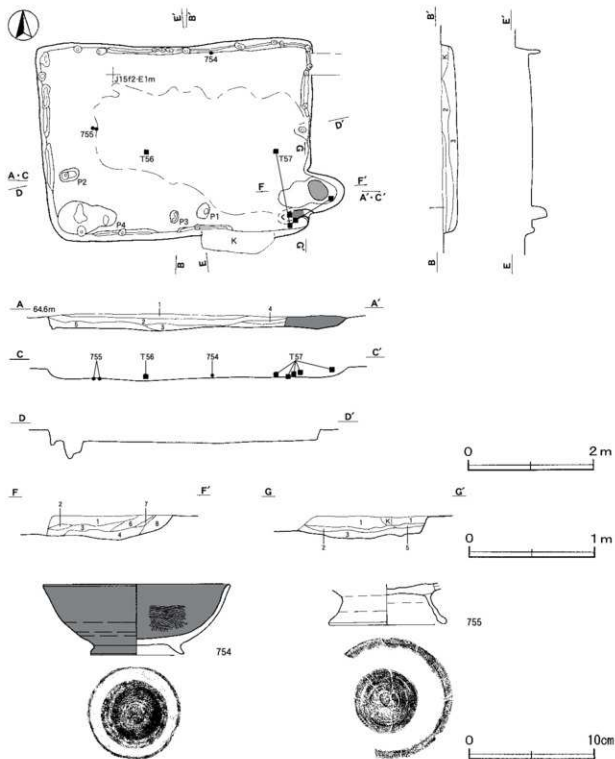
覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

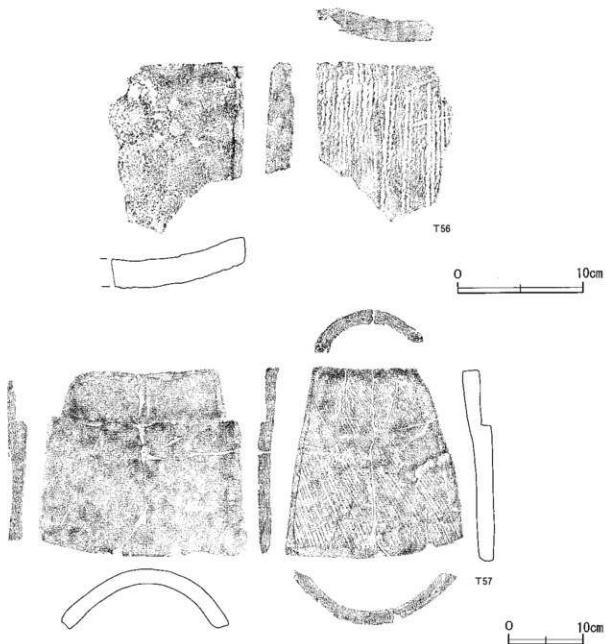
1 褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	4 褐色	ロームブロック中量
2 褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	5 褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック微量
3 褐色	ロームブロック少量		

遺物出土状況 土師器片259点（坏類135，高台付碗4，足高高台付坏3，甕類116，甌1），須恵器片8点（坏類5，甕類3），瓦片7点が全域から散在して出土している。754は北部，755は西部，T57は竈付近の床面からそれぞれ出土している。T56は中央部の覆土下層から出土している。

所見 時期は，出土土器から10世紀前半と考えられる。



第17図 第225号住居跡・出土遺物実測図



第18図 第225号住居跡出土遺物実測図

第225号住居跡出土遺物観察表 (第17・18図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
754	土師器	高台付椀	14.8	5.7	7.2	雲母	橙	普通	体部内面へラ磨き 底部凹縁へラ切り後高台脱り付け	床面	70% PL11
755	土師器	長石丸付用	-	(3.2)	9.2	長石・雲母・赤色 砂子	にぶ・橙	普通	底部凹縁へラ切り後高台脱り付け	床面	15%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
T56	平瓦	(13.4)	(10.6)	2.1	(450.0)	土製(長石・雲母)	凹面布目痕 凸面糊印き	覆土下層	
T57	丸瓦	25.3	22.2	2.3	2300.0	土製(石英・長石)	凹面布目痕 凸面へラ削り	床面	PL16 焼熟痕あり

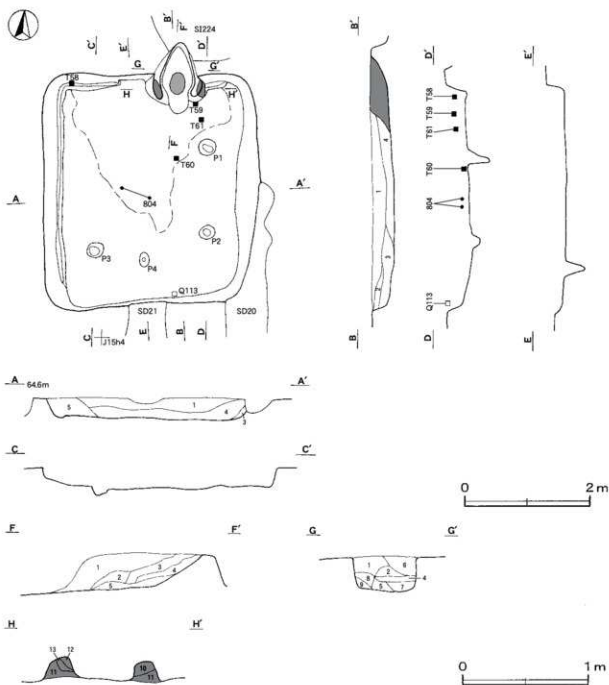
第226号住居跡 (第19・20図)

位置 調査区Ⅲ区のJ15g4区で、標高64mほどの尾根状の台地平坦部に位置している。

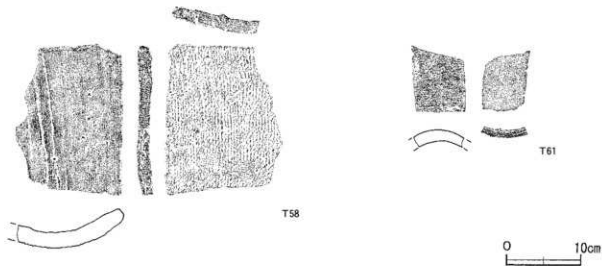
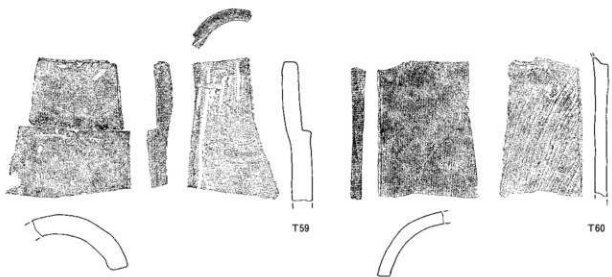
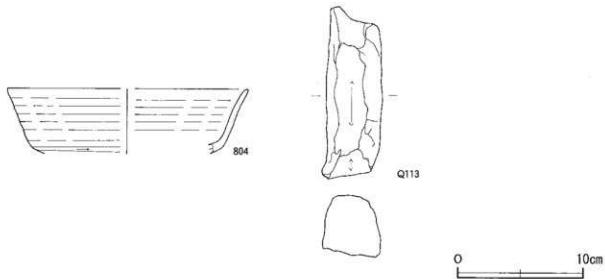
重複関係 第224号住居跡を掘り込み、第20・21号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.72m、短軸3.43mの方形で、主軸方向はN-8°-Eである。壁高は19~32cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、竈前面から中央部にかけて踏み固められている。壁溝が北西コーナー一部の壁際から西壁にかけて周回し、断面形はU字状である。



第19図 第226号住居跡実測図



第20图 第226号住居跡出土遺物実測図

竈 北壁のやや東寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで114cm、袖部幅は96cmである。袖部は床面と同じ高さの地山に、粘土粒子を含んだローム土によって構築されており、内側が火熱を受けて赤変している。火床部は、床面と同じ高さの平坦面を使用しており、火床面は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ40cm掘り込まれ、緩やかに外傾して立ち上がっている。竈土層断面図の第6層が天井部の崩落土に該当する。

竈土層解説

1	褐	色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子	6	褐	灰	色	粘土粒子多量、焼土粒子少量、炭化粒子微量	
			微量	7	褐	色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量		
2	暗	褐	色	焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子・粘土粒子	8	暗	赤	褐色	焼土粒子・粘土粒子少量、ローム粒子微量
			微量	9	明	褐	色	ローム粒子中量、焼土ブロック・粘土粒子微量	
3	暗	褐	色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子	10	灰	褐色	粘土粒子中量、焼土ブロック少量、ローム粒子微量	
			微量	11	褐	色	ローム粒子多量		
4	褐	色	焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子	12	に	い	黄	褐色	粘土粒子多量、焼土粒子微量
			微量	13	に	い	黄	褐色	粘土粒子中量、焼土粒子少量
5	暗	赤	褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量					

ピット 4か所。P1～P3は深さ16～32cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P4は深さ33cmで、規模と位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

1	褐	色	ローム粒子中量、焼土粒子微量	4	明	褐	色	ローム粒子中量
2	褐	色	ローム粒子中量	5	褐	色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量	
3	明	褐	色	ローム粒子中量、焼土粒子微量				

遺物出土状況 土師器片68点（坏類16、甕類52）、須恵器片10点（坏類5、蓋3、甕類2）、瓦片4点、石器1点（砥石）が竈付近を中心に出土している。804・T60は中央部の覆土下層、T58は北西部、T59・T61は竈右袖付近の覆土中層、Q113は南壁際の覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀中葉と考えられる。

第226号住居跡出土遺物観察表（第20図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
804	須恵器	坏	19.3	(5.2)	-	石英・長石	に	い	橙	普通	内・外面クロコナダ 体部下端溝へタ削り	覆土下層 15a

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q113	砥石	13.7	4.7	4.3	421.0	砂岩	砥面2面	覆土上層	PL14
T58	平瓦	(20.2)	(14.2)	2.2	(879.0)	土製（長石・黒色粒子）	両面布目肌 凸面鈍叩き	覆土中層	PL16
T59	丸瓦	(18.5)	(12.7)	2.6	(983.0)	土製（長石・雲母）	両面布目肌 凸面ヘラナゲ	覆土中層	PL16
T60	丸瓦	(18.5)	(8.7)	1.7	(694.0)	土製（石英・長石・雲母）	両面布目肌 凸面ヘラナゲ	覆土下層	
T61	丸瓦	(8.7)	(6.7)	1.5	(138.0)	土製（長石・雲母）	両面布目肌 凸面ヘラナゲ	覆土中層	

第227号住居跡（第21図）

位置 調査区Ⅲ区のJ14d0区で、標高64mほどの尾根状の台地平坦部に位置している。

重複関係 第235・238号住居跡を掘り込み、第536号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 削平により、確認できた範囲は長軸4.10m、短軸3.79mの方形又は長方形と推定され、主軸方向はN-91°-Eと考えられる。

床 ほぼ平坦で、北部から中央部にかけて踏み固められている。

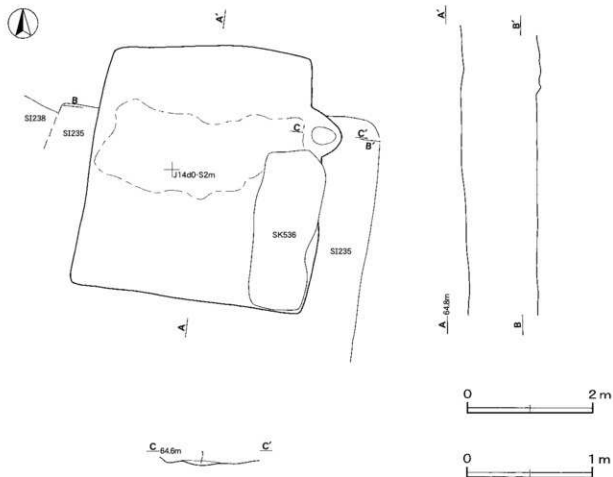
竈 削平のため崩壊しているが、火床面と思われる痕跡が東壁のやや北東コーナー寄りに確認されたため、竈跡と考えられる。

竈土層解説

1 暗赤褐色 焼土ブロック少量

遺物出土状況 土師器片26点（坏類6，甕類20），須恵器片1点（甕）が出土している。細片のため図示できない。

所見 時期は、重複関係及び周辺遺構の様相から10世紀代と考えられる。



第21図 第227号住居跡実測図

第228号住居跡（第22～24図）

位置 調査区Ⅲ区のJ14b9区で、標高64mほどの尾根状の台地平坦部に位置している。

重複関係 第242号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸2.67m，短軸2.45mの方形で、主軸方向はN-92°-Eである。壁高は16～21cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、竈前面から中央部にかけて踏み固められている。壁溝が南壁際の一部を除き、ほぼ全周している。断面形はU字状である。

竈 東壁のやや南寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで105cmである。右袖部の一部を除き崩

壊している。右袖部は床面と同じ高さの地山に、粘土粒子を含んだローム土で構築されている。瓦片が周辺から散乱して出土していることから、構築材として使用された可能性が考えられる。火床部は、床面と同じ高さの平面部を使用しており、火床面は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ40cm掘り込まれ、緩やかに外傾して立ち上がっている。竈土層断面図の第1・3層が天井部の崩落土に該当する。

竈土層解説

- | | | | |
|----------|-------------------------|-------|----------------------------|
| 1 にぶい黄褐色 | 粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子少量 | 5 暗褐色 | 炭化粒子中量、焼土粒子少量、ローム粒子微量 |
| 2 暗褐色 | 炭化粒子中量、焼土粒子少量、ロームブロック微量 | 6 褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量 |
| 3 にぶい褐色 | 粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子少量 | 7 褐色 | ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子少量 |
| 4 暗褐色 | 炭化粒子中量、焼土ブロック少量 | | |

ピット 26か所。P1・P2は深さ17cm・35cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P3は深さ45cmで、性格は不明である。壁際下に穿たれた23か所のピットは、配置から壁柱穴と考えられる。

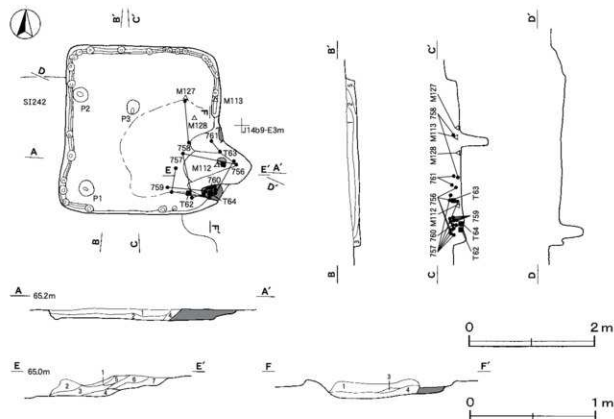
覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

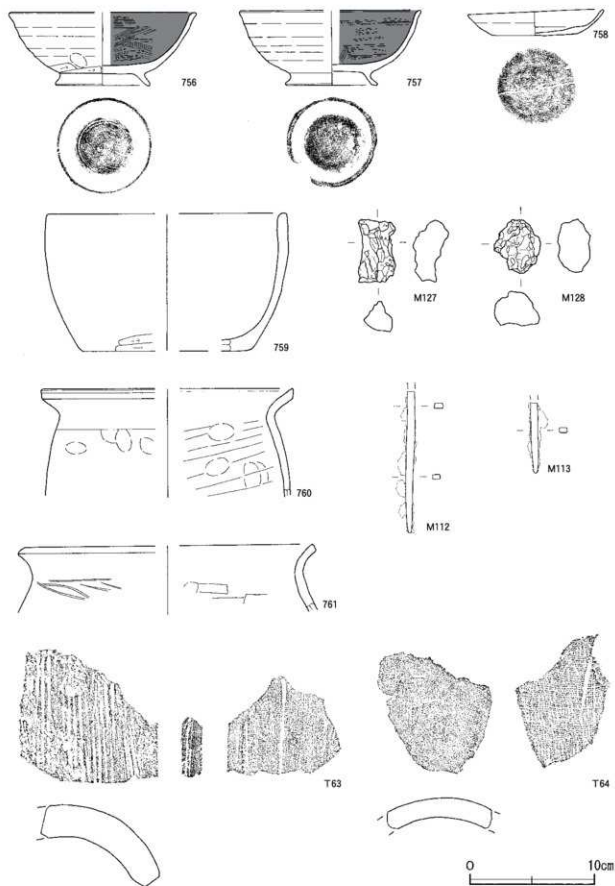
- | | | | |
|-------|----------------|-------|------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 4 明褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子少量 | 5 褐色 | ローム粒子中量 |
| 3 明褐色 | ローム粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片120点（坏類68、高台付椀15、甕類37）、須恵器片4点（坏類1、高台付坏2、蓋1）、瓦片3点、鉄製品2点（釘）、鉄滓2点が竈付近を中心に多く出土している。また、流れ込んだ縄文土器片1点（深鉢）も出土している。756～761・M112・M113、T63は竈付近の覆土上層から下層、M127・M128は竈北側、T62・T64は竈右袖付近の床面からそれぞれ出土している。

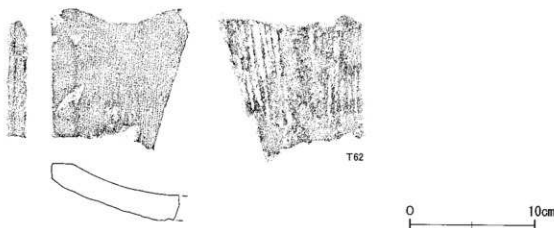
所見 時期は、出土土器から10世紀前半と考えられる。



第22図 第228号住居跡実測図



第23图 第228号住居跡出土遺物実測図(1)



第24図 第228号住居跡出土遺物実測図(2)

第228号住居跡出土遺物観察表(第23・24図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
776	土師器	高台付椀	14.8	5.9	7.5	雲母	にじい橙	普通	外面クロナゲ 体部下端手持ちヘラ削り 外面指頭削 内面ヘラ磨き 底部回転ヘ ラ削り後高台削り付け	覆土上層 ～下層	50% PL.11
757	土師器	高台付椀	14.4	6.0	7.3	雲母・砂礫	橙	普通	外面クロナゲ 内面ヘラ磨き 底部回転 ヘラ削り後高台削り付け	覆土上層 ～下層	40% PL.11
758	土師器	皿	10.7	2.0	6.5	長石・雲母	にじい黄橙	普通	内・外面ナゲ 体部下端ヘラ削り後 ナゲ	覆土下層	95% PL.10
759	土師器	鉢	19.0	11.0	[13.2]	石英・長石	橙	普通	内・外面ナゲ 体部下端ヘラ削り	覆土上層	20%
760	土師器	壺	[20.0]	(10.8)	-	石英・長石・赤色 粒子	橙	普通	外面ナゲ 内面ヘラナゲ 内・外面指頭削	覆土上層	5%
761	土師器	壺	[23.0]	(5.5)	-	石英・長石・雲 母・赤色粒子	にじい橙	普通	内・外面ヘラナゲ	覆土上層	5%

番号	器種	長さ(径)	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M12	釘	(11.4)	0.6	0.4	(16.9)	鉄	頭部欠損 断面長方形	覆土下層	PL.15
M13	釘	(5.7)	0.6	0.4	(6.9)	鉄	頭部欠損 断面長方形	覆土下層	PL.15
M17	鉄滓	5.0	2.9	2.8	49.0	砂鉄他	着磁性弱	床面	
M18	鉄滓	4.2	3.6	2.6	43.9	砂鉄他	着磁性弱	床面	
T62	平瓦	(11.7)	(10.1)	2.0	(330.0)	土製 (石英・長石・黒色粒子)	両面布目削 凸面調平き	床面	
T63	丸瓦	(10.8)	(9.3)	2.5	(376.0)	土製(長石・雲母)	両面布目削 凸面調平き	覆土中層	PL.16
T64	丸瓦	(10.5)	(8.3)	1.5	(141.0)	土製 (長石・雲母・黒色粒子)	両面布目削 凸面ヘラナゲ	床面	

第229号住居跡(第25図)

位置 調査区Ⅲ区の114J8区で、標高65mほどの尾根状の台地平坦部に位置している。

重複関係 第239号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 南壁は削平されており、確認できた範囲は長軸3.35m、短軸2.68mの長方形と推定され、主軸方向はN-1°-Wである。壁高は1~5cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、竈前面から中央部にかけて踏み固められている。

竈 北壁のほぼ中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで108cmである。袖部は削平のため確認できなかった。火床部は床面をわずかに掘りくぼめ、火床面は火熱を受けて赤変している。煙道部は壁外へ60cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。

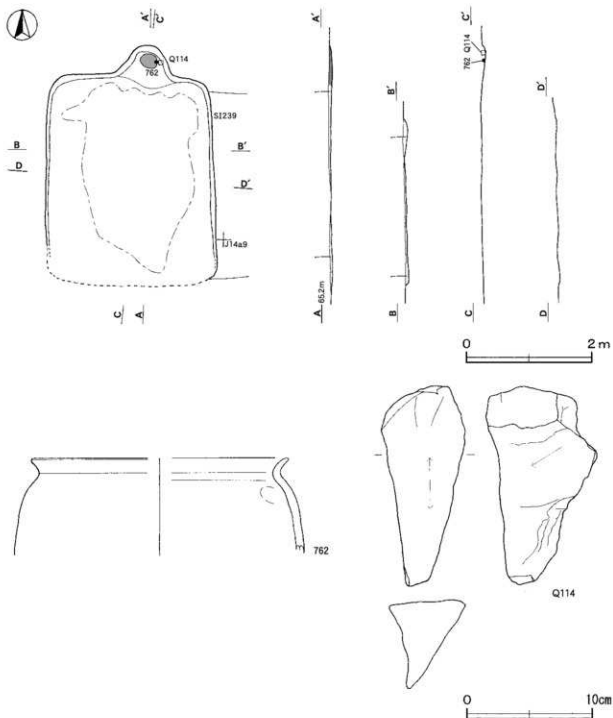
覆土 単一層で、層厚が薄いため堆積状況は不明である。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片19点(坏類3, 高坏2, 甕類14), 須恵器片1点(坏類), 石器1点(砥石), 鉄製品2点(釘)が出土している。762・Q114は竈の火床面からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器から11世紀前半と考えられる。



第25図 第229号住居跡・出土遺物実測図

第229号住居跡出土遺物観察表（第25図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
782	土師器	甕	30.2	(7.6)	-	雲母-砂礫	橙	普通	体部内面指明痕	竈火床面	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q14	砥石	16.0	8.0	7.1	589.0	砂岩	砥面2面	竈火床面	PL14

第230号住居跡（第26・27図）

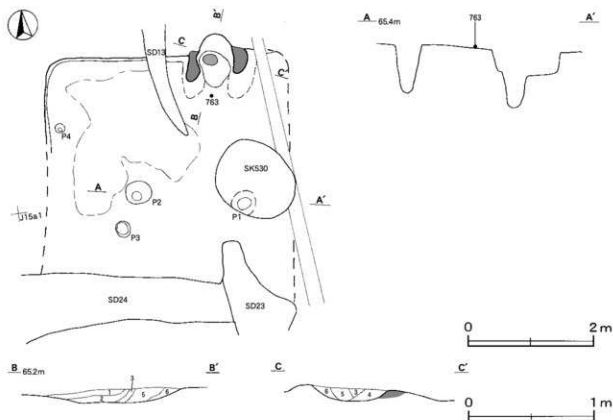
位置 調査区Ⅲ区の115j1区で、標高65mほどの尾根状の台地平坦部に位置している。

重複関係 第13・23・24号溝、第530号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南部が削平されているため、確認できた範囲は長軸3.90m、短軸3.52mの方形または長方形と推定され、主軸方向はN-9°-Eである。壁高は確認面と床面との差がほとんどなかったため、測定できなかった。

床 ほぼ平坦で、竈前面から西部にかけて踏み固められている。

竈 北壁の東寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで88cmである。袖部は削平のため確認できなかった。火床部は床面を皿状に12cm掘りくぼめ、火床面は火熱を受けて赤変している。煙道部は壁外へ36cm掘り込まれ、緩やかに外傾して立ち上がっている。



第26図 第230号住居跡実測図

甕土層解説

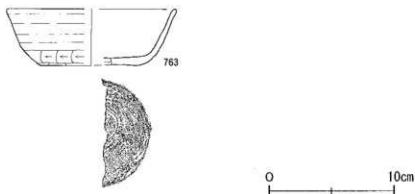
- | | |
|------------------------|------------------------|
| 1 赤褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子微量 | 4 褐色 ロームブロック・焼土粒子少量 |
| 2 赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子微量 | 5 赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 焼土ブロック中量 | 6 褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量 |

ピット 4ヶ所。P1・P2は深さ90cm・75cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P3・P4の深さは22cm・25cmで、性格は不明である。

覆土 層厚が薄く、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 土師器片6点(甕類)、須恵器片4点(坏類)が出土している。763は竈前面から出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。



第27図 第230号住居跡出土遺物実測図

第230号住居跡出土遺物観察表(第27図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
763	須恵器	坏	13.4	4.5	18.2	長石・雲母	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部内溝へフ切り	竈前面	40% PL10

第231号住居跡(第28・29図)

位置 調査区Ⅲ区のJ14F9区で、標高64mほどの尾根状の台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸3.30m、短軸3.12mの方形で、主軸方向はN-16°-Eである。壁高は5~20cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、竈前面から南壁にかけて踏み固められている。壁溝が南壁と西壁にみられ、断面形はU字状である。

竈 2か所。竈1は東壁の中央部に付設され、規模は焚口部から煙道部まで76cmである。袖部は右袖部の一部を除き崩壊しているが、床面と同じ高さの地山に、粘土粒子を含んだローム土で構築されている。周辺に細礫が散乱していることから、構築材として使用された可能性が考えられる。火床部は床面をわずかに掘りくぼめ、火床面は火熱を受けて赤変している。煙道部は壁外へ12cm掘り込まれ、ほぼ直立している。甕土層断面図の第2層が天井部の崩落土に該当する。竈2は北壁の東寄りに付設され、規模は焚口部から煙道部まで104cmで緩やかに外傾して立ち上がっている。火床部はほぼ平坦で、火床面が火熱を受けて赤変している。煙道部は壁外へ76cm掘り込まれ、緩やかに外傾して立ち上がっている。覆土の堆積状況や竈2の袖部が欠損しているこ

とから、竈2の廃絶後に、竈1に移設したと考えられる。

竈1土層解説

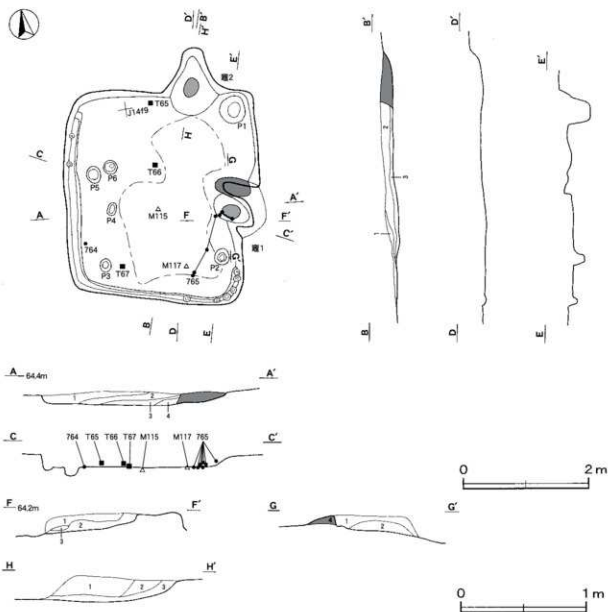
- | | | | | | |
|---|----|----------------------------|---|------|-----------------------|
| 1 | 褐色 | ローム粒子少量、粘土ブロック・炭化粒子微量 | 3 | 暗褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 |
| 2 | 褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量 | 4 | 明赤褐色 | ロームブロック・粘土粒子少量、焼土粒子微量 |

竈2土層解説

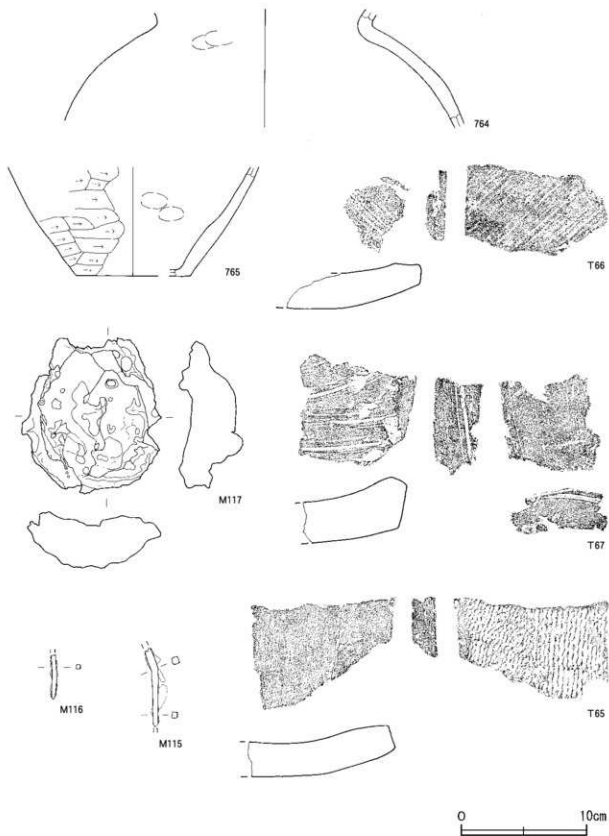
- | | | | | | |
|---|----|----------------------------|---|------|-------------------|
| 1 | 褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量 | 2 | 赤褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 |
| | | | 3 | 明赤褐色 | ロームブロック中量、ローム粒子微量 |

ピット 14か所。P1～P3は深さ16～36cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P4～P6は深さ13～19cmで、規模と位置から出入口施設に伴うピットと考えられる。壁際に穿たれた8か所のピットは、規模と配置から壁柱穴と考えられる。

覆土 4層に分層される。細礫が床面や覆土中に多く出土していることや、ロームブロックを含む不規則な堆



第28図 第231号住居跡実測図



第29图 第231号住居跡出土遺物実測図

積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 3 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量
2 褐色 ローム粒子中量、焼土ブロック微量 4 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片135点(坏類62, 甕類73), 須恵器片7点(坏類2, 甕類5), 鉄製品5点(釘), 瓦片3点, 椀状滓1点が竈1付近を中心に出土している。764は西部, 765・M117・T67は南部, M115は中央部の床面からそれぞれ出土している。T65は北部, T66は中央部の覆土下層からそれぞれ出土している。M116は覆土中から出土している。

所見 椀状滓や鉄釘が出土し, 住居の規模や竈の移設等から作業場として使用された可能性が考えられる。時期は, 出土土器から9世紀中葉と考えられる。

第231号住居跡出土遺物観察表(第29図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
764	須恵器	甕	-	(9.9)	-	長石	普通	普通	外面指頭痕	床面	5%
765	土師器	甕	-	(8.7)	9.0	長石・赤色粒子	にんい橙	普通	体部外面へう割り 内面指頭痕	床面	10%

番号	器種	長さ(径)	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M15	釘	(6.2)	0.6	0.5	(4.5)	鉄	基部破片 上部屈折 断面方形	床面	PL15
M16	釘	(3.6)	0.4	0.4	(1.6)	鉄	基部破片 断面方形	覆土中	PL15
M17	椀状滓	12.4	11.0	5.1	617.0	砂鉄微	着磁性別	床面	
T65	平瓦	(9.4)	(11.6)	2.8	(338.0)	土製(石英・長石)	凹面布目痕 凸面調印き	覆土下層	
T66	平瓦	(8.0)	(11.2)	2.8	(221.0)	土製(長石・雲母)	凹面布目痕 凸面へう割り	覆土下層	
T67	平瓦	(8.1)	(9.0)	4.1	(359.0)	土製(長石・黒色粒子)	凹面布目痕 凸面へう割り	床面	

第232号住居跡(第30図)

位置 調査区Ⅲ区のJ14g0区で, 標高64mほどの尾根状の台地平坦部に位置している。

重複関係 第233・234号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸2.75m, 短軸2.49mの長方形で, 主軸方向はN-102°-Eである。壁高は8~23cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 中央部が踏み固められている。壁溝が西壁際と南壁際の一部を周回し, 断面形は逆台形状である。

竈 東壁のほぼ中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで100cm, 袖部幅は92cmである。袖部は右袖部の一部が崩壊しているが, 床面と同じ高さの地山に, 粘土粒子と細礫を含んだローム土で構築されており, 内側が火熱を受けて赤変している。火床部は, 床面をわずかに掘りくぼめ, 火床面は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ64cm掘り込まれ, 緩やかに外傾して立ち上がっている。竈土層断面図の第1・2層が天井部の崩落土に該当する。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・粘土粒子微量 4 褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子微量
2 褐色 ロームブロック中量, 粘土粒子微量 5 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
3 褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量 6 褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子・粘土粒子微量

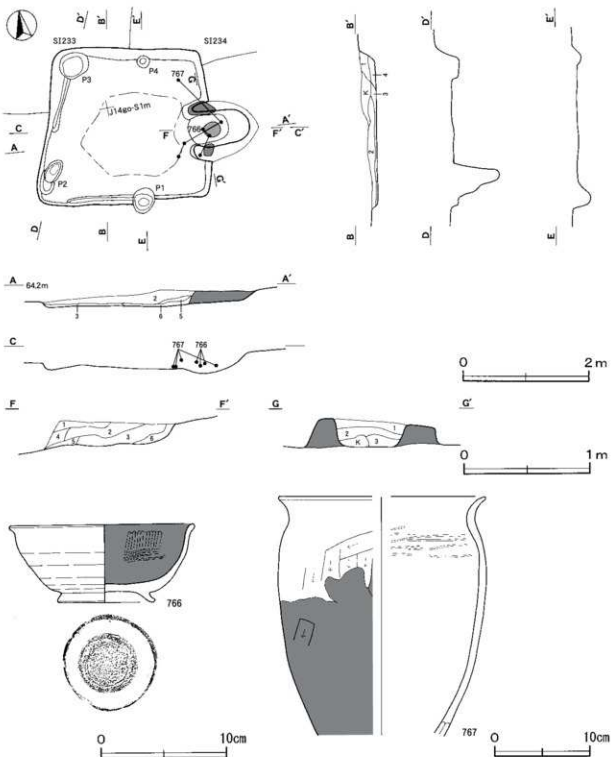
ピット 4か所。P1・P2は深さ20cm・64cmで, 規模と配置から主柱穴と考えられる。P3・P4は深さが

12cm・6cmで、性格は不明である。

覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|-------|----------------|
| 1 褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 | 4 明褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 褐色 | ロームブロック少量 | 5 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 明褐色 | ローム粒子中量 | 6 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 |



第30図 第232号住居跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片207点（坏類22，高坏10，甕類175），須恵器片9点（坏類8，蓋1）が竈付近を中心に出土している。766は竈の覆土下層，767は竈周辺の覆土下層から床面にかけてそれぞれ出土している。

所見 時期は，出土土器から10世紀前半と考えられる。

第232号住居跡出土遺物観察表（第30図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
766	土師器	高台付椀	14.5	6.2	7.3	赤色粘土	にぶい黄橙	普通	外面ロクロナデ 内面ヘラ磨き 凹底ヘラ切り後高台貼り付け	底部 覆土下層	60% PL.11
767	土師器	甕	[21.8],[25.4]	-	-	長石	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ磨り 内面ヘラ磨き	覆土下層 ～床面	30% 裏面材付着

第233号住居跡（第31・32図）

位置 調査区Ⅲ区のJ14f9区で，標高64mほどの尾根状の台地平坦部に位置している。

重複関係 第234号住居跡を掘り込み，第232号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.05m，短軸3.02mの方形で，主軸方向はN-21°-Wである。壁高は18～28cmで，外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で，中央部が踏み固められている。壁溝が西壁際と南壁際の一部を周回し，断面形はU字状である。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで94cm，袖部幅は132cmである。床面と同じ高さの地山に，粘土粒子を含んだローム土で構築されており，内側が赤変している。火床部は床面をわずかに掘りくぼめ，火床面は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ54cm掘り込まれ，ほぼ直立している。

竈土層解説

1	にぶい褐色	ローム粒子・粘土粒子少量	14	褐	色	焼土ブロック・ローム粒子少量
2	にぶい褐色	焼土ブロック・ローム粒子・粘土粒子少量	15	にぶい赤褐色	色	焼土ブロック・ローム粒子少量
3	褐色	ローム粒子中量，焼土粒子少量	16	にぶい赤褐色	色	焼土ブロック・ローム粒子・粘土粒子少量
4	褐色	ローム粒子中量，焼土粒子微量	17	暗褐色	色	焼土ブロック少量，ローム粒子・粘土粒子微量
5	明赤褐色	焼土ブロック中量，ローム粒子少量	18	褐色	色	ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
6	にぶい褐色	焼土ブロック・粘土粒子少量，ローム粒子微量	19	にぶい赤褐色	色	焼土ブロック少量，ローム粒子微量
7	にぶい赤褐色	粘土粒子中量，焼土ブロック少量	20	暗褐色	色	ローム粒子・焼土粒子微量
8	にぶい赤褐色	粘土粒子中量，焼土粒子微量	21	赤褐色	色	焼土粒子・粘土粒子少量，ローム粒子微量
9	暗赤褐色	焼土ブロック少量，ローム粒子微量	22	にぶい赤褐色	色	焼土ブロック中量，ローム粒子・粘土粒子微量
10	褐色	ロームブロック・ローム粒子・粘土粒子少量	23	暗褐色	色	ローム粒子・粘土粒子少量，焼土粒子微量
11	褐色	ロームブロック・焼土粒子少量	24	にぶい赤褐色	色	焼土ブロック・ローム粒子少量，粘土粒子微量
12	にぶい褐色	ローム粒子・焼土粒子少量，粘土粒子微量	25	暗褐色	色	ロームブロック・焼土粒子少量，粘土粒子微量
13	褐色	ローム粒子中量，焼土ブロック少量	26	灰褐色	色	粘土粒子中量，焼土粒子少量，ローム粒子微量

ピット 深さ21cmで，性格は不明である。

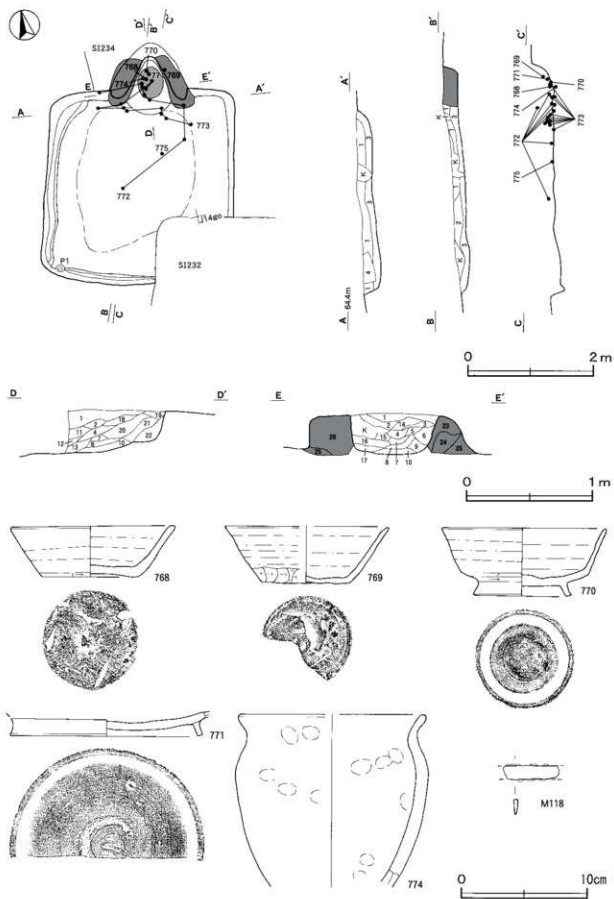
覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

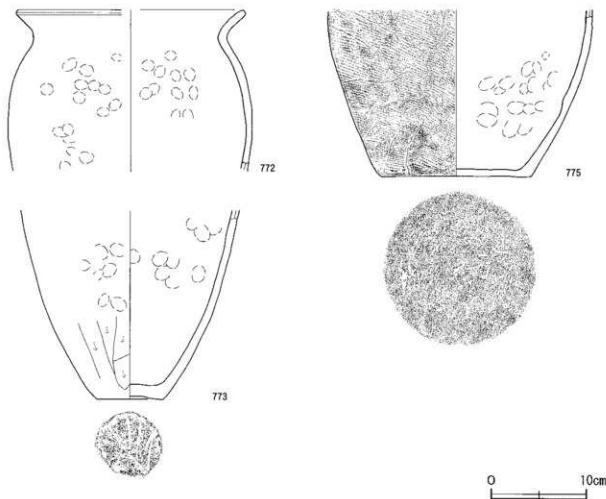
1	褐色	ローム粒子中量，焼土粒子少量，粘土粒子微量	3	褐色	色	ローム粒子中量，焼土ブロック・粘土粒子微量
2	褐色	ローム粒子中量，焼土粒子微量	4	暗褐色	色	ローム粒子少量，焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片238点（坏類40，高坏10，甕類188），須恵器片38点（坏類25，蓋3，盤1，甕類9），鉄製品1点（刀子）が竈付近を中心に出土している。768・770・771・774は竈の火床面，769は竈の右袖部，773・775は竈付近の床面からそれぞれ出土している。772は中央部の覆土下層から竈内・外の床面及び火床面にかけての破片が接合したものである。M118は覆土中から出土している。770は煙道部の真下より出土したことから竈の支脚に転用されたものと考えられる。

所見 時期は，出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第31图 第233号住居跡・出土遺物実測図



第32図 第233号住居跡出土遺物実測図

第233号住居跡出土遺物観察表 (第31・32図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
768	須恵器	坏	12.8	4.2	7.5	石英・長石	灰	普通	内・外面ロクロナデ 体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ切り後一方向のナデ	竈火床面	75% PL.10
769	須恵器	坏	[12.9]	4.5	7.0	石英・長石・雲母	黄灰	普通	内・外面ロクロナデ 体部下端手持ちヘラ削り 底部回転ヘラ切り	竈右袖部	30% PL.11
770	須恵器	高台付坏	13.0	5.4	7.0	長石・黒色粒子	暗灰黄	普通	内・外面ロクロナデ 体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	竈火床面	70% PL.11
771	須恵器	甕	-	(2.0)	15.1	長石	灰	普通	底部ヘラ切り後高台貼り付け	竈火床面	20%
772	土師器	甕	24.0	(17.1)	-	石英・長石	橙	普通	体部内・外面ナデ 内・外面指頭痕	覆土下層~床面・竈火床面	20%
773	土師器	甕	-	(20.6)	7.0	石英・長石	明赤褐	普通	体部外面下部縦方向ヘラ削り 内・外面指頭痕 底部木葉痕	床面	30%
774	土師器	甕	[14.6]	(13.8)	-	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	内・外面指頭痕	竈火床面	30%
775	須恵器	甕	-	(17.6)	15.5	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	体部外面平行引き 内面指頭痕 底部ヘラナデ	床面	40% PL.12

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M18	刀子	(4.5)	1.3	0.3	(6.4)	鉄	先端・基部欠損 断面三角形	覆土中	PL.15

第234号住居跡（第33・34図）

位置 調査区Ⅲ区のJ14f0区で、標高64mほどの尾根状の台地平坦部に位置している。

重複関係 第232・233住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.37m、短軸4.31mの方形で、主軸方向はN-1°-Wである。壁高は39～50cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほぼ平坦で、北東・南西・北西の各コーナー部を除き、踏み固められている。壁溝が全周し、断面形はU字状である。

竈 北壁のやや東寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで90cm、袖部幅は120cmである。袖部は床面と同じ高さの地山に、粘土粒子と細礫を含んだローム土で構築されている。火床部は床面を皿状に10cm掘りくぼめ、火床面は火熱を受けて赤変している。煙道部は壁外へ24cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。

土層解説

1	に深い赤褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック少量、粘土粒子微量	12	灰褐色	焼土ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子・粘土粒子少量
2	灰褐色	焼土ブロック・ローム粒子・粘土粒子少量	13	に深い赤褐色	焼土ブロック・ローム粒子・粘土粒子中量、炭化粒子少量
3	に深い赤褐色	ローム粒子多量、炭化物・焼土粒子少量	14	暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化物・粘土粒子少量
4	に深い赤褐色	ローム粒子多量、焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量	15	暗赤褐色	ローム粒子多量、焼土粒子・粘土粒子少量
5	暗赤褐色	ローム粒子多量、炭化物少量	16	に深い赤褐色	ローム粒子少量、焼土粒子少量
6	暗赤褐色	ローム粒子・炭化粒子中量、焼土ブロック・粘土粒子少量	17	暗褐色	粘土粒子多量、ロームブロック少量
7	暗赤褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子中量、粘土粒子少量	18	褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・粘土粒子少量
8	暗赤褐色	ローム粒子多量、焼土ブロック中量、炭化物少量	19	褐色	ローム粒子多量、粘土粒子中量
9	に深い赤褐色	ローム粒子多量、焼土粒子・粘土粒子少量	20	暗赤褐色	焼土粒子多量、粘土粒子少量
10	褐色	ローム粒子多量、粘土粒子少量	21	暗赤褐色	焼土ブロック・粘土粒子中量
11	褐色	ローム粒子多量、焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量	22	に深い赤褐色	粘土粒子多量、焼土ブロック少量
			23	暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・粘土粒子少量

ピット 5か所。P1～P4は深さ44～68cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ20cmで上端の長径が1mほどあるが、土層や位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

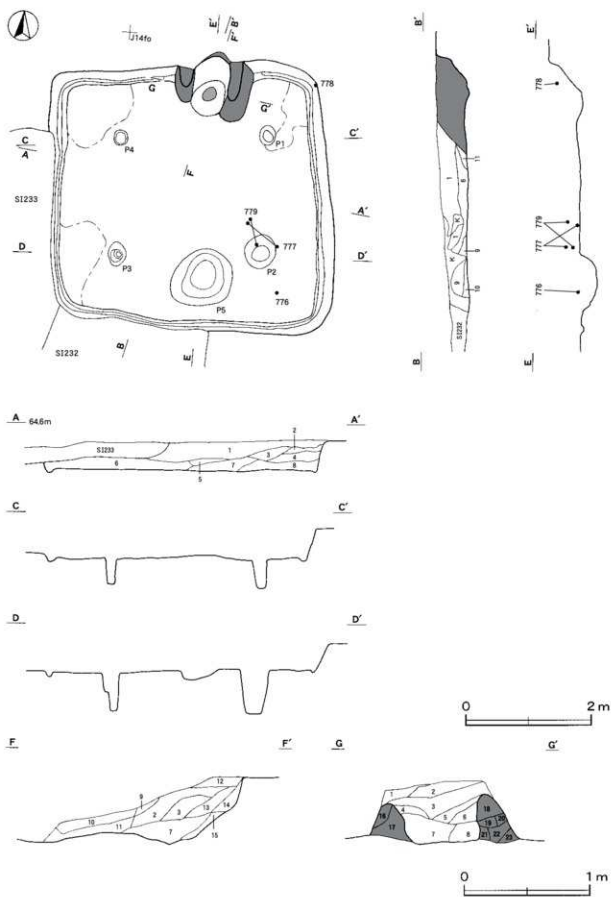
覆土 11層に分層される。多くのブロックや細礫を含む人為堆積である。

土層解説

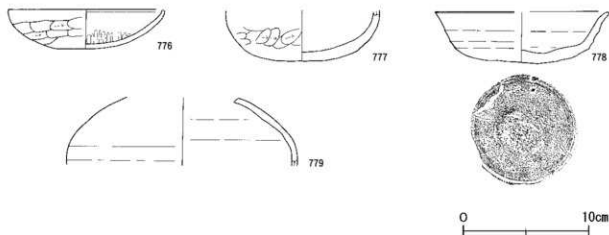
1	褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量	6	褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・粘土粒子微量
2	褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック少量	7	褐色	ローム粒子多量、焼土ブロック・炭化粒子微量
3	褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子微量	8	褐色	ローム粒子多量、焼土粒子少量
4	褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量	9	褐色	ローム粒子中量、焼土粒子微量
5	褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	10	明褐色	ローム粒子多量、粘土粒子微量
			11	褐色	ローム粒子中量、粘土粒子微量

遺物出土状況 土師器片261点（坏類64、高坏10、甕類187）、須恵器片38点（坏類20、高台付坏2、蓋8、壺1、甕類7）が全城から散在して出土している。また、流れ込んだ石器1点（2次加工を有する剥片）も出土している。776・777・779は南東部の覆土中層から床面に掛けて、778は北東コーナー部の覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀中葉と考えられる。



第33图 第234号住居跡実測図



第34図 第234号住居跡出土遺物実測図

第234号住居跡出土遺物観察表 (第34図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
776	土師器	坏	12.2	3.1	-	雲母・赤色粒子	橙	普通	体部外面へラ削り 内面へラ磨き	床面	90% PL10
777	土師器	坏	-	(4.0)	-	石英・黒色粒子	橙	普通	体部外面へラ削り	覆土中層・床面	25%
778	須恵器	坏	(13.8)	4.1	8.6	長石・雲母	灰黄	普通	内・外面ロクロナデ 底部回転へラ切り後ナデ	覆土上層	30%
779	須恵器	甕	-	(5.4)	-	雲母	橙	普通	内・外面ロクロナデ	覆土中層・下層	10%

第235号住居跡 (第35図)

位置 調査区Ⅲ区のJ14a9区で、標高64mほどの尾根状の台地平坦部に位置している。

重複関係 第238号住居跡を掘り込み、第227号住居、第536号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.55m、短軸5.10mの方形で、主軸方向はN-6°-Eである。壁高は1~4cmで外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 削平のため崩壊しているが、袖部跡と推定される粘土痕が確認されたため、北壁のやや北西コーナー寄りに付設されていたと推測される。火床部はわずかに掘り込みが確認された。

覆土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量

ピット 2か所。P1は深さ40cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P2は深さ70cmで、性格は不明である。

ピット土層解説

- 1 褐色 ロームブロック少量 4 暗褐色 ロームブロック少量
 2 褐色 ローム粒子少量 5 暗褐色 ローム粒子少量
 3 褐色 ローム粒子中量

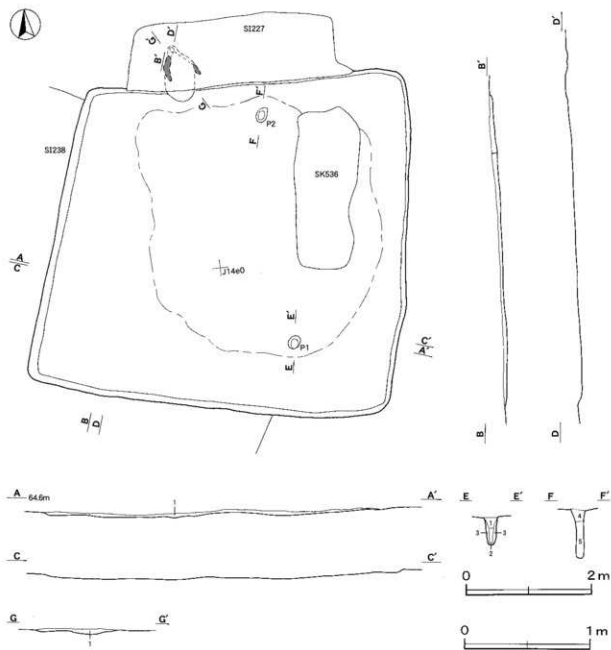
覆土 単一層で、層厚が薄いため堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 明褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片6点(甕)が出土しているが、細片のため図示できない。

所見 時期は、重複関係及び出土土器から8世紀代と考えられる。



第35図 第235号住居跡実測図

第236号住居跡 (第36・37図)

位置 調査区Ⅲ区のJ14c5区で、標高64mほどの尾根状の台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸3.75m、短軸3.71mの方形で、主軸方向はN-14°-Eである。壁高は14~34cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、竈前面が踏み固められている。壁溝が全周し、断面形はU字状である。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで102cm、袖部幅は120cmである。袖部は床面と同じ高さの地山に粘土粒子を含んだローム土で構築されており、内側が火熱を受けて赤変している。火床部は床面をわずかに掘りくぼめ、火床面は火熱を受けて赤変している。煙道部は壁外へ40cm掘り込まれ、外傾して

立ち上がっている。

土層解説

- | | | | |
|----------|-------------------------------|-----------|------------------------|
| 1 にぶい褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量、粘土粒子微量 | 7 にぶい褐色 | ローム粒子少量、焼土ブロック・鹿沼パミス微量 |
| 2 赤褐色 | 鹿沼パミス中量、焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 8 にぶい褐色 | 焼土粒子少量、ロームブロック微量 |
| 3 にぶい赤褐色 | 焼土粒子・粘土粒子少量、ロームブロック微量 | 9 にぶい赤褐色 | 焼土粒子少量、ロームブロック・粘土粒子微量 |
| 4 にぶい赤褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子・粘土粒子微量 | 10 赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量、鹿沼パミス微量 |
| 5 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック・粘土粒子少量、ローム粒子微量 | 11 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック中量、ローム粒子微量 |
| 6 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、粘土粒子少量 | 12 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック中量、粘土粒子少量 |
| | | 13 にぶい赤褐色 | 粘土粒子少量、焼土ブロック・ローム粒子微量 |

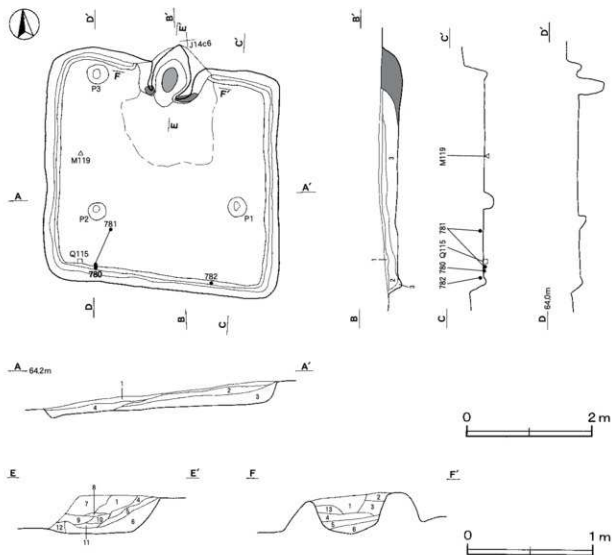
ピット 3か所。P1～P3は深さ10～40cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。

覆土 4層に分層される。鹿沼パミスを含む不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|------|-------------------------|-------|------------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量 | 3 褐色 | ローム粒子中量、鹿沼パミス少量、炭化粒子微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子少量、鹿沼パミス微量 | 4 明褐色 | ローム粒子中量、鹿沼パミス少量、焼土粒子微量 |

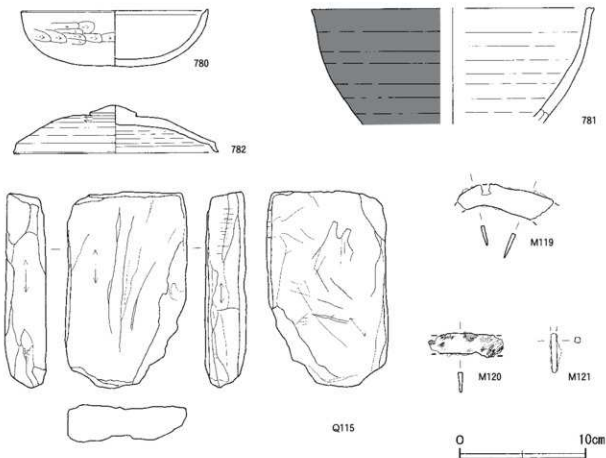
遺物出土状況 土師器片61点(坏類29, 甕類32), 須恵器片17点(坏類3, 高台付坏1, 蓋9, 壺1, 甕類3), 石器1点(砥石), 鉄製品3点(刀子, 鎌, 釘)が全城から散在して出土している。780・781・Q115は南西コーナー一部, 782は南部, M119は西部の床面からそれぞれ出土している。M120は覆土中, M121は竈の覆



第36図 第236号住居跡実測図

土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀中葉と考えられる。



第37図 第236号住居跡出土遺物実測図

第236号住居跡出土遺物観察表 (第37図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
780	土師器	坏	14.7	4.4	-	雲母	明赤褐	普通	体部外面へラ削り	床面	60% PL10
781	土師器	鉢	22.4	9.2	-	雲母	浅黄	普通	内・外面ロクロナデ	床面	10%
782	須恵器	蓋	16.0	3.8	-	長石	灰	普通	天井部凹溝へラ削り	床面	90% PL12

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q115	砥石	15.6	9.6	3.2	690.0	凝灰岩	砥面4面	床面	PL14
M119	鎌	(7.6)	2.0	0.3	(13.6)	鉄	基部欠損 断面三角形	床面	PL15
M120	刀子	(5.9)	1.6	0.3	(6.9)	鉄	断面三角形	礎土中	PL15
M121	釘	(3.3)	0.4	0.4	(2.2)	鉄	脚部破片 断面方形	礎覆土中	PL15

第239号住居跡 (第38図)

位置 調査区Ⅲ区のI14J9区で、標高65mほどの尾根状の台地平坦部に位置している。

重複関係 第229号住居に掘り込まれている。

規模と形状 確認できた範囲は南北軸2.96m、東西軸1.35mの方形又は長方形と推定され、主軸方向はN-94°-Eと考えられる。

床 ほぼ平坦で、竈の焚口部周辺が踏み固められている。

竈 東壁のほぼ中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで72cmで、袖部幅は92cmである。袖部は床面と同じ高さの地山に、粘土粒子を含んだローム土で構築されており、内側は火熱を受けて赤変している。また、火熱を受けた細礫が散在していることから、袖部の構築材として使用された可能性がある。火床部は床面と同じ高さの平坦面を利用しており、火床面は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ37cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- 1 褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・黒沼パミス微量
 2 赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子微量

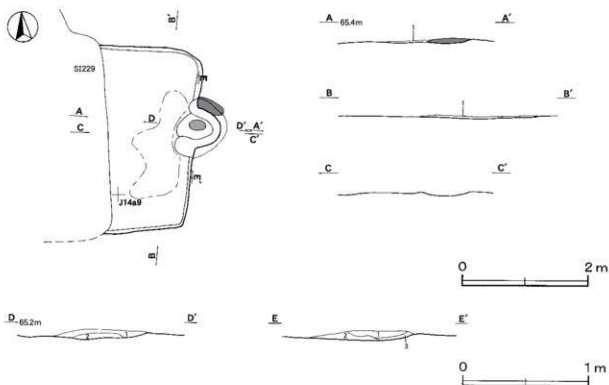
覆土 単一層で、層厚が薄いため堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量

遺物出土状況 土師器片10点（坏類3、甕類7）が出土している。すべて竈の火床部から出土しているが、細片のため図示できない。

所見 時期は、重複関係から11世紀前葉以前と考えられる。



第38図 第239号住居跡実測図

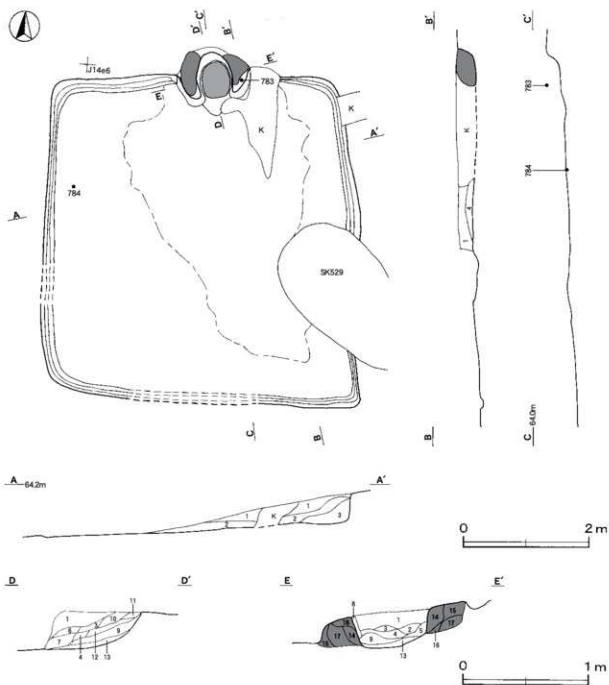
第240号住居跡 (第39・40図)

位置 調査区Ⅲ区のJ14e6区で、標高63mほどの尾根状の台地端部に位置している。

重複関係 第529号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南壁と西壁の一部が削平されている。確認できた範囲は長軸5.27m、短軸5.04mの方形と推定され、主軸方向はN-12°-Wである。壁高は3~20cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。竈前面から中央部にかけて踏み固められている。壁溝が、全周していると推測され、断面形はU字状である。



第39図 第240号住居跡実測図

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで100cm、袖部幅は120cmである。袖部は床面と同じ高さの地山に、粘土粒子を含んだローム土で構築され、内側が火熱を受けて赤変している。火床部は床面をわずかに掘りくぼめ、火床面は火熱を受けて赤変している。煙道部は壁外へ36cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。竈土層断面図の第6層が天井部の崩落土に該当する。

竈土層解説

1 焼 色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	10 焼 色	焼土ブロック・ローム粒子少量、粘土粒子微量
2 赤 褐色	焼土粒子・粘土粒子少量、ローム粒子微量	11 暗 赤 褐色	焼土粒子中量、粘土粒子少量
3 にぶい赤褐色	焼土粒子少量、ローム粒子微量	12 にぶい褐色	ローム粒子・焼土粒子少量
4 にぶい赤褐色	焼土粒子中量、粘土粒子少量、ローム粒子微量	13 にぶい赤褐色	焼土ブロック中量
5 暗 赤 褐色	焼土粒子多量、粘土粒子少量	14 暗 赤 褐色	焼土粒子中量、ローム粒子・粘土粒子少量
6 にぶい赤褐色	焼土粒子中量、焼土粒子少量、ローム粒子微量	15 焼 色	ローム粒子中量、粘土粒子微量
7 暗 黄 褐色	焼土ブロック少量、炭化粒子・粘土粒子微量	16 灰 褐色	粘土粒子中量、焼土粒子少量
8 赤 褐色	焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	17 にぶい褐色	粘土粒子中量、ローム粒子微量
9 暗 赤 褐色	焼土ブロック中量、炭化物微量	18 にぶい褐色	粘土粒子中量、ローム粒子少量

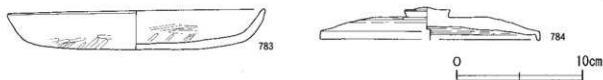
覆土 4層に分層される。周囲からの土砂が流入した堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

1 焼 色	ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量	3 焼 色	ローム粒子中量
2 焼 色	ローム粒子中量、炭化粒子少量	4 焼 色	焼土ブロック・ローム粒子・粘土粒子少量

遺物出土状況 土師器片47点（坏類26、甕類21）、須恵器片2点（坏類1、蓋1）が全域から散在して出土している。また、流れ込んだ石器1点（鏝）も出土している。783は竈の右袖部、784は西壁寄りの床面からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀中葉と考えられる。



第40図 第240号住居跡出土遺物実測図

第240号住居跡出土遺物観察表（第40図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	粘土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
783	土師器	皿	20.2	3.2	-	雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	体部内・外面へラ磨き	竈右袖部	45%
784	須恵器	蓋	[17.4]	2.6	-	長石	灰	普通	天井部9輪へラ削り	床面	30%

第241号住居跡（第41図）

位置 調査区Ⅲ区のJ14g6区で、標高62mほどの尾根状の台地端部に位置している。

確認状況 竈と東西側のわずかな壁の立ち上がりから住居と想定した。焼土がまとまって確認できたため、断ち割り調査をしたところ竈が確認された。竈から南部は削平されている。

規模と形状 確認できた範囲は南北軸0.85m、東西軸1.98mで、主軸方向はN-30°-Eと推定される。

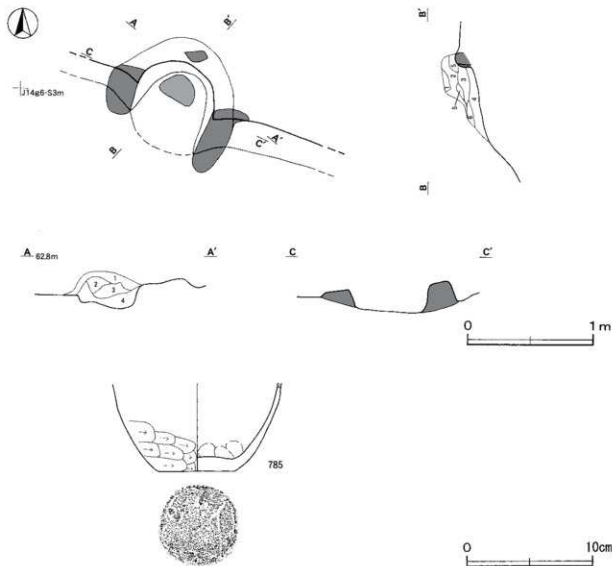
竈 確認できた規模は焚口部から煙道部まで70cmで、袖部幅は105cmである。袖部は粘土粒子を含んだローム土で構築されている。火床部は床面と推定される面をわずかに掘りくぼめ、火床面は火熱を受けて赤変している。煙道部は、壁外へ50cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。竈土層断面図の第3層が天井部の崩落土に該当する。

竈土層解説

- | | | | |
|---------|------------------------|------|---------------------------------|
| 1 明褐色 | ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子・粘土 | 4 褐色 | 焼土粒子中量、粘土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 明褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土 | 5 褐色 | 焼土粒子・粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子・炭化粒子微量 |
| 3 濃い赤褐色 | 粘土粒子中量、焼土ブロック・ローム粒子・炭化 | 6 褐色 | 焼土粒子・粘土粒子・炭化粒子・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片18点（坏類2，甕類16）が出土している。785は竈の覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器及び周辺遺構の様相から9世紀代と考えられる。



第41図 第241号住居跡・出土遺物実測図

第241号住居跡出土遺物観察表（第41図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
785	土師器	甕	-	(7.0)	6.0	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部外面下部へツナリ 内面指頭痕 底面木象痕	竈覆土中	60%

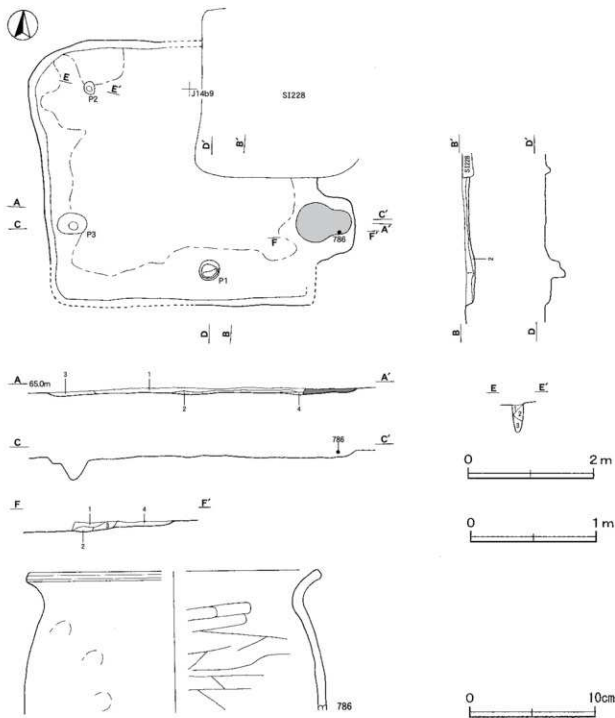
第242号住居跡（第42図）

位置 調査区Ⅲ区のJ14b9区で、標高65mほどの尾根状の台地平坦部に位置している。

重複関係 第228号住居に掘り込まれている。

規模と形状 南西コーナー部の一部が削平されており、確認できた範囲は長軸4.37m、短軸4.18mの方形と推定され、主軸方向はN-89°-Eである。壁高は9~20cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いて踏み固められている。



第42図 第242号住居跡・出土遺物実測図

竈 東壁のやや南寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで92cmである。袖部を確認することができなかったが、火床部の周囲に細礫が多数出土していることから、構築材として使用された可能性がある。火床部は床面をわずかに掘りくぼめ、火床面は火熱を受けて赤変している。煙道部は壁外へ64cm掘り込まれ、緩やかに外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- 1 褐色 ローム粒子・炭化粒子少量 3 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量
2 黒褐色 炭化粒子中量、ローム粒子・炭沼バミス微量 4 褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量

ピット 3ヶ所。P1・P2は深さ24cm・47cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P3は深さ32cmで、規模と位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

ピット2土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量 3 にぶい褐色 ローム粒子多量
2 明褐色 ローム粒子多量、炭沼バミス微量

覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量 3 褐色 ローム粒子多量
2 褐色 ローム粒子中量 4 黒褐色 炭化粒子中量、焼土粒子少量、ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片64点（環類30、高環2、甕類32）、須恵器片6点（環類4、蓋1、甕1）が全城から散在して出土している。786は竈の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉と考えられる。

第242号住居跡出土遺物観察表（第42図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
786	土師器	甕	22.8	11.3	-	雲母	にぶい黄橙	普通	体部外面指頭痕 内面ヘラナデ	覆土下層	5%

第243号住居跡（第43図）

位置 調査区Ⅲ区のJ15h3区で、標高64mほどの尾根状の台地平坦部に位置している。

重複関係 第22号溝に掘り込まれている。

規模と形状 南半分が調査区域外であるため、確認できた範囲は南北軸0.93m、東西軸3.41mの方形又は長方形と推定され、主軸方向はN-9°-Eである。壁高は15~23cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。竈前前から中央部にかけて踏み固められている。壁溝が北壁の一部にみられる。

竈 北壁の西コーナー寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで100cm、袖部幅は108cmである。袖部のほとんどが崩壊しており、確認された袖部は、床面と同じ高さの地山に粘土粒子を含んだローム土と芯材として使用された中礫で構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さの平坦面を使用しており、火床面は火熱を受けて赤変している。煙道部は壁外へ80cm掘り込み、外傾して立ち上がっている。竈土層断面図の第1層が、天井部の崩落土に該当する。

竈土層解説

- 1 灰黄褐色 粘土粒子多量、ローム粒子中量、焼土粒子微量 9 暗赤褐色 焼土ブロック多量、ローム粒子少量
2 褐色 ローム粒子多量、焼土ブロック微量 10 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量
3 灰褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・粘土粒子少量 11 褐色 ロームブロック少量
4 灰黄褐色 ロームブロック・粘土粒子中量、焼土粒子少量 12 黄褐色 焼土粒子・粘土粒子少量、ローム粒子微量
5 褐色 ローム粒子多量、焼土ブロック少量 13 赤褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子微量
6 褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量 14 にぶい赤褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・粘土粒子微量
7 褐色 ロームブロック・粘土粒子中量、焼土ブロック少量 15 暗赤褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・粘土粒子微量
8 暗赤褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量 16 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量

貯蔵穴 1か所。北東コーナー部に位置し、径88cmの円形で、深さ52cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

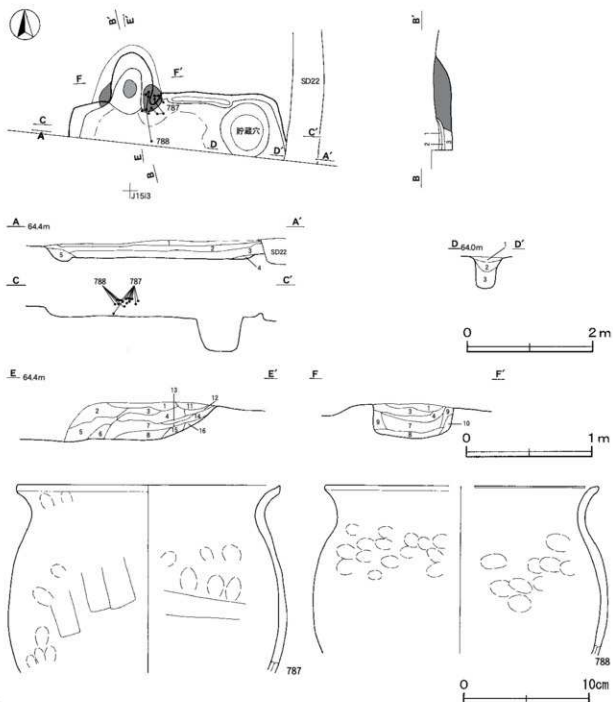
貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|------|----------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子・焼土粒子微量 | 3 褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量 | | |

覆土 5層に分層される。ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|------|-----------------------|
| 1 褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子少量 | 4 褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・鹿沼パミス微量 | 5 褐色 | ローム粒子中量、粘土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子・鹿沼パミス微量 | | |



第43図 第243号住居跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片324点(坏類84, 高坏4, 甕類236), 須恵器片33点(坏類6, 高台付坏1, 蓋22, 甕類4), 鉄滓1点, 瓦1点が覆土上層から下層にかけて出土している。787・788は竈付近の覆土上層から下層にかけてそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器から8世紀中葉と考えられる。

第243号住居跡出土遺物観察表(第43図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
787	土師器	甕	30.4	(15.0)	-	灰石・雲母	にぶい褐色	普通	内・外面ヘラナド 指頭痕	覆土上層 ~下層	30%
788	土師器	甕	21.6	(13.4)	-	灰石・雲母・赤色 粘土	褐色	普通	内・外面指頭痕	覆土上層	30%

第244号住居跡(第44・45図)

位置 調査区Ⅲ区のJ14h9区で, 標高64mほどの尾根状の台地平坦部に位置している。

規模と形状 南半分が, 調査区域外であるため, 確認できた範囲は南北軸1.90m, 東西軸4.04mの方形又は長方形と推定され, 主軸方向はN-16°-Eである。壁高は42~44cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 竈前面から中央部にかけて踏み固められている。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで128cm, 袖部幅は148cmである。袖部は床面と同じ高さの地山に, 粘土粒子を含んだローム土で構築されている。火床部は床面を皿状に20cm掘りくぼめた部分に, 焼土やロームブロックを含む赤褐色土を埋め戻しており, 火床面は火熱を受けて赤変している。煙道部は壁外へ36cm掘り込まれ, 外傾して立ち上がっている。竈土層断面図の第2・3・6・14層が天井部の崩落土に該当する。

竈土層解説

1 褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量	16 灰黄褐色	ローム粒子多量, 焼土ブロック少量, 炭化物微量
2 褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子少量, 粘土粒子微量	17 褐色	ローム粒子中量, 焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
3 褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子・粘土粒子少量	18 にぶい黄褐色	粘土粒子中量, 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量
4 褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量	19 にぶい褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
5 にぶい褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量, 炭化物微量	20 にぶい褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量
6 灰褐色	粘土粒子中量, 焼土粒子少量, ローム粒子微量	21 にぶい褐色	焼土ブロック中量, ローム粒子微量
7 暗赤褐色	焼土粒子中量, 粘土粒子少量, ローム粒子微量	22 赤褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量
8 褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子微量	23 にぶい褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化粒子微量
9 褐色	ローム粒子・粘土粒子少量	24 にぶい褐色	焼土粒子中量, ローム粒子・粘土粒子少量
10 にぶい褐色	ローム粒子・粘土粒子少量, 焼土粒子微量	25 明褐色	ローム粒子多量, 焼土ブロック微量
11 褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子微量	26 にぶい褐色	粘土粒子中量, ローム粒子少量, 焼土粒子微量
12 灰褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量	27 褐色	ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子微量
13 にぶい赤褐色	焼土粒子中量, 粘土粒子少量, ローム粒子微量		
14 灰褐色	粘土粒子中量, ローム粒子・焼土粒子微量		
15 にぶい黄褐色	ローム粒子中量, 焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量		

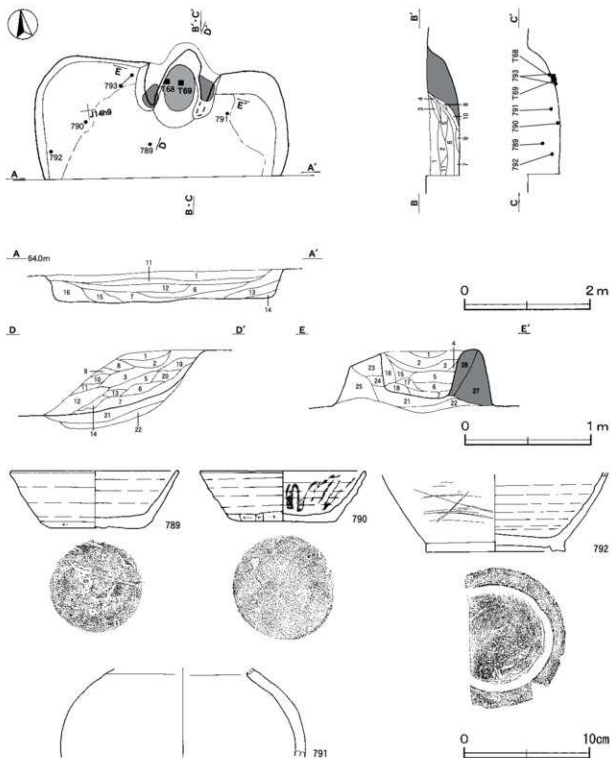
覆土 16層に分層される。周囲からの土砂が流れ込んだレンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

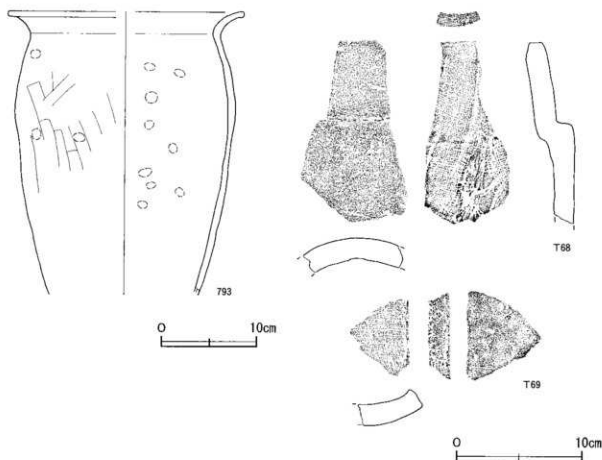
1 褐色	ロームブロック中量, 焼土粒子少量	9 褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子微量
2 褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子・粘土粒子少量	10 褐色	ロームブロック・粘土粒子少量
3 暗褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子・粘土粒子微量	11 褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子微量
4 褐色	ロームブロック少量, 炭化粒子・粘土粒子微量	12 褐色	ローム粒子中量, 炭化粒子微量
5 灰褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量	13 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量
6 暗褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子・粘土粒子微量	14 褐色	ローム粒子多量, 焼土粒子少量
7 褐色	ローム粒子・粘土粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	15 褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
8 灰黄褐色	粘土粒子中量, 焼土粒子少量, ローム粒子微量	16 暗褐色	ロームブロック多量, 炭化粒子少量, 焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片252点(坏類40, 高台付碗5, 甕類207), 須恵器片37点(坏類18, 高台付坏4, 蓋

1, 盤3, 壺2, 甕類8, 長頭瓶1), 瓦5点が全域から散在して出土している。また, 流れ込んだ石器1点(鐵)も出土している。789は竈前面の覆土中層, 790は西部の床面, 791は竈の右袖付近, 792は西壁際の覆土下層, 793は竈の左袖脇の床面からそれぞれ出土している。T68・T69は竈の火床面から出土している。所見 時期は, 出土土器から9世紀前葉と考えられる。



第44図 第244号住居跡・出土遺物実測図



第45図 第244号住居跡出土遺物実測図

第244号住居跡出土遺物観察表 (第44・45図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
789	須恵器	坏	13.1	4.6	7.2	長石・雲母	灰	普通	内・外面クロナゲ 体部下端の転へラ削り 底部の転へラ削り	覆土中層	95% PL.10 自然軸付着
790	須恵器	坏	13.1	4.0	8.4	長石・雲母	黄灰	普通	内・外面クロナゲ 体部下端手持ちへラ削り 底部の転へラ削り 転へラ削り	床面	90% PL.10 連付着
791	須恵器	壺	-	(7.1)	-	長石・雲母	灰	普通	内・外面ナゲ	覆土下層	10%
792	須恵器	壺	-	(6.2)	11.2	長石	灰黄	普通	内・外面クロナゲ 底部高台貼り付け ナゲ	覆土下層	20% PL.12
793	土師器	甕	24.8	(30.3)	-	雲母・細砂	明赤褐	普通	体部外面へラナゲ 内・外面指痕	床面	40%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
T68	丸瓦	(14.9)	(7.9)	1.8	(252.0)	土製(長石・雲母)	両面布目痕	竈火床面	PL.16
T69	平瓦	(7.0)	(5.0)	1.7	(72.0)	土製(長石・雲母)	両面布目痕	竈火床面	

第247号住居跡 (第46図)

位置 調査区Ⅲ区のJ15c4区で、標高65mほどの尾根状の台地平坦部に位置している。

重複関係 第23号溝に掘り込まれている可能性が考えられる。

確認状況 当初、焼土を多量に含む土坑と想定したが、土層や形状及び出土土器から住居の竈と判断した。

規模と形状 掘り立て、床面及び壁面を確認することはできなかった。確認できた竈の範囲は南北軸0.78m、東西軸0.59mで、主軸方向はN-0°と推定される。

竈 両袖部を確認することはできなかった。火床部は、床面を9cm掘りくぼめた部分に暗赤褐色土を埋め戻し

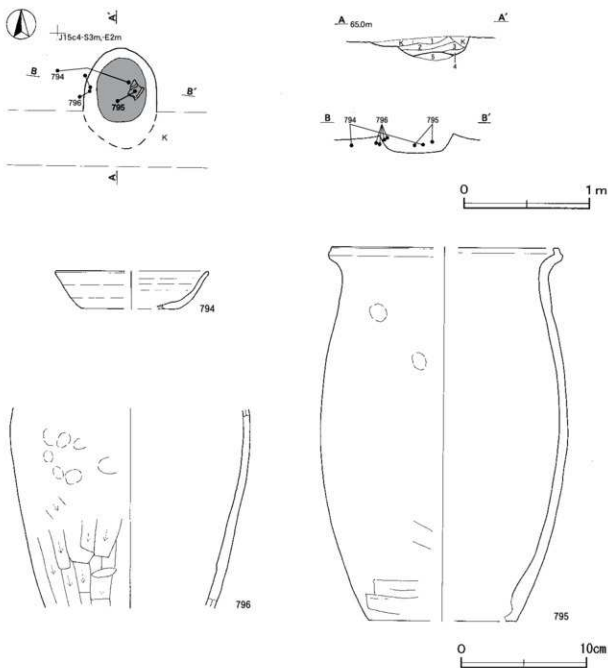
た平坦面を利用しており、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は、外傾して立ち上がっている。

遺土層解説

- | | |
|--------------------------------|----------------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子微量 | 4 赤褐色 焼土粒子中量、粘土粒子少量 |
| 2 赤褐色 焼土粒子多量、粘土粒子少量 | 5 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・粘土粒子微量 |
| 3 に近い赤褐色 焼土粒子中量、粘土粒子少量、ローム粒子微量 | |

遺物出土状況 土師器片34点（坏類2，甕類32）が竈の覆土から出土している。794～796は竈の覆土中層及び周辺からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀中葉と考えられる。



第46図 第247号住居跡・出土遺物実測図

第247号住居跡出土遺物観察表 (第46図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
794	土師器	坏	12.0	3.0	7.6	長石・赤色粒子	明赤褐	普通	内・外面クロコナデ	電覆土中層・周刀	20%
795	土師器	甕	18.0	29.7	11.8	石黒・黄緑・赤色粒子	明赤褐	普通	底部下端ヘラナデ 外面指頭痕	電覆土中層	20%
796	土師器	甕	-	15.9	-	長石・赤色粒子	明赤褐	普通	体部下端縦方向ヘラ作り 外面指頭痕	電覆土中層・周刀	20%

表3 奈良・平安時代竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設				礎土	主な出土遺物	時期	備考(旧→新)	
								柱穴	土間	石	礎					
216	J15c3	N-3°-E	[方形・長方形]	[3.20] × [2.75]	-	平坦	一部	-	-	-	礎2	-	人為	土師器	10世紀後半	本跡→SD23
222	J14g1	N-20°-E	[方形・長方形]	[4.10] × [3.87]	8~36	平坦	-	-	-	-	礎2	-	人為	土師器, 須恵器	9世紀中葉	
223	J14f3	N-68°-E	[方形・長方形]	4.60 × (1.50)	25~30	平坦	-	-	-	-	礎1	-	人為	土師器, 須恵器	8世紀中葉	
225	J15f2	N-93°-E	長方形	4.37 × 3.14	12~22	平坦	1段全周	1	1	22	礎1	-	自然	土師器, 須恵器, 瓦	10世紀前半	
226	J15e1	N-8°-E	方形	3.72 × 3.43	19~32	平坦	一部	3	1	-	礎1	-	自然	土師器, 須恵器, 瓦, 砥石	8世紀中葉	S1224→本跡→S1220-21
227	J14d0	N-91°-E	[方形・長方形]	[4.10] × [3.79]	-	平坦	-	-	-	-	礎1	-	不明	土師器, 須恵器	10世紀代	S1225→本跡→SK526
228	J14d0	N-92°-E	方形	2.67 × 2.45	16~21	平坦	1段全周	2	-	24	礎1	-	自然	土師器, 釘, 瓦, 鉄滓	10世紀前半	S1242→本跡
229	J14f8	N-1°-W	[長方形]	[3.35] × [2.68]	1~5	平坦	-	-	-	-	礎1	-	-	土師器, 須恵器, 砥石, 釘	11世紀前半	本跡→SD13-23-24, SK530
230	J15j1	N-9°-E	[方形・長方形]	[3.90] × [3.52]	-	平坦	-	2	-	2	礎1	-	-	土師器, 須恵器	9世紀前半	
231	J14f9	N-16°-E	方形	3.30 × 3.12	5~20	平坦	一部	3	3	8	礎2	-	人為	土師器, 須恵器, 釘, 陶土片, 瓦	9世紀中葉	
232	J14g0	N-102°-E	長方形	2.75 × 2.49	8~23	平坦	一部	2	-	2	礎1	-	自然	土師器, 須恵器	10世紀前半	S1233-234→本跡
233	J14f9	N-21°-W	方形	3.05 × 3.02	18~28	平坦	一部	-	-	1	礎1	-	自然	土師器, 須恵器, 刀子	9世紀中葉	S1234→本跡→S1232
234	J14f0	N-1°-W	方形	4.37 × 4.31	39~50	平坦	全周	4	1	-	礎1	-	人為	土師器, 須恵器	8世紀中葉	本跡→S1202-233
235	J14g9	N-6°-E	方形	5.55 × 5.10	1~4	平坦	-	1	-	1	礎1	-	不明	土師器	8世紀代	S1238→本跡→S1227, SK526
236	J14e5	N-14°-E	方形	3.75 × 3.71	14~34	平坦	全周	3	-	-	礎1	-	人為	土師器, 須恵器, 砥石, 鎌, 刀子, 釘	11世紀前半以前	
239	J14f9	N-94°-E	[方形・長方形]	2.96 × (1.35)	1~2	平坦	-	-	-	-	礎1	-	不明	土師器	11世紀前半	本跡→S1229
240	J14e6	N-12°-W	方形	5.27 × 5.04	3~20	平坦	1段全周	-	-	-	礎1	-	自然	土師器, 須恵器	8世紀中葉	本跡→SK529
241	J14e6	N-30°-E	-	(1.98) × (0.85)	-	-	-	-	-	-	礎1	-	不明	土師器	9世紀代	
242	J14g0	N-60°-E	[方形]	4.37 × [4.18]	9~20	平坦	-	2	1	-	礎1	-	自然	土師器, 須恵器	9世紀後半	本跡→S1228
243	J15d3	N-9°-E	[方形・長方形]	3.41 × (0.93)	15~23	平坦	一部	-	-	-	礎1	1	人為	土師器, 須恵器, 鉄滓, 瓦	8世紀中葉	本跡→SD22
244	J14e0	N-16°-E	[方形・長方形]	4.04 × (1.90)	42~44	平坦	-	-	-	-	礎1	-	自然	土師器, 須恵器, 瓦	9世紀前半	
247	J15e1	[N-0°]	-	-	-	-	-	-	-	-	礎1	-	-	土師器	8世紀中葉	本跡→SD23

3 中・近世の遺構と遺物

中・近世の遺構は、炭焼窯跡4基、溝跡3条、土坑2基が確認された。以下、確認された遺構と遺物について記述する。

(1) 炭焼窯跡

第1号炭焼窯跡 (第47図)

位置 調査区Ⅱ区のJ13f3区で、標高59mほどの台地端部に位置している。

規模と形状 東側は削平されており、全容は明らかではない。確認できた範囲は長径3.30m、短径2.84mである。平面形は不整形楕円形と推定され、長径方向はN-89°-Wである。

炭化室 平面形は長径2.05m、短径1.98mの不整形を呈している。遺存する壁は粘土を張っており、壁高は

10~75cmで、外傾して立ち上がっている。窯床は平坦で、地山をそのまま使用したと考えられ、火熱を受けて赤変硬化している。

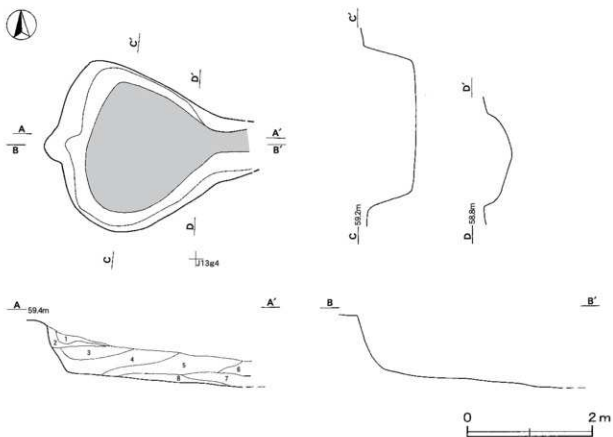
煙道部 奥壁中央部を幅70cm、奥行き34cmに掘り込み、黒色硬化している。

覆土 8層に分層される。天井部の崩落土に該当する土層は確認できなかった。第8層は焼土を多く含み、操業時に形成されたと考えられる。

土層解説

- | | |
|------------------------------------|-------------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子少量 | 5 暗赤褐色 焼土ブロック多量 |
| 2 暗赤褐色 焼土ブロック多量、ローム粒子少量、炭化物・粘土粒子微量 | 6 赤黒色 炭化物多量、焼土ブロック少量 |
| 3 暗赤褐色 焼土ブロック多量、炭化物中量 | 7 暗赤褐色 焼土ブロック多量、炭化物・炭微量 |
| 4 暗赤褐色 焼土ブロック多量、粘土ブロック少量、炭化粒子微量 | 8 赤褐色 焼土ブロック多量、炭少量 |

所見 時期は、近世以降と考えられる。



第47図 第1号炭焼窯跡実測図

第2号炭焼窯跡 (第48図)

位置 調査区Ⅱ区のJ13b4区で、標高59mほどの台地端部の斜面部に位置している。

規模と形状 東側は削平されており、全容は明らかではない。確認できた範囲は南北径2.82m、東西径1.06mである。平面形は楕円形と推定され、長径方向はN-14°-Eである。

炭化室 平面形は長径2.30m、短径0.66mの楕円形を呈している。遺存する壁は粘土で構築され、火熱を受けて赤変している。壁高は28~42cmで、緩やかに外傾している。窯床は平坦で、地山をそのまま利用したと考え

られる。

煙道部 奥壁中央部を幅30cm，奥行き38cm掘り込み，黒変している。

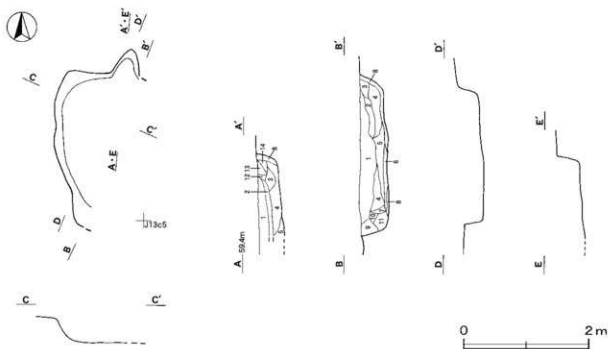
覆土 14層に分層される。全体的に粘性・しまりが弱い。天井部の崩落土に該当する土層は確認できなかった。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子中量，焼土ブロック・炭化物少量	7 暗赤褐色	焼土ブロック中量，炭化物少量，粘土粒子微量
2 暗赤褐色	焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量	8 暗赤褐色	炭化物・ローム粒子・焼土粒子少量
3 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・細砂少量，炭化物微量	9 暗赤褐色	焼土ブロック中量，ローム粒子少量，粘土粒子微量
4 暗赤褐色	焼土ブロック・炭化物中量，ローム粒子少量	10 暗赤褐色	焼土ブロック多量
5 黒色	炭化物多量，焼土ブロック・ローム粒子少量	11 暗赤褐色	焼土ブロック多量，粘土粒子中量
6 黒色	炭化粒子多量	12 暗赤褐色	焼土ブロック中量，炭化ブロック微量
		13 暗赤褐色	焼土ブロック・ローム粒子中量
		14 暗赤褐色	ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片1点(瓿)，瓦5点が出土した。瓦は壁の構築材として使用された痕跡がないことから，流れ込んだものと考えられる。

所見 時期は，位置及び主軸方向から，隣接する炭焼窯跡と同時期の近世以降と考えられる。



第48図 第2号炭焼窯跡実測図

第3号炭焼窯跡 (第49図)

位置 調査区Ⅱ区の114e5区で，標高64mほどの台地端部斜面に位置している。

規模と形状 確認できた範囲は南北径1.63m，東西径3.04mである。平面形は楕円形と推定され，長径方向はN-66°-Eである。

炭化室 平面形は長径2.90m，短径1.50mの楕円形を呈している。遺存する壁は粘土で構築され，火熱のために内側は黒変，外側は赤変している。壁高は3～22cmで，外傾して立ち上がっている。窯床は平坦で，地山をそのまま利用したと考えられる。

煙道部 奥壁中央部を幅24cm，奥行き38cm掘り込まれている。

焚口部 西側に付設されている。長径76cm、短径48cmの楕円形で火熱を受けて赤変している。

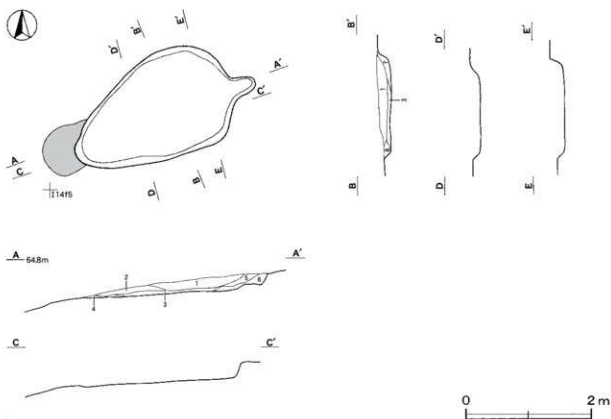
覆土 8層に分層される。第4層は焼土を多く含み、操業時に形成されたものと考えられる。

土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------------|--------|--------------------------|
| 1 褐 色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物微量 | 5 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化物少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化物少量、焼土ブロック微量 | 6 黒褐色 | 炭化材中量、焼土ブロック少量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物・鹿沼パミス少量 | 7 黒褐色 | 炭化物・焼土粒子中量、ローム粒子・鹿沼パミス少量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 8 黒褐色 | 焼土ブロック・炭化材・ローム粒子少量 |

遺物出土状況 土師器片2点（坏類）が出土した。いずれも流れ込んだものと考えられる。

所見 時期は、位置及び主軸方向から、隣接する炭焼窯跡と同時期の近世以降と考えられる。



第49図 第3号炭焼窯跡実測図

第4号炭焼窯跡（第50図）

位置 調査区Ⅱ区のJ13f2区で、標高60mほどの台地端部の斜面部に位置している。

規模と形状 焚口部が削平されており、確認できた範囲は南北径2.22m、東西径2.98mである。平面形は楕円形と推定され、長径方向はN-100°-Wである。

炭化室 平面形は長径2.28m、短径1.86mの楕円形を呈している。遺存する壁は、礫と粘土で構築されており、壁高は80~98cmで、外傾して立ち上がっている。窯床は平坦で、地山をそのまま使用し、火熱を受けて赤変し

ている。

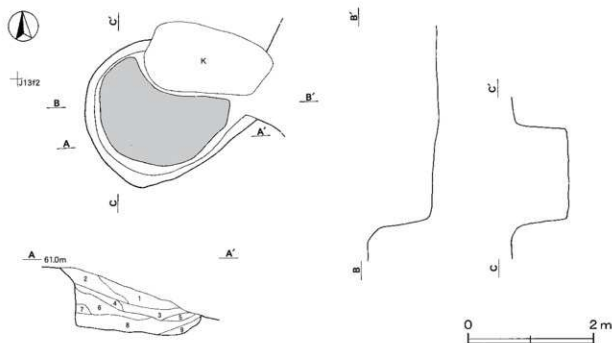
覆土 9層に分層される。第8層は、礫を多く含んでいることから、壁に使用されたものと考えられる。天井部の崩落土に該当する土層は確認できなかった。

土層解説

1	褐色	ロームブロック多量、焼土ブロック中量、炭化物少量、粘土ブロック微量	5	暗赤褐色	焼土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子微量
2	褐色	ロームブロック多量、焼土ブロック・炭化物少量、粘土ブロック微量	6	褐色	ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量
3	暗褐色	ロームブロック多量、焼土粒子少量、炭化物微量	7	灰褐色	ロームブロック多量、焼土ブロック少量
4	暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化物・細礫少量	8	暗赤褐色	細礫多量、ロームブロック・焼土ブロック中量
			9	暗赤褐色	焼土ブロック多量、ロームブロック・粘土ブロック少量

遺物出土状況 土師器片2点(坏)が出土した。いずれも流れ込んだものと考えられる。

所見 時期は、位置及び主軸方向から、隣接する炭焼窯跡と同時期の近世以降と考えられる。



第50図 第4号炭焼窯跡実測図

表4 炭焼窯跡一覧表

番号	位置	長軸方向	平面形	規模(m)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考(旧→新)
				(長径×短径)	深さ(cm)					
1	J13F3	N-89°-W	[不整形円形]	3.30 × 2.84	10~75	外傾	平坦	自然		
2	J13r4	N-14°-E	[楕円形]	(2.82) × (1.06)	28~42	緩傾	平坦	自然	土師器, 瓦	
3	I14e5	N-66°-E	[楕円形]	3.04 × 1.63	3~22	外傾	平坦	自然	土師器	
4	J13r2	N-10°-W	[楕円形]	(2.98) × 2.22	80~98	外傾	平坦	自然	土師器	

(2) 溝跡

第13号溝跡 (第51図・付図)

位置 調査区Ⅱ区のI15j1区で、標高65mほどの尾根状の台地平坦部に位置している。

重複関係 第230号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 I15j1区から南北方向(N-175°-E)に直線的に伸び、北側の調査区域外へと至る。確認できた規模は長さ2.54m、上幅22~40cm、下幅9~29cm、深さが61cmである。断面形はU字状を呈し、壁はほぼ直立している。

覆土 5層に分層される。ロームブロックを含む、不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|------|-----------------------|-------|-----------|
| 1 褐色 | ローム粒子少量、粘土粒子・炭化粒子微量 | 4 明褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 褐色 | ロームブロック少量、粘土粒子・炭化粒子微量 | 5 明褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | | |

所見 時期は、「当道遺跡1」で調査した第13号溝跡と形状や方向、位置もほぼ同じことから同一の遺構と判断し、中世以降と考えられる。



第51図 第13号溝跡実測図

第23号溝跡 (第52図・付図)

位置 調査区Ⅲ区のJ15a1~J15d5区で、標高64mほどの尾根状の台地平坦部に位置している。

重複関係 第230号住居跡、第24号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 J15a1区から南北方向(N-173°-E)へ伸び、J15c2区から屈曲し、東西方向(N-88°-E)へほぼ直線的に伸び、西側の調査区域外へと至る。確認できた規模は長さ12.56m、上幅8~58cm、下幅2~35cm、深さ14~40cmである。断面形はU字状を呈し、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|-------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック微量 | 4 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 褐色 | ローム粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片9点(坏類4, 甕類5)が出土しているが、いずれも流れ込んだものである。土器は、細片のため図示できない。

所見 南北方向から東西方向へと屈曲し、形状などから区画溝と考えられる。時期は、第24号溝跡を掘り込んでいることから中世以降と考えられる。



第52図 第23号溝跡実測図

第24号溝跡 (第53図・付図)

位置 調査区Ⅲ区の I14h8～J15a1区で、標高65mほどの尾根状の台地平坦部に位置している。

重複関係 第230号住居跡、第25号溝跡を掘り込み、第23号溝に掘り込まれている。

規模と形状 I14h8区から南北方向(N-170°-E)に延び、I14j8区から東西方向(N-120°-E)に蛇行し北側は調査区域外へと延びている。確認できた規模は長さ9.95m、上幅30～69cm、下幅6～20cm、深さ40～48cmである。断面形はV字状を呈し、壁は緩やかに外傾している。

覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量 4 明褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
 2 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 5 明褐色 ロームブロック中量
 3 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子・糞沼パミス微量

遺物出土状況 土師器片59点(環頸27, 甕頸32), 須恵器片2点(甕), 縄文土器片も出土しているが、いずれも流れ込んだものである。土器は、細片のため図示できない。

所見 「当向遺跡1」で確認された第15号溝跡と形状や方向及び位置が同じであるため、同一の遺構である可能性が考えられる。時期は、「当向遺跡1」の調査結果から中世以降と考えられる。



第53図 第24号溝跡実測図

表5 中・近世溝跡一覧表

番号	位置	方向	断面形	規模			壁面	覆土	形状	主な出土遺物	時期	備考(旧→新)	
				長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)							深さ(cm)
13	I15j	N-175°-E	U字状	(2.54)	22～40	9～29	61	直立	人為	直線状	中世以降	S1230→本跡 当向1北部 調査済み	
23	J15a1～J15d5	N-173°-E N-88°-E	U字状	(12.56)	8～58	2～35	14～40	外傾	自然	L字状	土師器	中世以降	S1230, S024 →本跡
34	I14h8～J15a1	N-170°-E N-120°-E	V字状	(9.95)	30～69	6～20	40～48	緩斜	自然	靴行状	土師器、須恵器	中世以降	S1230, S025→ 本跡→S023

(3) 土坑

第529号土坑 (第54図)

位置 調査区Ⅱ区の J14e7区で、標高64mほどの尾根状の台地平坦部に位置している。

重複関係 第240号住居跡を掘り込んでいます。

規模と形状 長径2.77m、短径1.49mの長楕円形で、長径方向はN-44°-Wである。深さは40cmで、底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 3層に分層される。ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

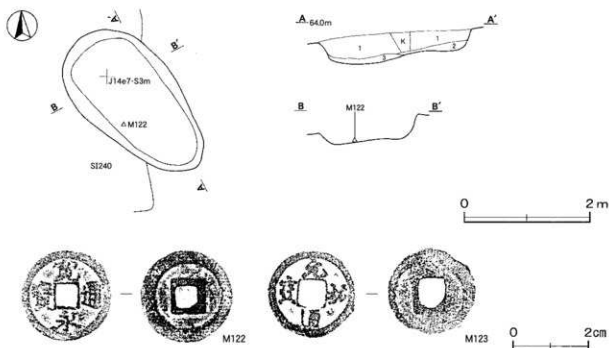
土層解説

- 1 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量 3 褐色 ローム粒子中量、糞沼パミス微量
 2 明褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 古銭2点(元祐通寶, 寛永通寶)が出土している。M122は床面, M123は覆土中からそれぞれ

出土している。

所見 古銭が出土していることから墓坑の可能性も考えられる。時期は、出土遺物から近世以降と考えられる。



第54図 第529号土坑・出土遺物実測図

第529号土坑出土遺物観察表 (第54図)

番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	初鋳年	材質	特徴		出土位置	備考
M122	寛永通寶	2.3	0.6	0.11	3.0	1697年	銅	背面無文	古寛永	床面	PL15
M123	元祐通寶	2.2	0.9	0.10	2.1	1086年 (北宋)	銅	背面無文		覆土中	PL15

第535号土坑 (第55図)

位置 調査区Ⅱ区のJ14g4区で、標高61mほどの尾根状の台地端部斜面に位置している。

確認状況 西部の一部は調査区域外となっているが、粘土部を含め確認された規模は、長径2.72m、短径2.00mの不整形円形で、粘土の層厚が8～29cmある。中央部は粘土の層厚が薄く、円形状の土坑が確認できた。

規模と形状 内側の土坑は、長径1.34m、短径1.28mの円形で、深さは72～86cmである。底面は皿状で、壁はほぼ直立している。

覆土 7層に分層される。下層部は粘性が強く、ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------------|-------|-------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子中量、澱沼バミス微量 | 5 褐色 | ロームブロック・澱沼バミス少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子・澱沼バミス少量 | 6 暗褐色 | ロームブロック・澱沼バミス少量 |
| 3 濃い褐色 | ローム粒子少量、澱沼バミス微量 | 7 灰褐色 | ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック・澱沼バミス少量、焼土粒子微量 | | |

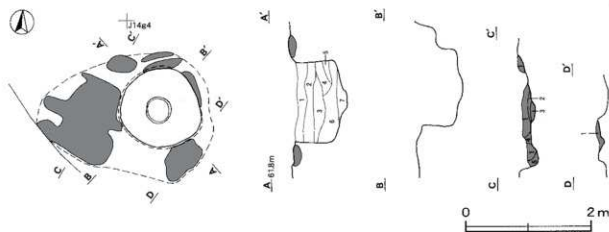
粘土覆土 5層に分層される。第1・5層は粘土を多く含み、第2～4層は粘土を含むローム土で構築されている。

粘土土層解説

- | | | | |
|---------|---------------------|--------|----------------------|
| 1 灰褐色 | 粘土粒子多量、ロームブロック微量 | 4 褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 褐色 | ローム粒子・粘土粒子少量 | 5 灰黄褐色 | 粘土粒子中量、ローム粒子・鹿沼パミス微量 |
| 3 にぶい褐色 | ローム粒子・粘土粒子少量、焼土粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片31点（坏類14、甕類17）、須恵器片9点（坏類7、高盤2）、瓦片1点、瓦質土器1点（香炉）、陶器片1点が出土している。すべて流れ込んだ遺物で、細片のため図示できない。

所見 土坑の構成から作業場の可能性も考えられるが、それに伴う遺物が出土しなかったため性格は不明である。時期は、出土土器から中世以降と考えられる。



第55図 第535号土坑実測図

表6 中・近世土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考(田一新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
S29	J14e7	N-4°-W	長楕円形	2.77 × 1.49	40	外傾	平坦	人為	古銭	S1240→本跡
S35	J14g1	-	円形	1.34 × 1.28	72~86	垂直	皿状	人為	土師器、須恵器、香炉、陶器	

4 その他の遺構と遺物

今回の調査で、時期不明の竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟、溝跡4条、土坑32基、ビット群3か所が確認された。以下、確認された遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第245号住居跡（第56図）

位置 調査区Ⅲ区のJ15b1区で、標高65mほどの尾根状の台地平坦部に位置している。

規模と形状 南部は削平されているため、確認できた範囲は長軸4.85m、短軸3.95mの長方形と推定され、主軸方向はN-7°-Wと考えられる。壁高は10～16cmで、外傾して立ち上がっている。

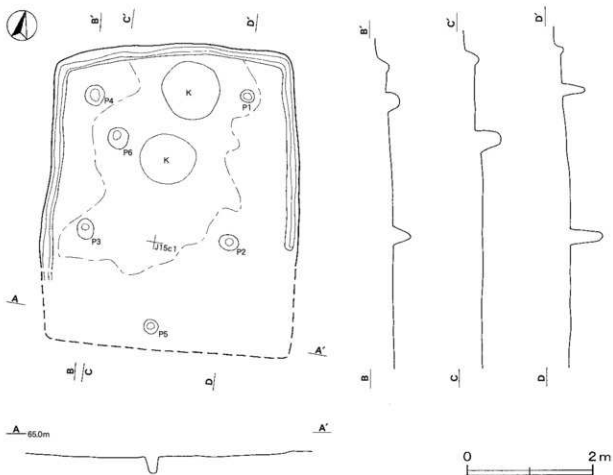
床 ほぼ平坦で、北部から中央部にかけて踏み固められている。壁溝が東部の一部を除いて周回していると推測される。

ピット 6か所。P1～P4は深さ31～55cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ27cmで、規模と位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6の性格は不明である。

覆土 層厚が薄いため、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 土師器片6点（甕類）が出土している。細片のため図示できない。

所見 時期は、出土土器がないため不明である。



第56図 第245号住居跡実測図

(2) 掘立柱建物跡

第20号掘立柱建物跡 (第57・58図)

位置 調査区Ⅲ区のJ14e5区で、標高63mほどの尾根状の台地端部に位置している。

規模と形状 桁行3間、梁行1間の側柱建物跡である。規模は、桁行5.49m、梁行2.25mで、桁行方向はN-31°-Eとする南北棟である。柱間寸法は桁行が約0.96m、梁行が1.1mで、面積は12.375㎡である。

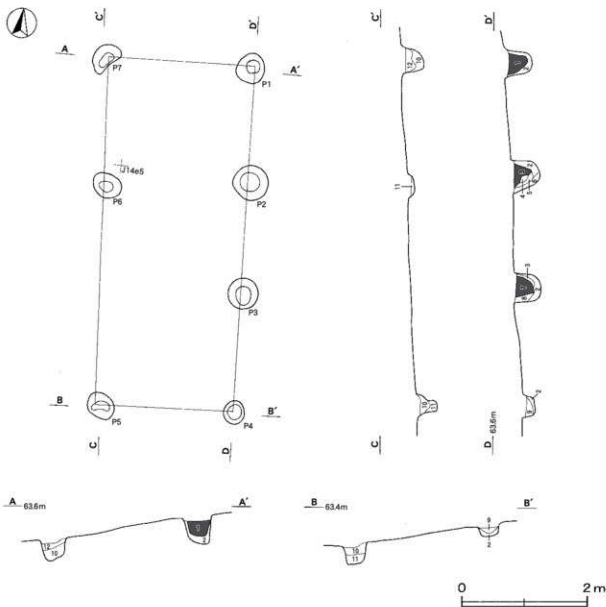
柱穴 7か所。平面形は径31～57cmの円形で、深さは10～46cmある。断面形は逆台形を呈している。柱痕は土層断面図の第1・3・7層が相当する。

ビット土層解説

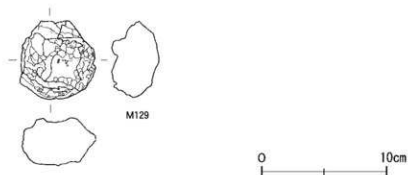
- | | | | |
|--------|-------------------|---------|------------------------|
| 1 暗 褐色 | ロームブロック中量、鹿沼バミス微量 | 7 褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量、鹿沼バミス少量 | 8 褐色 | ロームブロック少量、鹿沼バミス少量 |
| 3 褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 | 9 明 褐色 | ローム粒子中量、鹿沼バミス少量、炭化粒子微量 |
| 4 暗 褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 10 橙 色 | 鹿沼バミス中量、ロームブロック少量 |
| 5 褐色 | ローム粒子中量、鹿沼バミス微量 | 11 橙 色 | 鹿沼バミス中量、ローム粒子微量 |
| 6 明 褐色 | 鹿沼バミス中量、ロームブロック少量 | 12 暗 褐色 | ローム粒子・鹿沼バミス少量、炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片3点(環類2, 甕類1), 鉄滓1点が出土している。いずれも、柱の抜き取り後に流れ込んだと考えられる。M129はP1の覆土中から出土している。

所見 覆土中に鉄滓や土師器片が流れ込んでおり、周辺の遺構との関連性も考えられる。時期は、出土土器が細片のため不明である。



第57図 第20号掘立柱建物跡実測図



第58図 第20号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第20号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第58図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M129	鉄滓	6.2	5.9	3.7	202.0	砂鉄他	着磁性弱	P1 覆土中	

(3) 溝跡

時期及び性格の不明な溝跡4条が確認された。以下、その遺構と遺物について記述する。なお、平面図は遺構全体図に示す。

第20号溝跡 (第59図・付図)

位置 調査区Ⅲ区のJ15g4～J15h4区で、標高64mほどの尾根状の台地平坦部に位置している。

重複関係 第226号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 J15g4区から南北方向(N-179°-E)へ直線的に伸び、南側の調査区域外へと至る。確認できた規模は長さ5.38m、上幅39～76cm、下幅15～51cm、深さ17～18cmである。断面形はU字状を呈し、壁は外傾して立ちあがっている。

覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- | | | | | | |
|---|----|----------------|---|----|-----------|
| 1 | 褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子微量 | 3 | 褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 | 褐色 | ローム粒子少量 | | | |

遺物出土状況 土師器片3点(坏類1, 甕類2)が出土しているが、いずれも流れ込んだ土器で、細片のため図示できない。

所見 第21・22号溝跡と並行し伸びているが、性格は不明である。時期は、重複関係にある第226号住居跡より新しいことから、8世紀中葉以降と考えられるが、詳細は不明である。



第59図 第20号溝跡実測図

第21号溝跡 (第60図・付図)

位置 調査区Ⅲ区のJ15g4～J15h4区で、標高64mほどの尾根状の台地平坦部に位置している。

重複関係 第226号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 J15g4区から南北方向(N-178°-E)へ直線的に伸び、南側の調査区域外へと至る。確認できた規模は長さ7.36m、上幅45～77cm、下幅11～50cm、深さ9～15cmである。断面形はU字状を呈し、底面は平坦で壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

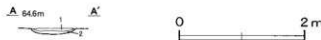
土層解説

1 褐色 ローム粒子中量

2 褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック微量

遺物出土状況 土師器片22点(環類11, 甕類11), 須恵器片2点(甕)が出土しているが、いずれも流れ込んだもので、細片のため図示できない。

所見 第20・22号溝跡と並行し延びているが、性格は不明である。時期は、重複関係にある第226号住居跡より新しいことから、8世紀中葉以降と考えられるが、詳細は不明である。



第60図 第21号溝跡実測図

第22号溝跡 (第61図・付図)

位置 調査区Ⅲ区のJ15e3～J15h3区で、標高64mほどの尾根状の台地平坦部に位置している。

重複関係 第243号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 J15e3区から南北方向(N-176°-E)へ直線的に伸び、南側の調査区域外へと至る。確認できた規模は長さ15.22m、上幅36～58cm、下幅6～28cm、深さ13～24cmである。断面形はU字状を呈し、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

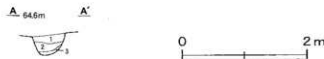
1 褐色 ローム粒子少量

3 褐色 ローム粒子中量

2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック微量

遺物出土状況 土師器片36点(環類24, 甕類12), 須恵器片3点(環類1, 甕類2)が出土しているが、いずれも流れ込んだ土器で、細片のため図示できない。

所見 第20・21号溝跡と並行して南側に延びているが、性格は不明である。時期は、重複関係にある第243号住居跡より新しいことから、8世紀中葉以降と考えられるが、詳細は不明である。



第61図 第22号溝跡実測図

第25号溝跡（第62図・付図）

位置 調査区Ⅲ区のI14i6～I14j8区で、標高65mほどの尾根状の台地端部斜面に位置している。

重複関係 第24号溝に掘り込まれている。

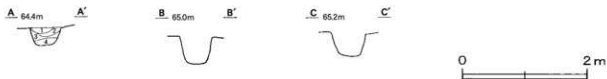
規模と形状 I14j8区から東西方向（N-85°-W）に直線的に延び、調査区域外へと至る。確認できた規模は長さ7.78m、上幅25～53cm、下幅9～33cm、深さ27～43cmである。断面形はU字状を呈し、底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- | | |
|----------------------|-----------------------|
| 1 褐色 炭屑パミス中量、ローム粒子微量 | 3 暗褐色 炭屑パミス少量、ローム粒子微量 |
| 2 褐色 ローム粒子・炭屑パミス少量 | 4 暗褐色 ローム粒子・炭屑パミス少量 |

所見 時期は、第24号溝に掘り込まれているため中世以前と考えられるが、出土土器がないため不明である。



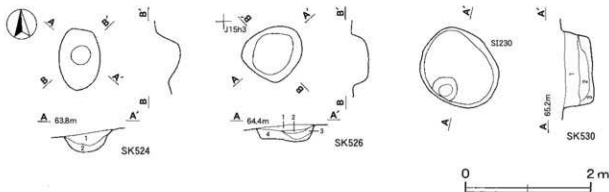
第62図 第25号溝跡実測図

表7 時期不明溝跡一覧表

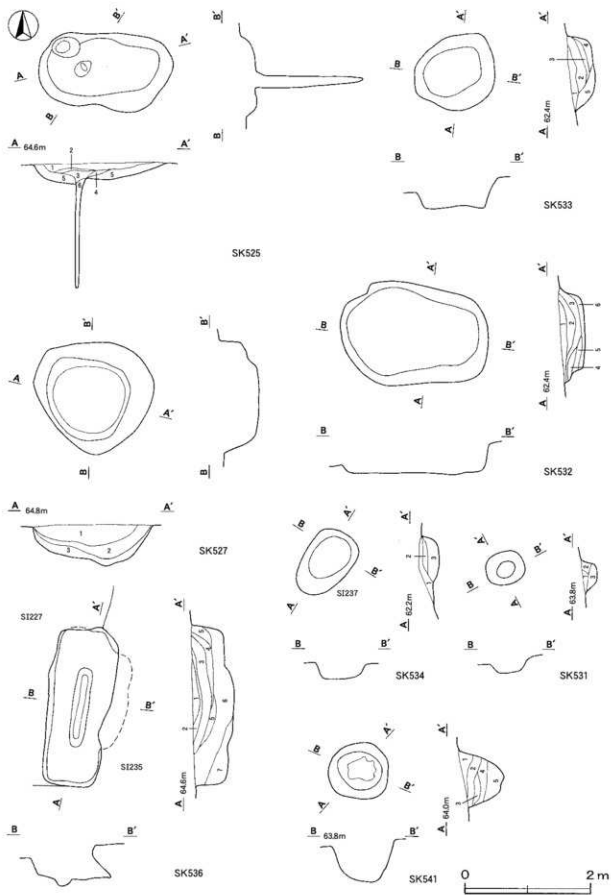
番号	位置	方向	断面形	規模			壁面	覆土	形状	主な出土遺物	時期	備考(旧→新)	
				長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)							深さ(cm)
20	J15g4～J15h4	N-179°-E	U字状	(5.38)	39～76	15～51	17～18	外傾	自然	直線状	土師器	不明	SI226→本跡
21	J15g4～J15h4	N-178°-E	U字状	(7.36)	45～77	11～50	9～15	緩斜	自然	直線状	土師器、須恵器	不明	SI226→本跡
22	J15g3～J15h3	N-176°-E	U字状	(15.22)	36～58	6～28	13～24	外傾	自然	直線状	土師器、須恵器	不明	SI243→本跡
25	I14i6～I14j8	N-85°-W	U字状	(7.78)	25～53	9～33	27～43	外傾	自然	直線状		不明	本跡→SI24

(4) 土坑（第63～66図）

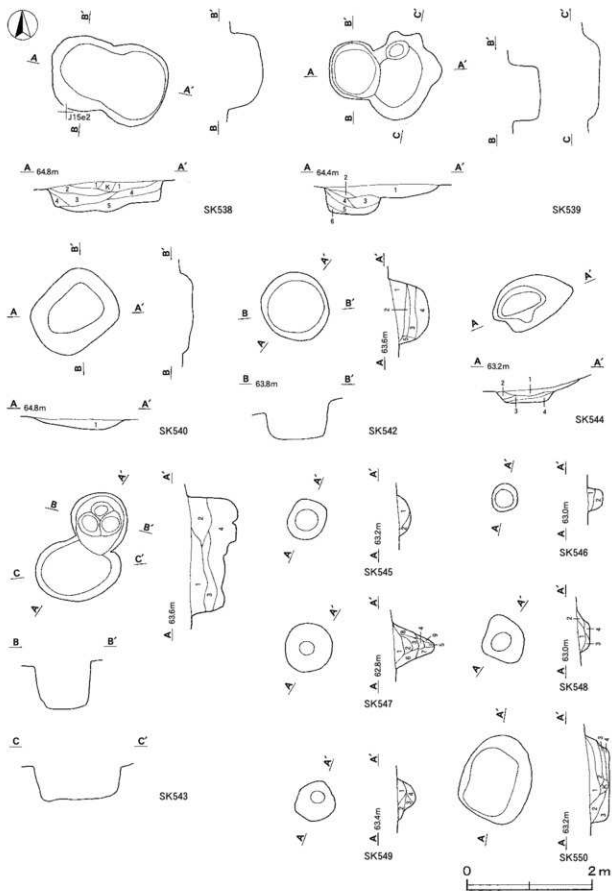
ここでは時期不明の土坑について、実測図と土層解説を記載する。



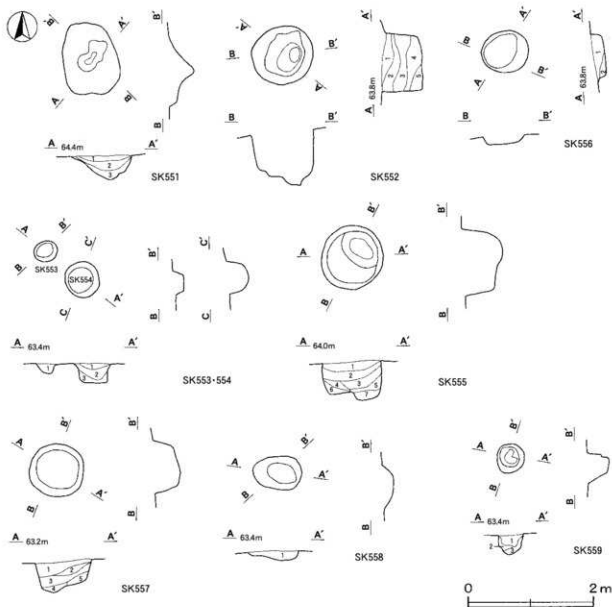
第63図 時期不明土坑実測図（1）



第64図 時期不明土坑実測図(2)



第65图 时期不明土坑实测图(3)



第66図 時期不明土坑実測図 (4)

第524号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子・粘土ブロック微量
- 2 暗 褐色 ロームブロック中量, 粘土ブロック微量

第525号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 ローム粒子中量
- 2 暗 褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子微量
- 3 暗 褐色 ローム粒子少量
- 4 明 褐色 ローム粒子中量
- 5 暗 褐色 ロームブロック中量
- 6 暗 褐色 ロームブロック少量

第526号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗 褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子微量
- 3 暗 褐色 ローム粒子中量, 粘土ブロック少量
- 4 暗 褐色 ローム粒子少量

第527号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 ロームブロック少量, 炭化物微量
- 2 暗 褐色 ロームブロック中量, 炭化物微量
- 3 暗 褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量

第530号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 ローム粒子少量
- 2 暗 褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
- 3 暗 褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量

第531号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 ロームブロック少量
- 2 暗 褐色 ローム粒子中量
- 3 暗 褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量

第532号土壌層解説

- 1 褐色 粘土ブロック・炭化粒子少量
- 2 褐色 膨沼バミス中量、ロームブロック・炭化物少量
- 3 明褐色 膨沼バミス中量、ローム粒子少量
- 4 褐色 ローム粒子・粘土粒子・膨沼バミス少量、炭化粒子微量
- 5 明褐色 ローム粒子中量、膨沼バミス少量
- 6 黄褐色 膨沼バミス中量、ローム粒子微量

第533号土壌層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・膨沼バミス少量
- 2 褐色 ローム粒子・粘土粒子中量、炭化粒子・膨沼バミス少量
- 3 にぶい褐色 炭化物・膨沼バミス少量、ロームブロック微量
- 4 黄褐色 膨沼バミス中量、ローム粒子微量
- 5 暗褐色 粘土粒子中量、膨沼バミス少量、ロームブロック微量

第534号土壌層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量、粘土粒子・膨沼バミス微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・膨沼バミス微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子・膨沼バミス微量

第536号土壌層解説

- 1 梅暗褐色 炭化粒子中量、ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 4 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 褐色 ローム粒子多量
- 6 褐色 ローム粒子中量
- 7 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量

第538号土壌層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック少量
- 4 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 5 暗褐色 ロームブロック少量

第539号土壌層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子微量
- 3 明褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 4 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 5 褐色 ローム粒子中量
- 6 明褐色 ローム粒子中量

第540号土壌層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

第541号土壌層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量
- 2 褐色 ローム粒子中量、膨沼バミス少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・膨沼バミス少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、膨沼バミス少量
- 5 褐色 ロームブロック多量

第542号土壌層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量、膨沼バミス少量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量、膨沼バミス少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量、膨沼バミス微量
- 4 黒褐色 ロームブロック・膨沼バミス微量
- 5 褐色 ローム粒子多量

第543号土壌層解説

- 1 褐色 ローム粒子・膨沼バミス少量、炭化粒子微量
- 2 褐色 膨沼バミス少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 膨沼バミス少量、ローム粒子微量
- 4 黒褐色 膨沼バミス中量、ローム粒子微量

第544号土壌層解説

- 1 にぶい黄褐色 膨沼バミス中量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 黄褐色 膨沼バミス中量、ローム粒子微量
- 3 明黄褐色 膨沼バミス少量、ローム粒子微量
- 4 黄褐色 膨沼バミス少量、ローム粒子・炭化粒子微量

第545号土壌層解説

- 1 褐色 ローム粒子・膨沼バミス少量、炭化粒子微量
- 2 黄褐色 ローム粒子・膨沼バミス少量

第546号土壌層解説

- 1 褐色 ローム粒子・膨沼バミス少量、粘土粒子微量
- 2 黒褐色 粘土粒子中量、ローム粒子・膨沼バミス少量

第547号土壌層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量
- 2 褐色 ローム粒子中量、粘土粒子少量
- 3 にぶい褐色 ローム粒子・膨沼バミス少量、粘土粒子微量
- 4 にぶい褐色 ローム粒子・膨沼バミス少量、炭化粒子微量
- 5 暗褐色 黒色粒子中量、粘土粒子少量、ローム粒子微量
- 6 褐色 ローム粒子中量、膨沼バミス微量
- 7 褐色 ローム粒子・粘土粒子少量
- 8 褐色 ローム粒子少量、膨沼バミス微量
- 9 褐色 ローム粒子・膨沼バミス少量

第548号土壌層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量、膨沼バミス微量
- 2 明褐色 膨沼バミス中量、ローム粒子微量
- 3 黄褐色 膨沼バミス多量、ロームブロック微量
- 4 褐色 膨沼バミス少量、ローム粒子微量

第549号土壌層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量、膨沼バミス少量、焼土粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子中量、膨沼バミス少量
- 3 褐色 膨沼バミス中量、ローム粒子微量
- 4 褐色 ローム粒子・粘土粒子・膨沼バミス少量

第550号土壌層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量
- 2 黄褐色 膨沼バミス多量、ローム粒子少量
- 3 黄褐色 膨沼バミス中量、ローム粒子微量
- 4 明黄褐色 膨沼バミス中量、粘土粒子少量、ローム粒子微量

第551号土壌層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量
- 2 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 3 明褐色 ローム粒子多量

第552号土壌層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量、膨沼バミス少量
- 2 暗褐色 ロームブロック・膨沼バミス少量
- 3 褐色 ロームブロック・膨沼バミス少量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量、膨沼バミス少量
- 5 褐色 ローム粒子少量

第553号土壌層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量、膨沼バミス少量

第554号土壌層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子中量、膨沼バミス少量
- 3 褐色 膨沼バミス中量、ロームブロック微量

第555号土壌層解説

- 1 褐色 ロームブロック少量、膨沼バミス微量
- 2 褐色 膨沼バミス少量
- 3 褐色 ローム粒子少量、膨沼バミス微量
- 4 褐色 ロームブロック中量
- 5 褐色 ローム粒子中量、膨沼バミス微量
- 6 明褐色 ロームブロック中量
- 7 明褐色 ローム粒子中量、膨沼バミス微量

第556号土壌層解説

- 1 明褐色 ローム粒子多量
- 2 明褐色 ローム粒子多量、炭化粒子微量

第557号土壌層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量、膨沼バミス少量
- 2 褐色 ローム粒子多量、膨沼バミス中量
- 3 にぶい褐色 ローム粒子中量、膨沼バミス少量
- 4 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・膨沼バミス少量
- 5 褐色 膨沼バミス中量、炭化粒子微量

第558号土坑土層解説

1 橙 色 鹿沼パミス多量、ロームブロック少量

第559号土坑土層解説

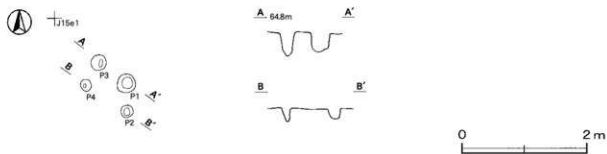
1 楊 色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
2 明 褐 色 ロームブロック・鹿沼パミス少量
3 楊 色 ロームブロック中量、鹿沼パミス少量

表8 時期不明土坑一覧表

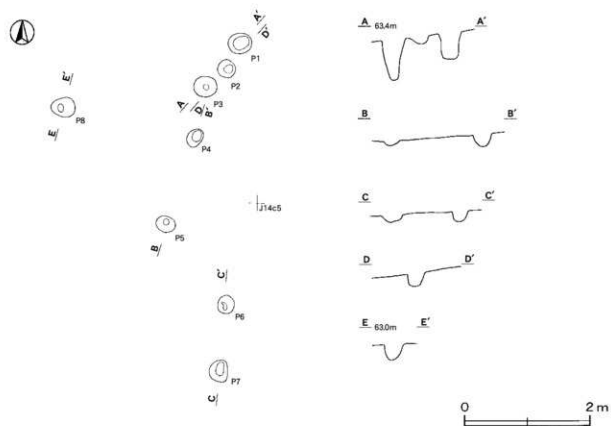
番号	位置	長径(軸)方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考(旧→新)
				長径(軸)×短径(軸) (m)	深さ (cm)					
524	J14e4	N-0°	楕円形	0.98×0.67	38	外傾	皿状	自然		
525	J15g2	N-87°-W	楕円形	2.15×1.25	196	外傾	皿状	人為		
526	J15h3	N-67°-E	楕円形	0.98×0.84	28	外傾	皿状	自然		
527	J14e8	N-86°-W	楕円形	1.90×1.73	60	外傾	平坦	自然		
530	J15j1	N-27°-W	楕円形	1.35×1.15	46	外傾	平坦	人為	S1230→本跡	
531	J14f7	N-45°-E	楕円形	0.65×0.54	25	外傾	皿状	自然		
532	J14e3	N-88°-W	楕円形	2.35×1.65	47	外傾	平坦	人為		
533	J14e3	N-44°-E	楕円形	1.38×1.15	46	外傾	平坦	人為		
534	J14f4	N-33°-E	楕円形	1.14×0.76	26	外傾	皿状	自然	S1237→本跡	
536	J14d0	N-7°-E	長方形	2.57×1.05	65	外傾	皿状	人為	S1227・235・238→本跡	
538	J15d2	N-68°-W	不整楕円形	1.85×1.28	54	外傾	皿状	人為		
539	J15g2	N-89°-E	不定形	1.80×1.40	50	垂直 壁状	平坦	人為		
540	J15d3	N-54°-E	隅丸長方形	1.38×1.15	18	緩斜	平坦	不明		
541	J14g8	-	円形	0.96×0.88	66	外傾	皿状	人為		
542	J14g7	-	円形	1.12×1.05	59	外傾	平坦	自然		
543	J14g7	N-31°-E	不定形	1.88×1.18	77	垂直	凹凸	人為	土師質土器	
544	J14c4	N-71°-E	不整楕円形	1.32×0.80	20	緩斜	平坦	人為		
545	J14c4	N-22°-E	楕円形	0.67×0.58	20	緩斜	皿状	自然		
546	J14c4	-	円形	0.44×0.40	25	外傾	皿状	自然		
547	J14h3	-	円形	0.78×0.77	66	外傾	皿状	人為		
548	J14b4	N-22°-W	不整楕円形	0.85×0.69	21	外傾 壁状	皿状	人為		
549	J14b4	-	円形	0.65×0.61	30	緩斜	皿状	人為		
550	J14d4	N-17°-E	楕円形	1.36×1.09	38	外傾	平坦	人為		
551	J15g2	N-26°-W	楕円形	1.22×0.87	41	緩斜	皿状	自然		
552	J14g8	-	円形	1.00×0.92	89	垂直	凹凸	自然		
553	J14f6	N-71°-E	楕円形	0.39×0.33	16	緩斜	皿状	不明		
554	J14f6	-	円形	0.55×0.55	31	外傾	平坦	自然		
555	J14g8	-	円形	1.04×0.96	64	垂直	凹凸	自然		
556	J14f7	-	円形	0.73×0.71	15	外傾	平坦	自然		
557	J14e6	-	円形	0.87×0.87	50	外傾	皿状	人為		
558	J14f6	N-88°-W	楕円形	0.79×0.54	20	緩斜	皿状	不明		
559	J14g7	-	円形	0.48×0.45	34	外傾	皿状	自然		

(5) ビット群 (第67～69図)

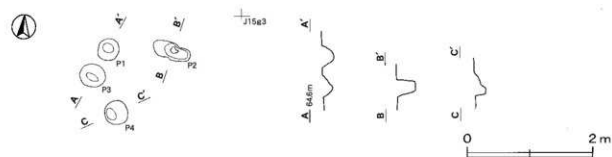
今回の調査では、ビット群3か所が確認されている。遺物が出土していないため、時期を判断することができない。また、ビットの配列に規則性が認められないことから、性格を明らかにすることもできない。以下、ビット群の平面図及び規模などを一覧表にまとめて記載する。



第67図 第4号ビット群実測図



第68図 第5号ビット群実測図



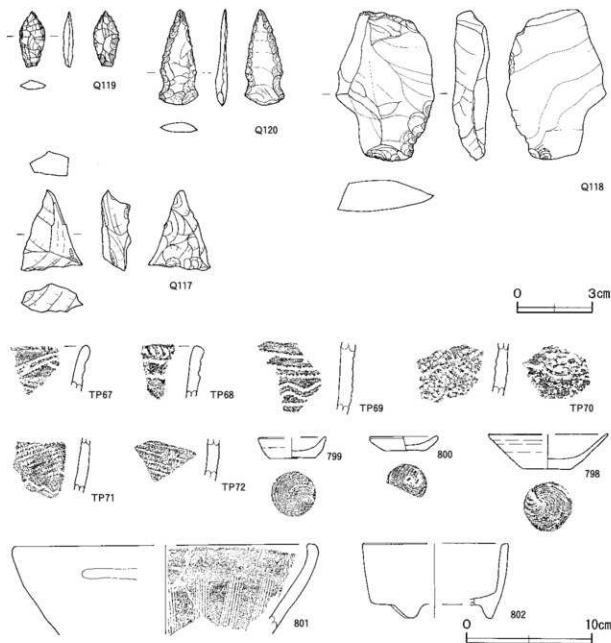
第69図 第6号ビット群実測図

表9 ビット群一覧表

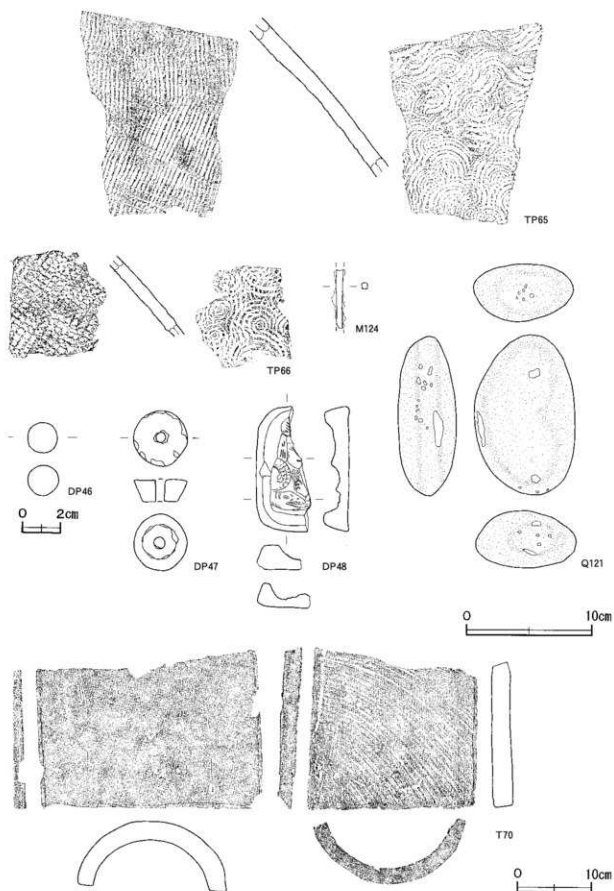
番号	位置	範囲	柱穴数	柱穴形状	径(cm)	深さ(cm)	主な出土遺物	備考
4	J15e1	1.00 × 0.90	4	円形	17~30	15~40		
5	J14b4~J14c4	5.48 × 3.18	8	円形	23~37	9~65		
6	J15a2	1.80 × 1.40	4	円形	25~62	15~30		

(6) 遺構外出土遺物 (第70~72図)

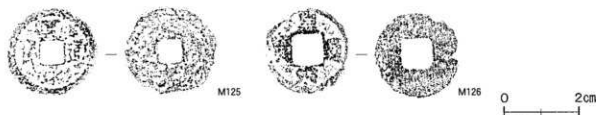
遺構に伴わない遺物について、実測図及び出土遺物観察表を記載する。



第70図 遺構外出土遺物実測図(1)



第71图 道橋外出土遺物実測図(2)



第72図 遺構外出土遺物実測図(3)

遺構外遺物観察表(第70~72図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q17	剥片	3.3	2.5	1.1	6.1	チャート	断面台形状	表採	PL14
Q18	2次加工を有する剥片	6.0	4.0	1.6	33.2	珪質頁岩	側縁に細かな調整	SI234覆土中	PL14
Q19	織	2.2	1.0	0.4	0.8	チャート	断面レンズ状	SI240覆土中	PL14
Q20	織	3.8	1.6	0.4	2.3	火山岩	断面レンズ状	SI244覆土中	PL14

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP65	須恵器	甕	長石・雲母	灰	普通	体外外面平行叩き 内面同心円当て具痕	表採	PL13
TP66	須恵器	甕	長石	灰黄	普通	体外外面格子叩き 内面同心円当て具痕	表採	PL13

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP67	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	にがい橙	普通	口縁部縄文原体による施文	SI224覆土中	PL13
TP68	縄文土器	深鉢	雲母	橙	普通	口縁部半截竹管による平行沈線を施文	SI228覆土中	PL13
TP69	縄文土器	深鉢	長石・雲母	にがい橙	普通	口縁部半截竹管による連続斜突文	表採	PL13
TP70	縄文土器	深鉢	石英・長石	黄灰	普通	胴部見の単節斜縄文を施文	SI224覆土中	PL13
TP71	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	橙	普通	胴部LRの単節斜縄文を施文	SI228覆土中	PL13
TP72	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	黄灰	普通	胴部見の単節斜縄文を施文	SI228覆土中	PL13

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
798	土師質土器	小皿	[9.4]	2.8	3.9	長石・雲母	浅黄橙	普通	外面ロクロ整形 底部刷毛切り	SK543覆土中	80% PL11
799	土師質土器	小皿	[5.2]	1.7	3.5	赤色粘土・黒色粘土	にがい黄橙	普通	外面ロクロ整形 底部刷毛切り	表採	50% PL11
800	土師質土器	小皿	5.2	1.1	3.2	石英・雲母・黒色粘土	浅黄	普通	内・外面ナデ 底部刷毛切り	SK535周辺	60% PL11
801	土師質土器	播鉢	[23.8]	(7.1)	-	長石・雲母・赤色粘土	にがい橙	普通	体外外面ナデ 1単位7条の羅り目	SK535周辺	10%
802	土師質土器	香炉	[14.4]	6.0	[10.0]	長石・雲母	黄灰	普通	体内内・外面ナデ	SK535周辺	20%

番号	器種	長さ(径)	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP46	土玉	1.6	-	1.6	3.2	土製(長石・雲母)	穿孔なし	表採	
DP48	埴型	10.0	(4.4)	2.0	(82.0)	土製(長石・雲母)	上部女性, 下部蛇	表採	PL13
Q121	磨石	12.2	8.0	4.6	612.0	火山岩	端部に使用痕	表採	
M124	釘	(4.8)	0.6	0.5	(3.7)	鉄	上部欠損 断面方形	表採	PL15
T70	丸瓦	(19.5)	19.8	2.6	(2410.0)	土製(長石・雲母)	両面布目筋 凸面へラ削り	表採	PL16

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP47	紡錘車	4.2	1.8	0.8	40.0	土製(長石・雲母)	円筒形	表採	PL13

番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	初埴年	材質	特徴	出土位置	備考
M25	寛永通寶	2.3	0.6	0.14	2.8	1697年	銅	背面無文 新寛永	表採	PL15
M26	皇宋通寶	2.2	0.9	0.09	1.5	1038年(北宋)	銅	背面無文	SK535周辺	PL15 一部破損

第4節 ま と め

1 はじめに

今回の調査の結果、時期が判明した住居は22軒である。7世紀前葉4軒、8世紀中葉7軒、9世紀前葉3軒・中葉2軒・後葉1軒、10世紀前半3軒・後半1軒、11世紀前半1軒が確認されており、この地域では集落が絶えることなく継続されてきたことがわかる。(第73～76図参照)

ここでは、「当向遺跡1」(以下「当向1」)¹⁾の成果をもとに当遺跡について若干の考察を加え、さらに周辺遺跡である「辰海道遺跡」「大日下遺跡」「金谷遺跡」「山ノ入古墳群」の各遺跡の性格を考慮しながら、当遺跡の特徴を述べていきたい。なお、時期は「当向1」のものを基本として使用した。

6期(7世紀前葉)

本期は第224・237・238・246号住居跡が該当し、「当向1」と合計すると8軒となる。特に遺物としては第224号住居跡から轡と手捏土器が出土している。

当該期の住居は遺跡の西部、標高64～65mの台地平坦部に集中している。柱穴から銅鋼が出土した第43B号住居跡(「当向1」)と、第224号住居跡とは直線距離で約60mと隣接している。また、当向の西隣にはこの時期に構築された山ノ入古墳群²⁾があることから、被葬者の一族である可能性を加味すれば、本期は有力者と思われる人々の居住地域が存在した時期であると考えられる。

9期(8世紀中葉)

本期は第223・226・234・236・240・243・247号住居跡が該当し、「当向1」と合計すると13軒となる。この時期は、台地平坦部に建てられた掘立柱建物跡を中心に集落が形成されている。第223号住居跡は、第78号住居跡(「当向1」)と同様に釜みのある須恵器が何点か出土しており、これらの土器が広域に流通することは考えにくく、堀ノ内古窯跡群に関わりのある人が居住していたことが推測される。

11期(9世紀前葉)

本期は第222・230・244号住居跡が該当し、「当向1」と合計すると7軒となる。第244号住居跡では竈袖部の構築材として瓦が使用されている。また、第222号住居跡のように複数の竈を使用したり、第230・244号住居跡のように東壁に竈が築かれるものもこの時期からである。遺物では第244号住居跡出土の須恵器の坯の体部内面から漆の付着がみられた。

12期(9世紀中葉)

本期は第231・233号住居跡が該当し、「当向1」と合計すると5軒となる。第231号住居跡からは椀状滓や鉄釘が出土しており、住居の規模や竈の移設等から作業場として使用された可能性が考えられる。

13期(9世紀後葉)

本期は第242号住居跡が該当し、「当向1」と合計すると10軒となる。東壁に竈を設けた住居が多く確認され、この時期を境にして、東竈の住居数が増えてくる傾向を示している。



第73図 6期住居の変遷



第74図 9期住居の変遷



第75図 11～13期住居の変遷



第76図 14～16期住居の変遷

14期 (10世紀前半)

本期は第225・228・232号住居跡が該当し、「当向1」と合計すると18軒となる。13期(9世紀後葉)から、集落は拡大傾向にある。本調査区においても当時期に該当する住居跡は、すべて東壁に竈を構築している。また、第225・228号住居跡の竈前面から瓦が出土していることから依然として瓦を竈の構築材として使用している。「当向1」でも述べられたように³⁾、2〜3軒でグループを形成するのであれば、今回調査した当該期の住居も同様のことがいえる。

15期 (10世紀後半)

本期は第216号住居跡が該当し、「当向1」と合計すると住居数は22軒である。住居の軒数は最大となり、集落が一番栄えた時期である。調査I区の西側と第III区に住居が集中して集落を形成されたことが考えられる。

16期 (11世紀前半)

本期は第229号住居跡が該当し、「当向1」と合計すると10軒となる。この時期は、住居数が減少する傾向にある。集落の特徴として、台地平坦部に一定の距離をおいて各住居が構築されている。

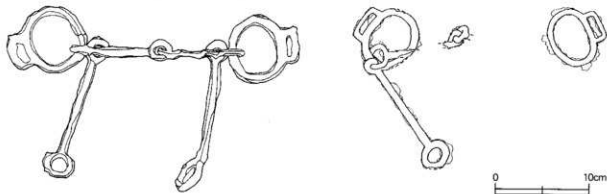
2 古墳時代後期の馬具の普及について

7世紀前葉ととらえられる第224号住居跡から馬具の一部である轡あしが出土した(第5・77図)。住居内から轡が出土した例は、つくば市島名熊の山遺跡の第2269号住居跡⁴⁾と、桜川市(旧岩瀬町)加茂遺跡の第33号住居跡⁵⁾、常陸太田市(旧金砂郷町)長者屋敷遺跡の第9号住居跡⁶⁾が挙げられる。長者屋敷遺跡出土の轡は当向遺跡と同年代であると考えられるが、鏡板のみの出土である。また、加茂遺跡出土の轡は8世紀前葉、島名熊の山遺跡出土の轡は9世紀中葉といずれも本跡出土の轡より後年のものである。両遺跡から出土している轡は律令体制が確立し、駅伝制及び伝馬制が制定され、役人の移動や文書の伝達等に馬が利用された時代のものである。

では、この時期に出土している轡にはどのような意味合いがあるのだろうか。茨城県内で確認されている馬具を、片平雅俊氏は馬装から次のように分類している⁷⁾。

A類 金銅装馬具：馬具を構成する部位の内、轡(鏡板)、鞍、杏葉、雲珠、辻金具などに金銅装が用いられる例

B類 鉄製馬具：板状立開素環鏡板付轡などからなる例



第77図 中台古墳群第6号墳出土轡(左)及び当向遺跡第224号住居跡出土轡(右)

当遺跡出土の馬具は片平氏のB類に該当する。B類は6世紀後半に出土数が急増し、金銅馬具との比率も逆転する。

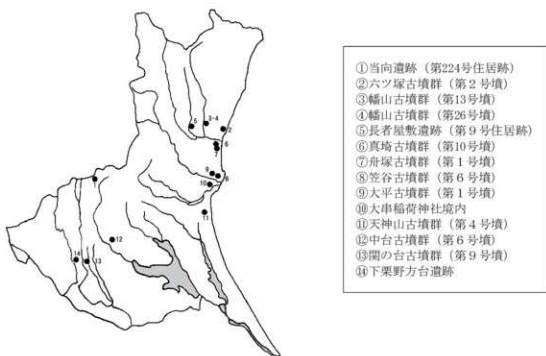
片平氏は、7世紀代にはさらに出土数は増加し続けると指摘し、B類の急増の背景には、馬具を所有・副葬しえる階級の中核をなしたのは「有力家父長層」であったと述べている。

西側に位置する山ノ入古墳群第2号墳の石室羨道部の覆土下層から轡が出土している⁹¹⁾。山ノ入古墳群から出土した轡は鏡板がなかったものの、引手や銜316の形式から同年代の轡であると推測される。山ノ入古墳群第2号墳も、当遺跡の第224号住居跡と同時期の遺構と考えられる。また、第2号墳は唯一の前方後円墳であり、群集墳の中でも中心的な存在であった者の墳墓であることが推測される。

前述したように第6期の居住域に有力家父長の一族が住んでいたと想定すれば、山ノ入古墳群の被葬者と何らかの関連があったと考えられる。

また、全国的にも、6世紀末から7世紀前半に集中して、群集墳から板状立開素環鏡板付轡が出土している。この板状立開素環鏡板付轡は広く全国から出土し、県内でも久慈川・那珂川・桜川・小貝川流域の古墳群から出土している(第78図)。桜川を下った中台古墳群第6号墳において同じ型式の轡が出土している(第77図)。これらは規格が同一であることから、同一地域で製作され、各地に流通していったと考えられる。その理由として岡安光彦氏はこの時期は大和朝廷が東国を中心に騎馬兵力の増強を図り、中心であった諏訪・三河地方から全国各地に形成していく背景があることを述べている。そのため、馬の生産も増え始め、同一規格の馬具が生産され始めたと述べている。関東地方では特に下野・上野から出土している⁹²⁾。

このことから、隣接する岩瀬地方にもその影響力はあったと推測したい。以上の視点で考えれば、第224号住居跡の住人が馬の飼育に携わったか、もしくは軍事的な立場にいた人物であることが考えられる。いずれにせよ、中央政権や近隣豪族との関わりがあったか、もしくは身分の高かった者であることが推測される。



第78図 県内板状素環鏡板付轡出土分布図

3 瓦を竈の構築材とした住居跡について

新治廃寺跡を近隣に持つ岩瀬西部地区には瓦を構築材とした竈が多く確認することができる。辰海道遺跡では8世紀中葉¹⁰⁾に、金谷遺跡では8世紀後葉に入ってから¹¹⁾、瓦を竈の構築材とした住居跡が確認されている。当遺跡では、9世紀前葉の住居跡から出土している。しかし、桜川対岸にあり、真壁郡に属する犬田神社前遺跡では確認されておらず¹²⁾、青木北原遺跡では、構築材として使用された可能性がある住居跡は1軒のみである¹³⁾。

当地は、律令時代には新治郡衙や新治廃寺がある新治郡の中心地であった。また、近隣には上野原瓦窯や本郷瓦窯、堀之内窯があり、地理的位置からそれらに関わる工人が多く住んでいたことが考えられる。瓦を構築材とする竈の構築技術が、辰海道を中心として金谷・当向へと伝播している背景には、工人が何らかの理由によって辰海道から金谷・当向へと移動してきたと推測したい。

4 律令制確立から崩壊に至るまでの当向遺跡の位置付けについて

今回の調査で主となる時代は奈良・平安時代である。近接する金谷遺跡は8世紀に再び集落が形成されるが、10世紀前葉には集落自体が消滅してしまう。このことは金谷遺跡自体が律令制によって作られた計画的な集落で、まさに当時の時代を映した集落であったと考えられる。しかしながら、当向の集落は断絶することなく続いている。その背景には次の(1)~(3)が考えられる。

- (1) 8世紀中葉において当地が重要な地域であったことが考えられる。8世紀中葉の当向は、掘立柱建物跡群が建ち並び、集落内における農作物や農具等の收藏地であったことが考えられる。また、須恵器の製造に関わるとされる者の住居（第78・223号住居跡）が確認できることから、工人層がこの地で生活をしてきたことが考えられる。
- (2) 「当向1」において、9世紀中葉の住居跡と推測される第88号住居跡から^[405]巡方が出土していることから、この近隣に新治郡衙と関わりがある人物が存在していたことが考えられる。
- (3) 9世紀中葉以降から鍛冶が盛んになった点である。なぜ、当向が鍛冶生産の地として適したのであろうか。その背景には南東に位置する辰海道遺跡と律令体制の崩壊との関連があると考えられる。

9世紀には律令政治の基盤が崩れ始め、全国的にも荘園制が成立しつつある時期である。辰海道遺跡から「庄」や「庄南」と記してある墨書土器が出土していることから、すでに8世紀後葉には律令制から荘園制へと体制が変わりつつある。桜川右岸に位置する辰海道遺跡周辺は、今までの調査によって交易の中心地という位置付けがされている¹⁴⁾。辰海道遺跡から出土した東海産の灰釉陶器からもその流通や繁栄ぶりが想像される。当然、交易品としては農産物のみでなく、鍛冶製品もその一つとされたと考えられる。

また、10世紀前半における平将門の乱の影響も考えられる。承平5（935）年に平将門が平国香と合戦を行い、筑波・真壁・新治郡内の「伴類」（これら3郡に居住していた土豪や有力農民）や百姓の家を焼き払ったとされており¹⁵⁾、少なからずその戦火の緊張が当向の地にも及んだことは容易に想像できよう。このような緊張状態の中において、領内の自衛手段のために多くの武器類を生産する必要があったと考えられる。今回の調査では確認できなかったが、「当向1」で10世紀前後の住居から鉄鏡が何点か出土していることから関連性が推測される。

いづれにせよ、需要が増え、従来から生産していた辰海道だけでは生産が追いつかず、鍛冶生産の際に使用される磚材が容易に採取でき、当向は鍛冶工房に最適な地であったと考えられる。

中世に入り、再び金谷の地で鑄造が行われることから、鍛冶関連の技術は中世にまで引き継がれていったと考えられる。

5 小結

当向遺跡は、古墳時代から中世まで延々と続いた複合遺跡であることが判明した。集落が途絶えることなく続いていたことは、南側に肥沃な大地を望み、北側には豊富な森林資源や鉱山資源及び水源が豊富であったことが考えられる。3次に渡っての発掘調査や近隣遺跡の調査結果を通して、当向遺跡は古墳時代には有力者の居住区、律令体制期には近隣地域の収蔵地、律令制から荘園制への移行期には、新たな生産の拠点として、坂門郷や中郡荘の重要な拠点であったことがうかがえる。

註)

- 1) 小澤重雄・小野克敏「当向遺跡1 北関東自動車道（協和～友部）建設事業内埋蔵文化財調査報告書III」『茨城県教育財団文化財調査報告』第224集 2004年3月
- 2) 小澤重雄「山ノ入古墳群 大日下遺跡 北関東自動車道（協和～友部）建設事業内埋蔵文化財調査報告書XIII」『茨城県教育財団文化財報告書』第255集 2006年3月
- 3) 1)と同じ
- 4) 田中幸夫他「島名燕の山遺跡 島名・福田坪一体型特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書VII」『茨城県教育財団文化財調査報告』第264集 2006年3月
- 5) 島田和宏「加茂遺跡 北関東自動車道（協和～友部）建設事業内埋蔵文化財調査報告書III」『茨城県教育財団文化財調査報告』第249集 2005年3月
- 6) 矢ノ倉正男「長者屋敷遺跡 主要地方道常陸那珂港山方線道路改良工事地内埋蔵文化財報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第117集 1997年3月
- 7) 片平雅俊「馬具の集成を終えて - 茨城県における古墳時代馬具の研究（2）」『茨城県史研究』No. 82 1999年3月
- 8) 2)と同じ
- 9) 岡安光彦「馬具副葬品古墳と東国舍人騎兵 考古資料と文献史料による総合的分析の試み」『埋もれた馬文化』馬の文化叢書1 古代 馬事文化財団 1993年12月
- 10) 仲村浩一郎他「辰海道遺跡1 北関東自動車道（協和～友部）建設事業内埋蔵文化財調査報告書I」『茨城県教育財団文化財調査報告』第222集 2004年3月
- 11) 青木仁昌他「金谷遺跡2 北関東自動車道（協和～友部）建設事業内埋蔵文化財調査報告書XII」『茨城県教育財団文化財調査報告』第254集 2006年3月
- 12) a 石川武志・柳雅彦「大田神社前遺跡1 北関東自動車道（協和～友部）建設事業内埋蔵文化財調査報告書VIII」『茨城県教育財団文化財調査報告』第229集 2004年3月
b 鶴志田祐一・早川麗司「大田神社前遺跡2 北関東自動車道（協和～友部）建設事業内埋蔵文化財調査報告書XIII」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第248集 2005年3月
c 寺内久永・須賀川正一「大田神社前遺跡3 北関東自動車道（協和～友部）建設事業内埋蔵文化財調査報告書XIV」『茨城県教育財団文化財調査報告』第270集 2007年3月
- 13) 本書第4章参照
- 14) 10)と同じ
- 15) 協和町史編纂委員会『協和町史』1993年3月

参考文献

- 松尾昌彦「馬具の流入と展開」『古墳時代東国政治論』藤山園 2002年8月
網野善彦「10世紀の社会変動と国制改革」『里の国の中世』平凡社 2004年9月

第4章 青木北原遺跡

第1節 遺跡の概要

青木北原遺跡は、桜川左岸の標高43mほどの台地上に立地している。調査前の現況は畑地や宅地で、調査面積は3,515㎡である。

今回の調査では、弥生時代から中世にかけての複合遺跡であることが確認された。検出された遺構は、弥生時代の土坑6基、古墳時代の竪穴住居跡40軒、土坑8基、奈良・平安時代の竪穴住居跡23軒、土坑2基、中世の方形竪穴遺構3軒、墓坑2基、時期不明の竪穴住居跡4軒、掘立柱建物跡2棟、柵列跡4か所、溝跡13条、井戸跡3基、道路跡1条、土坑69基、ピット群8か所、不明遺構1基である。遺物は、収納コンテナ（60cm×40cm×20cm）に66箱出土している。主な遺物は、弥生土器（壺）、土師器（坏、碗、高台付碗、高台付皿、高台付杯、埴、甕、甌）、須恵器（坏、高台付坏、蓋、捏鉢、甕、甌）、土製品（土玉、小玉、支脚、紡錘車）、石器（磨石、砥石）、石製品（管玉、白玉、紡錘車、石製模造品）、鉄製品（刀子、鐵、鎌、釘、鐙）、ガラス製品（小玉）などである。

第2節 基本層序

A312区にテストピットを設定し、基本土層の観察を行った。土層は、色調・構成粒子・含有物・粘性などから6層に分層された。土層の観察は、以下の通りである。

第1層は、黒褐色を呈する腐食土層の耕作土で、ロームブロックを中量含み、粘性が弱い。層厚は24～38cmである。

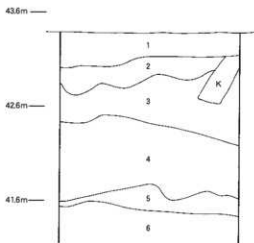
第2層は、にぶい褐色を呈するソフトローム層で、赤色粒子・鹿沼バミスを微量含み、締まりが強い。層厚は10cmである。

第3層は、暗褐色を呈するハードローム層で、鹿沼バミスを少量、赤色粒子を微量含み、粘性・締まりが共に強い。層厚は30～82cmである。

第4層は、黄褐色を呈する鹿沼軽石層で、粘性・締まりが共に強い。層厚は35～74cmである。

第5層は、明黄褐色を呈する鹿沼軽石と粘土の漸移層で、鹿沼バミスを中量、粘土粒子を少量含み、粘性・締まりが共に強い。層厚は8～30cmである。

第6層は、オリーブ褐色を呈する粘土層で、粘土粒子を多量含み、粘性が強い。下層は未掘のため本来の厚さは不明である。遺構は、第3層上面で確認された。



第79図 基本土層図



第80図 青木北原遺跡調査区設定図

第3節 遺構と遺物

1 弥生時代の遺構と遺物

土坑6基が確認された。これらの土坑は、調査Ⅰ・Ⅱ区の境界を中心とした標高44mの台地平坦部に位置しており、調査区域外に中心的な遺構がある可能性が考えられる。遺物は弥生時代の土器片以外は出土していない。遺構は、深さや形状等が類似し、まとまって確認されたことからこの時代の土坑と推測したが、性格は不明である。また、古墳時代、奈良・平安時代それぞれの遺構で出土した弥生土器は流れ込みによる遺物として各遺構で掲載することとした。以下、遺構と遺物について記述する。

第12号土坑（第81図）

位置 調査区Ⅰ区のB4f3区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.38m、短径1.34mの円形で、深さは44cmである。底面は平坦で、壁は直立している。

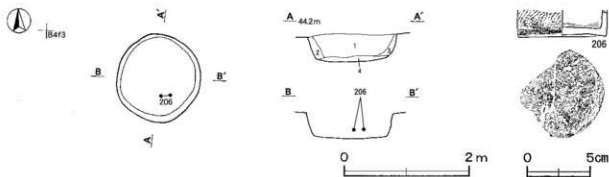
覆土 4層に分層される。全体的に締まりが強く、ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- | | |
|----------------------|--------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック少量 | 3 褐色 ローム粒子中量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量 | 4 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量 |

遺物出土状況 弥生土器片11点（壺）が出土している。206は覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から弥生時代中期前半と推測できるが、性格は不明である。



第81図 第12号土坑・出土遺物実測図

第12号土坑出土遺物観察表（第81図）

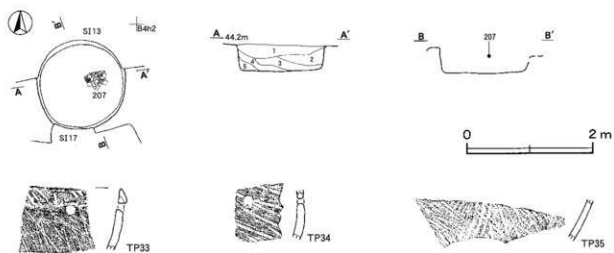
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
206	弥生土器	壺	-	(2.7)	7.0	黒色粒子	橙	普通	胴部LRの単筋縄文 下部丁寧な磨き出し 底部木炭痕	覆土下層	10%

第15号土坑（第82図）

位置 調査区Ⅰ区のB4h1区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第13・17号住居に掘り込まれている。

規模と形状 確認された規模は長径1.48m、短径1.40mの円形で、深さは40cmである。底面は平坦で、壁は直



第82图 第15号土坑·出土遺物実測図

立している。

覆土 5層に分層される。ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量 4 暗褐色 ロームブロック少量
 2 暗褐色 ローム粒子少量 5 黒褐色 ロームブロック少量
 3 灰褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 弥生土器片56点（壺）が出土している。207は覆土中層から出土しており、第91号土坑から出土した底部片と接合している。TP33～TP35は覆土中から出土している。

所見 第91号土坑から出土した破片と接合できることから、同時期に廃絶された土坑と考えられる。時期は、出土土器から弥生時代中期前半と推測できるが、性格は不明である。

第15号土坑出土遺物観察表（第82図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
207	弥生土器	壺	-	(46.9)	[11.0]	石英・長石・燧石・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	胴部外面斜位の条痕文後、同心円及び縦位の縞模文 下部磨き消し	覆土中層	30% PL21 SK91から底部出土

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP33	弥生土器	壺	石英・長石	にぶい黄橙	普通	口縁部肥厚 竹管状工具による刺突（内一外） 胴部縦位の条痕文	覆土中	PL32
TP34	弥生土器	壺	石英・長石	にぶい黄橙	普通	胴部縦位の条痕文後磨き消し 口縁部竹管状工具による刺突（内一外）	覆土中	PL32
TP35	弥生土器	壺	石英・長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	胴部縦位の条痕文	覆土中	

第55号土坑（第83図）

位置 調査区Ⅱ区のC5b7区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.21m、短径1.06mの楕円形で、深さは34cmである。長径方向はN-53°-Wであり、底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

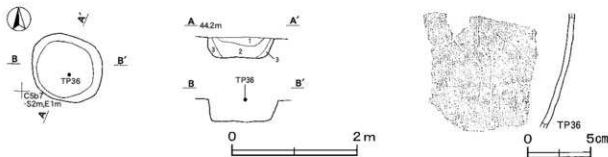
覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 3 褐色 ローム粒子中量
 2 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片8点（壺）が出土している。TP36は覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土土器から弥生時代中期前半と推測できるが、性格は不明である。



第83図 第55号土坑・出土遺物実測図

第55号土坑出土遺物観察表（第83図）

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP36	弥生土器	壺	石英・長石・白色 粒子	にがい褐色	普通	胴部縦位の条痕文	覆土上層	

第69号土坑（第84図）

位置 調査区Ⅱ区のB4j7区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.52m、短径1.50mの円形で、深さは66cmである。底面はほぼ平坦で、壁は直立している。

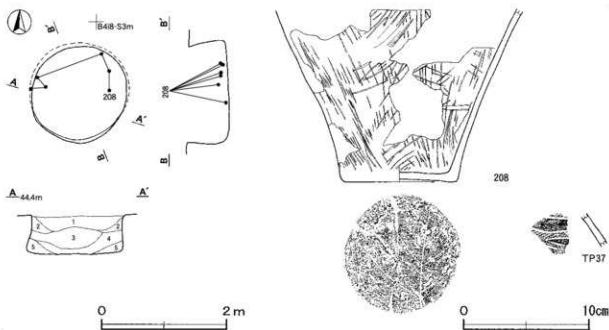
覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- | | |
|-----------------------|-----------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子微量 | 4 褐色 ローム粒子中量 |
| 2 極暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 5 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 3 極暗褐色 ロームブロック少量 | |

遺物出土状況 弥生土器片24点（壺）が出土している。208は覆土下層から底面にかけて出土した破片が接合したものである。TP37は覆土中から出土している。底面の北西部に粘土塊が確認されている。

所見 時期は、出土土器から弥生時代中期前半と推測できるが、性格は不明である。



第84図 第69号土坑・出土遺物実測図

第69号土坑出土遺物観察表（第84図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
208	弥生土器	壺	-	(13.9)	9.1	石英・長石	にがい褐色	普通	胴部外面縦位の条痕文 底部木葉痕	覆土下層 ～底面	15%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP37	弥生土器	壺	石英・長石	暗褐色	普通	胴部充填縄文	覆土中	

第78号土坑（第85図）

位置 調査区Ⅱ区のC4b8区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第61号住居に掘り込まれている。

規模と形状 確認された範囲は長径1.54m、短径1.02mである。平面形は円形又は楕円形で、長径方向はN-20°-Eと推定され、深さは30~40cmである。底面はほぼ平坦で、壁はほぼ直立している。

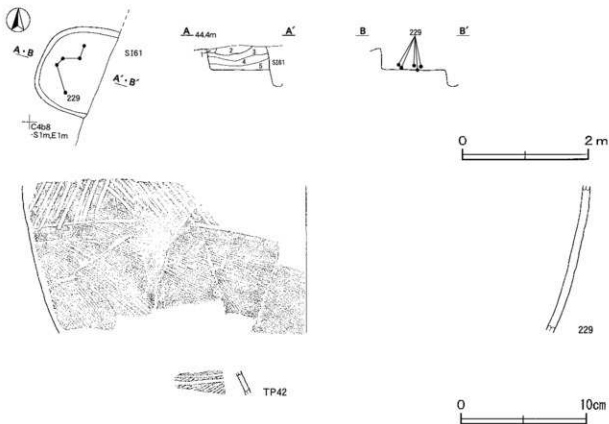
覆土 5層に分層される。ロームブロックを多く含む不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|-------|-----------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 褐色 | ロームブロック中量 | 5 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量 | | |

遺物出土状況 弥生土器片25点（壺）が出土している。229は覆土下層から底面にかけて出土した破片が接合したものである。TP42は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から弥生時代中期前半と推測できるが、性格は不明である。



第85図 第78号土坑・出土遺物実測図

第78号土坑出土遺物観察表（第85図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
229	弥生土器	壺	-	(11.7)	-	石英・長石	にが・赤褐色	普通	胴部外面斜位の赤褐色文後半截竹管状工具による沈線	覆土下層 ~底面	5%
番号	種別	器種			胎土	色調	焼成	文様の特徴		出土位置	備考
TP42	弥生土器	壺			石英・長石	暗褐色	普通	胴部甲部縄文施文後半截竹管状工具による横位の沈線		覆土中	PL32

第91号土坑（第86図）

位置 調査区Ⅱ区のB4e7区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 北部が調査区域外に延びており、確認できた範囲は長径1.56m、短径1.04mである。平面形は円形又は楕円形で、長径方向はN-55°-Wと推測され、深さは42~56cmである。底面はほぼ平坦で、壁は内傾している。

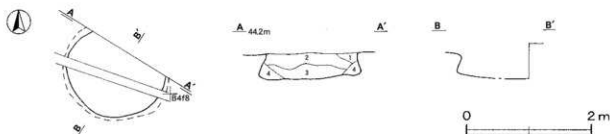
覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック少量 | 3 暗褐色 ローム粒子少量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子少量 | 4 暗褐色 ロームブロック少量 |

遺物出土状況 弥生土器28点（壺）が出土している。第15号土坑から出土した207と底部が接合する。

所見 第15号土坑から出土した破片と接合することから、同時期に廃棄された土坑と考えられる。時期は、出土土器から弥生時代中期前半と推測できるが、性格は不明である。



第86図 第91号土坑実測図

表10 弥生時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模(m)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考(旧~新)
				(長径×短径)	深さ					
12	B4f3	-	円形	1.38 × 1.34	44	直立	平坦	人為	弥生土器	
15	B4hi	-	円形	[1.48] × 1.40	40	直立	平坦	人為	弥生土器	本跡→S113-17
55	C5b7	N-53°-W	楕円形	1.21 × 1.06	34	外傾	平坦	自然	弥生土器	
69	B4j7	-	円形	1.52 × 1.50	66	直立	平坦	自然	弥生土器	
78	C4b6	N-20°-E	円形・楕円形	1.54 × (1.02)	30~40	直立	平坦	人為	弥生土器	本跡→S161
91	B4e7	N-55°-W	円形・楕円形	1.56 × (1.04)	42~56	内傾	平坦	自然	弥生土器	

2 古墳時代の遺構と遺物

竪穴住居跡40軒、土坑8基が確認された。以下、確認された遺構及び遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡（第87図）

位置 調査区Ⅰ区のA2j7区で、標高43mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第34・35号住居に掘り込まれている。

規模と形状 南西部が調査区域外であるため、確認できた範囲は南北軸4.90m、東西軸5.51mである。平面形は方形又は長方形と推定され、主軸方向はN-20°-Wである。壁高は20cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が北東壁際に見られ、断面形はU字状である。

ピット 2か所。P 1は深さ60cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P 2は深さ58cmで、性格は不明である。

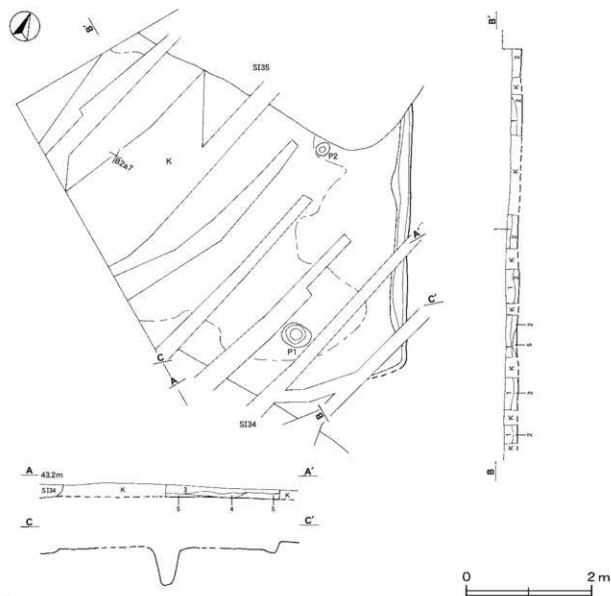
覆土 5層に分層される。ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック中量 | 4 褐色 | ロームブロック多量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック多量、焼土ブロック・炭化物微量 | 5 黒褐色 | ロームブロック多量 |
| 3 灰褐色 | ロームブロック多量、焼土ブロック・炭化物微量 | | |

遺物出土状況 土師器片150点（坏類13、高坏12、甕類125）が覆土中層から下層にかけて散在して出土している。細片のため図示できない。

所見 時期は、重複関係又は出土土器から5世紀中葉以前と考えられる。



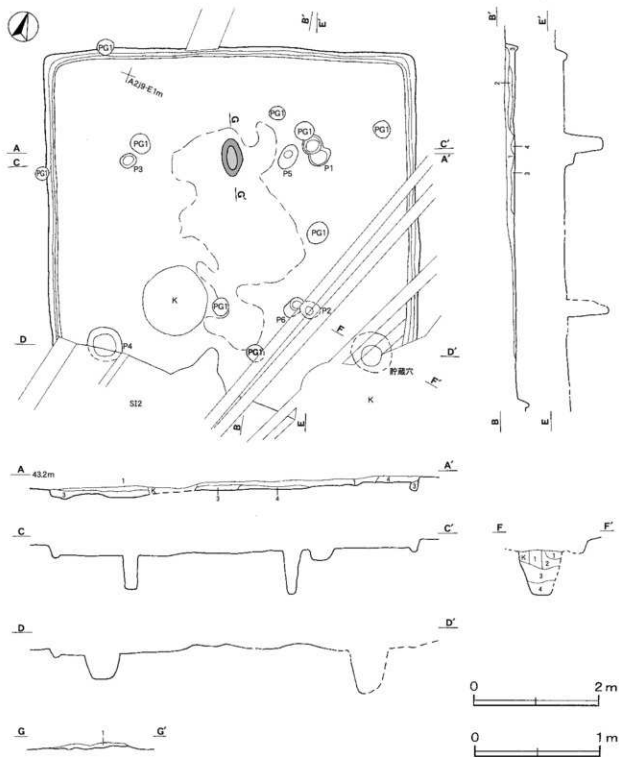
第87図 第1号住居跡実測図

第3号住居跡 (第88・89図)

位置 調査区I区のA29区で、標高43mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第2号住居、第1号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 南部は重複及び攪乱のため、確認できた範囲は南北軸5.52m、東西軸5.92mである。平面形は方形又は長方形と推定され、主軸方向はN-24°-Wである。壁高は15cmで、外傾して立ち上がっている。



第88図 第3号住居跡実測図

床 ほぼ平坦で、炉を囲み中央部が細長く踏み固められている。壁溝が全周し、断面形はU字状である。

炉 中央部からやや北壁寄りに位置している。規模は長径60cm、短径34cmの長楕円形で、床面をわずかに振りくぼめた地床炉である。火床面は火熱を受けて赤変硬化している。

伊土層解説

- 1 極暗赤褐色 焼土粒子多量

ピット 6か所。P1～P3は深さ60～66cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P4～P6は深さ44～70cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 南東コーナー部に位置していると推測される。長径70cm、短径64cmの楕円形で、深さは68cmと推定される。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子微量
 2 黒褐色 炭化物中量、ローム粒子・焼土粒子少量
 3 極暗褐色 炭化物少量、ロームブロック・焼土粒子微量

覆土 4層に分層される。ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量
 2 極暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
 3 褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック微量
 4 極暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片193点（坏類45、高坏13、甕類135）が全城から散在して出土している。1・2は貯蔵穴付近の覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。



第89図 第3号住居跡出土遺物実測図

第3号住居跡出土遺物観察表（第89図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	[15.0]	(5.9)	[5.8]	右赤・長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面へラ削り	覆土中	20%
2	土師器	坏	[11.8]	(4.5)	-	右赤・長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラナデ	覆土中	30%

第4A号住居跡（第90・91図）

位置 調査区1区のA2h8区で、標高43mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第4B・9号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 北西コーナー部は調査区域外であり、確認できた範囲は長軸5.68m、短軸5.48mである。平面形は方形で、主軸方向はN-5°-Eである。壁高は8～10cmで、外傾して立ち上がっている。

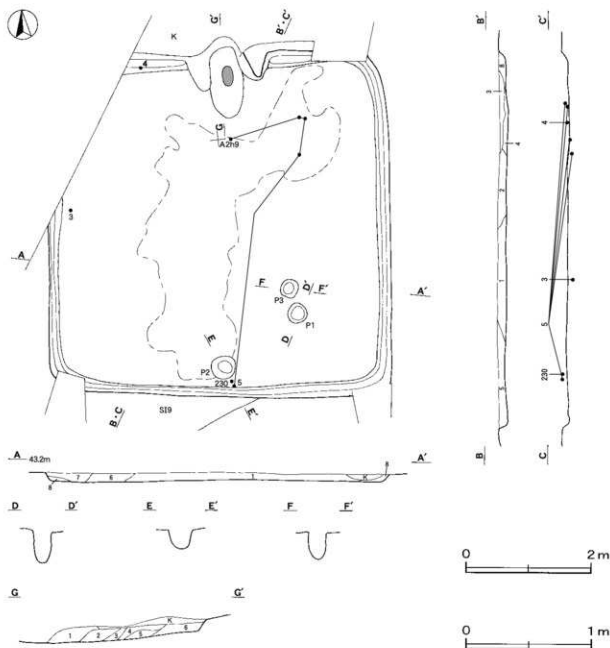
床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が全周し、断面形はU字状である。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は、焚口部から煙道部までが114cm、袖幅が124cmである。袖部は砂質粘土を含んだローム土によって構築されている。火床部は床面をわずかに掘りくぼめており、火床面は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ12cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | |
|---------------------------------|--|
| 1 暗褐色 砂質粘土粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック少量 | 4 黒褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物少量 |
| 2 暗褐色 砂質粘土粒子多量、ロームブロック・焼土ブロック少量 | 5 オリーブ褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・砂質粘土ブロック少量、炭化物微量 |
| 3 灰黄褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック少量、炭化物微量 | 6 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 |

ピット 3か所。P1は深さ48cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P2は深さ30cmで、規模と位置から出入口施設に伴うピットと考えられる。P3の深さは44cmで、性格は不明である。



第90図 第4A号住居跡実測図

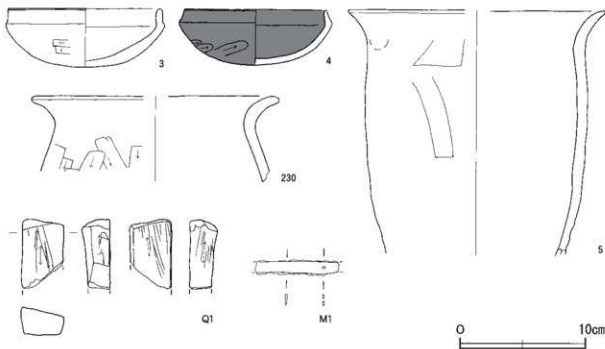
覆土 8層に分層される。ブロックを含む不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------------|-------|------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量 | 5 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック微量 |
| 3 黒褐色 | 炭化粒子少量、ロームブロック・砂質粘土ブロック微量 | 7 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量 |
| 4 灰褐色 | 砂質粘土ブロック少量、炭化粒子微量 | 8 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片655点(坏類164, 埴2, 高坏9, 甕類480), 須恵器片2点(坏類), 石器1点(砥石), 鉄製品1点(刀子)が全城から散在して出土している。230は南壁際の覆土下層, 3は西壁寄り, 4は北壁際の床面からそれぞれ出土している。5は南壁際の覆土下層と北部の床面から出土した破片が接合したものである。Q1・M1は覆土中から出土している。

所見 時期は, 出土土器から6世紀後葉と考えられる。本跡は第4B号住居跡と主軸方向が一致しており, 規模もほぼ同じことから, 作り替えがおこなわれた住居と考えられる。



第91図 第4A号住居跡出土遺物実測図

第4A号住居跡出土遺物観察表(第91図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3	土師器	坏	12.2	4.6	-	雲母	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面へラ削り	床面	90% PL23
4	土師器	坏	11.2	4.6	-	雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部横ナデ 体部外面へラ削り	床面	70%
5	土師器	甕	[20.4]	(19.5)	-	石英・長石・雲母・砂鉄	明赤褐	普通	体部外面へラナデ 指頭痕	覆土下層 ~床面	30%
230	土師器	甕	[19.0]	(6.8)	-	石英・長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面へラ削り み肌	覆土下層	5%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
Q1	砥石	(5.4)	3.3	2.2	(60.3)	泥岩	紙面4面		覆土中		
M1	刀子	(6.7)	0.9	0.2	(3.6)	鉄	切先・茎尻欠損 断面三角形		覆土中		

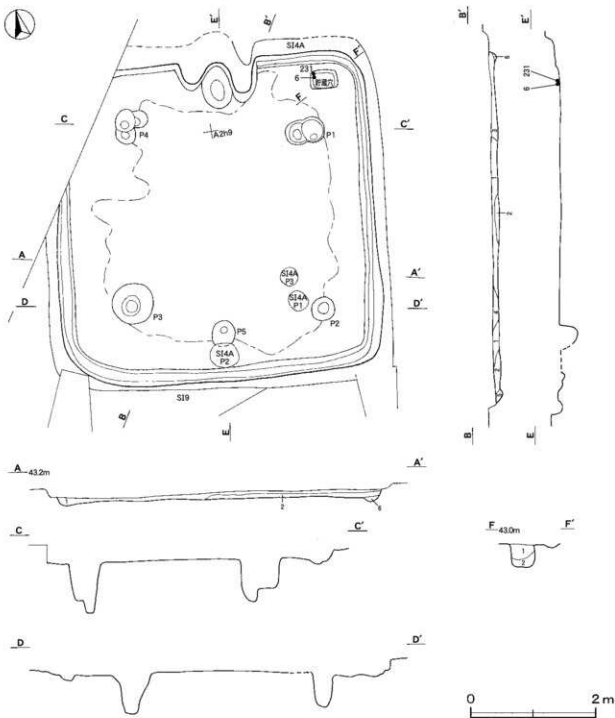
第4B号住居跡 (第92・93図)

位置 調査区I区のA2b8区で、標高43mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第9号住居跡を掘り込み、第4A号住居に掘り込まれている。

規模と形状 北西コーナー一部が調査区域外であるため、確認できた範囲は長軸5.14m、短軸5.12mである。平面形は方形で、主軸方向はN-5°-Eである。壁高は10~12cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝がほぼ全周し、断面形はU字状である。



第92図 第4B号住居跡実測図

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が全周し、断面形はU字状である。

ピット 4か所。P1・P2は深さ78cm・64cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P3・P4は深さ20cm・38cmで、規模と位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

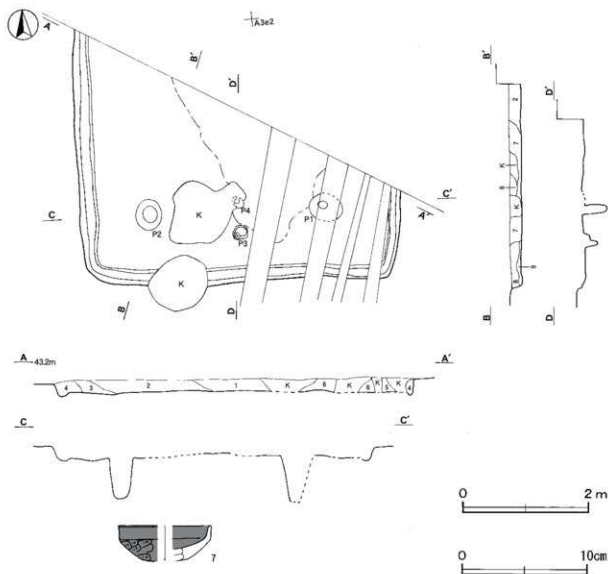
覆土 9層に分層される。ブロックを含む不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量	6 暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック少量
2 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量	7 黒褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量
3 褐色	ロームブロック少量	8 暗褐色	ロームブロック少量
4 褐色	ロームブロック中量	9 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量
5 極暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量		

遺物出土状況 土師器片96点(坏類13, 高坏1, 甕類82)が南部の覆土中層から集中して出土している。7は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第94図 第5号住居跡・出土遺物実測図

第5号住居跡出土遺物観察表 (第94図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
7	土師器	環	[7.2]	(2.8)	-	雲母・赤色粒子	褐	普通	口縁部横ナデ 体部外面へラ削り	覆土中	20%

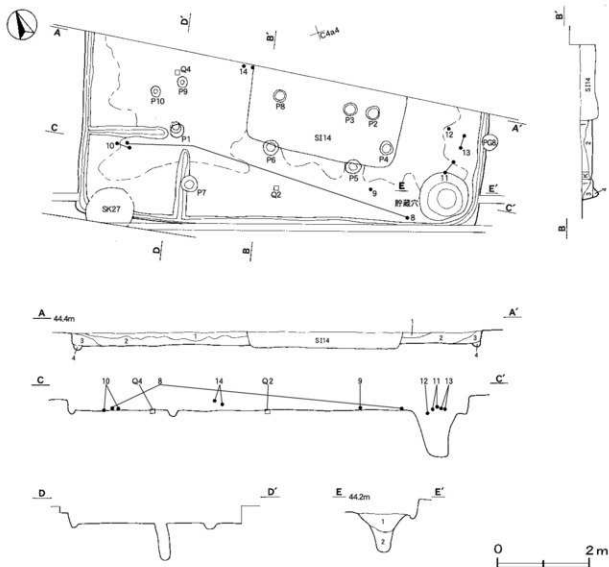
第8号住居跡 (第95~97図)

位置 調査区I区のC4a3区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第14号住居、第27号土坑、第8号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 北部が調査区域外であるため、確認できた範囲は南北軸3.81m、東西軸8.51mである。平面形は方形又は長方形と推定され、主軸方向はN-23°-Eである。壁高は23cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が全周し、断面形はU字状である。間仕切り溝が南西



第95図 第8号住居跡実測図

コーナー部に2条確認されている。

ピット 10か所。P 1は深さ72cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P 2～P 10は深さ12～28cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 南東コーナー部に位置している。長径112cm、短径102cmの円形で、深さは80cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1 灰褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物微量 2 暗褐色 ロームブロック少量

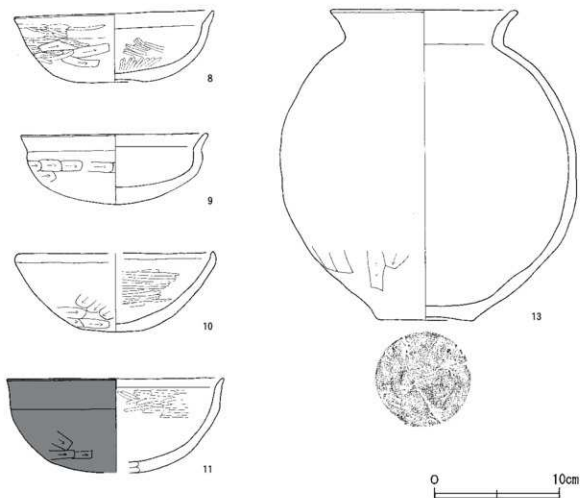
覆土 4層に分層される。ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

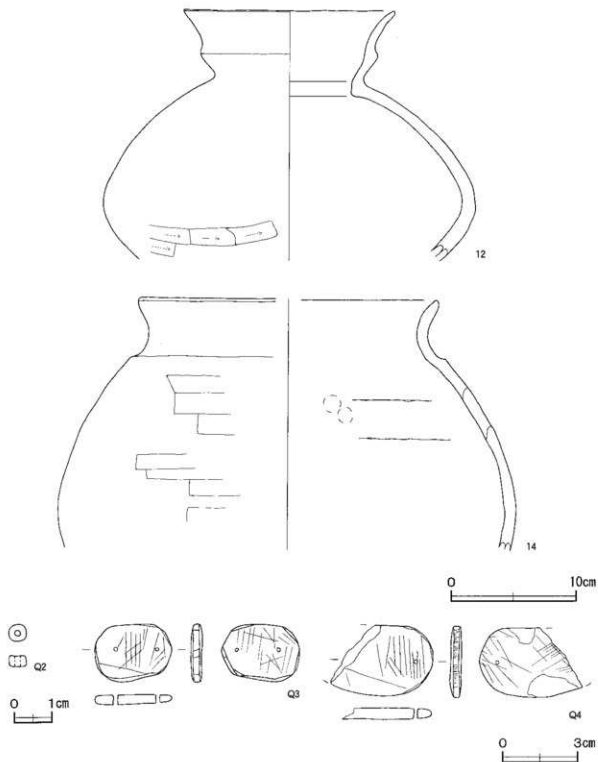
1 黒褐色 ロームブロック中量 3 灰褐色 ロームブロック少量
2 褐色 ロームブロック多量 4 褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片727点（坏類55、椀19、甕27、甕類626）、須恵器片5点（蓋1、甕4）、石製品3点（白玉1、双孔円板2）が散在して出土している。10は南西コーナー部、9・11～13は南東コーナー部、Q 2は南部、Q 4は西部の床面からそれぞれ出土している。8は南西コーナー部と南東コーナー部の床面、14は中央部の覆土中層から下層にかけての破片が接合したものである。Q 3は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀後葉と考えられる。



第96図 第8号住居跡出土遺物実測図(1)



第97図 第8号住居跡出土遺物実測図(2)

第8号住居跡出土遺物観察表(第96・97図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
8	土師器	坏	15.8	5.6	4.6	石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部横ナデ 体部外面へラ削り後磨き 内面へラ磨き	床面	80% PL.23
9	土師器	坏	14.9	5.5	-	長石・雲母	明赤褐	普通	体部外面へラ削り	床面	80% PL.23
10	土師器	坏	15.6	6.2	4.4	雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面へラ削り 内面へラ磨き	床面	60%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手の特徴	出土位置	備考
11	土師器	甗	17.2	7.5	-	石英・雲母・赤色 粒子	にぶい橙	普通	体部外面へラ削り 内面へラ磨き	床面	80% PL24
12	土師器	壺	16.6	(20.0)	-	石英・長石	にぶい橙	普通	体部外面へラ削り	床面	80% PL28
13	土師器	壺	14.5	24.9	7.5	石英・雲母・赤色 粒子	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面へラ削り	床面	90% PL28
14	土師器	壺	(23.5)	(20.0)	-	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部横ナデ 内面指頭痕 体部外面へラ削り後ナデ 内面指頭痕 輪積み痕	覆土中層 ・下層	10%

番号	器種	長さ	径	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q2	白玉	0.30	0.48	0.15	0.10	滑石	片面穿孔	床面	PL35

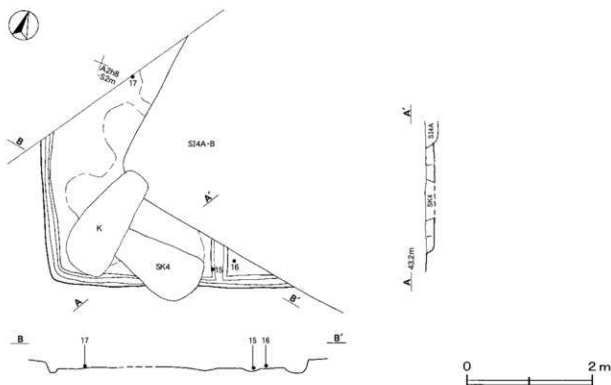
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q3	双孔円板	2.3	3.1	0.4	5.6	滑石	両面研磨 孔径0.15 cm	覆土中	PL35
Q4	双孔円板	2.8	(4.1)	0.5	(8.3)	滑石	両面研磨 孔径0.15 cm	床面	PL35

第9号住居跡 (第98・99図)

位置 調査区I区のA2b8区で、標高43mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第4A・B号住居、第4号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北西部が調査区域外であるため、確認できた範囲は南北軸3.80m、東西軸2.40mである。平面形は方形又は長方形と推定され、主軸方向はN-23°-Wである。壁高は15cmで、外傾して立ち上がっている。床はほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が全周し、断面形はU字状である。間仕切り溝が南壁中央部に確認されている。



第98図 第9号住居跡実測図

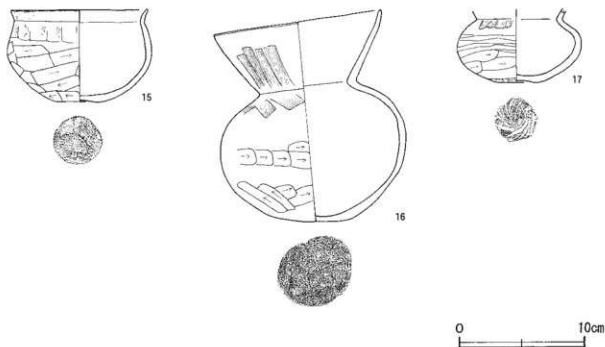
覆土 単一層で、層厚が薄いため堆積状況は不明である。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片106点（坏類24，埴27，甕類55），須恵器片1点（坏類）が出土している。15・16は南壁際の覆土下層，17は中央部の床面からそれぞれ出土している。

所見 時期は，出土土器から5世紀前葉と考えられる。



第99図 第9号住居跡出土遺物実測図

第9号住居跡出土遺物観察表（第99図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
15	土師器	碗	10.8	7.5	3.8	右美・長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面へラ削り	覆土下層	90% PL25
16	土師器	埴	13.5	16.9	5.5	右美・雲母・細織	橙	普通	口切部へケ目調整 体部外面へラ削り	覆土下層	80% PL26
17	土師器	埴	-	(5.8)	3.2	右美・雲母・赤色粒子	にみ・橙	普通	頸部へケ目調整 体部外面へラ削り	床面	80%

第12号住居跡（第100～102図）

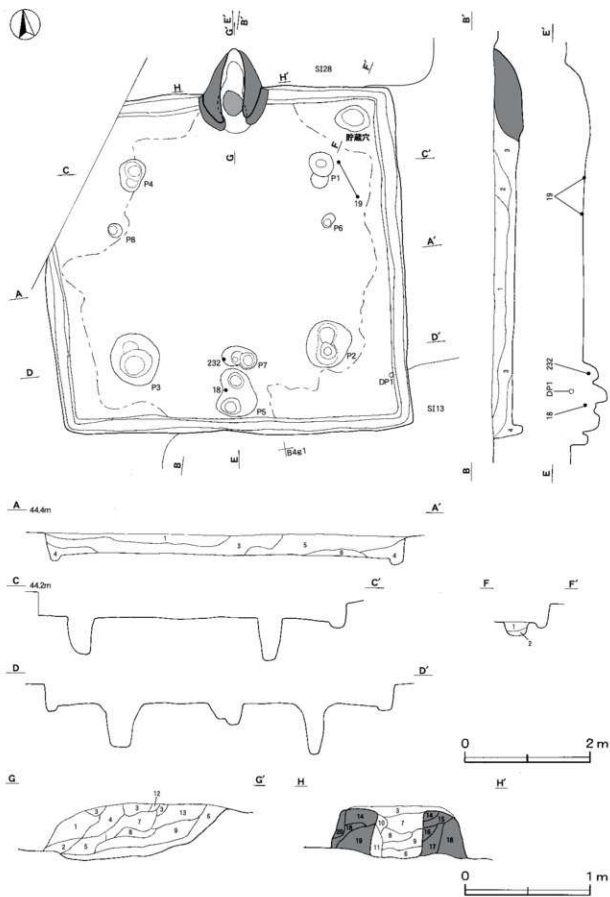
位置 調査区1区のB3f0区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第13・28号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 北西コーナー部は調査区域外である。長軸5.74m，短軸5.56mの方形で，主軸方向はN-9°-Eである。壁高は27～32cmで，外傾して立ち上がっている。

床 平坦で，竈前面から南壁際にかけて踏み固められている。壁溝が全周し，断面形はU字状である。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は，焚口部から煙道部まで134cm，袖部幅は114cmである。袖部は床面と同じ高さの地山に，砂質粘土を含んだローム土によって構築されている。火床部は床面を皿状に6cm掘りくぼめ，火床面は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ64cm掘り込まれ，外傾して立ち上がっている。



第100图 第12号住居跡実測图

る。

覆土層解説

- | | | | |
|---------|----------------------------------|---------|----------------------------------|
| 1 灰黄褐色 | 砂質粘土粒子中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量 | 11 暗赤褐色 | 砂質粘土粒子中量、焼土粒子少量 |
| 2 黒褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量 | 12 暗赤褐色 | 焼土ブロック多量、砂質粘土粒子中量 |
| 3 黒褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、ロームブロック微量 | 13 黒褐色 | 焼土ブロック多量、砂質粘土ブロック中量、炭化粒子少量 |
| 4 褐灰色 | 砂質粘土粒子中量、焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量 | 14 灰黄褐色 | ロームブロック・砂質粘土粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 5 黒褐色 | 砂質粘土粒子・炭化粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量 | 15 黒褐色 | 焼土粒子・砂質粘土粒子中量、ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 6 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量 | 16 黒褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子少量、ロームブロック微量 |
| 7 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量 | 17 暗褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 8 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量 | 18 褐色 | 砂質粘土粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量 |
| 9 暗暗赤褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子少量、ロームブロック微量 | 19 灰黄褐色 | 砂質粘土粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック少量 |
| 10 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、砂質粘土粒子・炭化粒子少量 | 20 黒褐色 | 砂質粘土粒子・炭化粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック微量 |

ピット 8か所。P1～P4は深さ56～80cmで、規模と配置からそれぞれ主柱穴と考えられる。P5は深さ40cmで、規模と位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6～P8は深さ10～35cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 北東コーナー部に位置している。長径56cm、短径40cmの楕円形で、深さは21cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|--------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック少量、炭化物 | 2 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック微量 |
|-------|------------------------|-------|--------------------|

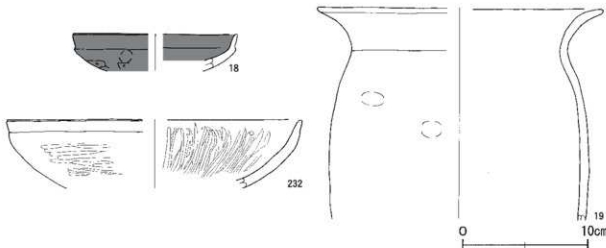
覆土 6層に分層される。ブロックを含む不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------------|-------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量 | 4 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量 | 5 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物・砂質粘土粒子微量 | 6 褐色 | ロームブロック中量、炭化物・鹿沼バミス少量 |

遺物出土状況 土師器片831点（坏類190、高坏7、甕類634）、須恵器片1点（甕）、土製品2点（不明）が散在して出土している。19は北東部の床面、DP1は東壁際の覆土上層からそれぞれ出土している。18はP5、232はP7の覆土上層、DP2は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から7世紀前葉と考えられる。



第101図 第12号住居跡出土遺物実測図(1)



第102図 第12号住居跡出土遺物実測図(2)

第12号住居跡出土遺物観察表(第101・102図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
18	土師器	環	[13.0]	(2.9)	-	赤色粒子	にふい壺	普通	口縁部横ナグ 体部外面へラ削り 指頭痕	P5覆土上層	10%
232	土師器	環	[23.4]	(5.4)	-	長石・雲母・赤色粒子	にふい壺	普通	口縁部横ナグ 体部内・外面へラ磨き	P7覆土上層	15%
19	土師器	甕	[22.6]	(16.8)	-	右英・長石・雲母・細砂	壺	普通	口縁部横ナグ 体部外面指頭痕	床面	30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP1	不明	(2.9)	1.4	(0.4)	(1.3)	土製(長石)	両端欠損 断面円形	覆土上層	
DP2	不明	(3.1)	1.2	0.8	(2.1)	土製(長石)	両端欠損 断面円形	覆土中	

第13号住居跡(第103~105図)

位置 調査区I区のB4g1区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第15号土坑を掘り込み、第12号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.16m、短軸5.81mである。平面形は方形で、主軸方向はN-7°-Wである。壁高は20~36cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が全周し、断面形はU字状である。

炉 2か所。炉1は中央部に位置している。規模は長径118cm、短径74cmの楕円形で、床面を皿状に15cm掘りくぼめた地床炉である。火床面は火熱を受けて赤変硬化している。炉2は炉1のやや北寄りに位置している。規模は長径124cm、短径54cmの楕円形で、床面を皿状に12cm掘りくぼめた地床炉である。火床面は火熱を受けて赤変硬化している。覆土の残存状況より、炉1の廃絶後に炉2が使用されたと考えられる。

炉1土層解説

1 暗赤褐色 焼土ブロック多量

2 灰褐色 ロームブロック多量

炉2土層解説

1 黒褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子少量

3 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量

2 褐色 ローム粒子中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量

4 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量

ピット 9か所。P1~P4は深さ60~89cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ80cmで、P1の内側に並行して位置しており、支柱穴と考えられる。P6は深さ24cmで、規模と位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P7~P9は深さ31~42cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 南東コーナー部に位置している。長径76cm、短径60cmの楕円形で、深さは76cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

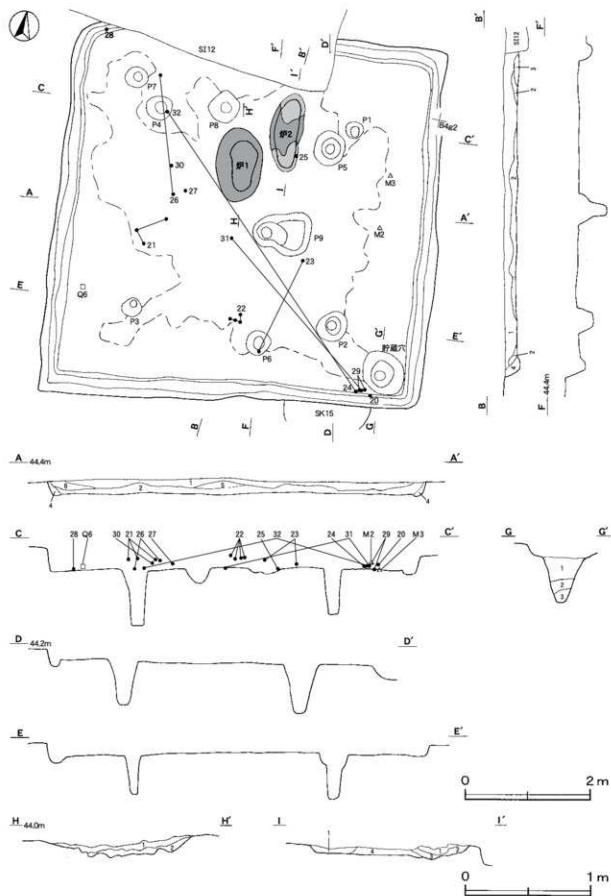
貯蔵穴土層解説

1 灰褐色 ロームブロック多量

3 黒褐色 ロームブロック・炭屑バミス微量

2 黒褐色 ロームブロック中量、炭屑バミス少量

覆土 6層に分層される。ブロックを含む不規則な堆積状況を示す人為堆積である。



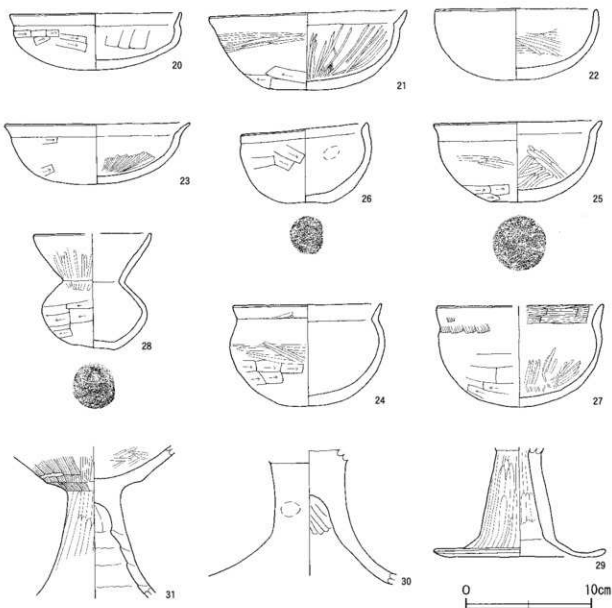
第103図 第13号住居跡実測図

土層解説

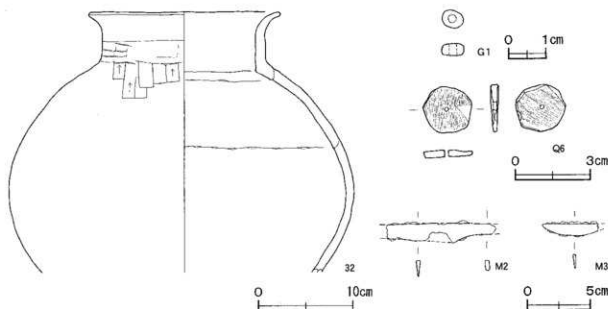
- | | | | |
|---------|-------------------------|--------|-----------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック微量 | 5 黒色 | 炭化物中量、ロームブロック微量 |
| 3 極暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量 | 6 極暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片938点（坏類393、椀41、埴25、高坏48、甕類431）、須惠器片2点（坏類1、甕類1）、石製品1点（有孔円板）、鉄製品2点（刀子）、ガラス製品1点（小王）が全城から散在して出土している。また、流れ込んだ弥生土器片56点（壺）も出土している。25は埴2火床部、28は北西コーナー部、M3は東部の床面からそれぞれ出土している。20・24は南東コーナー部、21・26・27・30・Q6は西部、22・23は南部、M2は東部の覆土下層からそれぞれ出土している。G1は覆土中から出土している。29は南東コーナー部の覆土下層と床面、31は中央部と南東コーナー部の床面、32は南東コーナー部の覆土下層とP4の覆土上層の破片がそれぞれ接合したものである。

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。



第104図 第13号住居跡出土遺物実測図（1）



第105図 第13号住居跡出土遺物実測図(2)

第13号住居跡出土遺物観察表 (第104・105図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
20	土師器	坏	13.5	4.5	-	石英・長石・雲母・赤色粒子	にじみ・橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラナデ	覆土下層	95% PL22
21	土師器	坏	15.5	6.2	5.8	石英・長石・雲母	赤褐色	普通	体部内・外面へラ磨き 体部外面へラ削り	覆土下層	78% PL23
22	土師器	坏	12.8	5.6	-	長石・雲母	橙	普通	体部内面へラ磨き	覆土下層	70% PL23
23	土師器	坏	14.6	4.8	-	雲母	明赤褐色	普通	体部外面へラ削り 内面へラ磨き	覆土下層	80%
24	土師器	椀	11.8	8.1	-	石英・長石	橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面へラ削り後磨き	覆土下層	90% PL25
25	土師器	椀	13.3	6.4	4.2	石英・長石	明赤褐色	普通	口縁部横ナデ 体部内・外面へラ磨き 体部外面へラ削り	炉2火床部	90% PL24
26	土師器	椀	10.0	6.3	2.6	石英・長石	にじみ・橙	普通	体部外面へラ削り 内面指頭痕	覆土下層	83% PL24
27	土師器	椀	[13.2]	8.1	-	石英・雲母	明赤褐色	普通	頸部・外口目調整 体部外面へラ削り後ナデ 内面へラ磨き	覆土下層	60% PL24
28	土師器	埴	[9.2]	9.2	3.6	長石・雲母	明赤褐色	普通	口切部へラ磨き 体部外面へラ削り	床面	70% PL26
29	土師器	高坏	-	(7.7)	13.7	長石・雲母	明赤褐色	普通	脚部外面へラ磨き 内面ナデ	覆土下層・床面	40%
30	土師器	高坏	-	(10.7)	-	石英・長石・雲母	橙	普通	脚部外面指頭痕 内面ナデ	覆土下層	30%
31	土師器	高坏	-	(12.1)	-	石英・長石・雲母	にじみ・橙	普通	杯部外面・外口目調整 内面へラ磨き 脚部外面へラ磨き 輪積み痕	覆土下層・床面	33%
32	土師器	甕	19.8	[27.7]	-	石英・長石・雲母	にじみ・黄褐色	普通	頸部外面縦位のへラ削り 輪積み痕	覆土下層・内層土上層	43% PL28

番号	器種	長さ	径	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
G1	小玉	0.30	0.57	0.20	0.12	ガラス	片面穿孔	覆土中	PL35

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q6	有孔円板	1.9	2.0	0.3	1.9	滑石	両面研磨 孔径0.18 cm	覆土下層	PL35
M2	刀子	(8.7)	1.6	0.4	(11.4)	鉄	刃部へ基部破片 断面三角形・方形	覆土下層	PL36
M3	刀子	(4.5)	1.1	0.2	(4.2)	鉄	刃部破片 断面三角形	床面	PL36

第14号住居跡 (第106図)

位置 調査区1区のC 4 a3区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第8号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 北東部が調査区域外であるため、確認できた範囲は南北軸1.64m、東西軸3.29mである。平面形は方形又は長方形と推定され、主軸方向はN-33°-Eである。壁高は37cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が全周し、断面形は逆台形状である。

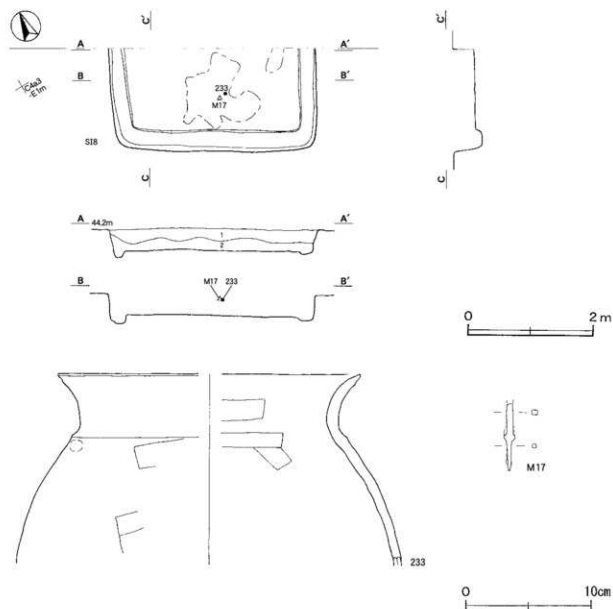
覆土 2層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量

遺物出土状況 土師器片52点（坏類2、高坏4、鉢1、甕類45）、鉄製品1点（鐵）が全城から散在して出土している。233・M17は南部の覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から7世紀前葉と考えられる。



第106図 第14号住居跡・出土遺物実測図

第14号住居跡出土遺物観察表 (第106図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
233	土師器	甕	24.0	15.2	-	右乳・長石雲母 少量	にじみ地	普通	体部内・外面へラナデ 外面指頭痕	覆土上層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M17	磁	(5.5)	1.0	0.4	(3.3)	鉄	頸部~基部破片 断面四角形	覆土上層	PL36

第15号住居跡 (第107・108図)

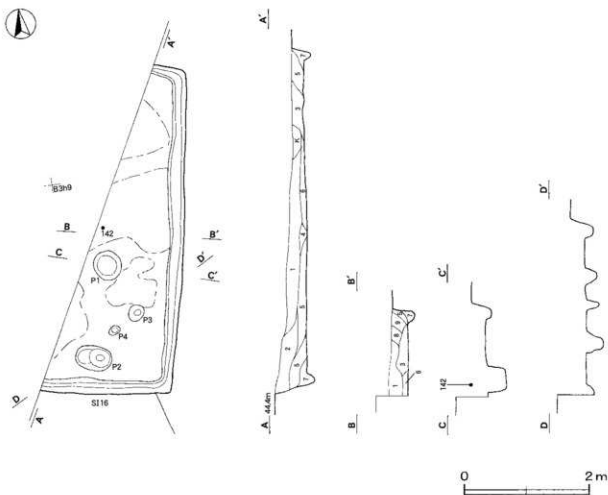
位置 調査区I区のB3h9区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第16号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 北西部が調査区域外であるため、確認できた範囲は南北軸5.27m、東西軸1.94mである。平面形は方形又は長方形と推定され、主軸方向はN-13°-Eである。壁高は25cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が全周し、断面形はU字状である。

ピット 4か所。P1・P2は深さ28cm・29cmで、規模と配置からそれぞれ主柱穴と考えられる。P3・P4は深さ18cm・20cmで、性格は不明である。



第107図 第15号住居跡実測図

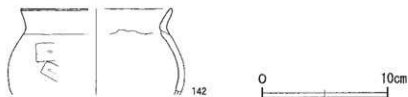
覆土 9層に分層される。ブロックを含む不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|-------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック微量 | 6 黒褐色 | 焼土ブロック少量、ロームブロック微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 7 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | 炭化物少量、ロームブロック・焼土ブロック微量 | 8 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 5 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量 | | |

遺物出土状況 土師器片48点（坏類7，高坏1，甕類40），鉄滓1点が出土している。142は東部の覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土土器から7世紀前葉と考えられる。



第108図 第15号住居跡出土遺物実測図

第15号住居跡出土遺物観察表（第108図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	平法の特徴	出土位置	備考
									体部外面へつ附り		
142	土師器	小形甕	12.0	(6.8)	-	石英・長石	に濃い褐色	普通	輪積み痕	覆土上層	10%

第16号住居跡（第109図）

位置 調査区I区のB319区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第15号住居，第7号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 西北部と西南部が調査区域外であるため、確認できた範囲は南北軸3.40m，東西軸3.88mである。平面形は方形又は長方形と推定され、主軸方向はN-19°-Wである。壁高は30cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

ピット 2か所。P1は深さ50cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P2は深さ12cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 南東コーナー部に位置している。長径70cm，短径64cmの円形で、深さは46cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量 | 2 暗褐色 | ロームブロック中量 |
|-------|-----------|-------|-----------|

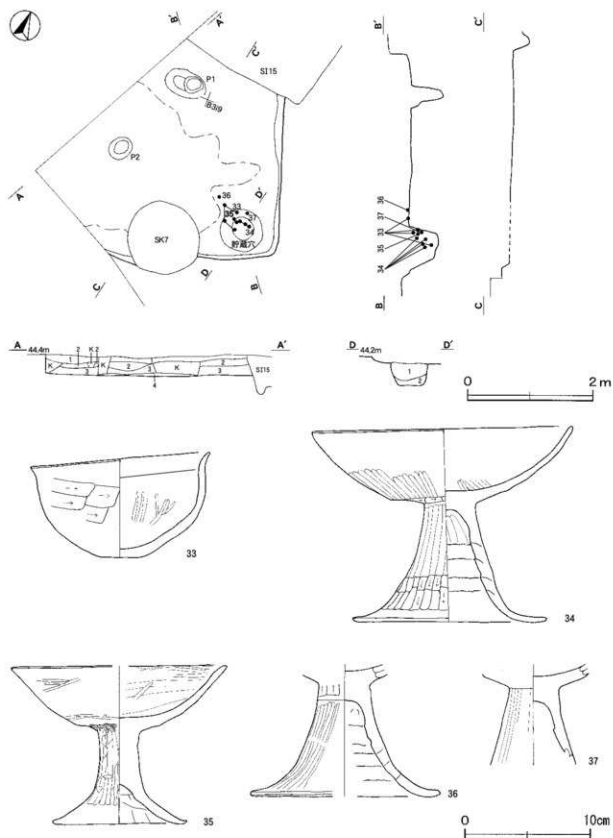
覆土 4層に分層される。ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|-------|------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック微量 | 3 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片281点（坏類97，碗2，高坏19，甕類163）が貯蔵穴付近を中心に出土している。34・35・37は貯蔵穴の覆土中層，36は南東部の床面からそれぞれ出土している。33は南東部の床面から貯蔵穴内の覆土下層にかけての破片が接合したものである。

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。



第109図 第16号住居跡・出土遺物実測図

第16号住居跡出土遺物観察表（第109図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
33	土師器	甗	14.2	8.5	3.6	石英・長石・雲母・赤色粒子	明赤褐色	普通	口縁部横ナデ 体部外面へフ磨き	内面 床面～貯蔵穴覆土中層	75% PL.24
34	土師器	高环	20.6	15.6	15.5	石英・長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	环・脚部外面へフ磨き 脚部輪槽み状	貯蔵穴覆土中層	90% PL.27
35	土師器	高环	16.9	12.5	10.1	雲母・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	环部内・外面、脚部外面へフ磨き 頸部ハケ目直 脚部内面ナデ	貯蔵穴覆土中層	30%
36	土師器	高环	-	(10.5)	(14.4)	長石・雲母	にぶい赤褐色	普通	脚部外面へフ磨き 輪槽み状	頸部外面 床面	40%
37	土師器	高环	-	(8.0)	-	石英・長石・雲母	にぶい赤褐色	普通	脚部外面へフ磨き 内面ナデ	貯蔵穴覆土中層	30%

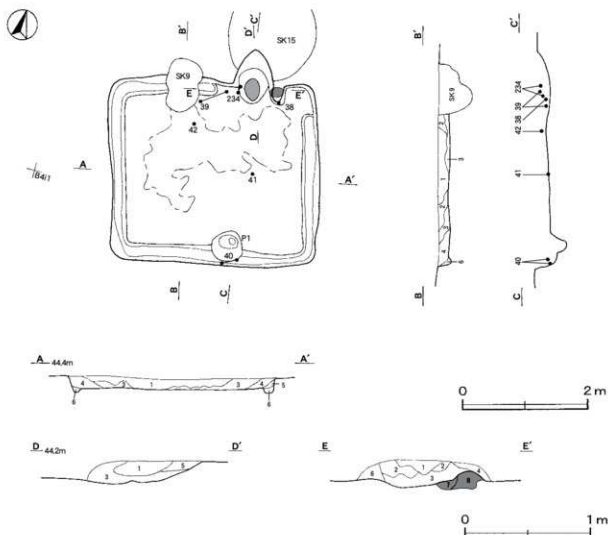
第17号住居跡（第110・111図）

位置 調査区I区のB4hl区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第15号土坑を掘り込み、第9号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.32m、短軸2.90mである。平面形は長方形で、主軸方向はN-6°-Wである。壁高は25cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝がほぼ全周し、断面形はU字状である。



第110図 第17号住居跡実測図

竈 北壁の東寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで83cm、袖部幅は84cmである。袖部は床面と同じ高さの地山に砂質粘土を含んだローム土によって構築されている。火床部は床面を皿状に12cm掘りくぼめ、火床面は火熱により赤変している。煙道部は壁外へ58cm掘り込まれ、緩やかに外傾して立ち上がっている。竈土層断面図の第1層が天井部の崩落土に該当する。

竈土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------------------|-------|---------------------------------|
| 1 灰褐色 | 焼土ブロック多量、砂質粘土ブロック少量 | 5 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量 |
| 2 黒褐色 | 焼土ブロック中量、炭化物・砂質粘土ブロック少量、ロームブロック微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量、炭化物微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量、炭化物微量 | 7 黒褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック少量、炭化物微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・砂質粘土ブロック少量 | 8 灰褐色 | ロームブロック中量、砂質粘土少量 |

ピット 深さ24cmで、規模と位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

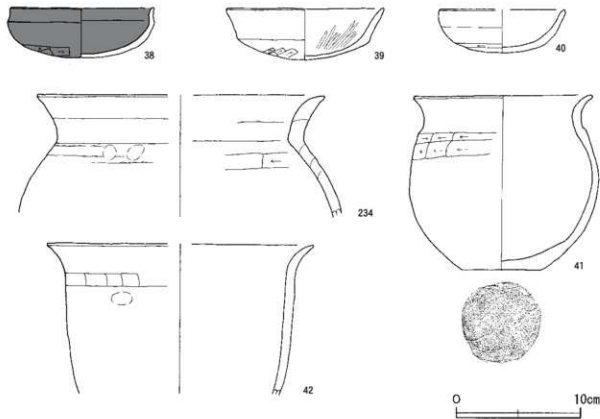
覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物微量 | 4 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック微量 | 6 黒褐色 | ロームブロック微量 |

遺物出土状況 土師器片232点（坏類34、高坏1、甕類195、甕2）、須恵器片8点（坏類）が竈前面を中心に出土している。41は中央部床面、38は竈右袖部、39は北部、40は南部壁際、42は中央部の覆土下層からそれぞれ出土している。234は竈覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第111図 第17号住居跡出土遺物実測図

第17号住居跡出土遺物観察表（第111図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
38	土師器	坏	11.4	4.0	-	長石・雲母	橙	普通	口縁部横ナゲ 体部外面へラ削り	覆土下層	90% PL23
39	土師器	坏	12.7	4.1	-	雲母	にぶい黄橙	普通	体部外面へラ削り 内面へラ磨き	覆土下層	50%
40	須恵器	坏	[10.0]	3.5	-	石英・長石	灰	普通	体部外面へラ削り	覆土下層	85% PL22
41	土師器	甕	14.2	14.1	6.4	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	体部外面へラ削り	床面	95% PL27
234	土師器	甕	[23.0]	(9.8)	-	石英・長石・雲母	橙	普通	体部外面指刷痕 内面へラ削り 輪積み痕	覆土上層	5%
42	土師器	瓶	[21.4]	(12.0)	-	石英・長石・雲母・磁石	明黄褐	普通	体部外面へラナゲ 指刷痕	覆土下層	10%

第21号住居跡（第112図）

位置 調査区I区のA3j5区で、標高43mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第20号住居に掘り込まれている。

規模と形状 西北部が調査区域外であり、北部が第20号住居に掘り込まれているため、確認できた範囲は南北軸2.35m、東西軸4.30mである。平面形は方形又は長方形と推定され、主軸方向はN-12°-Wである。壁高は18~22cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

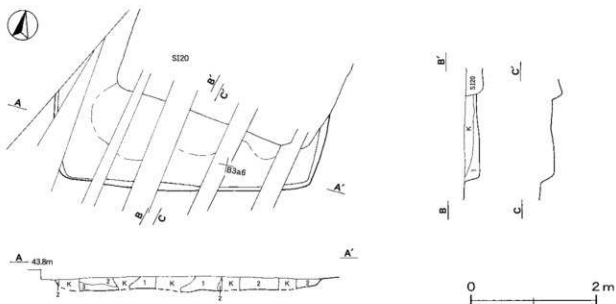
覆土 3層に分層される。ルームブロックを含む不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量 3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
2 黒褐色 ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片107点（坏類9、高坏2、甕類89、瓶7）、須恵器片1点（甕）が散在して出土している。また、流れ込んだ弥生土器片2点（甕）も出土している。土器は細片のため図示できない。

所見 時期は、重複関係や出土土器から7世紀以前と考えられる。



第112図 第21号住居跡実測図

第22号住居跡 (第113・114図)

位置 調査区I区のA3j9区で、標高43mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号溝に掘り込まれている。

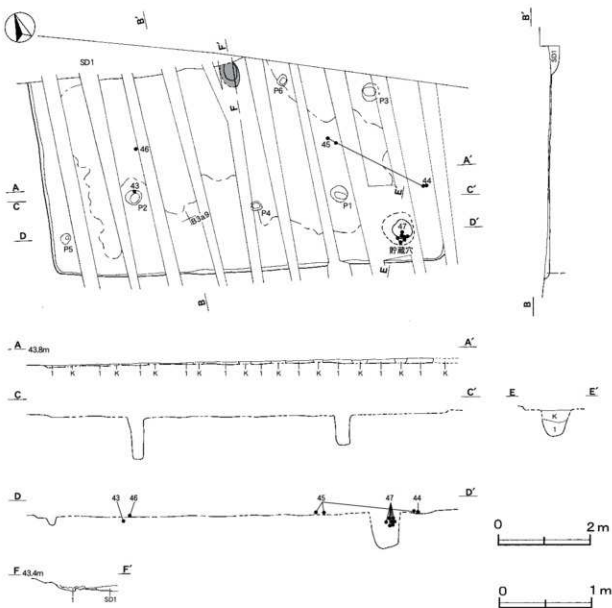
規模と形状 北東部が調査区域外であるため、確認できた範囲は南北軸4.57m、東西軸8.30mである。平面形は方形又は長方形と推定され、主軸方向はN-16°-Eである。壁高は6cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 ほぼ中央部に位置している。規模は長径54cm、短径41cmの楕円形と推定され、床面を皿状に12cm掘りくぼめた地床炉である。火床面は火熱を受けて赤変硬化している。

伊土層解説

1 にいふ赤褐色 焼土ブロック少量、炭化粒子微量



第113図 第22号住居跡実測図

ピット 6か所。P1・P2は深さ64cm・90cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P3～P6は深さ15～26cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 南東コーナー部に位置している。長径68cm、短径62cmの円形で、深さは58cmと推定される。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量

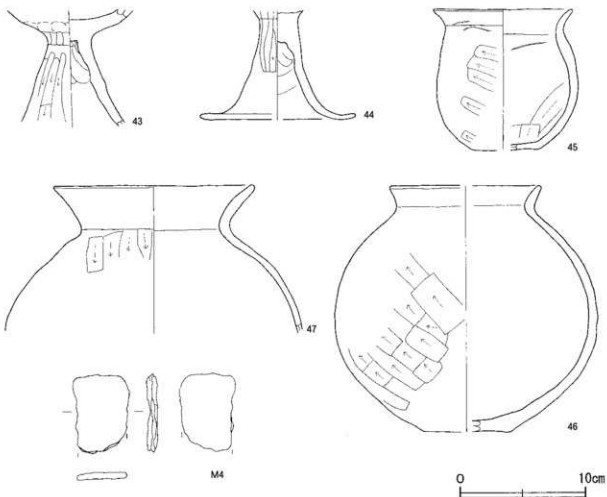
覆土 単一層で、層厚が薄いため堆積状況は不明である。

土層解説

1 灰褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片422点（坏類72、碗12、埴30、高坏51、甕類256、瓶1）、須恵器片2点（甕類）、鉄製品1点（鉄鋌カ）が貯蔵穴付近を中心に出土している。43はP2、47は貯蔵穴の覆土上層からそれぞれ出土している。44・45は南東部、46は南西部の床面、M4は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀前葉と考えられる。



第114図 第22号住居跡出土遺物実測図

第22号住居跡出土遺物観察表 (第114図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
43	土師器	高坏	-	(9.3)	-	石英・長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	頸部外面へラナゲ 指頭直 脚部外面へラ削り 内面へラナゲ	P2層土上層	35%
44	土師器	高坏	-	(8.6)	(12.4)	長石・雲母・細織	橙	普通	脚部外面へラ削り 内面へラナゲ	床面	40%
45	土師器	小形甕	11.0	11.2	-	石英・長石・赤色粒子	橙	普通	体部外面へラ削り 内面へラナゲ	床面	60% PL27
46	土師器	甕	11.6	19.6	[6.8]	長石・細織	にぶい橙	普通	体部外面へラ削り	床面	50%
47	土師器	甕	15.8	(11.5)	-	長石・雲母	橙	普通	体部外面へラ削り	貯蔵穴 覆土上層	30%

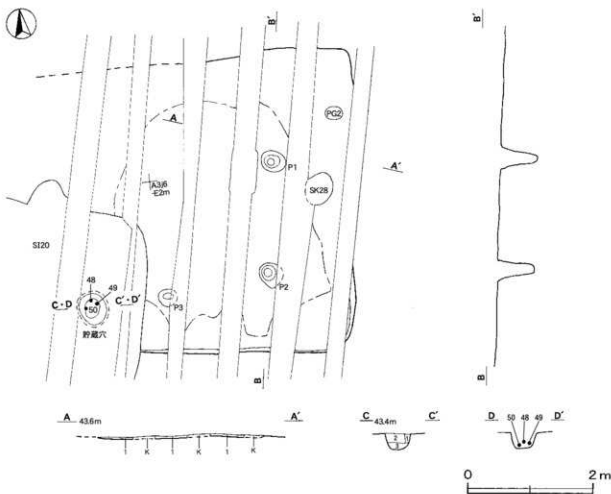
番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M4	鉄鉋	(6.2)	4.5	0.8	(44.6)	鉄	一部欠損 断面長方形	覆土中	PL36

第23号住居跡 (第115・116図)

位置 調査区I区のA3j6区で、標高43mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第20号住居、第28号土坑、第2号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 北西部が削平されており、確認できた範囲は南北軸4.84m、東西軸4.40mである。平面形は方形又は長方形と推定され、主軸方向はN-7°-Wである。壁高は2cmで、外傾して立ち上がっている。



第115図 第23号住居跡実測図

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

ピット 3か所。P1・P2は深さ60cm・58cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P3は深さ30cmで、規模と位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 南西コーナー部に位置している。長径52cm、短径44cmの楕円形で、深さは28cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量 3 暗褐色 ロームブロック少量
2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量

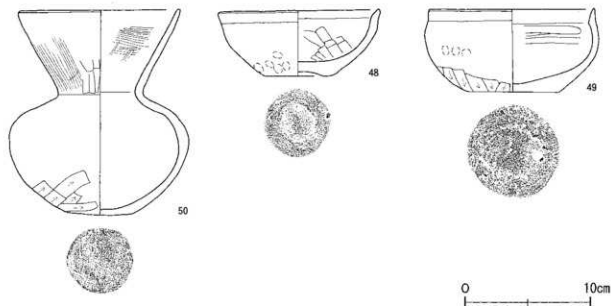
覆土 単一層で、層厚が薄いため堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片32点（環類9、椀2、埴1、高坏1、甕類19）が覆土中層から下層にかけて散在して出土している。48～50は、貯蔵穴の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。



第116図 第23号住居跡出土遺物実測図

第23号住居跡出土遺物観察表（第116図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
48	土師器	環	12.7	5.3	5.2	石英・長石・細織	明赤褐色	普通	体部外面微傾斜 内面ヘラナデ	貯蔵穴 覆土下層	100% PL23
49	土師器	環	13.1	6.7	7.2	石英・長石・雲母	橙	普通	体部外面ヘラ削り 指刷痕 内面ヘラナデ	貯蔵穴 覆土下層	100% PL24
50	土師器	埴	12.6	16.4	5.2	長石・雲母	明赤褐色	普通	口辺部内・外面ヘラ磨き 体部外面ヘラ削り	貯蔵穴 覆土下層	100% PL26

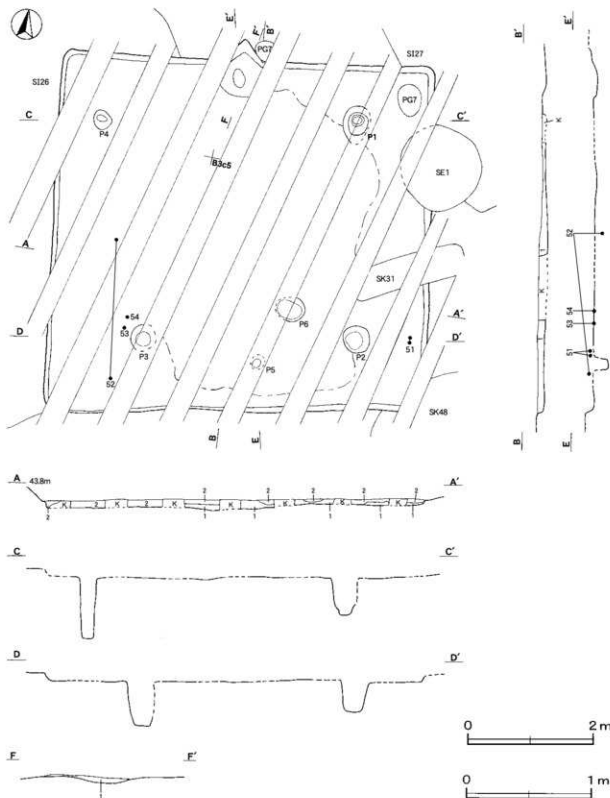
第25号住居跡（第117・118図）

位置 調査区I区のB3c5区で、標高43mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第26・27号住居跡、第48号土坑を掘り込み、第1号井戸、第31号土坑、第7号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.04m、短軸5.68mの方形で、主軸方向はN-15°-Wである。壁高は15cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。



第117図 第25号住居跡実測図

竈 北壁の中央部に付設されている。確認された規模は、焚口部から煙道部までが90cmのみである。

竈土層解説

1 暗 赤 褐 色 焼土ブロック少量、炭化粒子微量

ピット 6か所。P1～P4は深さ48～100cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ24cmで、規模と位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ15cmで、性格は不明である。

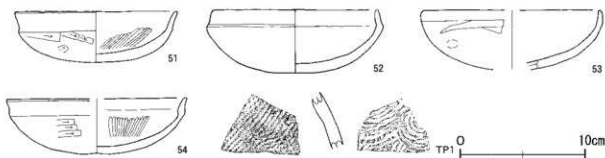
覆土 2層に分層される。ブロックを含む不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

1 暗 褐 色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量、炭化物 2 黒 褐 色 焼土ブロック中量、ロームブロック少量
微量

遺物出土状況 土師器片515点（坏類83、高坏7、甕類425）、須恵器片6点（坏類3、蓋1、甕類2）が全域から散在して出土している。51は南東部覆土下層、52～54は南西部の床面からそれぞれ出土している。TP1は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第118図 第25号住居跡出土遺物実測図

第25号住居跡出土遺物観察表（第118図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
51	土師器	坏	12.8	4.0	-	右赤・長石・赤色粒子	橙	普通	体部外面へラ削り 内面へラ磨き	覆土下層	80% P4.22
52	土師器	坏	13.0	5.0	-	赤色粒子	にぶい橙	普通	内・外面ナデ	床面	60%
53	土師器	坏	[14.0]	4.7	-	雲母	にぶい橙	普通	体部外面へラナデ 摺頭板	床面	50%
54	土師器	坏	[14.2]	4.4	-	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面へラ削り 内面へラ磨き	床面	30%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP1	須恵器	甕	長石	灰白	普通	体部外面縦位の平行削き 内面同心円当て具板	覆土中	

第26号住居跡（第119～121図）

位置 調査区I区のB3c4区で、標高43mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第25・33号住居に掘り込まれている。

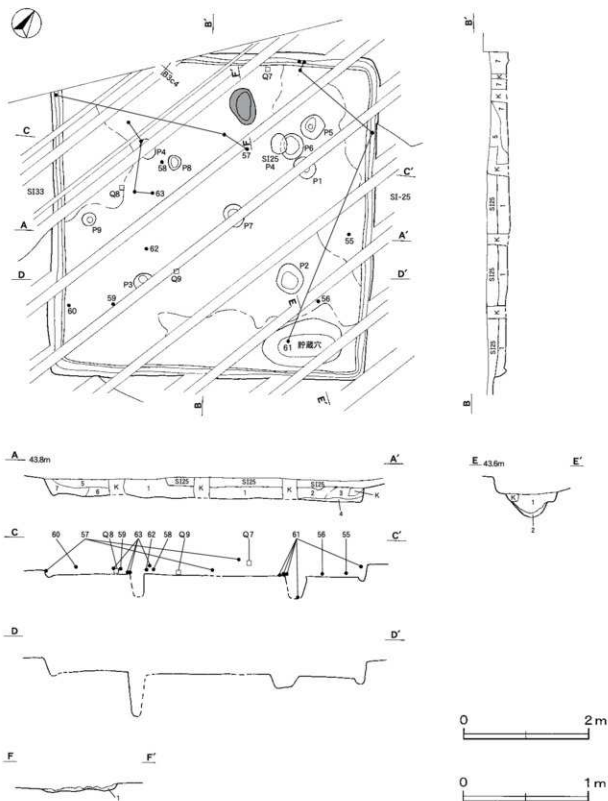
規模と形状 北西部の一部は調査区域外である。長軸5.20m、短軸5.12mの方形で、主軸方向はN-32°-Wである。壁高は22～24cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が全周し、断面形はU字状である。

炉 中央部からやや北壁寄りに位置している。規模は長径58cm、短径38cmの長楕円形で、床面を皿状に8cm掘りくぼめた地床炉である。火床面が火熱を受けて赤変硬化している。

伊土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック少量、炭化粒子微量



第119図 第26号住居跡実測図

ピット 9か所。P1～P4は深さ20～70cmで、規模と配置からそれぞれ主柱穴と考えられる。P5～P9は深さ4～21cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 南東コーナー部に位置している。長径128cm、短径76cmの楕円形で、深さは36cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

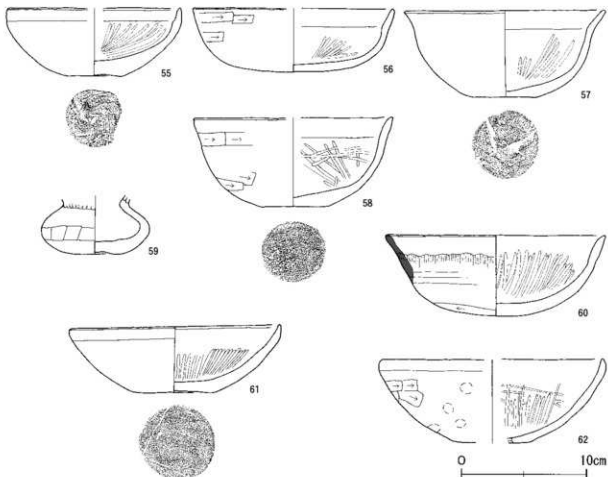
覆土 7層に分層される。ブロックを含む不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

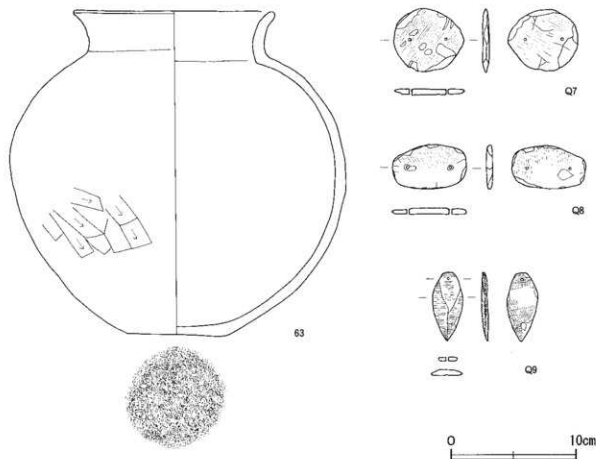
- 1 黒褐色 ロームブロック少量 5 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
 2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 6 暗褐色 ロームブロック少量
 3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量 7 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量
 4 褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片747点（坏類192、碗5、埴1、高坏5、甕類546）、石製品3点（双孔円板2、剣形模造品1）が全城から散在して出土している。55は東部、56は南東部、58・62・63は中央部、59・60は南西部の覆土下層からそれぞれ出土している。61は北壁際の床面、東壁際の覆土中層と貯蔵穴の底面にかけての破片が接合したもので、57は西壁際の覆土下層と炉付近の覆土上層・下層の破片が接合したものである。Q7は北壁際の覆土上層、Q8は西部、Q9は南部の床面からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。



第120図 第26号住居跡出土遺物実測図（1）



第121図 第26号住居跡出土遺物実測図(2)

第26号住居跡出土遺物観察表(第120・121図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
55	土師器	坏	[13.6]	5.4	4.6	長石・雲母	明赤褐	普通	体部内面へラ磨き	覆土下層	80% PL.23
56	土師器	坏	[16.0]	5.1	-	石英・長石・雲母	明褐	普通	体部外面へラ削り 内面へラ磨き	覆土下層	50%
57	土師器	椀	15.8	7.0	5.2	雲母	にぶい赤褐	普通	体部内面へラ磨き	覆土上層・下層	80% PL.24
58	土師器	椀	[15.8]	7.1	5.0	長石・雲母	明赤褐	普通	体部外面へラ削り 内面へラ磨き	覆土下層	60%
59	土師器	埴	-	(4.6)	4.0	長石・雲母	にぶい黄褐	普通	体部外面へラナデ 頸部へラ磨き	覆土下層	60% PL.25
60	土師器	鉢	17.4	6.4	-	長石・雲母	明赤褐	普通	頸部へラ目調整後ナデ 体部外面へラ削り 内面へラ磨き	覆土下層	50% PL.25 埋付着
61	土師器	鉢	16.5	5.4	6.0	石英・長石・雲母 赤色粒子	明赤褐	普通	体部内面へラ磨き	覆土上層・床面 貯蔵穴底面	65% PL.23
62	土師器	鉢	[17.6]	6.6	-	雲母	明赤褐	普通	体部外面へラ削り 指置痕 内面へラ磨き	覆土下層	40%
63	土師器	甕	15.6	26.0	8.0	石英・長石	浅黄褐	普通	体部外面へラ削り	覆土下層	90% PL.28

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q7	双孔円板	5.0	5.6	0.5	23.5	滑石	両面研磨 孔径0.15cm	覆土上層	PL.35
Q8	双孔円板	3.5	6.0	0.5	17.7	滑石	両面研磨 孔径0.15cm	床面	PL.35
Q9	削形模造品	5.4	2.5	0.5	8.6	滑石	全面研磨調整 片面両刃状 上部穿孔 孔径0.16cm	床面	PL.34

第27号住居跡(第122・123図)

位置 調査区I区のB3b6区で、標高43mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第25号住居、第6号土坑、第7号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.68m、短軸4.48mの隅丸方形で、主軸方向はN-40°-Eである。壁高は2～8cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

ピット 5か所。P1～P3は深さ38～74cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P4は深さ24cmで、規模と位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P5は深さ45cmで、性格は不明である。

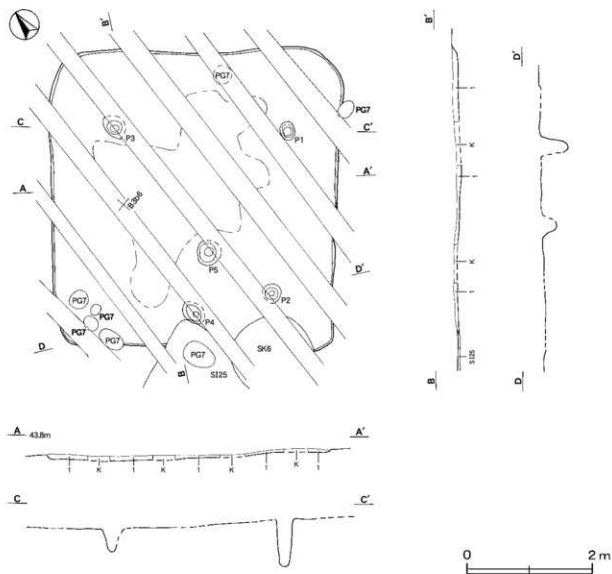
覆土 単一層で、層厚が薄いため堆積状況は不明である。

土層解説

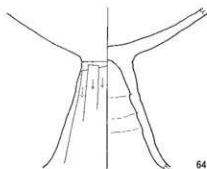
1 褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片75点（坏類16、高坏7、甕類52）、須恵器片1点（坏）が散在して出土している。また、流れ込んだ弥生土器片2点（甕）も出土している。64は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀後葉と考えられる。



第122図 第27号住居跡実測図



第123図 第27号住居跡出土遺物実測図

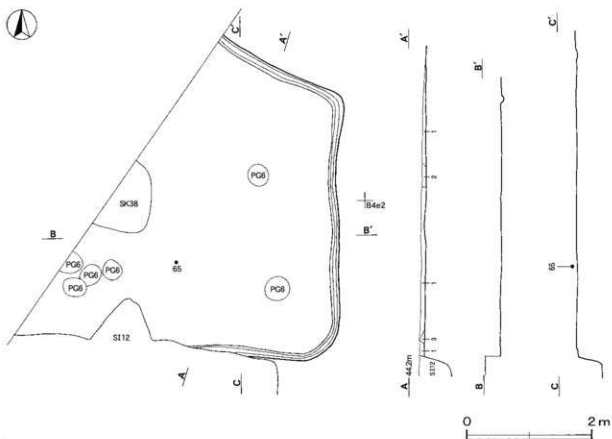
第27号住居跡出土遺物観察表 (第123図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
64	土師器	高坏	-	(12.9)	-	石英・長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	脚部外面へラ削り 輪積み痕	覆土中	40%

第28号住居跡 (第124・125図)

位置 調査区I区のB4e1区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

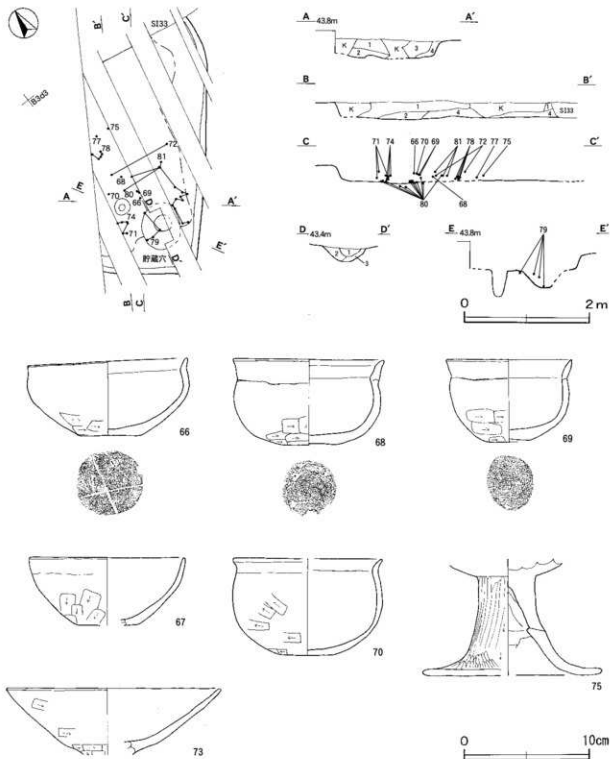
重複関係 第12号住居、第38号土坑、第6号ピット群に掘り込まれている。



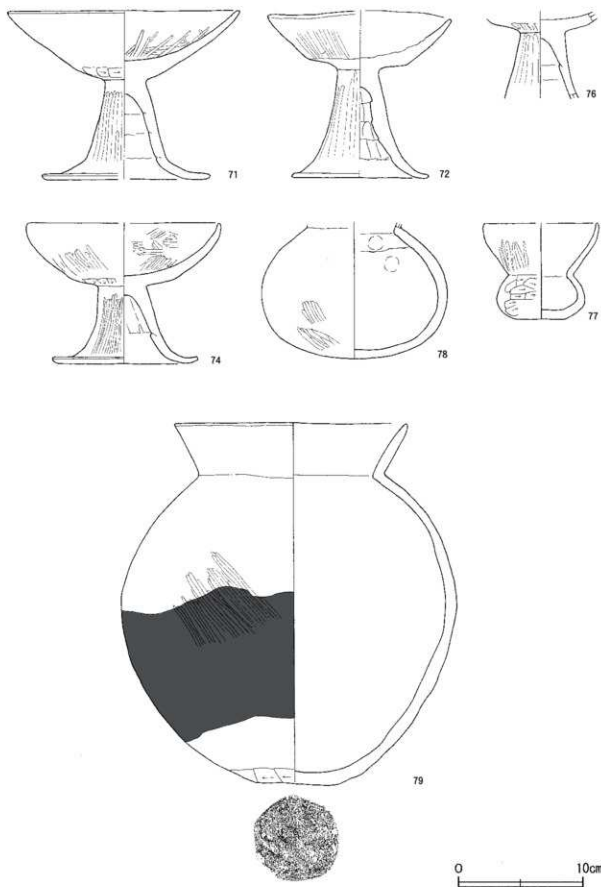
第124図 第28号住居跡実測図

いる。66・68～72・74・80・81は南東部の覆土中層から床面にかけて、75・77・78は中央部の覆土下層からそれぞれ出土している。79は貯蔵穴覆土上層から底面にかけて出土した破片が接合したものである。67・73・76は覆土中から出土している。

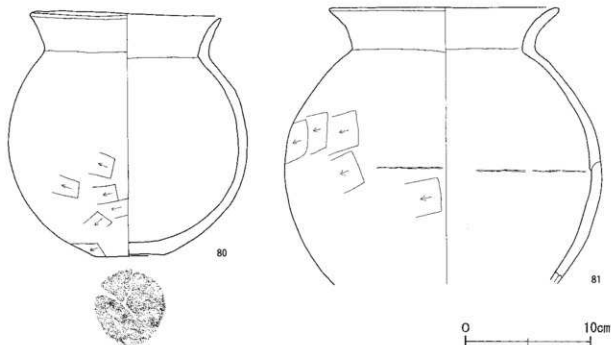
所見 時期は、出土土器から5世紀前葉と考えられる。



第126図 第31号住居跡・出土遺物実測図



第127图 第31号住居跡出土遺物実測図(1)



第128図 第31号住居跡出土遺物実測図(2)

第31号住居跡出土遺物観察表(第126~128図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
66	土師器	坏	12.7	6.2	5.1	石英・長石・雲母	にぶい赤褐色	普通	体部外面へラ削り 底部へラ記号	覆土中層	100% PL23
67	土師器	椀	12.2	7.4	[5.2]	石英・長石・雲母	にぶい黄褐色	普通	体部外面へラ削り	覆土中	50%
68	土師器	椀	11.9	7.0	4.2	石英・長石・赤色 粒子	明赤褐色	普通	体部外面へラ削り 底部へラ切り後ナデ 輪積みみ肌	覆土下層	93% PL25
69	土師器	椀	9.8	6.7	3.5	石英・長石・赤色 粒子	赤	普通	体部外面へラ削り 底部へラ切り後ナデ 輪積みみ肌	覆土中層	90% PL25
70	土師器	椀	11.8	7.7	[4.4]	石英・長石・赤色 粒子	橙	普通	体部外面へラ削り	覆土中層	23%
71	土師器	高坏	18.4	13.5	[13.0]	石英・長石	明赤褐色	普通	坏部外面へラ削り 内面へラ磨き 脚部外 面へラ磨き 輪積みみ肌	覆土中層 ~下層	90% PL27
72	土師器	高坏	14.6	13.5	10.8	石英・長石・砂礫	赤	普通	坏・脚部外面へラナデ 内面ナデ	覆土中層	70% PL27
73	土師器	高坏	17.0	(5.3)	-	石英・長石・雲母	にぶい地	普通	坏部外面へラ削り	覆土中	50%
74	土師器	高坏	[15.2]	11.3	10.4	石英・長石・赤色 粒子	にぶい黄褐色	普通	坏部内・外面へラ磨き 下端へラ削り 脚 部外面へラ磨き	覆土下層	60%
75	土師器	高坏	-	(9.3)	[14.2]	長石	にぶい黄褐色	普通	脚部外面磨き 内面輪積みみ肌	覆土下層	40%
76	土師器	高坏	-	(7.0)	-	赤色粒子・砂礫	橙	普通	脚部外面へラ削り 内面ナデ	覆土中	30%
77	土師器	埴	[9.0]	7.7	3.8	石英・長石	明赤褐色	普通	口辺部外面へラ磨き 体部外面へラ削り	覆土下層	60% PL26
78	土師器	埴	-	(10.8)	-	長石・砂礫	赤	普通	体部外面へラ磨き 内面指頭肌	覆土下層	30%
79	土師器	甕	18.5	29.2	6.6	石英・長石・細礫	にぶい赤褐色	普通	口縁部積ナデ 体部外面へラ磨き後ナデ 底部へラナデ	約6次覆土 上層~底面	80% PL28 復付着
80	土師器	甕	14.8	19.4	5.6	石英・長石	明赤褐色	普通	体部外面へラ削り	覆土中層 ~床面	80% PL27
81	土師器	甕	18.1	(22.0)	-	石英・長石・赤色 粒子	橙	普通	体部外面へラ削り 輪積みみ肌	覆土中層	60%

第33号住居跡(第129図)

位置 調査区1区のB3c3区で、標高43mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第26・31号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 北西部が調査区域外であるため、確認できた範囲は南北軸3.46m、東西軸2.90mである。平面形は方形又は長方形と推定され、主軸方向はN-12°-Eである。壁高は28cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

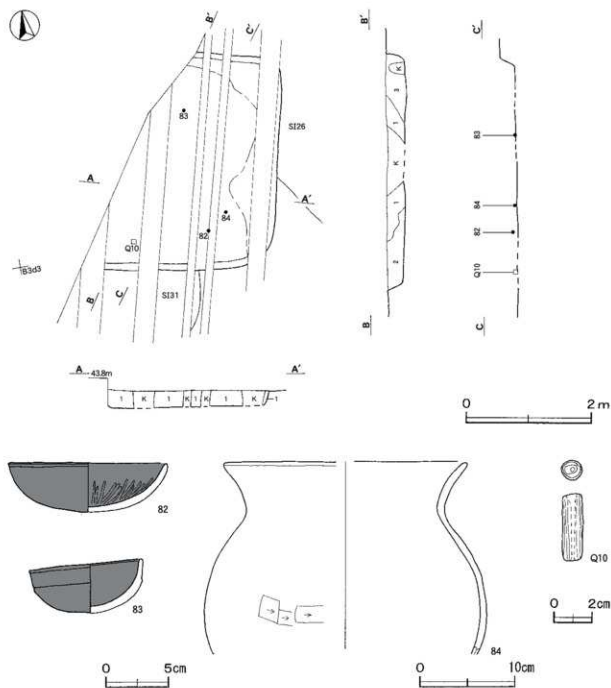
覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化物少量、焼土ブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・炭化物少量
- 3 黒褐色 ロームブロック・炭化物少量

遺物出土状況 土師器片156点（坏類37，高坏7，甕類112），須恵器片2点（坏類），石製品1点（管玉）が南東部を中心に出土している。82・84・Q10は南部，83は北部の床面からそれぞれ出土している。

所見 時期は，出土土器から6世紀中葉と考えられる。



第129図 第33号住居跡・出土遺物実測図

第33号住居跡出土遺物観察表 (第129図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
82	土師器	坏	12.6	3.9	-	長石・黄母	にぶい黄橙	普通	体部外面へラナヅ 内面へラ磨き	床面	100% Pl.22
83	土師器	坏	9.0	4.2	-	石英・長石	にぶい黄橙	普通	体部内・外面ナヅ	床面	90% Pl.22
84	土師器	甕	25.4	20.5	-	石英・長石・赤色 粘土	黒黧	普通	体部外面へラ削り	床面	10%

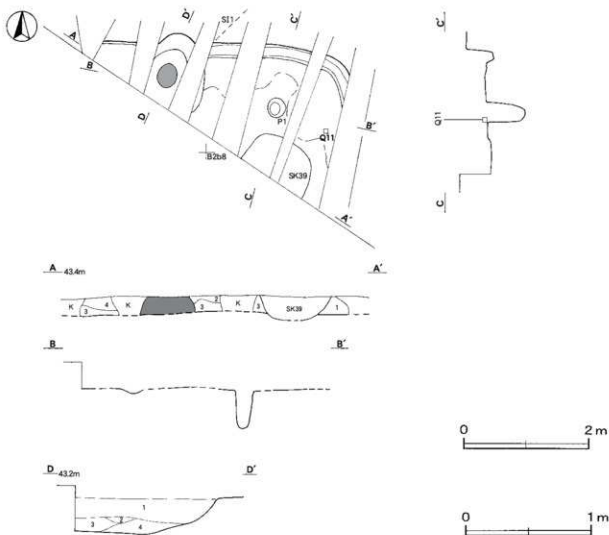
番号	器種	長さ	径	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q10	管玉	3.5	1.1	0.2~0.6	4.6	滑石	外面研磨	床面	Pl.35

第34号住居跡 (第130・131図)

位置 調査区1区のB2a8区で、標高43mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号住居跡を掘り込み、第39号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南西部が調査区域外であるため、確認できた範囲は南北軸2.45m、東西軸4.16mである。平面形は方形又は長方形と推定され、主軸方向はN-0°である。壁高は25~32cmで、外傾して立ち上がっている。



第130図 第34号住居跡実測図

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が北東コーナー部の壁際を周回し、断面形はU字状である。

竈 北壁の中央部に付設されているが、規模は攪乱により不明確である。袖部は粘土痕のみである。火床部は床面をわずかに掘りくぼめ、火床面は火熱を受けて赤変している。煙道部は壁外に16cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。竈土層断面図の第1・4層が天井部の崩落土に該当する。

竈土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|---------|-------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土ブロック | 3 灰黄褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量、炭化物微量 |
| 2 黒褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子少量 | 4 極暗赤褐色 | 砂質粘土ブロック中量、焼土ブロック少量 |

ピット 深さ60cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。

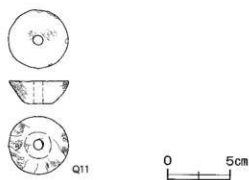
覆土 4層に分層される。ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|-------|--------------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック微量 | 4 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土ブロック・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量 | | |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片100点（環類12、甕類87、甕1）、須恵器片2点（甕類）、石製品1点（紡錘車）が全域から散在して出土している。土器は細片のため図示できない。Q11は東部の床面から出土している。

所見 時期は、重複関係及び出土土器から6世紀以降と考えられる。



第131図 第34号住居跡出土遺物実測図

第34号住居跡出土遺物観察表（第131図）

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q11	紡錘車	4.7	1.8	0.8	47.7	滑石	全面研磨	床面	PL35

第35号住居跡（第132・133図）

位置 調査区I区のA2i7区で、標高43mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 西部が調査区域外であるため、確認できた範囲は南北軸5.26m、東西軸4.00mである。平面形は方形又は長方形と推定され、主軸方向はN-3°-Eである。壁高は10cm~13cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が全周し、断面形はU字状である。

ピット 4か所。P1・P2は深さ32cm・60cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P3は深さ22cmで、

規模と位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 4は深さ14cmで、性格は不明である。

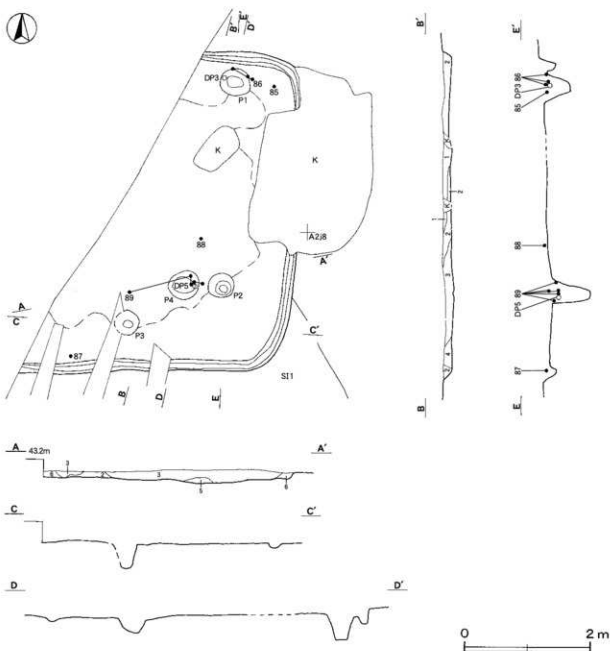
覆土 6層に分層される。ブロックを含む不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

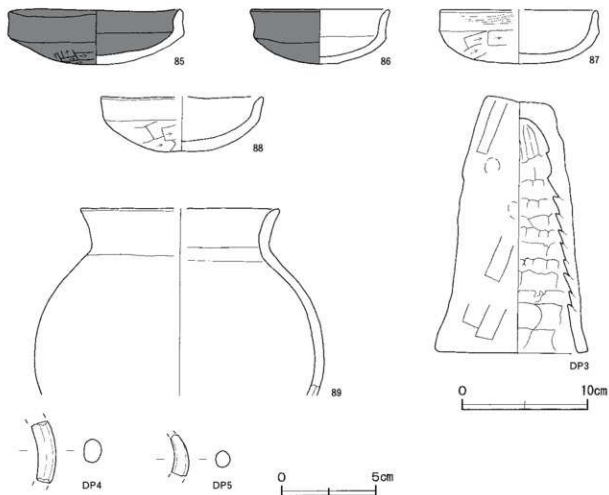
- | | | | |
|-------|------------------------|-------|------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量 | 4 黒褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 | 5 褐灰色 | ロームブロック少量、焼土ブロック微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量 | 6 暗褐色 | ロームブロック少量 |

遺物出土状況 土師器片200点（坏類47、高坏1、鉢2、甕類150）、土製品3点（支脚1、不明2）が全域から散在して出土している。85・86は北東コーナー一部、87は南西部、88は中央部の床面からそれぞれ出土している。89は南部の床面とP 4の覆土上層の破片が接合したものである。DP 3はP 1、DP 5はP 4の覆土上層から、DP 4は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、重複関係及び出土土器から6世紀中葉と考えられる。



第132図 第35号住居跡実測図



第133図 第35号住居跡出土遺物実測図

第35号住居跡出土遺物観察表 (第133図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
85	土師器	坏	13.7	4.5	-	長石・雲母	にぶい褐色	普通	体部外面へラ削り	床面	100% PL22
86	土師器	坏	11.0	4.4	-	石英・長石	にぶい黄褐色	普通	体部内・外面ナデ	床面	80% PL23
87	土師器	坏	[12.4]	4.3	-	長石・雲母	にぶい褐色	普通	口縁部横ナデ 体部外面へラ削り	床面	50%
88	土師器	坏	[12.8]	4.3	-	石英・長石	灰黄褐色	普通	体部外面へラ削り	床面	30%
89	土師器	甕	[15.8]	[14.8]	-	石英・長石・砂礫	にぶい黄褐色	普通	口縁部横ナデ 体部内・外面ナデ	床面～ P4覆土上層	15%

番号	器種	長さ	幅(径)	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP3	支脚	20.5	12.1	5.0	(890.0)	土製(石英・長石)	内・外面へラナデ 外面指頭痕	P1覆土上層	PL34
DP4	不明	(3.3)	(1.3)	0.9	(5.5)	土製(長石)	両端欠損 断面楕円形	覆土中	
DP5	不明	(2.2)	(0.9)	0.9	(1.9)	土製(長石)	両端欠損 断面円形	P4覆土上層	

第36号住居跡 (第134図)

位置 調査区I区のB3f5区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

確認状況 重複関係によって壁面は確認できなかったが、床面の硬化面および出土遺物から住居跡と判断した。

重複関係 第37～40号住居に掘り込まれている。

規模と形状 南部及び東部が調査区域外であるため、確認できた範囲は南北軸6.17m、東西軸4.02mである。

重複のため、平面形、主軸方向、壁高は不明である。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

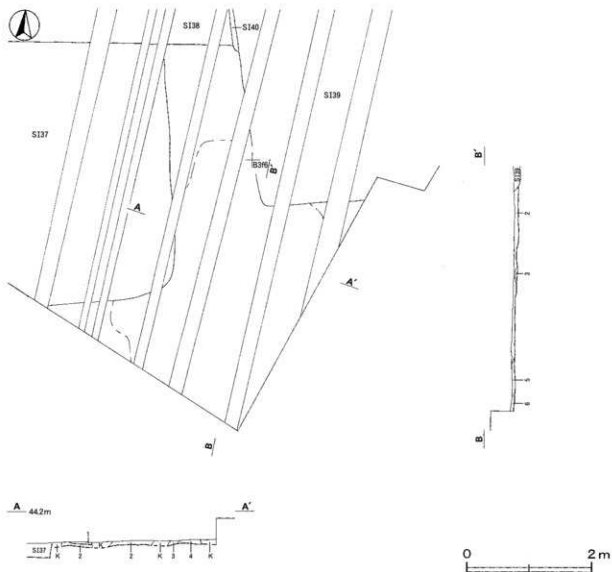
覆土 6層に分層される。ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|------|-------------------|-------|-----------------|
| 1 褐色 | ロームブロック少量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 褐色 | ロームブロック少量、鹿沼パミス微量 | 5 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 3 褐色 | ロームブロック中量 | 6 黒褐色 | ロームブロック中量、炭化物少量 |

遺物出土状況 土師器片43点（坏類6、埴5、甕類32）が全域から散在して出土している。土器は細片のため図示できない。

所見 時期は、重複関係及び出土土器から5世紀以前と考えられる。



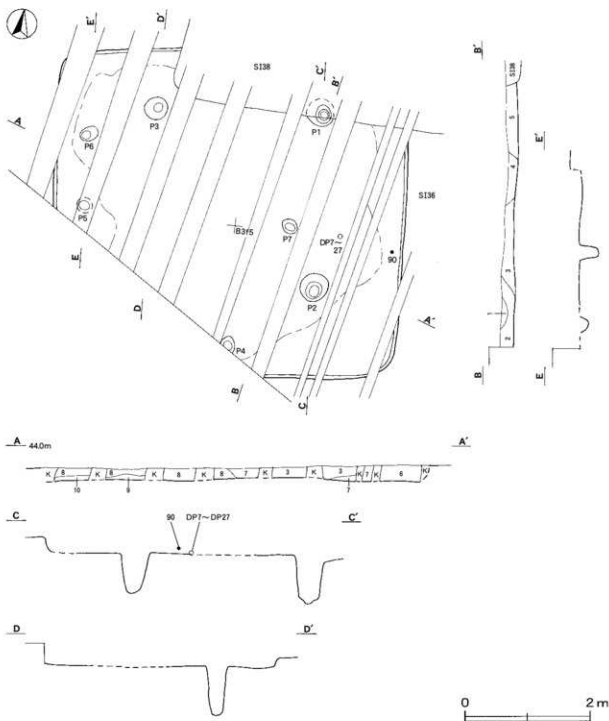
第134図 第36号住居跡実測図

第37号住居跡 (第135・136図)

位置 調査区I区のB3e4区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第36号住居跡を掘り込み、第38号住居に掘り込まれている。

規模と形状 南西部が調査区域外であるため、確認できた範囲は南北軸5.20m、東西軸5.75mである。平面形は方形又は長方形と推定され、主軸方向は $N-7^{\circ}-W$ である。壁高は15~23cmで、外傾して立ち上がっている。



第135図 第37号住居跡出土物実測図

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

ピット 7か所。P1～P3は深さ60～80cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P4は深さ16cmで、規模と位置から出入口施設に伴うピットと考えられる。P5～P7は深さ12～30cmで、性格は不明である。

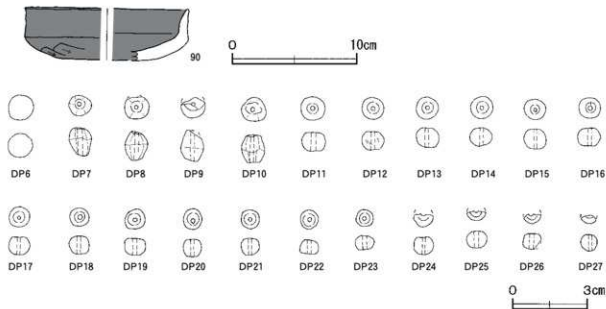
覆土 10層に分層される。ブロックを含む不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・炭化物少量、焼土ブロック微量	6 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子少量
2 黒褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量	7 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量
3 黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	8 黒褐色	ロームブロック・炭化物少量
4 極暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量	9 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
5 極暗褐色	ロームブロック少量、炭化物微量	10 暗褐色	ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片609点（坏類160，埴4，高坏48，甕類397），須恵器片4点（坏類2，甕類2），土製品22点（土玉1，小玉21）が東部を中心に出土している。また、流れ込んだ弥生土器片7点（甕）も出土している。90は東壁際の覆土下層から出土している。DP7～DP27は東壁部の床面からまとまって出土している。DP6は覆土中から出土している。

所見 時期は、重複関係及び出土土器から6世紀前葉と考えられる。



第136図 第37号住居跡出土遺物実測図

第37号住居跡出土遺物観察表（第136図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
90	土師器	坏	12.6	4.1	-	長石・雲母	オリーブ褐	普通	体部外面手持ちへう削り	覆土下層	136

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP6	土玉	1.03	0.90	-	1.00	土製（長石）	穿孔なし	覆土中	
DP7	小玉	0.90	1.10	0.15	0.84	土製（長石）	中央部一方向からの穿孔	床面	PL34
DP8	小玉	0.95	1.15	0.10	(0.86)	土製（長石）	中央部一方向からの穿孔 一部欠損	床面	PL34
DP9	小玉	0.96	1.22	0.10	(0.72)	土製（長石・雲母）	中央部一方向からの穿孔 一部欠損	床面	PL34
DP30	小玉	0.95	1.14	0.15	0.98	土製（石英・長石）	中央部一方向からの穿孔	床面	PL34

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP11	小玉	0.95	0.71	0.15	0.64	土製(長石・雲母)	中央部一方向からの穿孔	床面	PL34
DP12	小玉	0.89	0.74	0.10	0.60	土製(長石・雲母)	中央部一方向からの穿孔	床面	PL34
DP13	小玉	0.86	0.75	0.15	0.56	土製(長石)	中央部一方向からの穿孔	床面	PL34
DP14	小玉	0.89	0.70	0.15	0.56	土製(長石・雲母)	中央部一方向からの穿孔	床面	PL34
DP15	小玉	0.85	0.80	0.12	(0.58)	土製(長石・雲母)	中央部一方向からの穿孔 一部欠損	床面	PL34
DP16	小玉	0.85	0.70	0.15	0.50	土製(長石・雲母)	中央部一方向からの穿孔	床面	PL34
DP17	小玉	0.80	0.67	0.10	0.44	土製(石英・長石・雲母)	中央部一方向からの穿孔	床面	PL34
DP18	小玉	0.75	0.68	0.15	(0.36)	土製(長石)	中央部一方向からの穿孔 一部欠損	床面	PL34
DP19	小玉	0.78	0.61	0.15	(0.34)	土製(長石)	中央部一方向からの穿孔 一部欠損	床面	PL34
DP20	小玉	0.72	0.63	0.18	0.32	土製(長石・雲母)	中央部一方向からの穿孔	床面	PL34
DP21	小玉	0.75	0.58	0.16	0.30	土製(長石・雲母)	中央部一方向からの穿孔	床面	PL34
DP22	小玉	0.73	0.51	0.17	(0.28)	土製(長石・雲母)	中央部一方向からの穿孔 一部欠損	床面	PL34
DP23	小玉	0.66	0.50	0.16	0.22	土製(長石・雲母)	中央部一方向からの穿孔	床面	PL34
DP24	小玉	0.75	0.71	0.11	(0.21)	土製(長石)	中央部一方向からの穿孔 一部欠損	床面	PL34
DP25	小玉	0.85	(0.65)	(0.20)	(0.20)	土製(石英・長石)	中央部一方向からの穿孔 一部欠損	床面	PL34
DP26	小玉	(0.70)	(0.65)	(0.20)	(0.13)	土製(長石)	中央部一方向からの穿孔 一部欠損	床面	PL34
DP27	小玉	(0.60)	(0.65)	(0.15)	(0.14)	土製(石英・長石)	中央部一方向からの穿孔 一部欠損	床面	PL34

第38号住居跡(第137・138図)

位置 調査区I区のB3d5区で、標高43mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第36・37号住居跡を掘り込み、第39・40号住居に掘り込まれている。

規模と形状 重複のため、確認できた範囲は南北軸4.02m、東西軸4.88mである。平面形は方形又は長方形と推定され、主軸方向はN-5°-Eである。壁高は20~25cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、竈前面から南壁際まで踏み固められている。

竈 北壁の中央部に付設されている。攪乱により左袖部の一部が崩壊しており、規模は焚口部から煙道部まで90cm、袖部幅は121cmと推定される。袖部は床面と同じ高さの地山に、砂質粘土を含んだローム土で構築されている。火床部は床面をわずかに掘りくぼめ、火床面は火熱を受けて赤変している。煙道部は壁外に5cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。竈土層断面図の第1・4・6層が天井部の崩落土に該当する。

竈土層解説

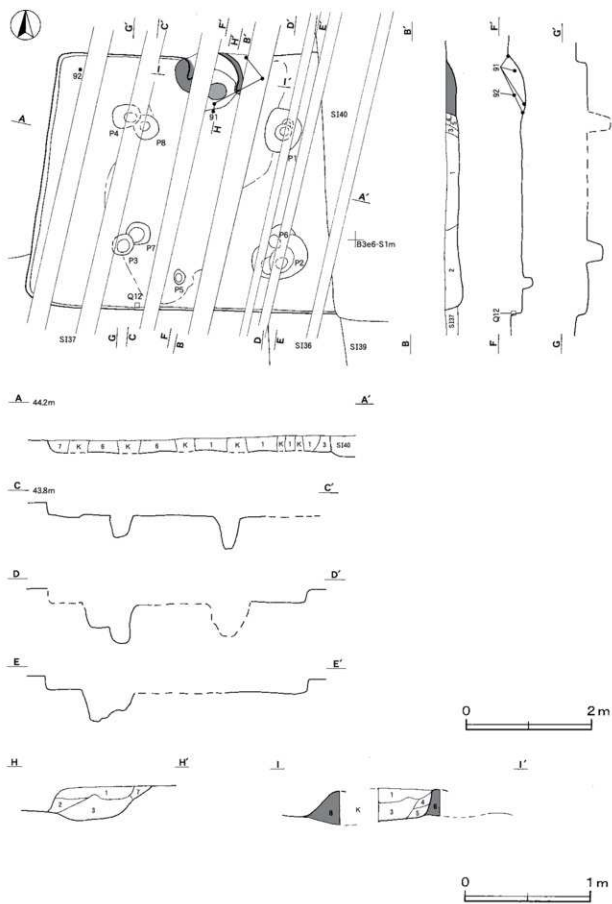
- | | |
|---------------------------------------|--|
| 1 灰黄褐色 砂質粘土ブロック中量、焼土ブロック少量、炭化
粒子微量 | 5 黒褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化物微量 |
| 2 濃い赤褐色 焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量 | 6 灰黄褐色 焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量 |
| 3 暗赤褐色 焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量、炭化
粒子微量 | 7 暗赤褐色 砂質粘土ブロック中量、焼土ブロック少量、炭化
粒子微量 |
| 4 灰黄褐色 砂質粘土ブロック中量、焼土ブロック少量 | 8 灰黄褐色 焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量、ローム粒
子・炭化物微量 |

ピット 8か所。P1~P4は深さ28~64cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P6~P8は深さ38~54cmで、P2~P4のそれぞれの重複関係から建て替え前の主柱穴と考えられる。P5は深さ17cmで、規模と位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 7層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

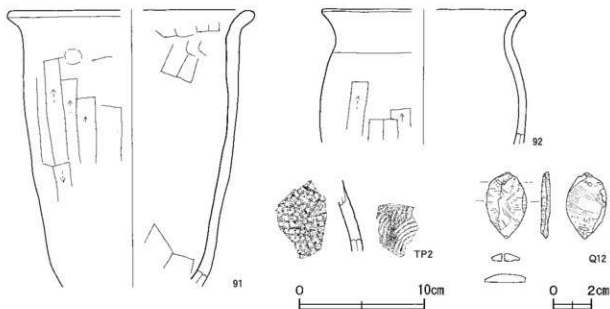
- | | |
|---|--------------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量 | 5 暗褐色 ロームブロック少量、砂質粘土ブロック・炭化物微量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック・炭化物少量、焼土ブロック微量 | 6 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・砂質粘土ブ
ロック微量 | 7 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物粒子微量 |
| 4 褐灰色 ロームブロック・砂質粘土ブロック少量、焼土ブ
ロック・炭化物微量 | |



第137図 第38号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片352点(坏類74, 埴5, 高坏2, 甕類271), 須恵器片4点(甕類), 土製品1点(支脚), 石製品1点(剣形模造品)が全域から散在して出土している。91は甕右袖脇の覆土上層から焚口部にかけての破片が接合したものである。92は北西コーナー部, Q12は南壁際の覆土中層, TP2は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 重複関係及び出土土器から6世紀中葉と考えられる。



第138図 第38号住居跡出土遺物実測図

第38号住居跡出土遺物観察表(第138図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
91	土師器	甕	[18.9]	(22.0)	-	右英・長石・雲母・灰色粒子	にぶい・粗	普通	体部外面へラ削り 指頭痕 内面へラナデ	覆土上層～焚口部	40%
92	土師器	甕	[16.0]	(10.6)	-	右英・長石	にぶい・粗	普通	体部外面へラ削り	覆土中層	25%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP2	須恵器	甕	長石・白色粒子	灰白	普通	体部外面格子叩き 内面同心円当て具痕	覆土中	

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q12	剣形模造品	3.5	2.1	0.4	4.1	滑石	全面研磨 片面両刃状 上部穿孔 孔径0.15cm	覆土中層	PL34

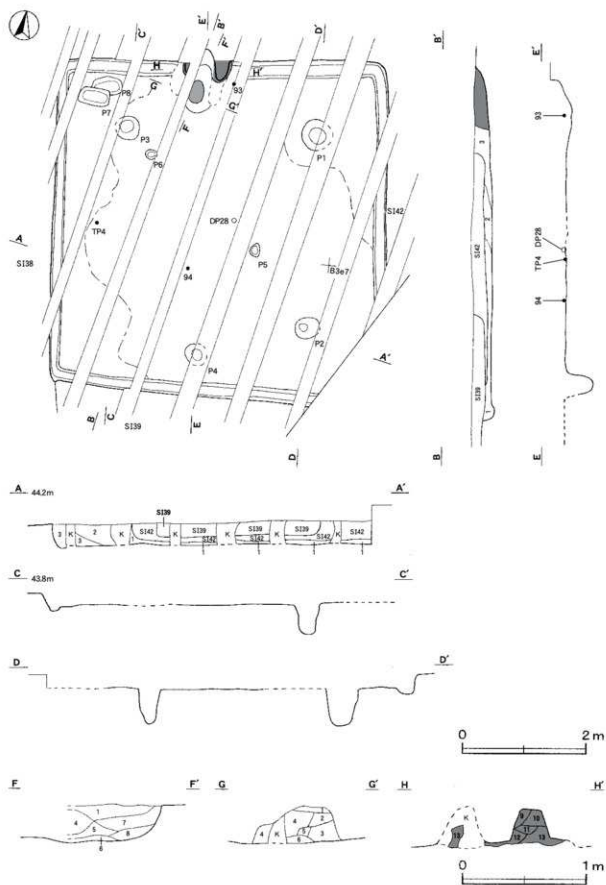
第40号住居跡(第139・140図)

位置 調査区I区のB3a6区で, 標高43mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第38号住居跡を掘り込み, 第39・42号住居に掘り込まれている。

規模と形状 南東コーナー部は調査区域外である。長軸5.57m, 短軸5.33mの方形で, 主軸方向はN-3°-Wである。壁高は20~32cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 竈前面から南壁にかけて踏み固められている。壁溝が全周しており, 断面形はU字状である。



第139图 第40号住居跡実測図

竈 北壁の中央部に付設されている。攪乱により袖部の一部が崩壊しているため、規模は焚口部から煙道部まで110cm、袖部幅は62cmと推定される。袖部は床面と同じ高さの地山に、砂質粘土を含んだローム土で構築されている。火床部は床面をわずかに掘りくぼめ、火床面は火熱を受けて赤変している。煙道部は壁外に20cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。竈土層断面図の第4層が天井部の崩落土に該当する。

竈土層解説

1 黒褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量	8 暗褐色	焼土ブロック・炭化粒子少量、ロームブロック微量
2 深黄褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量	9 暗赤褐色	砂質粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
3 黒褐色	砂質粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	10 暗褐色	砂質粘土ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
4 に近い黄褐色	砂質粘土ブロック中量、焼土ブロック少量	11 暗赤褐色	焼土粒子・砂質粘土ブロック少量、炭化粒子微量
5 暗赤褐色	焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量	12 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量
6 暗赤褐色	焼土ブロック中量	13 黒褐色	焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量
7 暗赤褐色	焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量、炭化粒子微量		

ピット 8か所。P1～P3は深さ48～60cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P4は深さ44cmで、規模と位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P5～P8は位置が不規則で、性格は不明である。

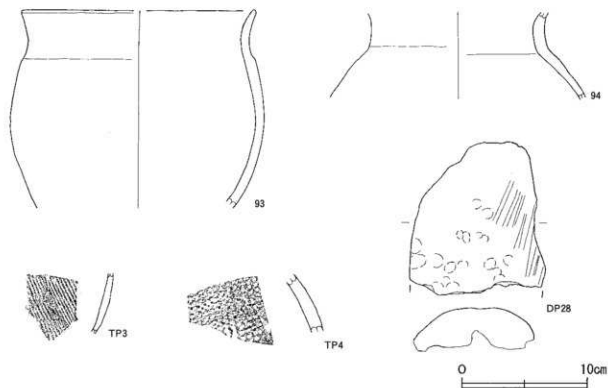
覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量	3 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量、砂質粘土ブロック微量
2 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量		

遺物出土状況 土師器片571点（坏類96、埴1、高坏19、甕類445、甗10）、須恵器片10点（坏類6、甕類4）、土製品1点（支脚）が出土している。また流れ込んだ弥生土器片1点（蓋）も出土している。93は竈右袖付近、94・DP28は中央部、TP4は西部の床面からそれぞれ出土している。TP3は覆土中から出土している。

所見 時期は、重複関係及び出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第140図 第40号住居跡出土遺物実測図

第40号住居跡出土遺物観察表 (第140図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
93	土師器	甕	18.6	(15.8)	-	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部横ナデ 体部内・外面ナデ	床面	10%
94	土師器	甕	-	(6.9)	-	長石・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部横ナデ 体部内・外面ナデ	床面	5%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
Tp3	弥生土器	甕	長石・赤色粒子	橙	普通	胴部縦位の朱痕	覆土中	PL32

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
Tp4	須恵器	甕	長石・黒色粒子	灰白	普通	体部外面格子印き	床面	

番号	器種	長さ	幅(径)	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Dp28	支脚	(12.2)	(10.8)	(3.5)	(370.0)	土製(石英・長石)	外面ヘラナデ 指頭直	床面	

第41号住居跡 (第141図)

位置 調査区1区のB3e6区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第39号住居、第44号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南東コーナー部が調査区域外であるため、確認できた範囲は南北軸0.92m、東西軸1.26mである。平面形は方形又は長方形と推定され、主軸方向はN-13°-Eである。壁高は6~9cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦である。

覆土 2層に分層される。ロームブロックを含む人為堆積である。

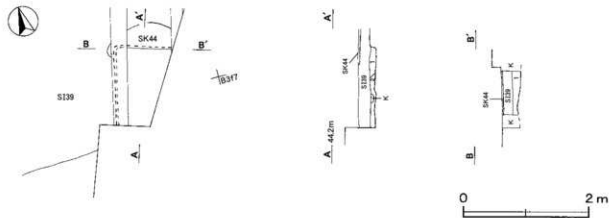
土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量

2 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片39点(環類7, 甕類32), 須恵器片2点(環類)が出土している。土器は細片のため図示できない。

所見 時期は、重複関係及び出土土器から7世紀以降と考えられる。



第141図 第41号住居跡実測図

第42号住居跡（第142・143図）

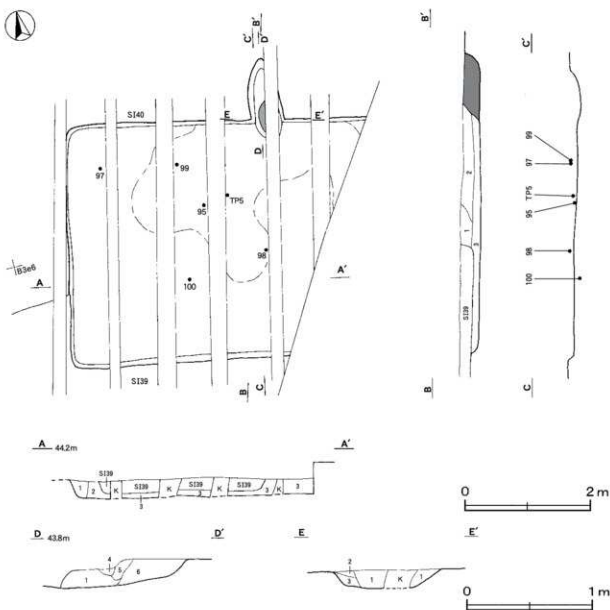
位置 調査区Ⅰ区のB3e6区で、標高43mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第40号住居跡を掘り込み、第39号住居に掘り込まれている。

規模と形状 東部が調査区域外であるため、確認できた範囲は南北軸3.78m、東西軸4.78mである。平面形は方形又は長方形と推定され、主軸方向はN-12°-Eである。壁高は8~12cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、竈前面から中央部にかけて踏み固められている。

竈 北壁の中央部に付設されている。攪乱により袖部や焚口部、火床部の一部が崩壊しており、規模は焚口部から煙道部まで130cmと推定される。火床部は床面をわずかに掘りくぼめ、火床面は火熱を受けて赤変している。煙道部は壁外に98cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。竈土層断面図の第2・4・5層が天井部の崩落土に該当する。



第142図 第42号住居跡実測図

覆土層解説

- 1 黒 褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量、ロームブロック・砂質粘土ブロック少量、炭化粒子
砂質粘土ブロック微量
2 灰 黄 褐色 焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量
3 黒 褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
4 灰 黄 褐色 砂質粘土ブロック少量、ロームブロック・焼土ブロック微量

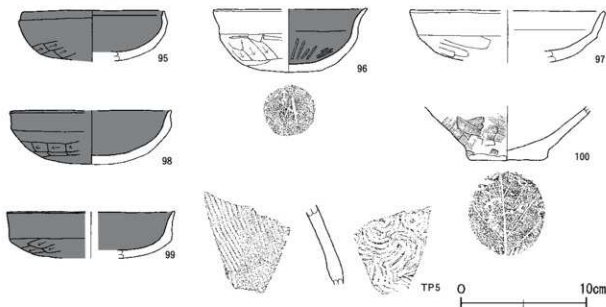
覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- 1 暗 褐色 ロームブロック・炭化物少量
2 暗 褐色 焼土ブロック・炭化物少量、ローム粒子微量
3 褐 色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片127点（坏類25，甕類102），須恵器片1点（甕）が北西部を中心に出土している。95・100・TP5は中央部床面，97は北西部，98は中央部，99は北部の覆土下層からそれぞれ出土している。96は覆土中から出土している。

所見 時期は、重複関係及び出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第143図 第42号住居跡出土遺物実測図

第42号住居跡出土遺物観察表（第143図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
95	土師器	坏	11.3	3.9	-	長石・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部外面へラ削り	床面	60% PL.22
96	土師器	坏	[11.8]	5.0	-	石英・長石	にぶい黄橙	普通	体部外面へラ削り 内面へラ磨き 底部へラ削り	覆土中	70% PL.23
97	土師器	坏	[15.6]	(4.0)	-	長石	にぶい褐	普通	体部外面へラナゲ	覆土下層	20%
98	土師器	坏	[12.6]	4.2	-	長石	にぶい褐	普通	体部外面へラ削り	覆土下層	25%
99	土師器	坏	[13.6]	(3.7)	-	長石・黄母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部外面へラ削り	覆土下層	15%
100	土師器	甕	-	(4.3)	6.0	長石	橙	普通	体部外面へケ目調整 底部木葉痕	床面	15%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP5	須恵器	甕	石英・長石	黄灰	普通	体部外面縦位の平行叩き 内面同心円当て具痕	床面	

第43号住居跡（第144図）

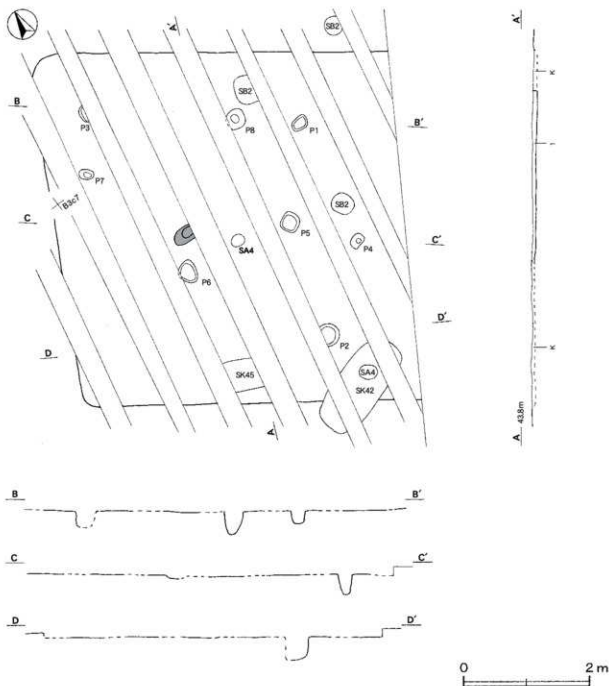
位置 調査区Ⅰ区のB3c7区で、標高43mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第2号掘立柱建物，第42・45号土坑，第4号柵列に掘り込まれている。

規模と形状 東部は調査区域外であるため，確認できた範囲は南北軸5.60m，東西軸5.60mである。平面形は方形又は長方形と推定され，主軸方向はN-39°-Eである。壁は確認できなかった。

床 ほぼ平坦である。

炉 中央部やや西寄りに位置している。規模は長径44cm，短径24cmの楕円形と推定され，床面をわずかに掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱を受けて赤変している。



第144図 第43号住居跡実測図

ピット 8か所。P1～P3は深さ20～38cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P4～P8は深さ32～38cmで、性格は不明である。

覆土 層厚が薄く、単一層のため堆積状況は不明である。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片46点(埴2, 甕類44), 須恵器片1点(甕類)が出土している。土器は細片のため図示できない。

所見 時期は、遺構の規模や様相及び出土土器から5世紀後葉以前と考えられる。

第47号住居跡(第145・146図)

位置 調査区Ⅱ区のB4g8区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第2号溝跡を掘り込んで、第6号溝に掘り込まれている。

規模と形状 西部が調査区域外である。長軸7.90m, 短軸7.82mの方形で、主軸方向はN-6°-Eである。壁高は18～34cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が東壁から南壁にかけて周回し、断面形はU字状である。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで108cm, 袖部幅は77cmである。袖部は床面と同じ高さの地山に、砂質粘土を含んだローム土で構築されている。火床部は床面を10cm掘り込み、焼土を含んだローム土を皿状に埋め戻している。火床面は火熱を受けて赤変している。煙道部は壁外に47cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。竈土層断面図の第5・10層が天井部の崩落土に該当する。

竈土層解説

1 黒褐色 焼土粒子微量	6 暗褐色 焼土粒子中量, ロームブロック少量
2 暗褐色 砂質粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量	7 黒褐色 焼土粒子少量
3 黒褐色 ローム粒子少量	8 暗褐色 焼土粒子少量
4 暗褐色 焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量	9 暗褐色 焼土ブロック中量, ローム粒子少量
5 暗褐色 焼土ブロック・砂質粘土ブロック中量, ローム粒子少量	10 暗褐色 砂質粘土ブロック少量, 焼土粒子少量
	11 暗褐色 ローム粒子少量

ピット 4か所。P1・P2の深さはともに80cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P3・P4の深さは24cm・18cmで、規模と位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 北東コーナー部に位置している。東部が掘乱を受けており、確認できる範囲は長径70cm, 短径60cmの円形又は楕円形と推定され、深さは74cmである。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量	3 暗褐色 ロームブロック少量
2 暗褐色 ローム粒子少量	

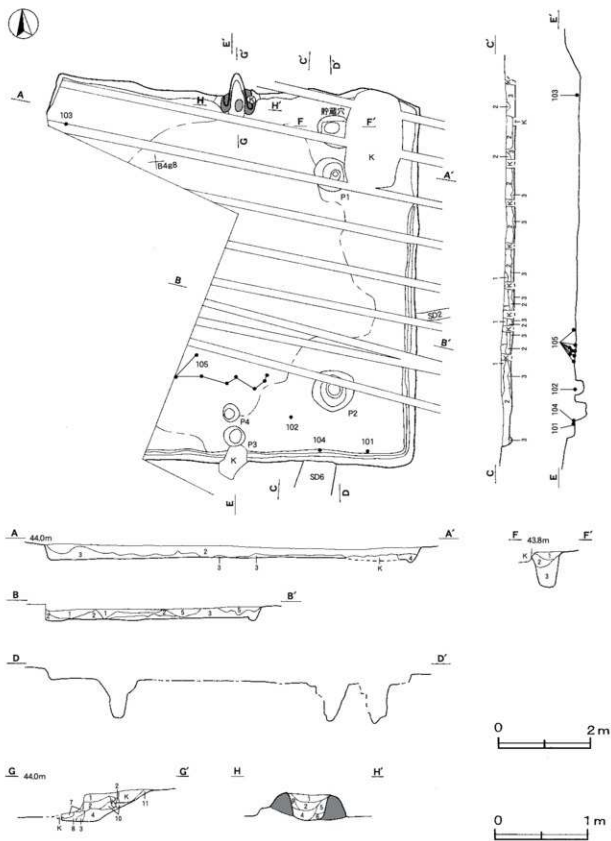
覆土 5層に分層される。ロームブロックを多く含む不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

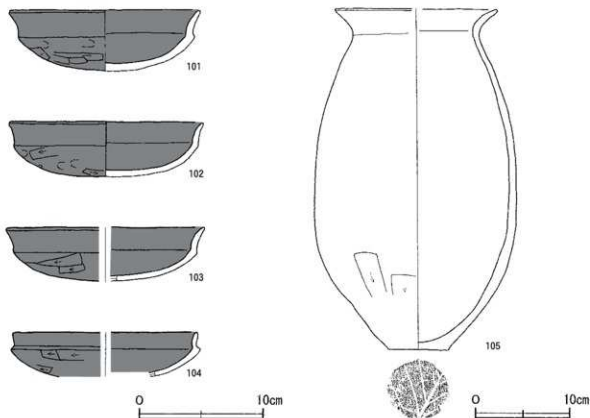
1 黒褐色 ロームブロック少量	4 暗褐色 ロームブロック中量
2 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	5 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色 ロームブロック中量	

遺物出土状況 土師器片306点(坏類19, 高台付坏1, 甕類286), 須恵器片5点(坏2, 壺1, 甕類2), 土製品1点(支脚)が南部を中心に出土している。101・104は南壁際, 102・105は南部, 103は北西コーナー部の床面からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀中葉と考えられる。



第145图 第47号住居跡実測図



第146図 第47号住居跡出土遺物実測図

第47号住居跡出土遺物観察表 (第146図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
101	土師器	坏	15.2	4.9	-	長石	暗褐色	普通	体部外面へラ削り 指頭痕	床面	90% PL.22
102	土師器	坏	15.5	4.4	-	石英・長石・雲母	灰黄褐色	普通	体部外面へラ削り 指頭痕	床面	90% PL.22
103	土師器	坏	[15.6]	4.3	-	石英・長石	黄灰色	普通	体部外面へラ削り	床面	40%
104	土師器	坏	[14.6]	3.5	-	石英・長石	にぶい黄褐色	普通	体部外面へラ削り	床面	10%
105	土師器	甕	[17.2]	36.6	6.4	石英・長石・砂礫・赤色粒子	にぶい褐色	普通	体部外面へラ削り 底部木葉痕	床面	60%

第51号住居跡 (第147～149図)

位置 調査区Ⅱ区のB5j4区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第50号住居に掘り込まれている。

規模と形状 北東部は調査区域外であるため、確認できた範囲は南北軸5.52m、東西軸5.34mである。平面形は方形又は長方形と推定され、主軸方向はN-16°-Wである。壁高は48～58cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。西壁に間仕切り溝が1条確認されている。壁溝が全周し、断面形はU字状である。

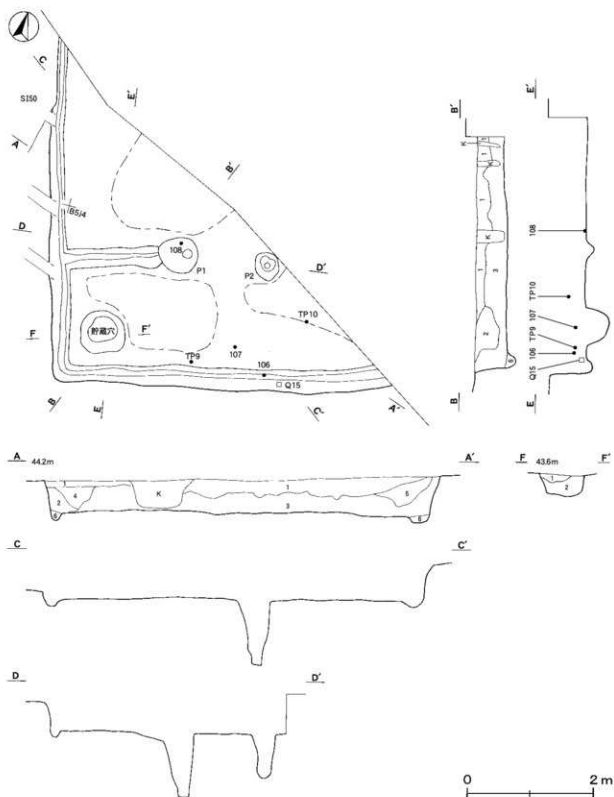
ピット 2か所。P1は深さ102cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P2は深さ60cmで、間仕切り溝の端部に位置しているため、間仕切りの柱穴と推定される。

貯蔵穴 南西コーナー部に位置している。規模は長径74cm、短径72cmの円形で、深さは38cmである。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量

2 暗褐色 ロームブロック少量



第147図 第51号住居跡実測図

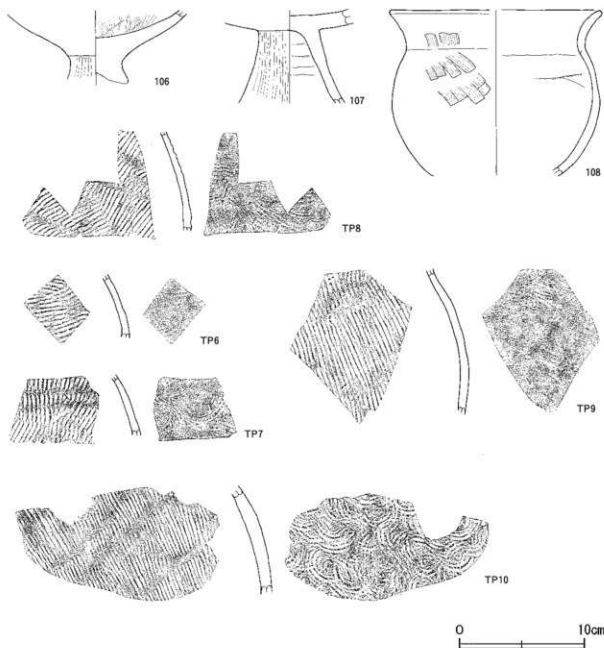
覆土 6層に分層される。不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

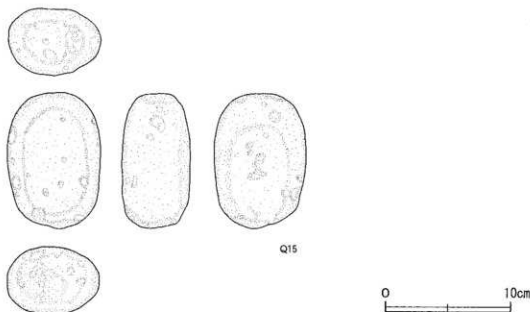
- | | | | |
|-------|------------------------|-------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 4 黒褐色 | 炭化物・ローム粒子少量、焼土粒子微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量、炭化物・焼土粒子微量 | 5 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化物少量、焼土粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック少量 |

遺物出土状況 土師器片508点（坏類65、埴9、高坏20、甕類414）、須恵器片20点（蓋1、甕類19）、石器1点（磨石）が南部を中心に出土している。また、流れ込んだ弥生土器片4点（壺）も出土している。106・107・TP9・Q15は南壁際の覆土下層、108はP1の覆土上層から出土している。TP10は南部の覆土中層、TP6～TP8は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀前葉と考えられる。



第148図 第51号住居跡出土遺物実測図(1)



第149図 第51号住居跡出土遺物実測図(2)

第51号住居跡出土遺物観察表(第148・149図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
106	土師器	高坏	-	(5.8)	-	長石・赤色粒子	明赤褐	普通	坏部内面・脚部外面へラ磨き	覆土下層	25%
107	土師器	高坏	-	(7.4)	-	長石・雲母	に5%赤褐	普通	脚部外面へラ磨き 内面ナデ	覆土下層	25%
108	土師器	甕	16.6	(13.3)	-	石英・長石	に5%黄褐	普通	口縁基部ナデ 体部及び頸部外面ハケ目調整	白覆土上層	20%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP6	須恵器	甕	白色粒子	オリーブ灰	普通	体部外面縦位の平行明き 内面同心円当て具痕	覆土中	
TP7	須恵器	甕	白色粒子	黒	普通	体部外面縦位の平行明き 内面同心円当て具痕	覆土中	
TP8	須恵器	甕	石英・白色粒子	灰	普通	体部外面縦位の平行明き 内面同心円当て具痕	覆土中	
TP9	須恵器	甕	長石・白色粒子	黄灰	普通	体部外面縦位の平行明き 内面同心円当て具痕	覆土下層	
TP10	須恵器	甕	黒色粒子	灰白	普通	体部外面縦位の平行明き 内面同心円当て具痕	覆土中層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q15	磨石	10.7	7.4	5.3	679.0	安山岩	使用痕2.5ヶ所 打突面摩耗	覆土下層	PL35

第55号住居跡(第150・151図)

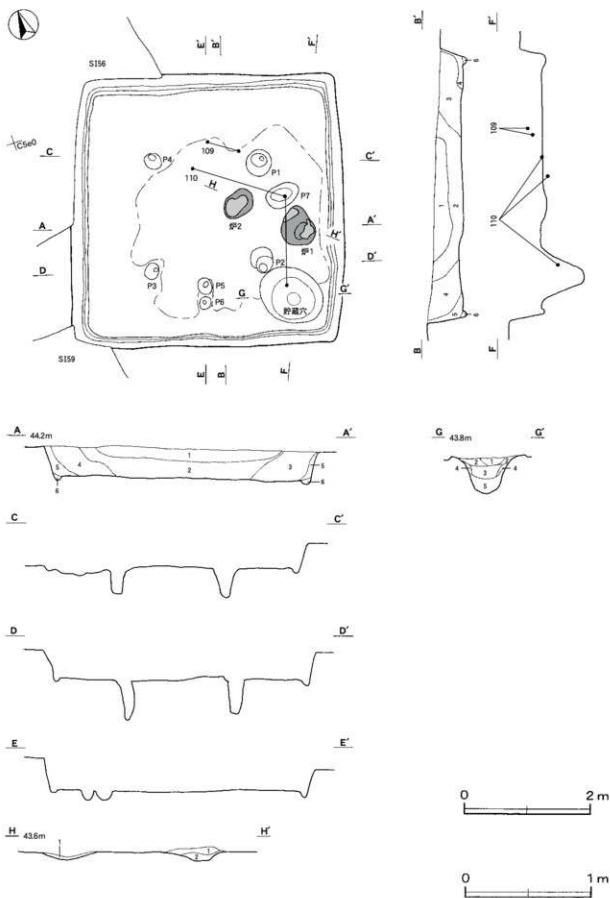
位置 調査区C 5 e0区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第56・59号住居に掘り込まれている。

規模と形状 一辺4.32mの方形で、主軸方向はN-19°-Eである。壁高は32~52cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が全周し、断面形はU字状である。

炉 2ヶ所。炉1は東部に位置しており、規模は長径64cm、短径54cmの不整楕円形で、床面を皿状に10cm掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱を受けて赤変硬化している。炉2はほぼ中央部に位置しており、規模は長径54cm、短径38cmの楕円形で、床面をわずかに掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱を受けて赤変硬化して



第150図 第55号住居跡実測図

いる。炉1・2ともほぼ同時期に使用されたと考えられる。

伊1土層解説

1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量

2 極暗赤褐色 焼土粒子中量

伊2土層解説

1 極暗赤褐色 焼土粒子中量

ピット 7か所。P1～P4は深さ40～64cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P5・P6の深さは、16cm・18cmで、規模と位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P7は深さ15cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 南東コーナー部に位置している。規模は長径107cm、短径84cmの楕円形で、深さは58cmである。底面は皿状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1 褐色 ロームブロック中量

4 褐色 ローム粒子多量

2 暗褐色 ロームブロック少量

5 暗褐色 ローム粒子中量

3 極暗褐色 ロームブロック少量

覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量

4 暗褐色 炭化物・ローム粒子少量、焼土粒子微量

2 暗褐色 ロームブロック少量

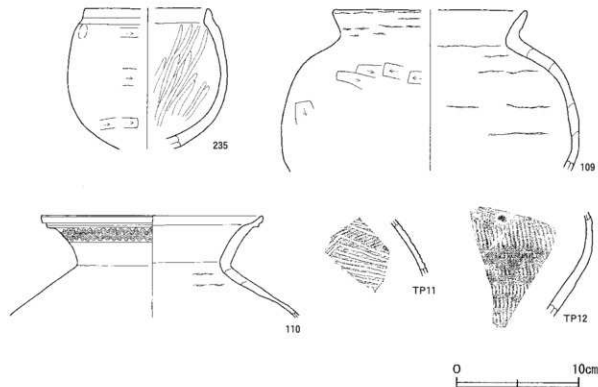
5 褐色 ロームブロック中量

3 暗褐色 ローム粒子少量

6 暗褐色 ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片463点（坏類66、高坏1、甕類396）、須恵器片36点（坏類1、甕類35）、土製品2点（支脚）が炉の周辺を中心に出土している。また、流れ込んだ弥生土器片3点（壺）も出土している。109は中央部の覆土下層、110は貯蔵穴とP7の覆土中層と中央部の床面から出土した破片が接合したものである。235・TP11・TP12は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀後葉と考えられる。



第151図 第55号住居跡出土遺物実測図

第55号住居跡出土遺物観察表 (第151図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
235	土師器	椀	10.8	(11.5)	-	石英・長石	にぶい赤褐色	普通	体部外面へつ削り 指頭痕 内面へつ磨き	覆土中	30%
109	土師器	甕	15.8	(13.1)	-	石英・長石・雲母	にぶい褐色	普通	体部外面へつ削り 輪積み痕	覆土下層	20%
110	須恵器	甕	18.2	(8.3)	-	長石	黄灰	良好	口辺部櫛歯状工具による波状文 輪積み痕	貯蔵六・貯埋土中層・灰面	25%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP11	弥生土師器	甕	長石・雲母	にぶい褐色	普通	胴部 IR の甲筋縄文施文後斜位の沈線	覆土中	Pl.32

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP12	須恵器	甕	長石・赤色粒子	黄灰	普通	体部外面段位の平行明き	覆土中	

第61号住居跡 (第152～154図)

位置 調査区Ⅱ区C-4b9区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第78号土坑を掘り込み、第8号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.84m、短軸5.58mの方形で、主軸方向はN-25°-Eである。壁高は51～62cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、電前面から中央部にかけて踏み固められている。溝溝が全周し、断面形はU字状である。

竈 北壁の中央部に付設されている。焚口部が攪乱を受けており、確認できた規模は袖部幅159cmである。袖部は床面と同じ高さの地山に、砂質粘土を含んだローム土で構築されている。火床部は床面を皿状に15cm掘り込み、焼土を多量に含んだローム土を埋め戻した平坦面を利用しており、火床面は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に50cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。竈土層断面図の第3・6・7層が天井部の崩落土に該当する。

竈土層解説

1	暗褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子微量	10	暗赤褐色	焼土粒子中量、砂質粘土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量
2	暗褐色	焼土粒子少量、ロームブロック微量			砂質粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
3	暗褐色	焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量、炭化粒子微量	11	暗褐色	ロームブロック・砂質粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
4	極暗赤褐色	焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量	12	暗褐色	ロームブロック・砂質粘土ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
5	極暗赤褐色	焼土ブロック少量、砂質粘土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量	13	褐色	ロームブロック中量、砂質粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
6	極暗褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック少量、炭化粒子微量	14	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、砂質粘土ブロック・炭化粒子微量
7	極暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量	15	暗赤褐色	焼土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子微量
8	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量	16	極暗赤褐色	焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子微量
9	灰黄褐色	砂質粘土ブロック多量、焼土粒子少量、ローム粒子微量			

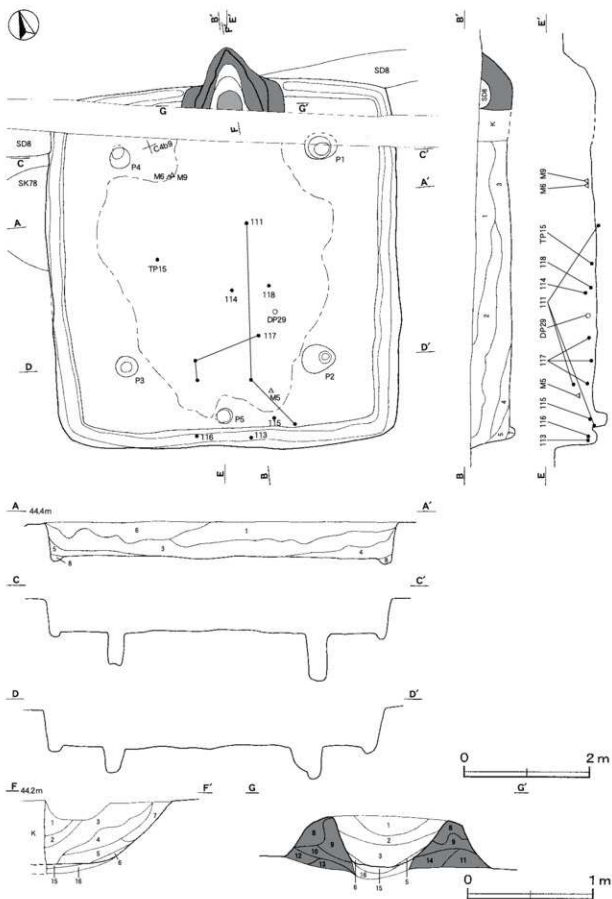
ピット 5か所。P1～P4は深さ40～78cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ20cmで、規模と位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 8層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

1	黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	5	黒褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量
2	極暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	6	黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
3	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	7	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量
4	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量	8	暗褐色	ロームブロック少量

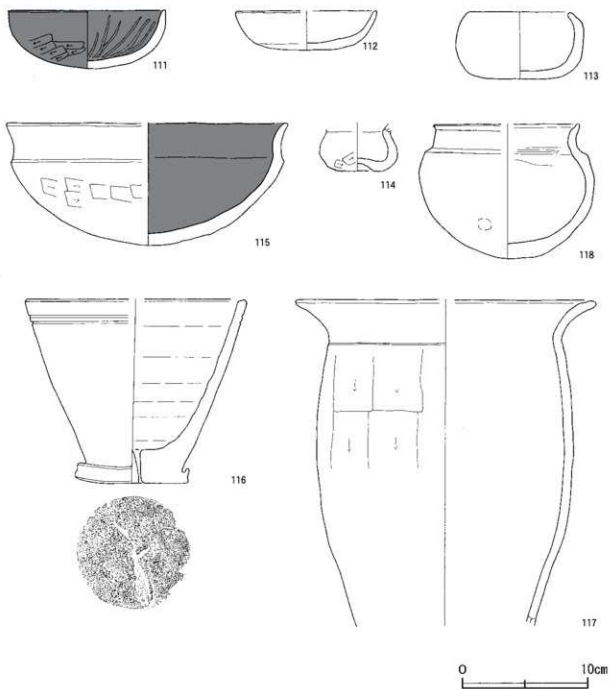
遺物出土状況 土師器片1,817点(坏壺536, 椀8, 埴2, 高坏9, 鉢1, 甕類1,255, 甌6), 須恵器片32点



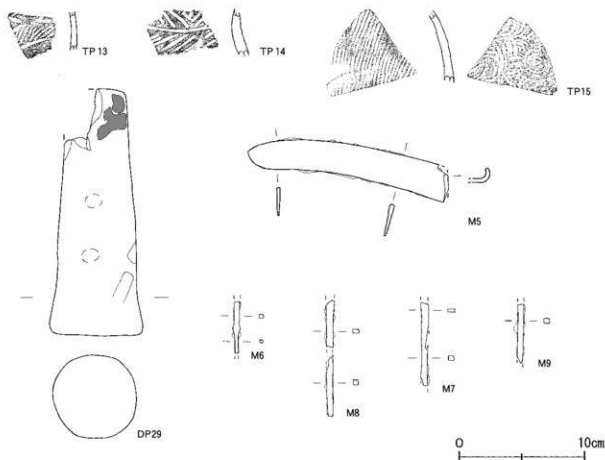
第152图 第61号住居跡実測图

(環類24, 高台付坏1, 甕類6, 鉢1), 土製品96点(支脚片14, 不明82), 鉄製品9点(鎌4, 鎌1, 釘1, 不明2)が全域から散在して出土している。また, 流れ込んだ弥生土器片42点(甕)も出土している。111は中央部と南部の覆土中層から床面にかけて出土した破片が接合したものである。113・115・116は南壁際, 117は南部, 114・118・TP15・DP29は中央部, M6・M9は北部の覆土下層からそれぞれ出土している。M5は南部の覆土中層から, 112・TP13・TP14・M7・M8は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器から7世紀中葉と考えられる。



第153図 第61号住居跡出土遺物実測図(1)



第154図 第61号住居跡出土遺物実測図(2)

第61号住居跡出土遺物観察表(第153・154図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
111	土師器	坏	12.5	4.6	-	長石	にぶい・褐	普通	体部外面へラ削り 内面へラ磨き	覆土中層・床面	90% PL.22
112	須恵器	坏	[11.3]	3.1	[4.0]	石英・長石・砂礫	灰	普通	体部内・外面ナゲ	覆土中	40%
113	土師器	甗	8.0	5.4	5.0	石英・長石・雲母	褐色	普通	体部内・外面ナゲ	覆土下層	95% PL.24
118	土師器	甗	11.4	10.8	-	石英・長石	にぶい・橙	普通	体部内・外面ナゲ 指頭痕	覆土下層	95% PL.25
114	土師器	埴	-	(3.8)	3.7	長石・赤色粒子	淡黄橙	普通	体部外面へラ削り	覆土下層	50%
115	土師器	鉢	[22.2]	9.7	-	長石	にぶい・橙	普通	口縁部横ナゲ 体部外面へラ削り	覆土下層	50% PL.25
116	須恵器	椀鉢	[17.3]	14.7	8.9	石英・長石	灰	普通	体部内・外面クロコナゲ 底部へラ削り	覆土下層	50% PL.27
117	土師器	甕	[23.6]	[26.0]	-	石英・長石・雲母・赤色粒子・砂礫	橙	普通	口縁部横ナゲ 体部外面へラ削り	覆土下層	50%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP13	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい・褐	普通	胴部充填縄文	覆土中	PL.32
TP14	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	赤褐	普通	胴部半截竹管状工具による沈線	覆土中	PL.32

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP18	須恵器	甕	石英・長石・雲母	灰白	普通	体部外面縦位の平行引き 内面同心円状具痕	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP29	支脚	19.7	7.4	7.6	(883.0)	土製(石英・長石・雲母)	へラナゲ 指頭痕	覆土下層	PL.34 竈部材仕着
M5	鎌	16.0	2.8	0.3	(48.4)	鉄	弓状に彎曲 断面三角形	覆土中層	PL.36

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M6	鍔	(4.2)	0.7	0.3	(2.8)	鉄	基部破片 断面方形	覆土下層	PL36
M7	鍔	(6.7)	0.6	0.4	(4.2)	鉄	基部破片 断面方形	覆土中	
M8	鍔	(9.7)	0.7	0.4	(5.4)	鉄	基部破片 断面方形	覆土中	PL36
M9	釘	(4.7)	0.5	0.4	(3.8)	鉄	基部破片 断面方形	覆土下層	

第62号住居跡 (第155・156図)

位置 調査区Ⅱ区B 4 i9区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第71号土坑を掘り込み、第63号住居、第6・7号溝、第73号土坑、第1号墓坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.30m、短軸6.02mの方形で、主軸方向はN-6°-Eである。壁高は34~46cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が全周し、断面形はU字状である。

炉 中央部からやや北側に位置しており、長径50cm、短径40cmの楕円形である。床面を皿状に14cm掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱を受けて赤変硬化している。

伊土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量 3 褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量
2 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量

ピット 7か所。P1~P4は深さ70~82cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ24cmで、規模と位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6・P7の深さは24cm・68cmで、性格は不明である。ピット土層断面図第1・2・5層が、柱の抜き取り痕に該当する。

ピット土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量 5 暗褐色 ロームブロック・鹿沼バミス少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
3 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 6 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
4 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

貯蔵穴 南西コーナー部に位置している。規模は長軸89cm、短軸82cmの方形で、深さは86cmである。底面は平坦で、壁はほぼ直立している。

貯蔵穴土層解説

- 1 麻暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量 5 暗褐色 ロームブロック少量
2 麻暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、ロームブロック微量 6 褐色 ローム粒子・鹿沼バミス中量、炭化粒子微量
3 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量 7 暗褐色 ローム粒子少量
4 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

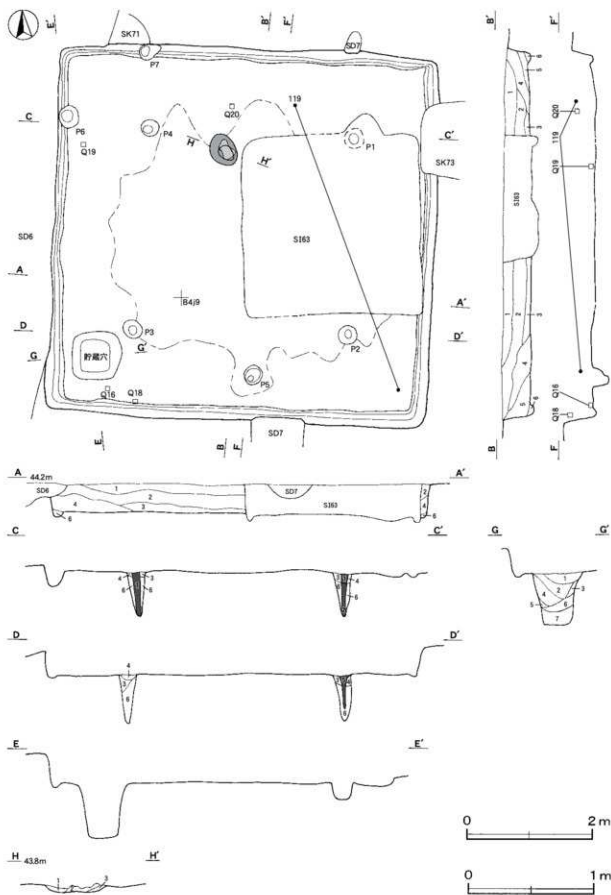
覆土 6層に分層される。ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

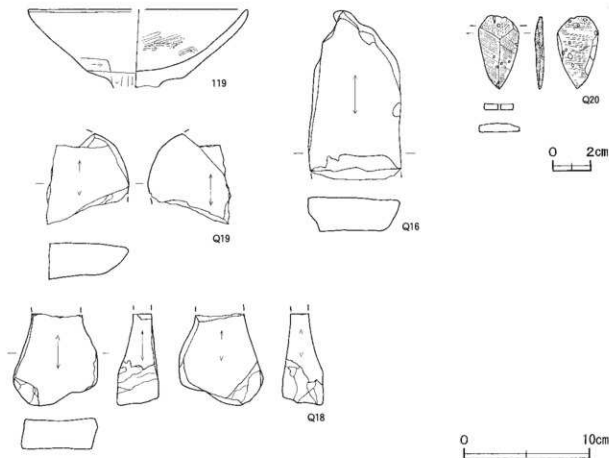
- 1 黒褐色 ロームブロック少量 4 暗褐色 ローム粒子中量
2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量 5 褐色 ロームブロック中量
3 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 6 暗褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片743点（坏類33、埴2、高坏36、甕類670、甕2）、須恵器片28点（坏16、高台付坏1、甕類11）、石器3点（砥石）、石製品1点（剣形模造品）が全城から散在して出土している。119は南東コーナー部及び北部の覆土中層から出土した破片が接合したものである。Q16は南壁際、Q19は西部の床面、Q18は南壁際の覆土上層、Q20は北部の覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。



第155图 第62号住居跡実測图



第156図 第62号住居跡出土遺物実測図

第62号住居跡出土遺物観察表 (第156図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
119	土器器	高坏	17.4	(6.2)	-	長石・雲母	橙	普通	坏部外面へラ削り 内面へラ磨き	覆土中層	30%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
Q16	砥石	(13.4)	7.3	2.7	(399.0)	砂岩	砥面1面		床面		
Q18	砥石	(7.3)	6.8	2.4	(202.0)	凝灰岩	砥面4面		覆土上層		
Q19	砥石	(6.5)	(7.3)	2.9	(165.0)	砂岩	砥面2面		床面		
Q20	削形模造品	3.8	2.2	0.4	4.6	滑石	全面研磨	片面両刀状 上部穿孔 孔径0.16cm	覆土中層	PL34	

第64号住居跡 (第157～160図)

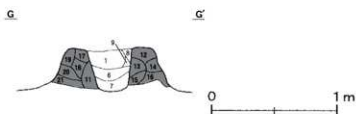
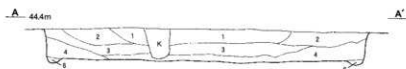
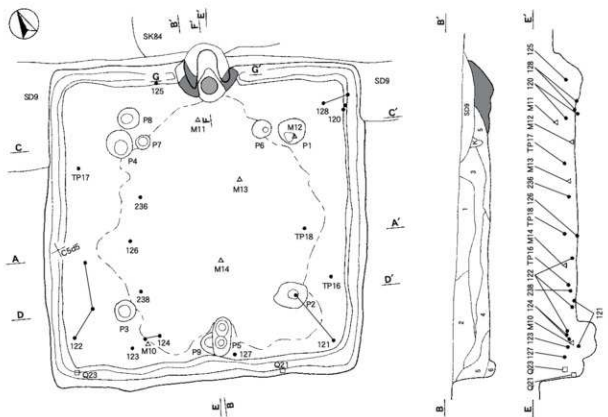
位置 調査区Ⅱ区C 5 d5区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第84号土坑を掘り込み、第9号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.17m、短軸5.12mの方形で、主軸方向はN-24°-Eである。壁高は53cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が全周し、断面形はU字状である。

竈 北壁の中央部に付設されている。焚口部から煙道部までは80cm、袖部幅は98cmである。袖部は床面と同じ高さの地山に、砂質粘土を含んだローム土で構築されている。火床部は床面をわずかに掘り込み、火床面は



第157图 第64号住居跡実測図

火熱を受けて赤変している。煙道部は壁外に10cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。竈土層断面図の第2・3・4層が天井部の崩落土に該当する。

竈土層解説

1 極暗褐色	砂質粘土ブロック少量、ローム粒子微量	11 極暗赤褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、砂質粘土ブロック・炭化粒子微量
2 暗褐色	砂質粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック少量	12 暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子少量、砂質粘土粒子微量
3 暗褐色	砂質粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子微量	13 暗赤褐色	焼土粒子中量、砂質粘土ブロック少量
4 にぶい黄褐色	砂質粘土ブロック多量、焼土粒子少量、ロームブロック微量	14 にぶい褐色	砂質粘土ブロック・焼土粒子少量、ローム粒子微量
5 暗赤褐色	焼土ブロック少量、砂質粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量	15 にぶい赤褐色	焼土粒子中量、砂質粘土粒子少量
6 暗褐色	砂質粘土ブロック中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	16 褐色	砂質粘土ブロック・ローム粒子少量
7 極暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量	17 黒褐色	焼土粒子少量、ローム粒子微量
8 にぶい黄褐色	砂質粘土ブロック多量、焼土粒子少量、ローム粒子微量	18 暗赤褐色	焼土粒子中量、ロームブロック・砂質粘土ブロック少量
9 暗褐色	砂質粘土ブロック多量、焼土粒子少量、ローム粒子微量	19 灰褐色	砂質粘土ブロック少量、ロームブロック・焼土ブロック微量
10 暗褐色	砂質粘土ブロック中量、焼土粒子少量、ローム粒子微量	20 にぶい褐色	砂質粘土ブロック中量、焼土粒子微量
		21 暗褐色	砂質粘土ブロック中量、ロームブロック少量、焼土粒子微量

ピット 9か所。P1～P4は深さ28～62cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ28cmで、規模と位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6～P8の深さは20～30cmで、主柱穴の立て替えを行ったか、あるいは補助柱穴として使用されたと考えられる。P9は深さ20cmで、P5以前の出入り口施設に伴うピットと考えられる。

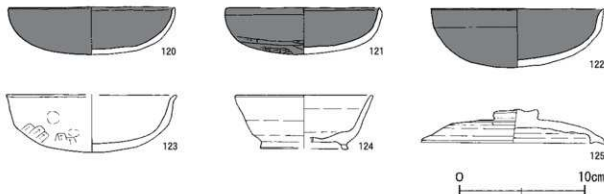
覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

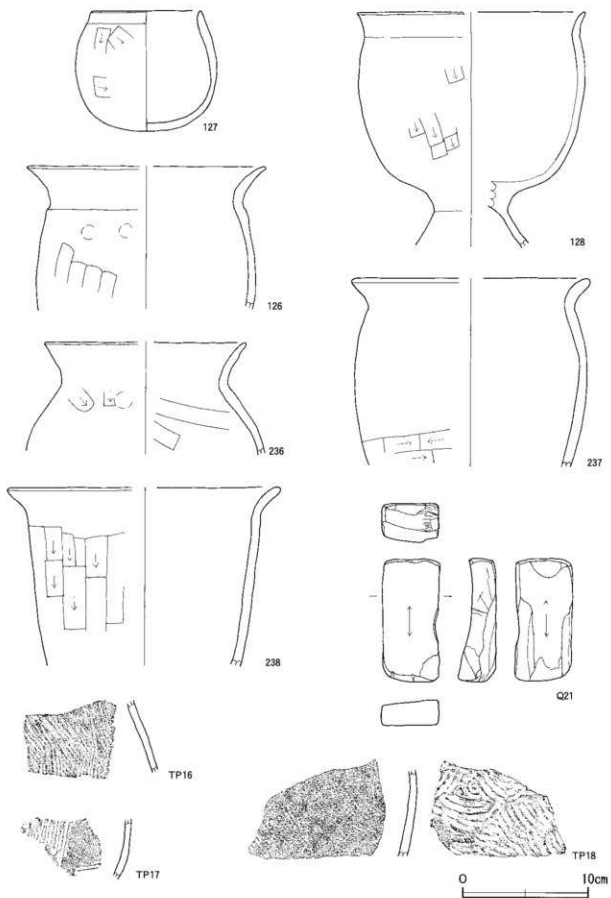
1 極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子微量	4 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
2 極暗褐色	ローム粒子・焼土ブロック微量	5 暗褐色	焼土ブロック・砂質粘土ブロック・ローム粒子少量
3 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量	6 褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片1,534点(坏類542, 甕類990, 甌2), 須恵器片95点(坏類31, 蓋6, 甌1, 甕類57), 石器1点(砥石), 石製品1点(白玉), 鉄製品2点(刀子1, 不明1), 鉄滓3点が南西部を中心に出土している。また、流れ込んだ弥生土器片2点(壺)も出土している。120・128は北東部, 126は西部, 127・Q21は南壁際, M10は南部の床面からそれぞれ出土している。121は南東部床面とP2覆土上層の破片が接合したものである。236は西部, 122～124・238は南西部, 125は北壁際の覆土下層から出土している。Q23は南西コーナー部, TP17は西部, TP16・TP18は東部, M13・M14は中央部の覆土中層からそれぞれ出土している。M11は竈前面, M12はP1の覆土上層からそれぞれ出土している。237は竈の覆土中から出土している。

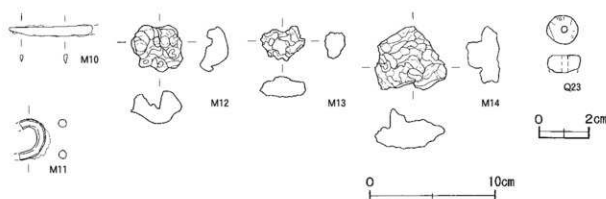
所見 時期は、出土土器から7世紀後葉と考えられる。



第158図 第64号住居跡出土遺物実測図(1)



第159图 第64号住居跡出土遺物実測図(2)



第160図 第64号住居跡出土遺物実測図(3)

第64号住居跡出土遺物観察表(第158~160図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
120	土師器	坏	13.2	3.7	-	長石・白色粒子	にぶい黄橙	普通	体部内・外面ナデ	床面	90% PL22
121	土師器	坏	12.2	3.7	-	長石	にぶい黄橙	普通	体部外面へラ削り	床面・ II層土上層	80%
122	土師器	坏	13.8	4.7	-	石英・長石	にぶい黄橙	普通	口縁部横ナデ	覆土下層	60%
123	土師器	坏	[13.4]	4.5	-	長石・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部外面へラ削り 指頭痕	覆土下層	30%
127	土師器	碗	8.8	9.6	-	長石・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面へラ削り	床面	95% PL25
124	須恵器	高台付坏	11.0	4.3	[7.0]	長石	黄灰	普通	内・外面クロコナデ 高台貼り付け	覆土下層	60% PL26
125	須恵器	蓋	14.4	2.7	-	石英・長石	灰	普通	天井部内面へラ削り	覆土下層	93% PL26
136	土師器	甕	[18.8]	[11.3]	-	石英・長石・砂礫	暗褐	普通	口縁部横ナデ 外面へラナデ 指頭痕	床面	20%
226	土師器	甕	[15.8]	(8.9)	-	長石・雲母	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面へラ削り 指頭痕 内面へラナデ	覆土下層	10%
227	土師器	甕	[18.6]	(14.8)	-	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部横ナデ 体部外面へラ削り	覆土中	5%
128	土師器	台付甕	[18.0]	(18.6)	-	石英・長石	にぶい赤褐	不良	体部外面へラ削り	床面	20%
228	土師器	瓶	[21.0]	(14.2)	-	石英・長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面へラ削り	覆土下層	5%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP16	弥生土器	壺	石英・長石・雲母・赤色粒子	褐	普通	胴部縦位の条痕施文後磨き消し	覆土中層	PL32
TP17	弥生土器	壺	長石・雲母	黒褐	普通	胴部単節調文施文後縦位の沈澱	覆土中層	PL32

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP18	須恵器	甕	石英・長石	灰	普通	体部外面縦位の平行引き 内面同心円当て具痕	覆土中層	PL33

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q21	砥石	9.8	4.5	3.0	173.8	凝灰岩	砥面2面	床面	PL35
M0	刀子	(6.7)	0.8	0.3	(3.5)	鉄	刃部破片 断面三角形	床面	PL36
M11	不明	3.1	(2.5)	0.7	(7.4)	鉄	一部欠損 環状	覆土上層	
M12	鉄滓	3.6	4.1	2.0	38.6	鉄	着磁性別	P1覆土上層	
M13	鉄滓	2.7	3.6	1.7	30.2	鉄	着磁性强	覆土中層	
M14	鉄滓	5.1	5.7	3.2	71.7	鉄	着磁性別	覆土中層	

番号	種別	長さ	径	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q23	白玉	(0.70)	1.35	0.25	(1.58)	凝灰岩	全面研磨調整 中央部1の穿孔孔	覆土中層	PL35

第67号住居跡 (第161・162図)

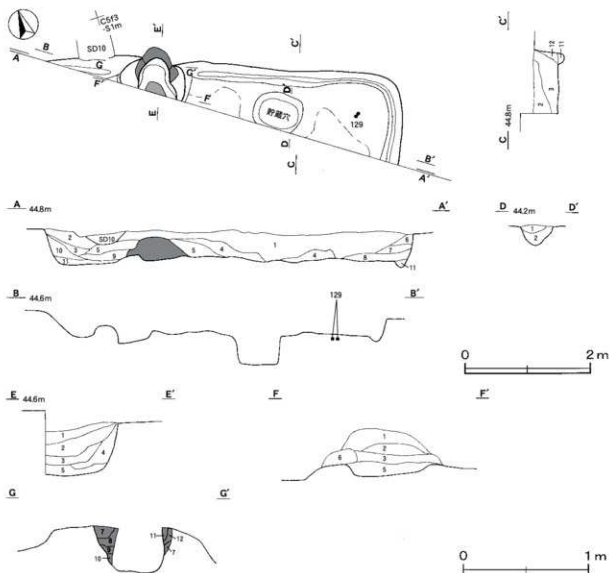
位置 調査区Ⅱ区C5f3区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第10号溝に掘り込まれている。

規模と形状 ほとんどが調査区域外であるため、確認できた範囲は南北軸1.26m、東西軸5.67mである。平面形は方形又は長方形と推定され、主軸方向はN-25°-Eである。壁高は26cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が全周し、断面形はU字状である。貯蔵穴を囲むように高さ5cmほどの高まりが確認されている。

竈 北壁に付設されている。焚口部は調査区域外で、袖部幅は109cmである。袖部は地山に砂質粘土を含んだローム土で構築されている。火床部はほぼ平坦で、火床面は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に12cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。竈土層断面図の第1・2層が天井部の崩落土に該当する。



第161図 第67号住居跡実測図

覆土層解説

1 灰 褐色	砂質粘土ブロック中量、ローム粒子・焼土粒子微量	7 暗 褐色	ローム粒子・焼土粒子少量
2 にぶい褐色	砂質粘土ブロック中量、ローム粒子・焼土粒子少量	8 にぶい赤褐色	ローム粒子・焼土粒子少量
3 褐色	ローム粒子中量、砂質粘土ブロック・焼土粒子少量	9 褐色	ローム粒子少量
4 暗赤褐色	ローム粒子中量、ローム粒子・砂質粘土粒子少量	10 赤 褐色	ローム粒子・焼土粒子少量
5 にぶい赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土粒子少量	11 にぶい赤褐色	焼土粒子中量
6 にぶい赤褐色	砂質粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック少量	12 にぶい褐色	焼土粒子少量、ローム粒子微量

貯蔵穴 北東コーナー部に位置している。確認できた規模は長軸80cm、短軸60cmの長方形で、深さは42cmである。底面は平坦で、壁はほぼ直立している。

貯蔵穴土層解説

1 暗 褐色	ロームブロック微量	2 暗 褐色	ロームブロック少量
--------	-----------	--------	-----------

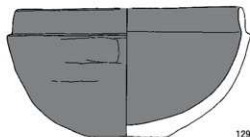
覆土 12層に分層される。ブロックを含む不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

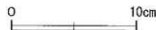
1 極 暗 褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量	7 黒 色	ローム粒子少量
2 黒 褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量	8 極 暗 褐色	ロームブロック少量
3 黒 褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量	9 黒 褐色	ロームブロック・焼土粒子少量
4 黒 褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量・炭化物微量	10 黒 褐色	ロームブロック微量
5 黒 褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量	11 褐色	ローム粒子中量
6 黒 褐色	ローム粒子少量	12 暗 褐色	ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片81点（環3、甕類78）、須恵器片2点（坏類）が窟周辺から多く出土している。129は北東コーナー部の床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀中葉と考えられる。



129



第162図 第67号住居跡出土遺物実測図

第67号住居跡出土遺物観察表（第162図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
129	土師器	鉢	17.8	10.4	6.0	長石・雲母	にぶい黄褐色	普通	口縁部横ナデ 輪積み後ヘラナデ	床面	80% Pl.25 二次焼成

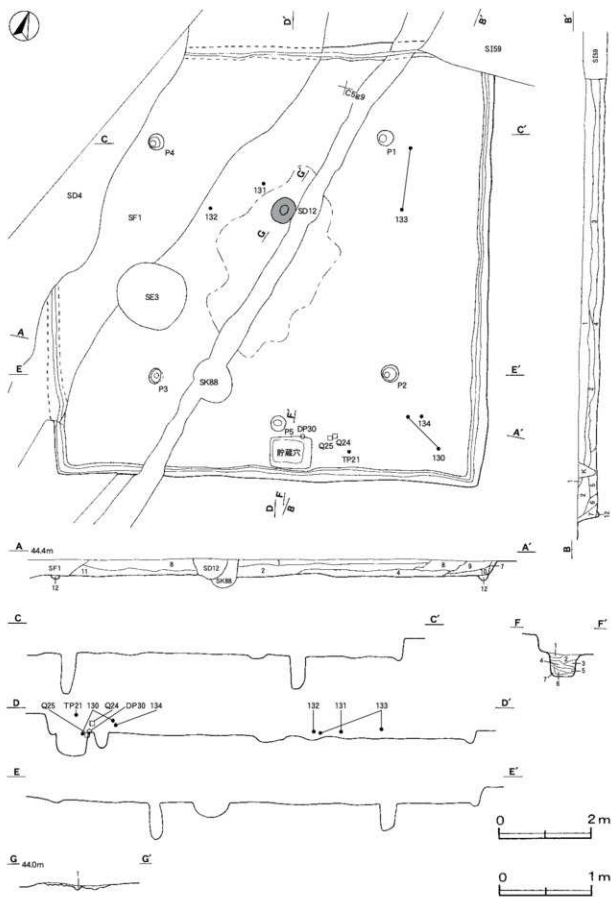
第68号住居跡（第163～165図）

位置 調査区Ⅱ区C 5b8区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第59号住居、第4・12号溝、第3号井戸、第1号道路、第88号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸9.28m、短軸9.22mの方形で、主軸方向はN-13°-Wである。壁高は17～40cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が全周し、断面形はU字状である。



第163图 第68号住居跡実測図

炉 ほぼ中央部に位置している。規模は長径56cm、短径36cmの楕円形で、床面をわずかに掘りくぼめた地床炉である。炉床はあまり火熱を受けていない。

伊土層解説

- 1 暗褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量

ピット 5か所。P1～P4は深さ58～91cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P5の深さは29cmで、規模と位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 南壁際中央部に位置している。規模は長軸91cm、短軸68cmの長方形で、深さは45cmである。底面は平坦で、壁はほぼ直立している。

貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|--------|------------------|-------|--------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック微量 |
| 2 暗暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 | 6 褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 7 褐色 | ロームブロック中量 |
| 4 暗暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック微量 | | |

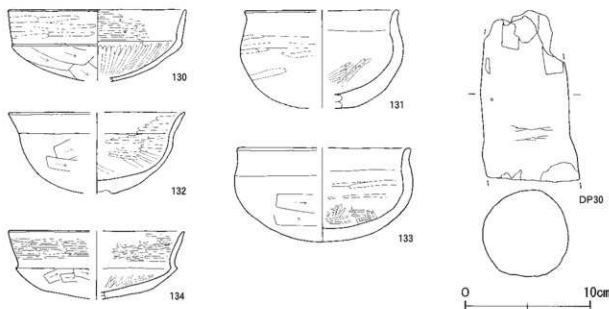
覆土 12層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

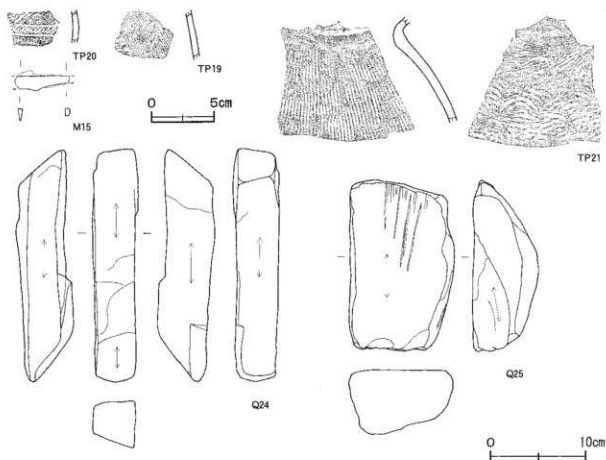
- | | | | |
|--------|----------------------|--------|----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 7 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 暗暗褐色 | ロームブロック少量 | 8 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土ブロック微量 | 9 褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック微量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量 | 10 暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 11 褐色 | ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子微量 |
| 6 黒褐色 | ローム粒子少量 | 12 褐色 | ローム粒子少量 |

遺物出土状況 土師器片1,277点(坏類304, 埴2, 高坏6, 甕類964, 瓶1), 須恵器片129点(坏類60, 高台付坏3, 蓋6, 甕類58, 瓶1, 瓶1), 土製品3点(支脚), 石器4点(剥片2, 砥石2), 鉄製品1点(刀子)が全域から散在して出土している。また、流れ込んだ弥生土器片29点(甕)も出土している。130は南東部の覆土下層から床面にかけて、131・132は中央部、133は北東部の覆土下層からそれぞれ出土している。134は南東部、Q24は南部の覆土中層、DP30・Q25は南部の床面、TP21は南壁際の覆土上層からそれぞれ出土している。TP19・TP20・M15は東部の覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀後葉と考えられる。



第164図 第68号住居跡出土遺物実測図(1)



第165図 第68号住居跡出土遺物実測図(2)

第68号住居跡出土遺物観察表(第164・165図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
130	土師器	坏	14.0	5.7	-	長石	暗赤褐	普通	口辺部へラ磨き 体部外面へラ削り 内面へラ磨き	覆土下層・床面	90% PL.22
131	土師器	坏	[12.0]	(7.8)	-	長石・赤色粒子	橙	普通	内・外面へラ磨き	覆土下層	25%
132	土師器	坏	[14.0]	6.5	-	長石	明赤褐	普通	体部外面へラ削り 内面へラ磨き	覆土下層	30%
133	土師器	坏	[13.6]	7.5	-	石英・長石・赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面へラ削り 内面へラ磨き	覆土下層	30%
134	土師器	坏	[13.8]	(5.4)	-	長石	明赤褐	普通	口辺部へラ磨き 体部外面へラ削り 内面へラ磨き	覆土中層	30%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP19	弥生土器	壺	石英・長石	灰・黄褐	普通	胴部見の甲節縄文	覆土中	
TP20	弥生土器	壺	長石・雲母	黒褐	普通	胴部充填縄文	覆土中	PL.32

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP21	須恵器	壺	石英・長石	灰	普通	体部外面磨子叩き 内面同心円当て具痕	覆土上層	PL.33

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP30	支脚	(13.6)	7.8	6.8	(74.0)	土製(石英・長石・雲母)	へラナデ	床面	
Q21	碇石	25.0	5.0	5.6	1060.0	砂岩	碇面5面	覆土中層	PL.35
Q25	碇石	18.1	11.0	7.0	1880.0	砂岩	碇面2面	床面	
M15	刀子	(4.3)	1.2	0.4	(5.7)	鉄	基部破片 断面方形・三角形	覆土中	PL.36

第72号住居跡（第166図）

位置 調査区Ⅱ区中部のC5e1区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第66号住居に掘り込まれている。

規模と形状 ほとんどが調査区域外であるため北東コーナー部のみ確認できた。確認できた範囲は南北軸0.90m、東西軸1.08mである。平面形は方形又は長方形と推定され、主軸方向はN-0°である。壁高は72cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦である。

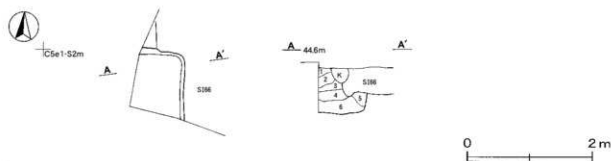
覆土 6層に分層される。ロームブロックを不規則に含む人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|-------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量 | 4 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 5 褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック少量 |

遺物出土状況 土師器片17点（甕類）が覆土上層から中層にかけて散在して出土している。土器は細片のため図示できない。

所見 時期は、重複関係や出土土器及び遺構の様相から、7世紀以前と考えられる。



第166図 第72号住居跡実測図

表11 古墳時代堅穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設				覆土	主な出土遺物	時期	備考 (旧→新)		
								柱	土	石	中						
1	A2J7	N-20°-W	[方形・長方形]	(5.51) × (4.90)	20	平坦	一部	1	-	1	-	-	人為	土師器	5世紀中葉以前	本跡→S134・35	
3	A2J9	N-24°-W	[方形・長方形]	5.92 × (5.52)	15	平坦	(全周)	3	-	3	0	1	人為	土師器	5世紀中葉	本跡→S12, PG1	
4A	A2I8	N-5°-E	方形	5.68 × 5.48	8~10	平坦	(全周)	1	1	1	覆1	-	人為	土師器、須恵器、磁石、刀子	6世紀後葉	S14B・9→本跡	
4B	A2I8	N-5°-E	方形	5.14 × 5.12	10~12	平坦	(ほぼ全周)	4	1	-	覆1	1	人為	土師器	6世紀後葉	S19→本跡→S14A	
5	A3e1	N-5°-E	[方形・長方形]	5.12 × (4.00)	16~20	平坦	(全周)	2	2	-	-	-	人為	土師器	6世紀後葉		
8	C4a3	N-23°-E	[方形・長方形]	8.51 × (3.81)	23	平坦	(全周)	1	-	9	-	1	人為	土師器、須恵器、双孔門板、白玉	5世紀後葉	本跡→S114, SK27, PG8	
9	A2I8	N-23°-W	[方形・長方形]	(3.80) × (2.40)	15	平坦	(全周)	-	-	-	-	-	不明	土師器、須恵器	5世紀前葉	本跡→S14A・B, SK4	
12	B3f0	N-9°-E	方形	5.74 × 5.56	27~32	平坦	(全周)	4	1	3	覆1	1	人為	土師器、須恵器、不明土製品	7世紀前葉	S113・28→本跡	
13	B4g1	N-7°-W	方形	6.16 × 5.81	20~36	平坦	(全周)	5	1	3	0	2	1	人為	弥生土器、土師器、須恵器、有孔門板、刀子、ガラス小玉	5世紀中葉	SK15→本跡→S112

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設				扉土	主な出土遺物	時期	備考 (旧→新)	
								土	瓦	伊	石					
14	C463	N-33°-E	[方形・ 長方形]	3.29 × (1.64)	37	平埧	[全周]	-	-	-	-	自然	土師器、鉄鏡	7世紀前半	SI 8 → 本跡	
15	B310	N-13°-E	[方形・ 長方形]	5.27 × (1.94)	25	平埧	[全周]	2	-	2	-	人為	土師器	7世紀前半	SI16 → 本跡	
16	B319	N-19°-W	[方形・ 長方形]	(3.88) × (3.40)	30	平埧	-	1	-	1	-	人為	土師器	5世紀中葉	本跡→SI15, SK 7	
17	B411	N-6°-W	長方形	3.32 × 2.90	25	平埧	ほぼ 全周	-	1	-	覆1	-	自然	土師器、須恵器	6世紀後半	SK15 → 本跡 → SK 9
21	A335	N-12°-W	[方形・ 長方形]	(4.30) × (2.35)	18~22	平埧	-	-	-	-	-	人為	土師器、須恵器、弥 土土器	7世紀以前	本跡→SI20	
22	A339	N-16°-E	[方形・ 長方形]	(8.30) × (4.57)	6	平埧	-	2	-	4	伊1	不明	土師器、須恵器、鉄 鏡等	5世紀前半	本跡→SD 1	
23	A336	N-7°-W	[方形・ 長方形]	(4.84) × (4.40)	2	平埧	-	2	1	-	-	不明	土師器	5世紀中葉	本跡→SI20, SK28, PG 2	
25	B3c5	N-15°-W	方形	6.04 × 5.68	15	平埧	-	4	1	1	覆1	-	人為	土師器、須恵器	6世紀後半	SI26~27, SK 48 → 本跡 → SE 1, SK31, PG 7
26	B3c4	N-32°-W	方形	5.20 × 5.12	22~24	平埧	[全周]	4	-	5	伊1	1	人為	土師器、双孔円板 制形模造品	5世紀中葉	本跡→SI25~ 33
27	B336	N-40°-E	隅丸方形	4.68 × 4.48	2~8	平埧	-	3	1	1	-	不明	弥生土器、土師器、 須恵器	5世紀後半	本跡→SI25, SK 6, PG 7	
28	B4e1	N-0°	[方形・ 長方形]	(5.02) × (4.86)	8	平埧	[全周]	-	-	-	-	-	人為	土師器	5世紀前半	本跡→SI12, SK38, PG 6
31	B3d3	N-40°-E	[方形・ 長方形]	(4.00) × (1.91)	24~28	平埧	-	1	-	-	-	1	人為	土師器	5世紀前半	本跡→SI33
33	B3c3	N-12°-E	[方形・ 長方形]	3.46 × (2.90)	28	平埧	-	-	-	-	-	-	自然	土師器、須恵器、管 玉	6世紀中葉	SI26~31 → 本 跡
34	B2a8	N-0°	[方形・ 長方形]	(4.16) × (2.45)	25~32	平埧	一部	1	-	-	覆1	-	人為	土師器、須恵器、紡 錘車	6世紀以降	SI 1 → 本跡 → SK39
35	A217	N-3°-E	[方形・ 長方形]	5.26 × (4.00)	10~13	平埧	[全周]	2	1	1	-	-	人為	土師器、支脚	6世紀中葉	SI 1 → 本跡
36	B3f5	不明	不明	(6.17) × (4.02)	-	平埧	-	-	-	-	-	-	人為	土師器	5世紀以前	本跡→SI37 ~40
37	B3e4	N-7°-W	[方形・ 長方形]	(5.20) × 5.60	15~23	平埧	-	3	1	3	-	-	人為	弥生土器、土師器、 須恵器、土玉、小玉	6世紀前半	SI36 → 本跡 → SI38
38	B3d5	N-5°-E	[方形・ 長方形]	(4.88) × 4.02	20~25	平埧	-	4	1	3	覆1	-	自然	土師器、須恵器、支 脚、制形模造品	6世紀中葉	SI36~37 → 本 跡 → SI39~40
40	B3d6	N-3°-W	方形	5.57 × 5.33	20~32	平埧	[全周]	3	1	4	覆1	-	自然	弥生土器、土師器、 須恵器、支脚	6世紀後半	SI38 → 本跡 → SI39~42
41	B3d6	N-13°-E	[方形・ 長方形]	(1.26) × (0.92)	6~9	平埧	-	-	-	-	-	-	人為	土師器、須恵器	7世紀以降	本跡→SI39, SK44
42	B3d6	N-12°-E	[方形・ 長方形]	(4.78) × 3.78	8~12	平埧	-	-	-	-	覆1	-	自然	土師器、須恵器	6世紀後半	SI 40 → 本跡 → SI39
43	B3c7	N-20°-E	[方形・ 長方形]	(5.60) × (5.60)	-	平埧	-	3	-	5	伊1	-	不明	土師器、須恵器	5世紀後半 以前	本跡→SD 2, SK42~45, SA 4
47	B4d8	N-6°-E	方形	(7.90) × 7.82	18~34	平埧	一部	2	2	-	覆1	1	人為	土師器、須恵器、支 脚	6世紀中葉	SD 2 → 本跡 → SD 6
51	B534	N-16°-W	[方形・ 長方形]	(5.52) × (5.34)	48~58	平埧	[全周]	1	-	1	-	1	人為	弥生土器、土師器、 須恵器、磨石	5世紀前半	本跡→SI50
55	C5d0	N-19°-E	方形	4.32 × 4.32	32~32	平埧	全周	4	2	1	伊2	1	自然	弥生土器、土師器、 須恵器、支脚	5世紀後半	本跡→SI56~ 59
61	C410	N-25°-E	方形	5.84 × 5.58	51~62	平埧	全周	4	1	-	覆1	-	自然	弥生土器、土師器、 須恵器、支脚、鉄鏡、 鏝、釘	7世紀中葉	SK78 → 本跡 → SD 8
62	B419	N-6°-E	方形	6.30 × 6.02	34~46	平埧	[全周]	4	1	2	伊1	1	人為	土師器、須恵器、砥 石、制形模造品	5世紀中葉	SK71 → 本跡 → SI63, SD 6・7, SK73, 第1号墓坑
64	C5d5	N-24°-E	方形	5.17 × 5.12	53	平埧	全周	4	2	3	覆1	-	自然	弥生土器、土師器、 須恵器、砥石、白土 刀子、鉄滓	7世紀後半	SK84 → 本跡 → SD 9
67	C5f3	N-25°-E	[方形・ 長方形]	(5.67) × (1.26)	26	平埧	[全周]	-	-	-	覆1	1	人為	土師器、須恵器	6世紀中葉	本跡→SD10
68	C516	N-13°-W	方形	9.28 × 9.22	17~40	平埧	[全周]	4	1	-	伊1	1	自然	弥生土器、土師器、 須恵器、支脚、剥片、 砥石、刀子	5世紀後半	本跡→SI59, SD 4~12, SE 3, SF 1, SK88
72	C5e1	N-0°	[方形・ 長方形]	(1.08) × (0.90)	72	平埧	-	-	-	-	-	-	人為	土師器	7世紀以前	本跡→SI66

(2) 土坑

第3号土坑 (第167図)

位置 調査区1区の入3h2区で、標高43mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 径1.10mの円形で、深さは42cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

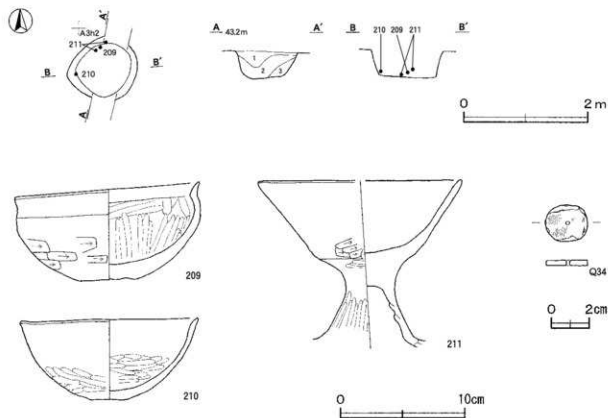
覆土 3層に分層される。ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量
2 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック微量
3 黒褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片35点(環類2, 高坏3, 碗8, 甕類22), 石製品1点(有孔円板)が覆土上層から下層にかけて出土している。209~211は覆土下層から、Q34は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀後葉と考えられる。



第167図 第3号土坑・出土遺物実測図

第3号土坑出土遺物観察表 (第167図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
209	土師器	碗	14.6	7.7	4.5	長石・雲母・黒色 粘土	橙	普通	口縁部横子で 体部外面へラ削り 内面 へラ磨き	覆土下層	95% PL.24
210	土師器	碗	14.1	6.5	3.0	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	体部内・外面へラ磨き	覆土下層	90% PL.24
211	土師器	高坏	16.1	(13.4)	-	石英・長石・雲母	にじみ褐	普通	坏部下端へラ削り 脚部へラ磨き	覆土下層	50%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q34	有孔円板	2.3	0.3	0.2	2.9	滑石	一方向からの穿孔 両面研磨	覆土中	80% PL.35

第16号土坑（第168図）

位置 調査区I区のB3d5区で、標高43mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.60m、短径1.42mの楕円形で、長径方向はN-13°-Eである。深さは100cmで、底面は平坦である。壁は直立している。

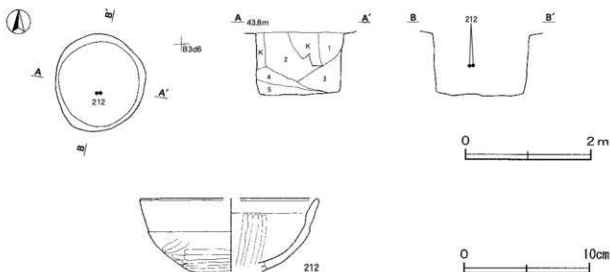
覆土 5層に分層される。ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|--------|------------------|--------|--------------------|
| 1 極暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 4 極暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 5 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック微量 |
| 3 極暗褐色 | ロームブロック少量 | | |

遺物出土状況 土師器片14点（高坏5、甕類9）が覆土中層を中心に出土している。また、流れ込んだ弥生土器片1点（甕）も出土している。212は覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀中葉と考えられる。



第168図 第16号土坑・出土遺物実測図

第16号土坑出土遺物観察表（第168図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
212	土師器	坏	[14.0]	(5.7)	-	右赤・長石・富母・赤色粒子	赤褐	普通	口縁部横ナゲ	体内内・外面へク磨き	覆土中層	40%

第46号土坑（第169図）

位置 調査区I区のB3c6区で、標高43mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径0.55m、短径0.47mである。平面形は楕円形で、長径方向はN-35°-Eである。深さは29cmで、底面は皿状である。壁は外傾して立ち上がっている。

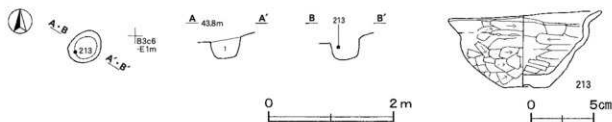
覆土 単一層のため堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片1点（手捏土器）が出土している。213は覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀中葉と考えられる。



第169図 第46号土坑・出土遺物実測図

第46号土坑出土遺物観察表（第169図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
213	土器器	手捏土器	12.0	6.2	3.5	長石・雲母	にじみ橙	普通	体部内・外面へラ削り	覆土中層	90% 片25

第47号土坑（第170図）

位置 調査区Ⅰ区のA3j6区で、標高43mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 径0.30mの円形である。深さは30cmで、底面は皿状である。壁は外傾して立ち上がっている。

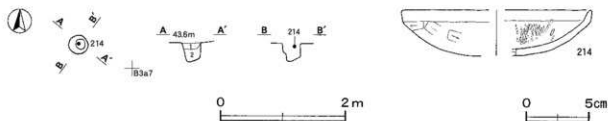
覆土 2層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化物粒子微量 2 黒褐色 ロームブロック・炭化物微量

遺物出土状況 土師器片2点（環類）が出土している。214は覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土土器から7世紀以前と考えられる。



第170図 第47号土坑・出土遺物実測図

第47号土坑出土遺物観察表（第170図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
214	土師器	環	14.9	3.6	-	右赤・長石・赤色粒子	灰褐	普通	体部外面へラ削り 内面へラ磨き	覆土上層	20%

第49号土坑（第171図）

位置 調査区Ⅱ区のB3e4区で、標高43mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 南西部が調査区域外であるため、確認できた範囲は長径0.72m、短径0.40mである。平面形は

不定形と推定され、長径方向はN-57°-Wである。深さは18cmで、底面は皿状である。壁は外傾して立ち上がっている。

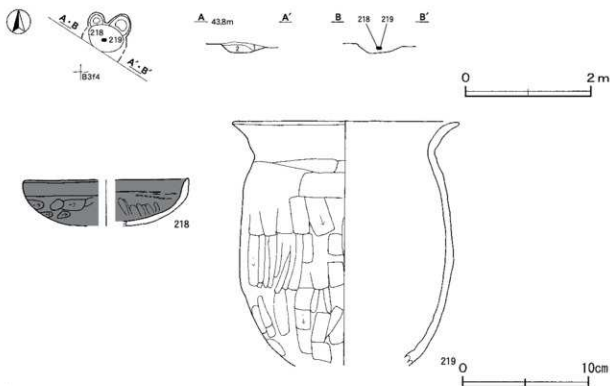
覆土 2層に分層される。ブロックを含む不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- 1 珉 褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 2 灰黄褐色 ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土ブロック微量

遺物出土状況 土師器片57点（坏類2，甕類55）が覆土上層から下層にかけて出土している。218・219は覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第171図 第49号土坑・出土遺物実測図

第49号土坑出土遺物観察表（第171図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
218	土師器	坏	(13.0)	(3.7)	-	長石・雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラ削き	覆土中層	50%
219	土師器	甕	17.5	(19.4)	-	石英・長石	に5%赤褐	普通	口縁部横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ	覆土中層	80% PL28

第62号土坑（第172図）

位置 調査区Ⅱ区のC5a9区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第56号住居に掘り込まれている。

規模と形状 西部は調査区域外であるため、確認できた範囲は長径3.00m、短径1.70mである。平面形は楕円形と推定され、長径方向はN-77°-Wである。深さは10cmで、底面は平坦である。壁は緩やかに外傾して立

ち上がっている。

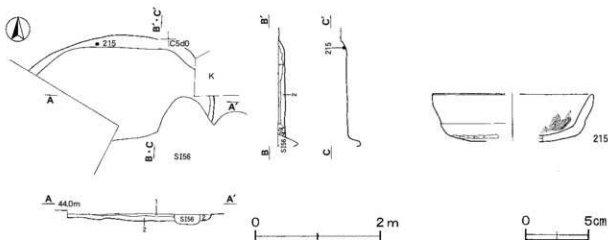
覆土 4層に分層される。ブロックを含む不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|-------|-------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量 | 3 暗褐色 | 焼土粒子少量、ロームブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック微量 | 4 暗褐色 | 粘土ブロック・焼土粒子少量、ロームブロック微量 |

遺物出土状況 土師器片12点（坏類3，甕類9）が覆土中層を中心に出土している。また、流れ込んだ弥生土器片1点（甕）も出土している。215は底面から出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第172図 第62号土坑・出土遺物実測図

第62号土坑出土遺物観察表（第172図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
215	土師器	坏	[12.6]	(3.8)	-	石英・長石	にじみ・艶	普通	口縁部横ナデ へら置き	体部外面へら削り 内面	底面	2B

第75号土坑（第173図）

位置 調査区Ⅱ区のC5e6区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.32m、短径1.18mである。平面形は楕円形で、長径方向はN-22°-Wである。深さは48cmで、底面は平坦である。壁は内傾して立ち上がっている。

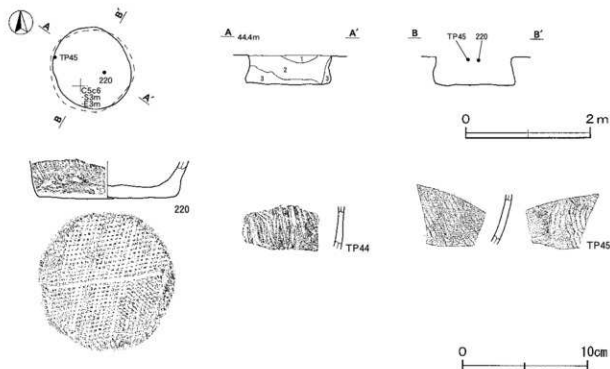
覆土 3層に分層される。ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|--------|-----------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック微量 | 3 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 極暗褐色 | ロームブロック中量 | | |

遺物出土状況 土師器片1点（甕類）、須恵器片2点（坏類1，甕類1）が覆土上層を中心に出土している。また、流れ込んだ弥生土器片（甕）6点も出土している。220・TP45は覆土上層から、TP44は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から古墳時代と考えられる。



第173図 第75号土坑・出土遺物実測図

第75号土坑出土遺物観察表 (第173図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
220	弥生土器	甕	-	(3.0)	10.9	石英・雲母	に5%黄緑	普通	胴部下部条痕文脇文後磨き消し 底部刷代目	覆土上層	5%
TP44	弥生土器	甕				石英・長石・金雲母	黒褐	普通	胴部縦位の条痕文	覆土中	
TP45	弥生土器	甕				長石・雲母・細砂	灰白	普通	体部外面縦位の平行明き 内面同心円当て具痕	覆土上層	

第87号土坑 (第174図)

位置 調査区Ⅱ区中部のC5e1区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第66号住居、第89号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 確認できた範囲は長径1.26m、短径1.12mである。平面形は楕円形で、長径方向はN-48°-Wである。深さは30cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

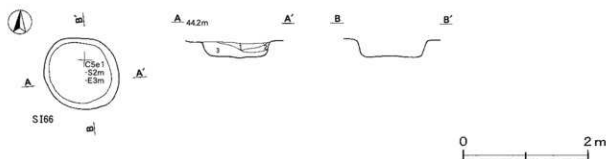
覆土 3層に分層される。ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック多量
2 暗褐色 ローム粒子少量
3 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片4点(増2、甕類2)が覆土中層を中心に出土している。細片のため図示できない。

所見 時期は、重複関係や出土土器から古墳時代中期と考えられる。



第174図 第87号土坑実測図

表12 古墳時代土坑一覧表

番号	位置	長短方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考(旧→新)
				長軸×短軸(m)	深さ(cm)					
3	A3h2	-	円形	1.10 × 1.10	42	外傾	平坦	人為	土師器、有孔門板	
16	B3d5	N-13°-E	楕円形	1.60 × 1.42	100	直立	平坦	人為	弥生土器、土師器	
36	B3c6	N-36°-E	楕円形	0.55 × 0.47	29	外傾	皿状	不明	土師器	
47	A3j5	-	円形	0.30 × 0.30	30	外傾	皿状	自然	土師器	
49	B3e4	N-57°-W	[不定形]	[0.72] × [0.40]	18	外傾	皿状	人為	土師器	
62	C5d9	N-77°-W	[楕円形]	(3.00) × (1.70)	10	外傾	平坦	人為	弥生土器、土師器	本跡→S16
75	C5c6	N-22°-W	楕円形	1.32 × 1.18	48	内傾	平坦	人為	弥生土器、土師器、須恵器	
87	C5e1	N-8°-W	楕円形	1.26 × 1.12	30	外傾	平坦	人為	土師器	本跡→S66, S89

3 奈良・平安時代の遺構と遺物

竪穴住居跡23軒、土坑2基が確認された。以下、確認された遺構及び遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第2号住居跡 (第175・176図)

位置 調査区1区のB2a9区で、標高43mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第3号住居跡を掘り込み、第1号方形竪穴遺構、第29・50号土坑に掘り込まれている。

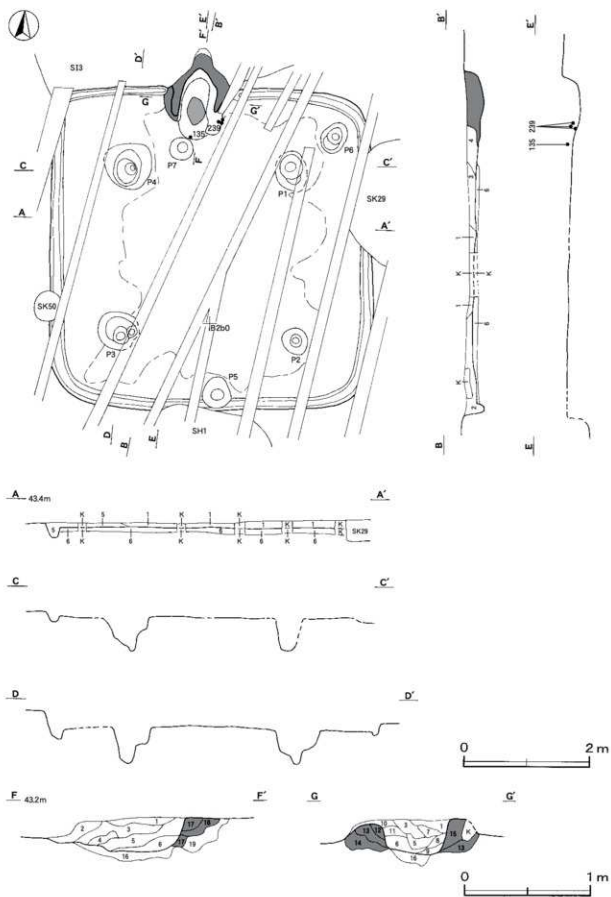
規模と形状 一边が5.35mの方形で、主軸方向はN-4°-Wである。壁高は13~27cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。貼床はロームブロックを主体とする灰褐色土で、厚さは4~10cmである。壁溝が全周し、断面形はU字状である。

竈 北壁の中央部に付設されている。焚口部から煙道部まで148cm、袖部幅122cmである。袖部は地山に砂質粘土を含んだローム土で構築されており、内側が火熱を受けて赤変している。火床部は床面を11cm掘りくぼめた部分に暗褐色土を埋め戻した平面面を利用している。火床面は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ32cm掘り込まれ、ほぼ直立している。竈土層断面図の第4・7層が天井部の崩落土に該当する。

竈土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、砂質粘土ブロック微量	4 褐色	砂質粘土ブロック多量、焼土ブロック少量
2 褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量	5 濃い赤褐色	焼土ブロック多量、ローム粒子少量、砂質粘土粒子微量
3 暗褐色	焼土粒子中量、ロームブロック少量、砂質粘土ブロック微量	6 赤褐色	焼土ブロック多量、ローム粒子少量
		7 濃い褐色	砂質粘土ブロック中量、ローム粒子・焼土粒子少量



第175图 第2号住居跡実測図

8 赤褐色	焼土粒子多量、ローム粒子少量	14 黒褐色	ロームブロック中量、焼土粒子少量
9 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量	15 灰褐色	砂質粘土ブロック・焼土粒子中量
10 暗褐色	砂質粘土ブロック中量、焼土粒子少量	16 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量
11 暗赤褐色	焼土粒子多量、砂質粘土ブロック少量、ロームブロック微量	17 にぶい褐色	焼土粒子多量、ローム粒子・砂質粘土粒子中量
12 灰褐色	砂質粘土ブロック多量、焼土粒子中量	18 黒褐色	焼土粒子多量、ローム粒子・砂質粘土粒子中量
13 にぶい褐色	ローム粒子・焼土粒子少量	19 にぶい褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック微量

ピット 7か所。P1～P4は深さ46～58cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ38cmで、規模と位置から、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6・P7は深さ27cm・54cmで、性格は不明である。

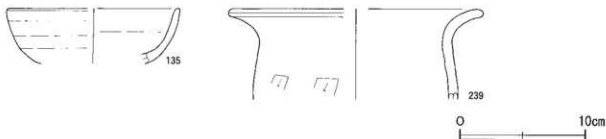
覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積で、第6層は貼床の構築土層である。

土層解説

1 黒褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック少量	4 黒褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化物微量
2 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量	5 褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量
3 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量	6 灰褐色	ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片349点（坏類58、高坏8、甕類283）、須恵器片5点（坏）が全城から散在して出土している。135は竈前焚土層の覆土下層、239は竈右袖部脇の床面からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀初頭と考えられる。



第176図 第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表（第176図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
135	須恵器	坏	13.6	(4.3)	-	石英・長石	黄沢	普通	内・外面口ロナデ	覆土下層	15%
239	土師器	甕	19.6	(7.2)	-	石英・長石・雲母	にぶい褐色	普通	体部外面へツ刷り	床面	5%

第6号住居跡（第177～179図）

位置 調査区1区B4h3区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第43号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 南東コーナー部が調査区域外であるため、確認された範囲は南北軸4.40m、東西軸4.40mの方形又は長方形と推定され、主軸方向はN-7°-Eである。壁高は18～27cmで、外傾して立ち上がっている。

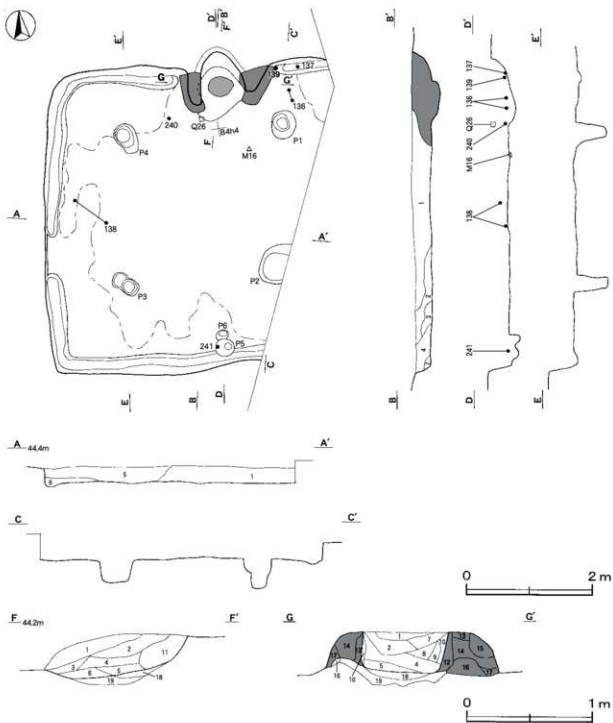
床 平地で、竈前部から中央部が踏み固められている。壁溝がほぼ全周し、断面形はU字状である。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで106cmで、袖部幅が139cmである。袖部は床面と同じ高さの地山に砂質粘土・細礫を含んだローム土で構築されている。火床部は床面を9cm掘りくぼめ、暗赤褐色土、暗褐色土を埋め戻した平地面を利用してあり、火床面は火熱を受けて赤変硬化している。煙

道部は壁外へ49cm掘り込まれ、緩やかに外傾して立ち上がっている。竈土層断面図の第1・2・7・10層が天井部の崩落土に該当する。

竈土層解説

- | | | | |
|----------|-------------------|--------|--------------------------|
| 1 に近い黄褐色 | 砂質粘土ブロック少量、炭化粒子微量 | 6 黒 褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子少量、砂質粘土ブロック微量 |
| 2 に近い黄褐色 | 砂質粘土ブロック中量 | 7 褐色 | 砂質粘土ブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土粒子中量 | 8 赤 褐色 | 焼土粒子中量、砂質粘土ブロック微量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、炭化粒子微量 | | |
| 5 暗赤褐色 | 焼土粒子少量、砂質粘土ブロック微量 | | |



第177図 第6号住居跡実測図

- | | | | |
|-----------|---------------------------|----------|---------------------------------|
| 9 黒褐色 | 砂質粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 | 15 黒褐色 | ロームブロック・炭化物少量、焼土ブロック・砂質粘土ブロック微量 |
| 10 暗赤褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土ブロック中量 | 16 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量、焼土ブロック微量 |
| 11 極暗赤褐色 | 焼土粒子中量、砂質粘土ブロック・炭化粒子微量 | 17 暗褐色 | 砂質粘土ブロック少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 12 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック中量、砂質粘土ブロック少量、細砂微量 | 18 暗赤褐色 | 焼土ブロック少量 |
| 13 灰黄褐色 | 砂質粘土ブロック少量、焼土ブロック・細砂微量 | 19 極暗赤褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子微量 |
| 14 にぶい赤褐色 | 砂質粘土ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・細砂微量 | | |

ピット 6か所。P1～P4は深さ34～46cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ16cmで、規模と位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ20cmで、P5に立て替える以前の出入り口施設に伴うピットと考えられる。

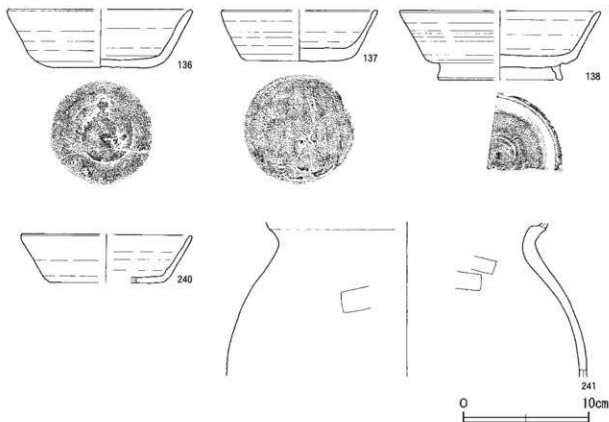
覆土 7層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

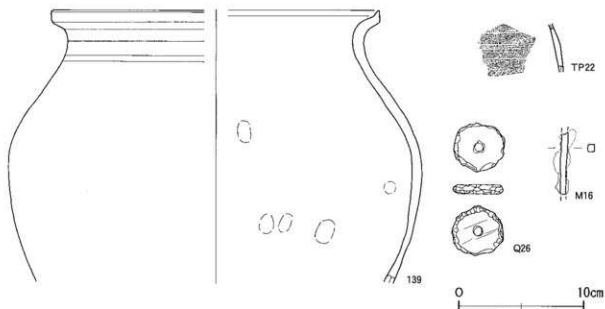
- | | | | |
|-------|--------------------------------|-------|-------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 | 4 黒褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化物・砂質粘土粒子微量 | 5 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | 砂質粘土粒子少量、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック微量 |
| | | 7 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 |

遺物出土状況 土師器片241点(坏類50, 甎1, 甕類190), 須恵器片42点(坏類32, 高台付坏2, 甕類8), 石製品1点(紡錘車), 鉄製品1点(釘)が全城から散在して出土している。また、流れ込んだ弥生土器片3点(壺)も出土している。136・137・139・240・M16は北部の床面, 241はP5の覆土上層, 138は西部の覆土下層, Q26は北部の覆土上層からそれぞれ出土している。TP22は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀中葉と考えられる。



第178図 第6号住居跡出土遺物実測図(1)



第179図 第6号住居跡出土遺物実測図(2)

第6号住居跡出土遺物観察表(第178・179図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
136	須恵器	坏	[14.6]	4.6	8.0	石英・長石・黒色 粒子・白色針状 鉱物	灰色	普通	内・外面ロクロナデ 底部回転ヘラ切り後 ナデ	床面	60%
137	須恵器	坏	[12.4]	4.0	8.7	石英・長石	灰黄	普通	内・外面ロクロナデ 底部ヘラ切り後一方 向の削り	床面	70% ヘラ起号「X」
240	須恵器	坏	[13.4]	3.8	[9.0]	石英・長石	灰	普通	内・外面ロクロナデ	床面	25%
138	須恵器	高台付坏	[15.8]	5.6	[9.8]	石英・長石・黒色 粒子	灰黄	普通	内・外面ロクロナデ 底部回転ヘラ削り後 高台貼り付	覆土下層	20%
139	土師器	甕	[26.0]	[21.8]	-	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	口縁部横ナデ 体部内面指頭痕	床面	30%
241	土師器	甕	-	[12.2]	-	石英・長石・雲母	にぶい黄褐	普通	体部内・外面ヘラナデ	P5覆土上層	5%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP22	弥生土器	壺	石英・長石	にぶい褐色	普通	胴部横位の条痕文	覆土中	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q26	紡錘車	4.0	0.7	0.8	16.7	粘板岩	全面研磨 二次加工	覆土上層	P135

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M16	釘	5.0	0.5	0.6	(9.4)	鉄	基部破片 断面四角形	床面	

第7号住居跡(第180・181図)

位置 調査区I区のB4e2区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号掘立柱建物に掘り込まれている。

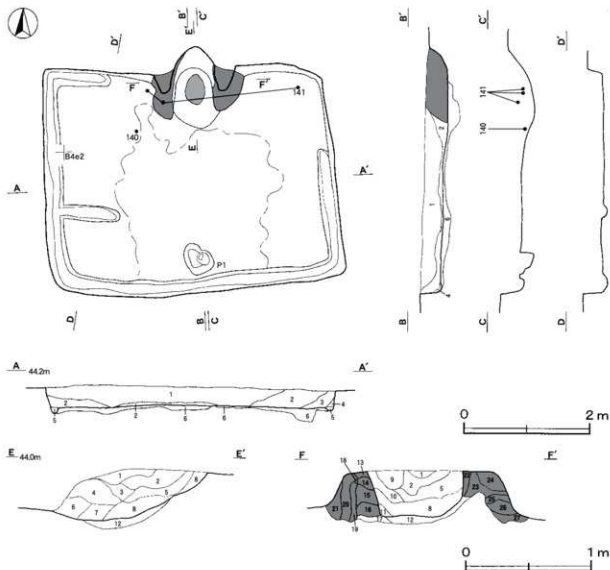
規模と形状 長軸4.70m、短軸3.62mの長方形で、主軸方向はN-1°-Wである。壁高は26~33cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、竈前面から南壁にかけて踏み固められている。貼床は、ロームブロックを主体とする明褐色土で、厚さは2~24cmである。壁溝が北東コーナー部を除き周回しており、断面形はU字状である。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで130cmで、袖部幅が148cmである。袖部は床面と同じ高さの地山に砂質粘土を含んだローム土で構築されている。火床部は床面を皿状に12cm掘りくぼめ、火床面は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ53cm掘り込まれ、緩やかに外傾して立ち上がっている。竈覆土断面図の第2・7・9層が天井部の崩落土に該当する。

竈土層解説

- | | | | |
|----------|--------------------------------------|-----------|----------------------------------|
| 1 にぶい褐色 | ロームブロック・砂質粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化物・細砂微量 | 9 灰オリーブ色 | 砂質粘土ブロック多量、ロームブロック・焼土粒子少量、細砂微量 |
| 2 オリーブ褐色 | 砂質粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック・細砂少量、炭化物微量 | 10 赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック中量、砂質粘土ブロック少量、細砂微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・砂質粘土ブロック・細砂少量 | 11 極暗褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック少量、砂質粘土ブロック・細砂微量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量、細砂微量 | 12 にぶい赤褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子少量 |
| 5 暗褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック・砂質粘土ブロック少量、細砂微量 | 13 極暗褐色 | 砂質粘土ブロック多量、焼土粒子微量 |
| 6 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量、炭化物・細砂微量 | 14 にぶい赤褐色 | 砂質粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土粒子少量 |
| 7 黒褐色 | 砂質粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック・細砂少量 | 15 にぶい褐色 | 砂質粘土ブロック多量、ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 8 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック・砂質粘土ブロック少量、炭化物微量 | 16 褐色 | ロームブロック・砂質粘土ブロック少量、焼土粒子微量 |
| | | 17 褐色 | ローム粒子中量 |
| | | 18 にぶい赤褐色 | 砂質粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量 |
| | | 19 暗褐色 | ローム粒子少量 |



第180図 第7号住居跡実測図

- 20 暗褐色 砂質粘土ブロック中量、ローム粒子・焼土粒子・細礫少量、炭化粒子微量
 21 黒褐色 砂質粘土粒子中量、ローム粒子少量
 22 暗赤褐色 砂質粘土ブロック・焼土粒子中量、ローム粒子微量
 23 灰褐色 砂質粘土ブロック多量、ローム粒子・焼土粒子微量
 24 灰褐色 砂質粘土ブロック中量、ローム粒子・砂質粒子少量、焼土粒子微量
 25 暗褐色 砂質粘土ブロック・ローム粒子少量
 26 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
 27 暗褐色 ローム粒子微量

ピット 深さ21cmで、規模と位置から出入り口施設に伴うピットであると考えられる。

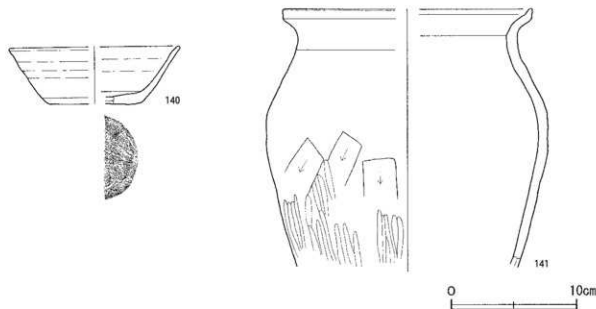
覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積で、第6層は貼床の構築土層である。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量
 2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量
 3 暗褐色 ロームブロック少量、炭化物微量
 4 灰褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量
 5 灰褐色 ロームブロック少量
 6 明褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片382点（坏類73，高坏1，蓋1，甕類307），須恵器片19点（坏類11，高台付坏2，蓋1，甕類5）が全域から散在して出土している。また、流れ込んだ弥生土器片1点（蓋）も出土している。140・141は北部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。



第181図 第7号住居跡出土遺物実測図

第7号住居跡出土遺物観察表（第181図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
140	須恵器	坏	[13.4]	4.5	[7.0]	石英・長石	灰	普通	内・外面ロクロナゲ 底部へラ切り後ナゲ	覆土下層	30%
141	土師器	甕	[19.8]	(20.5)	-	石英・長石	橙	普通	口縁部横ナゲ 体部外面へラ削り後磨き	覆土下層	20%

第10号住居跡（第182図）

位置 調査区I区のB4f4区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第11号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 ほとんどが調査区域外であるため、確認できた範囲は南北軸3.53m、東西軸0.94mである。平面

形は方形又は長方形と推定され、主軸方向は $N-5^{\circ}-E$ である。壁高は15cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝がほぼ全周し、断面形はU字状である。

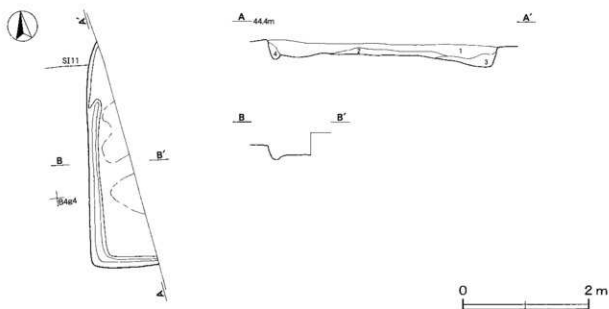
覆土 4層に分層される。ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量 3 黒褐色 ロームブロック中量
2 暗褐色 ロームブロック少量 4 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片25点（環類1，甕類24），須恵器片2点（環類1，高台付環1）が全城から散在して出土している。細片のため図示できない。

所見 時期は、遺構の様相及び出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第182図 第10号住居跡実測図

第11号住居跡（第183図）

位置 調査区1区のB4f3区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第10号住居に掘り込まれている。

規模と形状 東部が調査区域外であるため、確認できた範囲は南北軸2.84m、東西軸1.86mである。平面形は方形又は長方形と推定され、主軸方向は $N-4^{\circ}-E$ である。壁高は8～10cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が南西コーナー一部壁際を周回しており、断面形はU字状である。

ピット 深さ18cmで、規模と位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

ピット土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量 3 灰褐色 炭化粒子多量、ローム粒子中量
2 褐色 ロームブロック多量、炭化粒子少量

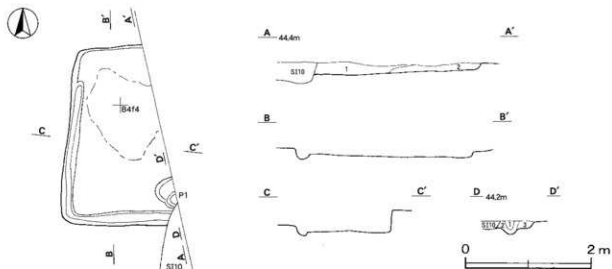
覆土 2層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

1 灰褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量 2 黒褐色 ロームブロック少量、炭化物微量

遺物出土状況 土師器片48点（甕類）、須恵器片3点（坏類）が全域から散在して出土している。細片のため図示できない。

所見 時期は、重複関係及び出土土器から9世紀中葉以前と考えられる。



第183図 第11号住居跡実測図

第18号住居跡（第184図）

位置 調査区I区のB4g2区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第10号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.39m、短軸3.34mの方形で、主軸方向はN-14°-Eである。壁高は15cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、竈前面から南壁にかけて踏み固められている。壁溝がほぼ全周し、断面形はU字状である。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで76cmで、袖幅が133cmである。袖部は床面と同じ高さの地山に砂質粘土を含んだローム土で構築されており、内側が火熱を受けて赤変している。火床部は床面を20cm掘りくぼめた部分に、黒褐色土を10cm埋め戻した皿状の部分を利用しており、火床面は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ34cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。竈土層断面図の第1層が天井部の崩落土に該当する。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|--------------------------------------|---------|-----------------------------|
| 1 褐色 | 砂質粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック・細礫少量、炭化物微量 | 5 黒褐色 | 焼土ブロック多量、砂質粘土ブロック・細礫少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量、砂質粘土ブロック・炭化物微量 | 6 暗褐色 | 焼土ブロック多量、砂質粘土ブロック・細礫少量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック少量、砂質粘土ブロック・炭化物微量 | 7 灰黄褐色 | 砂質粘土ブロック中量 |
| 4 褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量 | 8 灰黄褐色 | 砂質粘土ブロック多量、焼土ブロック・細礫少量 |
| | | 9 黒褐色 | ロームブロック・砂質粘土ブロック少量、焼土ブロック微量 |
| | | 10 灰黄褐色 | ロームブロック・砂質粘土ブロック少量、焼土ブロック微量 |

ピット 深さ18cmで、規模と位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

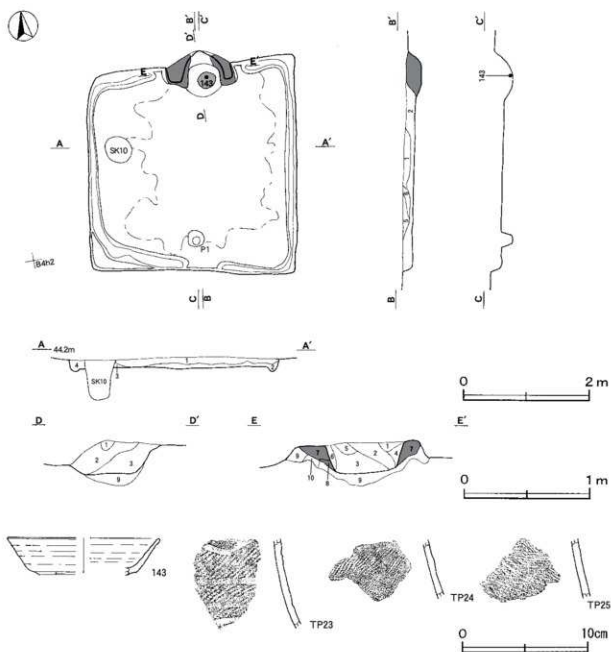
覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------|-------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 極暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片112点（坏類18、高坏1、甕類93）、須恵器片17点（坏類16、甕類1）が全城から散在して出土している。また、流れ込んだ弥生土器片7点（甕）も出土している。143は竈の火床面から、TP23～TP25は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第184図 第18号住居跡・出土遺物実測図

第18号住居跡出土遺物観察表（第184図）

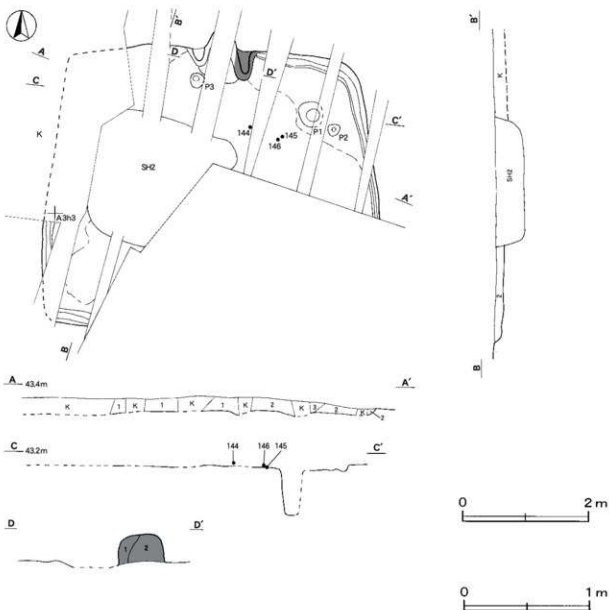
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
143	瀬底器	坏	12.0	(2.8)	-	石英・黒色粒子	黒灰	普通	内・外面ロクロナデ 体部下端90度へラ削り	竈火床面	5% 自然傾斜着

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
T22	弥生土器	壺	長石	にぶい橙	普通	胴部1段の単節縄文施文後竹管状工具による平行沈線	覆土中	
T24	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	胴部1段の単節縄文	覆土中	PL32
T25	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	黒灰	普通	胴部横位の条痕文	覆土中	PL32

第19号住居跡（第185・186図）

位置 調査区I区のA3g3区で、標高43mほどの台地平埴部に位置している。

重複関係 第2号方形竪穴遺構に掘り込まれている。



第185図 第19号住居跡実測図

規模と形状 南部が調査区域外であるため、確認できた範囲は南北軸4.50m、東西軸4.94mである。平面形は方形又は長方形と推定され、主軸方向はN-13°-Eである。壁高は9cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、竈前面から中央部にかけて踏み固められている。壁溝が北東・南西コーナー部を周回しており、断面形はU字状である。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで100cmで、袖部幅が112cmである。袖部は床面と同じ高さの地山に砂質粘土を含んだローム土で構築されている。火床部及び煙道部は耕作による攪乱を受けているため確認できなかった。

竈土層解説

1 赤褐色 焼土粒子中量、砂質粘土ブロック・ローム粒子少量 2 褐色 砂質粘土ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子微量

ピット 3か所。P1は深さ72cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P2・P3は深さ19cm・25cmで、性格は不明である。

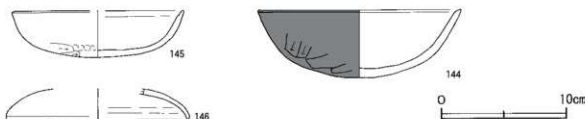
覆土 3層に分層される。重複及び攪乱のため、堆積状況は不明である。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック微量 3 暗褐色 ロームブロック少量
2 極暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片33点（環類17、甕類16）、須恵器片5点（蓋3、甕類2）が全域から散在して出土している。144～146は北部の床面からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀初頭と考えられる。



第186図 第19号住居跡出土遺物実測図

第19号住居跡出土遺物観察表（第186図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
144	土師器	環	16.0	5.4	-	長石・雲母	浅黄橙	普通	体部外面へラ削り	床面	40%
145	土師器	環	13.6	3.7	-	長石・雲母	濃い橙	普通	体部外面へラ削り 指頭痕	床面	40%
146	須恵器	蓋	14.4	2.5	-	長石	黄灰	普通	内・外面クロコナダ	床面	13%

第20号住居跡（第187・188図）

位置 調査区I区のA3j6区で、標高43mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第21・23号住居跡、第32号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 北西コーナー部が調査区域外である。長軸3.42m、短軸3.36mの方形で、主軸方向はN-12°-Eである。壁高は29cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、竈前面から南壁にかけて踏み固められている。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで106cmで、袖部幅が84cmである。袖部は床

面と同じ高さの地山に、砂質粘土を含んだローム土で構築されている。火床部は床面と同じ高さの平坦面を利用しており、火床面は火熱を受けて赤変している。煙道部は壁外へ41cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。竈土層断面図の第3層が天井部の崩落土と考えられる。

竈土層解説

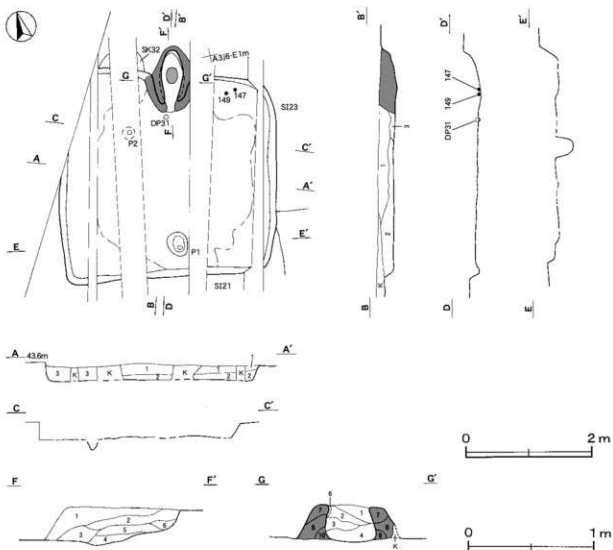
- | | |
|------------------------------------|--|
| 1 黒褐色 焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量、炭化粒子微量 | 6 黒褐色 焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 砂質粘土ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子・ローム粒子微量 | 7 黄褐色 ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量 |
| 3 灰黄褐色 砂質粘土ブロック中量、焼土粒子微量 | 8 黄褐色 砂質粘土ブロック中量、焼土粒子・砂礫微量 |
| 4 黒褐色 炭化粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック微量 | 9 黄褐色 焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量、砂礫微量 |
| 5 暗赤褐色 焼土ブロック少量、砂質粘土ブロック・炭化粒子微量 | 10 灰黄褐色 焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量、ロームブロック微量 |

ピット 2か所。P1は深さ33cmで、規模と位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P2は深さ16cmで、性格は不明である。

覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

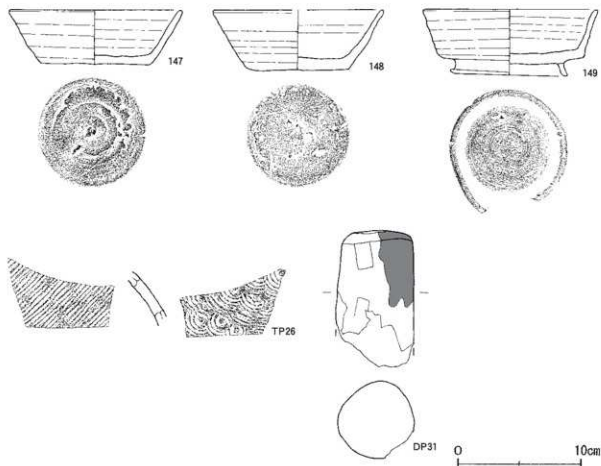
- | | |
|-------------------------------|---------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 | 3 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量 | |



第187図 第20号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片159点（坏類42，甕類117），須恵器片21点（坏類17，高台付坏2，甕類2），土製品1点（支脚）が全域から散在して出土している。147・149・DP31は北部の床面，148・TP26は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は，出土土器から8世紀後葉と考えられる。



第188図 第20号住居跡出土遺物実測図

第20号住居跡出土遺物観察表（第188図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
147	須恵器	坏	13.7	4.4	8.9	石英・長石・雲母	灰黄	普通	内・外面クロコナデ 底部回転ヘラ切り	床面	9区 PL.29
148	須恵器	坏	13.6	4.9	8.3	石英・長石・雲母	灰黄	普通	内・外面クロコナデ 底部回転ヘラ切り後ナデ	覆土中	5区
149	須恵器	高台付坏	13.9	5.5	9.5	石英・長石	灰	普通	内・外面クロコナデ 底部回転ヘラ削り後高台削り付け	床面	9区 PL.30

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP26	須恵器	甕	石英・長石	灰	普通	体部外面斜位の平行明き 内面同心円当て具痕	覆土中	PL.33

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP31	支脚	(11.0)	(6.4)	6.5	(479.0)	土製（石英・長石・雲母）	外面ヘラナデ	床面	覆部材付着

第24号住居跡（第189・190図）

位置 調査区I区のB4c2区で、標高44mほどの台地の平坦部に位置している。

重複関係 第11号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 西部が調査区域外であるため、確認できた範囲は南北軸3.26m、東西軸2.32mである。平面形は方形又は長方形と推定され、主軸方向はN-4°-Wである。壁高は41cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほゞ平坦で、竈前面から中央部が踏み固められている。壁溝がほゞ全周し、断面形はU字状である。

竈 北壁のほゞ中央部に付設されていたと推測される。規模は焚口部から煙道部までが93cmである。袖部は崩壊していたが、火床部の両脇の床面上に粘土痕が確認されたことから袖部と判断した。火床部は床面をわずかに掘りくぼめ、火床面は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ24cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。竈土層断面図の第1・3層が天井部の崩落土に該当する。

竈土層解説

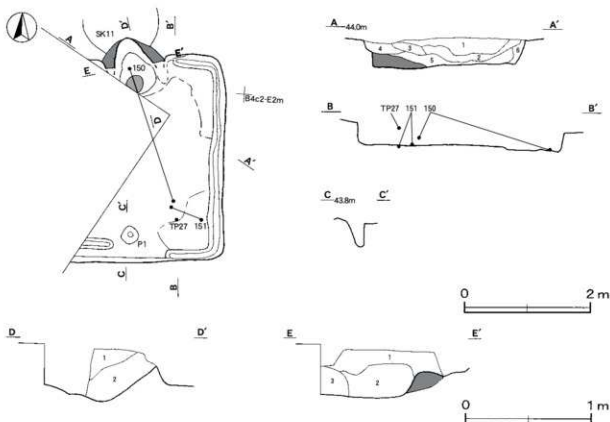
- | | |
|---|--|
| 1 濃い褐色 砂質粘土ブロック中量、焼土ブロック・ローム粒
子微量 | 3 灰黄褐色 砂質粘土ブロック多量、ローム粒子少量、焼土
ブロック・炭化物微量 |
| 2 暗褐色 焼土粒子中量、ロームブロック少量、砂質粘土ブ
ロック・炭化物微量 | |

ピット 深さ41cmで、規模と配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 6層に分層される。不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

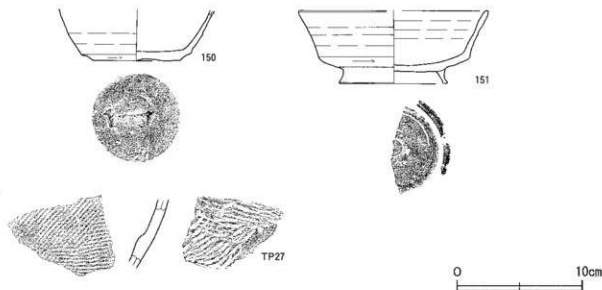
- | | |
|-------------------------------|--------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック微量 | 4 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量 |
| 2 極暗褐色 ロームブロック中量 | 5 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 3 灰褐色 ロームブロック・砂質粘土粒子少量、焼土粒子微量 | 6 褐色 ローム粒子中量 |



第189図 第24号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片143点（坏類23，高坏19，碗2，甕類99），須恵器片20点（坏類10，高台付坏7，甕類3）が全域から散在して出土している。150は、竈の火床面と東部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。151・TP27は南東部の床面，覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 時期は，出土土器から9世紀前葉と考えられる。



第190図 第24号住居跡出土遺物実測図

第24号住居跡出土遺物観察表（第190図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴		出土位置	備考
									内・外面ロクロナデ	底部下縁の転へテ削り		
150	須恵器	坏	-	(4.0)	7.0	長石・雲母	灰褐色	普通	内・外面ロクロナデ	底部下縁の転へテ削り	覆土下層・竈火床面	30%
151	須恵器	高台付坏	15.0	5.8	8.8	長石	黄灰	普通	内・外面ロクロナデ	底部の転へテ削り後高台削り付け	床面	30%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴		出土位置	備考
						体部外面斜位の平行引き	内面同心円当て具痕		
TP27	須恵器	甕	石英・長石	灰	普通	体部外面斜位の平行引き	内面同心円当て具痕	覆土中層	

第39号住居跡（第191・192図）

位置 調査区Ⅰ区のB3e6区で，標高43mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第36・38・40～42号住居跡を掘り込み，第41・44号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南東部は調査区域外である。長軸4.08m，短軸4.04mの方形で，主軸方向はN-10°-Wである。壁高は10～22cmで，外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で，中央部が踏み固められている。

竈 北壁の中央部に付設されている。左袖の一部が擾乱を受けているため，確認できた規模は焚口部から煙道部まで88cm，袖部幅は106cmと推定される。袖部は床面と同じ高さの地山に，砂質粘土を含んだローム土で構築されている。火床部は床面をわずかに掘りくぼめ，火床面は火熱を受けて赤変している。煙道部は壁外にわずかに掘り込まれ，外傾して立ち上がっている。竈土層断面図の第4・5層が天井部の崩落土に該当する。

覆土層解説

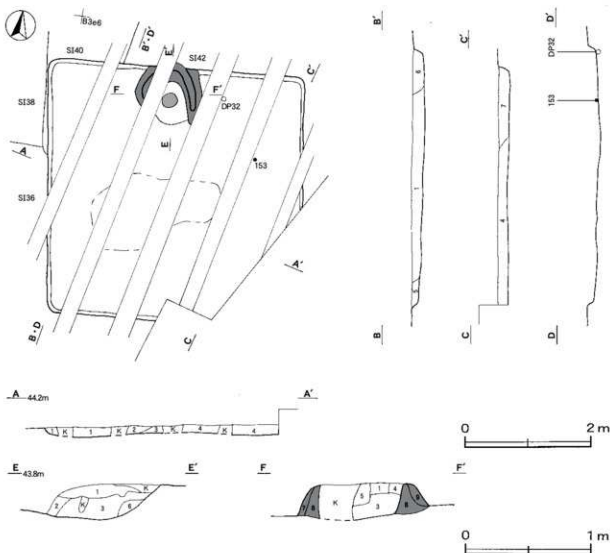
- | | | | |
|--------|----------------------------------|-------|----------------------------------|
| 1 黒褐色 | 焼土ブロック少量、砂質粘土ブロック・炭化粒子微量 | 7 黒褐色 | ロームブロック・砂質粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 黒褐色 | 砂質粘土ブロック少量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量 | 9 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量、砂質粘土ブロック微量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量、炭化粒子微量 | | |
| 5 暗赤褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土ブロック・炭化粒子少量 | | |
| 6 黒褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土ブロック・炭化粒子少量、ロームブロック微量 | | |

覆土 7層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|-----------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量 | 6 黒褐色 | ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 | 7 黒褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量 | | |
| 4 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量 | | |
| 5 黒褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | | |

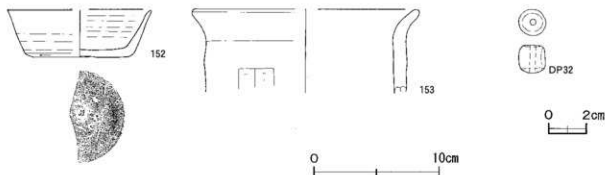
遺物出土状況 土師器片282点(坏類69, 碗2, 埴1, 高坏1, 甕類209), 須惠器片25点(坏類19, 高台付坏4, 甕類2), 土製品1点(土玉), 石器1点(砥石)が竈付近を中心に出土している。153は東部, DP32は竈



第191図 第39号住居跡実測図

右袖付近の床面からそれぞれ出土している。152は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。



第192図 第39号住居跡出土遺物実測図

第39号住居跡出土遺物観察表 (第192図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
152	須恵器	坏	[11.3]	3.8	7.4	石英・長石	灰黄	普通	内・外面ロクロナデ 体部下端の軌へラ削り 底部下端の軌へラ切の後ナデ	覆土中	30% 自然軸付着
153	土師器	甕	[17.8]	(6.7)	-	石英・長石・雲母 赤色粒子	に濃い黄橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面へラ削り	床面	5%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP32	土玉	1.42	1.45	0.3	3.2	土製(長石)	中央部一方向への穿孔	床面	PL34

第50号住居跡 (第193・194図)

位置 調査区Ⅱ区のB513区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第51号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.01m、短軸2.93mの方形で、主軸方向はN-14°-Eである。壁高は36~42cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。竈前面から中央部にかけて踏み固められている。

竈 北壁の中央部に付設されている。袖部と焚口部が攪乱を受けているため、確認できた規模は焚口部から煙道部まで90cm、袖部幅は124cmと推定される。袖部は、地山を土台とし、砂質粘土を含むローム土で構築されており、内壁が火熱を受けて赤変している。火床部は、ほぼ平坦で、火床面は火熱を受けて赤変している。土師器の甕が、火床面に逆位で火熱を受けて出土していることから、支脚として使用されていたと考えられる。煙道部は壁外へ36cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。

覆土層解説

1 極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量	4 暗赤褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子微量
2 暗赤褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量	5 極暗赤褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量
3 暗赤褐色	焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子微量	6 極暗褐色	焼土粒子少量、ローム粒子微量

ピット 深さ46cmで、規模と位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

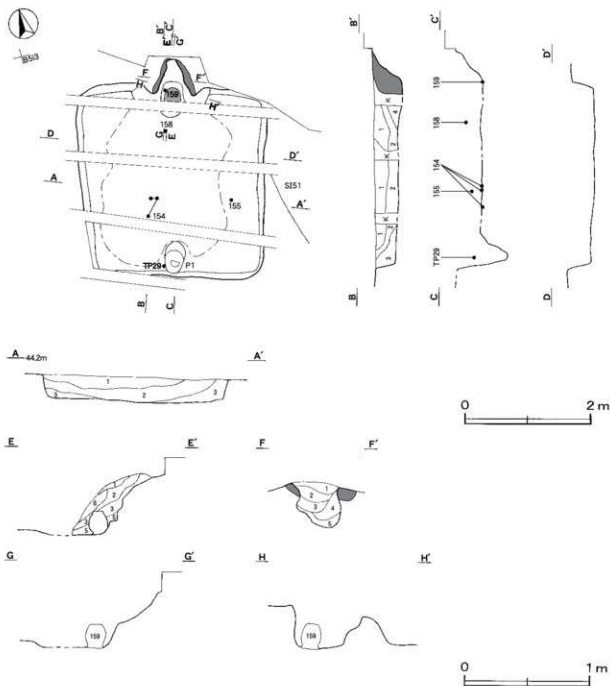
土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
 2 極暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

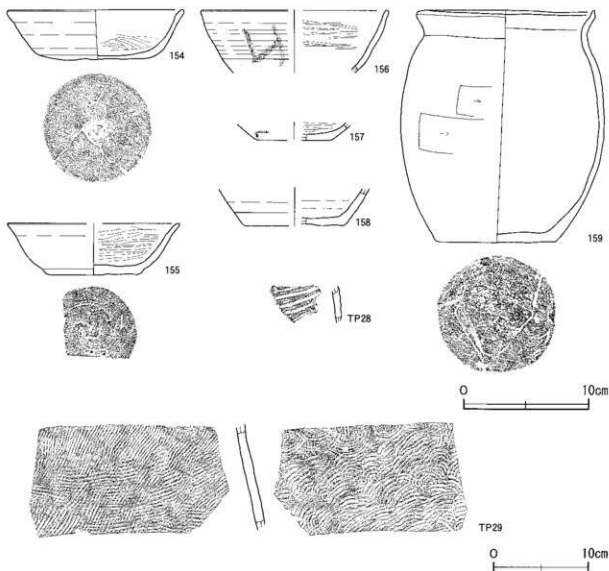
- 3 極暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
 4 極暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量

遺物出土状況 土師器片273点（坏類45、甕類228）、須恵器片7点（坏類1、甕類6）、鉄滓2点が全域から散在して出土している。また、流れ込んだ弥生土器片3点（壺）も出土している。154は中央部の床面、159は竈の火床面上、155は東部、158は竈前面、TP29は南壁際の覆土下層からそれぞれ出土している。156・157・TP28は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉と考えられる。



第193図 第50号住居跡実測図



第194図 第50号住居跡出土遺物実測図

第50号住居跡出土遺物観察表 (第194図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
154	土師器	坏	14.0	4.6	8.7	長石・雲母	にじい・橙	普通	外面ロクロナデ 体部内面へラ磨き 底部凹陥へラ切り後ナデ	床面	95% PL.29
155	土師器	坏	[13.6]	4.1	7.0	長石・雲母	にじい・橙	普通	外面ロクロ整形後下家ナデ 体部内面へラ磨き 底部凹陥へラ切り	覆土下層	30%
156	土師器	坏	[14.8]	(4.9)	-	石英・長石・雲母	にじい・黄橙	普通	外面ロクロナデ 体部内面へラ磨き	覆土中	5% PL.29 黒書「井」カ
157	土師器	坏	-	(1.4)	[6.0]	石英・雲母	にじい・黄橙	普通	体部内面へラ磨き	覆土中	5% 黒書「井」カ
158	須恵器	坏	-	(3.1)	[8.0]	石英・長石・雲母	黄灰	普通	内・外面ロクロナデ 体部外面下端凹陥へラ切り後ナデ	覆土下層	10%
159	土師器	甕	13.8	18.5	9.5	石英・長石・雲母	にじい・赤橙	普通	体部外面へラ削り 底部へラ削り	竈火床面	95% PL.31
番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考			
TP28	弥生土器	壺	長石・雲母・白色粘土	橙	普通	胴部平截竹管状工具による横位の沈線	覆土中	PL.32			
番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考			
TP29	須恵器	甕	長石・黒色粘土	黄灰	普通	体部外面平行叩き 内面同心円当て具痕	覆土下層	PL.33			

第52号住居跡 (第195～198図)

位置 調査区Ⅱ区のC6e2区で、標高44mほどの台地端部に位置している。

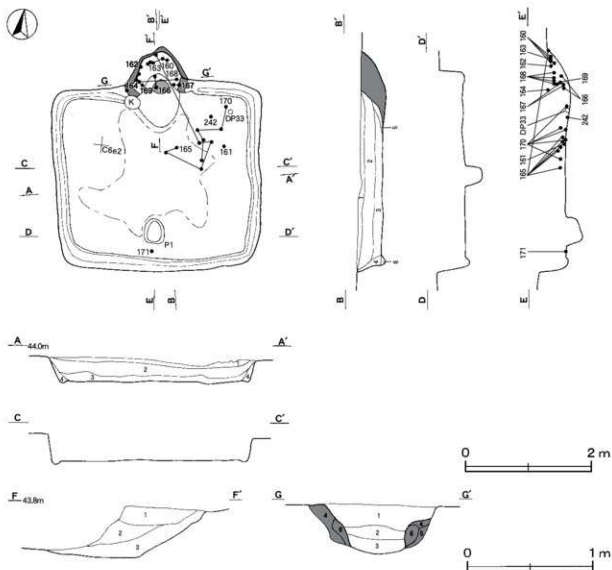
規模と形状 長軸3.24m、短軸3.02mの方形で、主軸方向はN-5°-Wである。壁高は35～44cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。竈前面から中央部にかけて踏み固められている。壁溝が全周し、断面形はU字状である。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで124cmで、袖部は両袖ともほとんど崩壊しているため、袖部幅は110cmと推定される。袖部は砂質粘土を含んだローム土で構築され、土器が構築材として使用されている。火床部は床面を皿状に10cm掘りくぼめ、火床面は火熱を受けて赤変している。煙道部は壁外へ46cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|---------------------------|
| 1 黒色 | ローム粒子少量、砂質粘土ブロック・焼土粒子微量 | 5 暗褐色 | 砂質粘土粒子中量、ローム粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 | 6 黒褐色 | 砂質粘土粒子中量、焼土粒子少量、ロームブロック微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | | |
| 4 黒褐色 | 砂質粘土ブロック・ローム粒子少量 | | |



第195図 第52号住居跡実測図

ピット 深さ28cmで、規模と位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

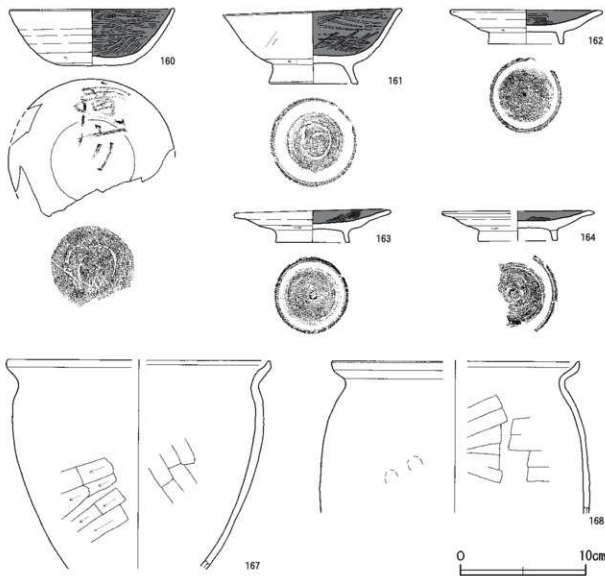
覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

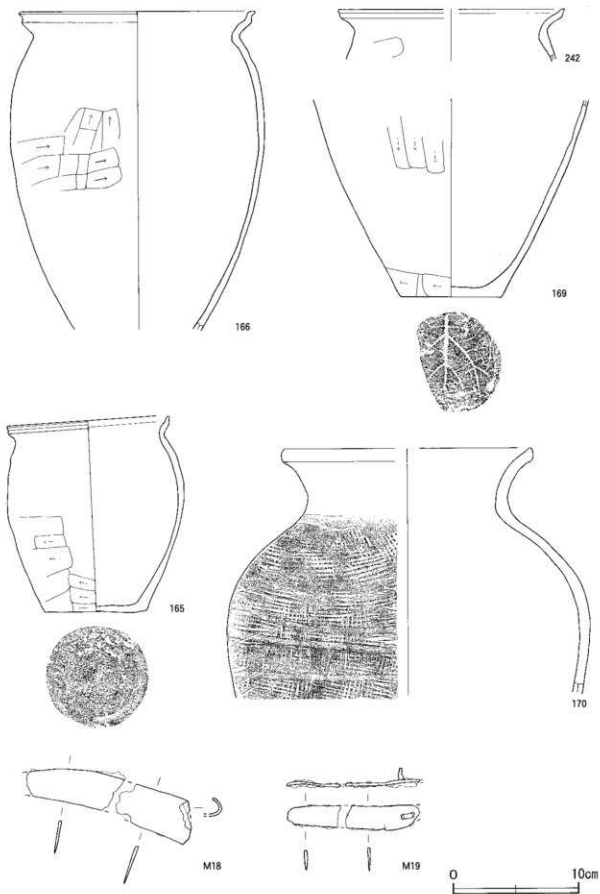
- | | | | |
|-------|---------------------|-------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | 焼土ブロック・炭化物・ローム粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | 6 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片805点（坏類46，高台付坏3，碗17，皿15，甕類724），須恵器片46点（坏類26，壺4，甕類16），土製品1点（支脚），鉄製品2点（鎌1，不明1）が竈付近を中心に出土している。160・162～164・166～169は竈の覆土上層から下層にかけてそれぞれ出土している。161は東部，171は南壁際の床面，242・DP33は北東コーナー部の床面からそれぞれ出土している。165は中央部の覆土下層から出土している。170は北東コーナー部の覆土下層から床面にかけて出土した破片が接合したものである。M18・M19は覆土中から出土している。

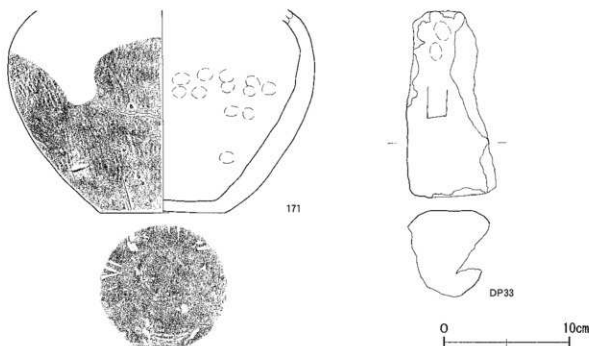
所見 時期は，出土土器から9世紀後葉と考えられる。



第196図 第52号住居跡出土遺物実測図(1)



第197图 第52号住居跡出土遺物実測図(2)



第198図 第52号住居跡出土遺物実測図(3)

第52号住居跡出土遺物観察表(第196~198図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
160	土師器	坏	13.0	4.6	6.4	長石・雲母・赤色粒子	にぶい褐色	普通	外面口クロナデ 体部内面ヘラ磨き 底部ヘラ切り後ナデ	竪掘土上層	5% PL.29 裏面(裏方)ナ
161	土師器	高台付椀	14.0	6.0	6.8	石英・長石・雲母	にぶい黄褐色	普通	体部内面ヘラ磨き 底部凹面ヘラ切り後高台貼り付け	床面	100% PL.31
162	土師器	高台付皿	11.8	2.7	6.0	石英・長石・雲母	にぶい赤褐色	普通	体部外面下凹面ヘラ磨り 内面ヘラ磨き 底部凹面ヘラ切り後高台貼り付け	竪掘土上層	95% PL.31
163	土師器	高台付皿	12.2	2.7	5.8	長石・雲母	明赤褐色	普通	体部外面下凹面ヘラ磨り 内面ヘラ磨き 底部凹面ヘラ切り後高台貼り付け	竪掘土上層	90% PL.31
164	土師器	高台付皿	11.8	2.4	[6.2]	石英・長石・雲母	にぶい褐色	普通	体部外面下凹面ヘラ磨り 内面ヘラ磨き 底部凹面ヘラ切り後高台貼り付け	竪掘土上層	30%
165	土師器	甕	12.7	15.6	8.0	石英・長石	明赤褐色	普通	体部外面ヘラ磨り 底部ヘラナデ	竪掘土下層	80% PL.31
166	土師器	甕	18.4	(25.3)	-	石英・長石・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐色	普通	体部外面ヘラ磨り	竪掘土下層	43%
167	土師器	甕	[20.8]	(16.6)	-	長石・雲母	にぶい褐色	普通	体部外面ヘラ磨り 内面ヘラナデ	竪掘土下層	30%
168	土師器	甕	[19.6]	(12.1)	-	石英・長石・雲母	にぶい褐色	普通	体部外面指頭痕 内面ヘラナデ	竪掘土中層	20%
169	土師器	甕	-	(15.8)	8.0	石英・長石・雲母	にぶい黄褐色	普通	体部外面ヘラ磨り 底部木炭痕	竪掘土中層	20%
242	土師器	甕	[18.0]	(4.1)	-	石英・長石・赤色粒子	にぶい褐色	普通	体部外面ヘラナデ	床面	5%
170	須恵器	甕	[19.6]	(19.6)	-	長石	灰	普通	口縁部横ナデ 体部外面格子目き	竪掘土下層 ~床面	40%
171	須恵器	甕	-	(16.1)	10.0	長石	灰黄褐色	普通	体部外面平行目き 内面指頭痕	床面	40% PL.31

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP33	支脚	(14.9)	(7.2)	(6.8)	(572.0)	土質(石英・長石・雲母)	外面ヘラナデ 指頭痕	床面	
M18	鎌	(13.1)	3.5	0.2	(38.1)	鉄	断面三角形	竪掘土中層	PL.36
M19	不明	(10.5)	1.7	0.3	(13.3)	鉄	断面三角形 端部突起物有り	竪掘土中層	PL.36

第53号住居跡(第199・200図)

位置 調査区Ⅱ区のC5c8区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第4号溝に掘り込まれている。

規模と形状 南西部が調査区域外であるため、確認できた範囲は南北軸2.95m、東西軸3.60mである。平面形

は長方形と推定され、主軸方向はN-14°-Wである。壁高は15cmで、外傾して立ち上がっている。

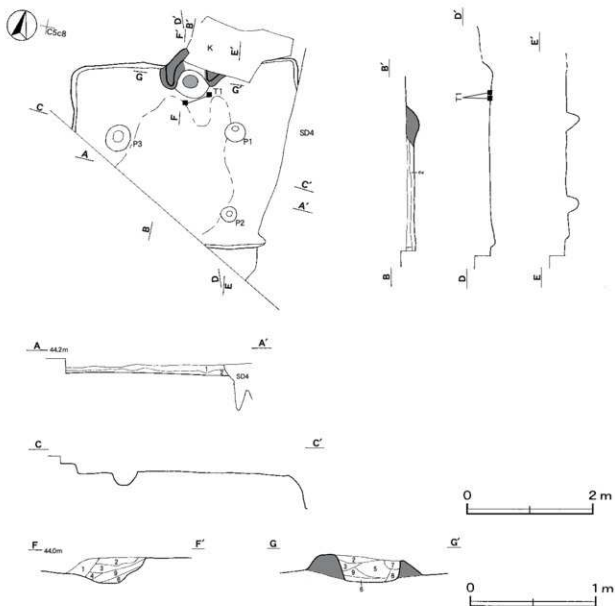
床 ほぼ平坦で、竈前面から中央部にかけて踏み固められている。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで80cm、袖部幅は106cmである。袖部は地山の上に砂質粘土で構築されており、内側は火熱を受けて赤変している。火床部は床面を皿状に10cm掘りくぼめ、火床面は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ25cm掘り込まれていると推定され、外傾して立ち上がっている。竈土層断面図の第3・7層が天井部の崩落土に該当する。

竈土層解説

- | | |
|---------------------------|------------------------------|
| 1 黒褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 6 暗赤褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量 | 7 暗褐色 砂質粘土ブロック・焼土粒子中量、炭化粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 焼土ブロック・砂質粘土ブロック中量 | 8 暗褐色 砂質粘土ブロック・焼土粒子少量 |
| 4 極暗赤褐色 焼土粒子少量、炭化粒子微量 | 9 暗褐色 焼土粒子少量 |
| 5 暗赤褐色 焼土粒子中量、炭化粒子微量 | |

ピット 3か所。P1～P3は深さ18～20cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。



第199図 第53号住居跡実測図

覆土 2層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

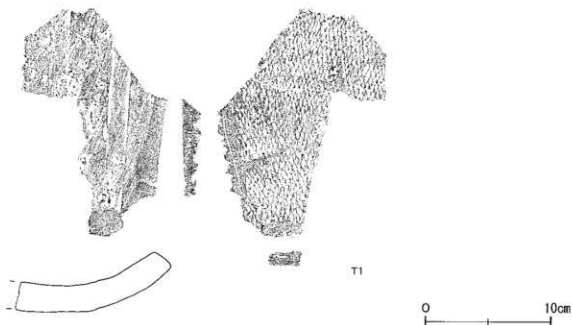
土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量

2 黒褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片86点（坏類6，甕類80），須恵器片5点（坏類4，甕類1），瓦片2点（平瓦）が全城から散在して出土している。T1は竈前面の床面から出土している。土器片は細片のため図示できない。

所見 瓦片に竈部材が付着していることから竈の構築材として使用された可能性がある。時期は、重複関係及び出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第200図 第53号住居跡出土遺物実測図

第53号住居跡出土遺物観察表（第200図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
T1	平瓦	(18.2)	(12.3)	2.2	(497.0)	土製(石英・長石・赤色粒子)	前面へう調整 凸面側凹状の明き	床面	竈部材付着

第54号住居跡（第201図）

位置 調査区Ⅱ区のC5c9区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第4・5号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北東部は調査区域外であるため、確認できた範囲は南北軸3.64m，東西軸3.66mである。平面形は方形と推定され、主軸方向はN-7°-Wである。壁高は32cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が全周し、断面形はU字状である。

ピット 深さ32cmで、規模と位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

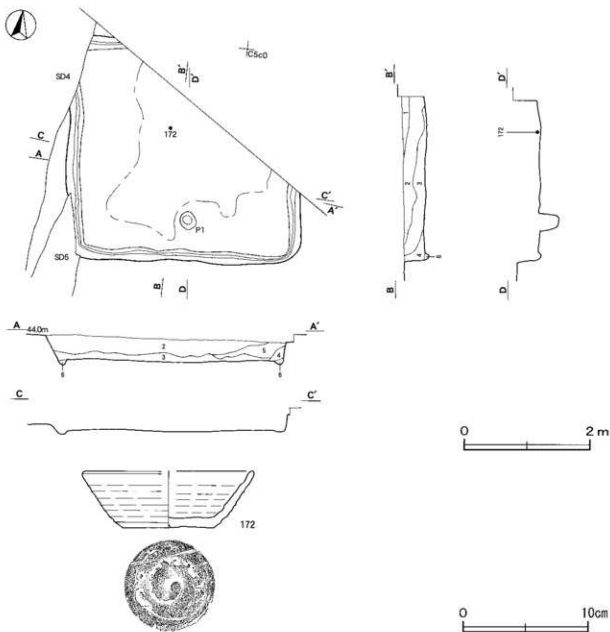
覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量 | 5 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子中量 | 6 暗褐色 | ローム粒子中量 |

遺物出土状況 土師器片238点（環類23，甕類215），須恵器片43点（環類29，甕類14）が全域から散在して出土している。172は中央部の床面から出土している。

所見 時期は，出土土器から9世紀前葉と考えられる。



第201図 第54号住居跡・出土遺物実測図

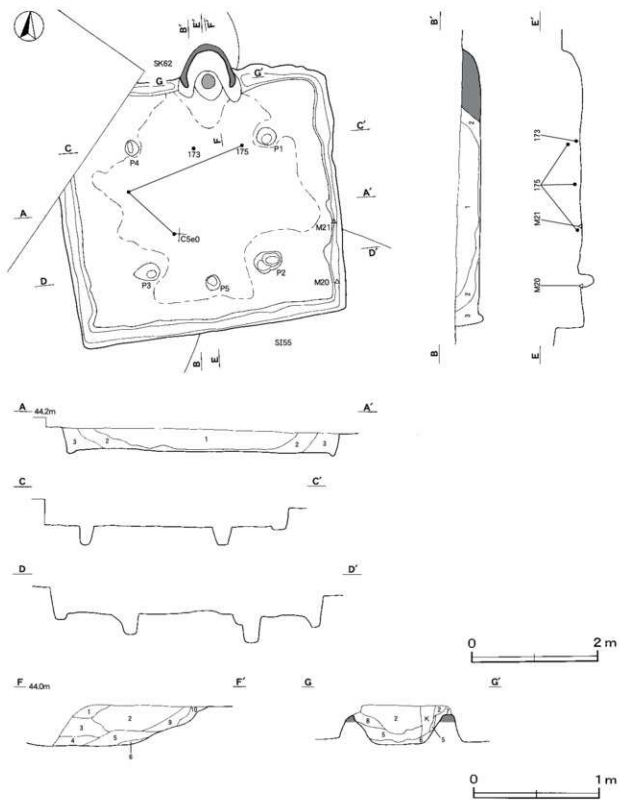
第54号住居跡出土遺物観察表（第201図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
172	須恵器	坪	13.4	4.5	7.2	長石	灰	普通	内・外面コクロナデ 底面削面へラ切り	床面	45%

第56号住居跡（第202～204図）

位置 調査区Ⅱ区のC5d0区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第55号住居跡，第62号土坑を掘り込んでいる。



第202図 第56号住居跡実測図

規模と形状 北西コーナー一部が調査区域外であるため、確認できた範囲は長軸4.42m、短軸4.10mの方形で、主軸方向はN-11°-Wである。壁高は32~41cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほぼ平坦で、竈前面から中央部にかけて踏み固められている。壁溝が全周し、断面形はU字状である。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで124cm、袖部幅は112cmである。袖部は床面と同じ高さの地山に、砂質粘土を含んだローム土で構築されており、内側が火熱を受けて赤変している。火床部は、床面と同じ高さの平坦面を利用してあり、火床面は火熱を受けて赤変している。煙道部は壁外へ40cm掘り込まれ、緩やかに外傾して立ち上がっている。竈土層断面図の第1・10層が天井部の崩落土に該当する。

竈土層解説

- | | |
|---------------------------------|----------------------------------|
| 1 暗褐色 砂質粘土ブロック中量、焼土粒子少量、ローム粒子微量 | 6 暗赤褐色 焼土ブロック少量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子少量 | 7 暗赤褐色 焼土粒子中量、砂質粘土ブロック少量、ローム粒子微量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック少量 | 8 暗褐色 ローム粒子少量、砂質粘土ブロック・焼土粒子微量 |
| 4 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量 | 9 暗褐色 砂質粘土ブロック・焼土粒子少量、ローム粒子微量 |
| 5 暗褐色 砂質粘土ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 10 暗赤褐色 砂質粘土ブロック・焼土粒子中量、ローム粒子微量 |

ピット 5か所。P1~P4は深さ30~44cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ22cmで、規模と位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

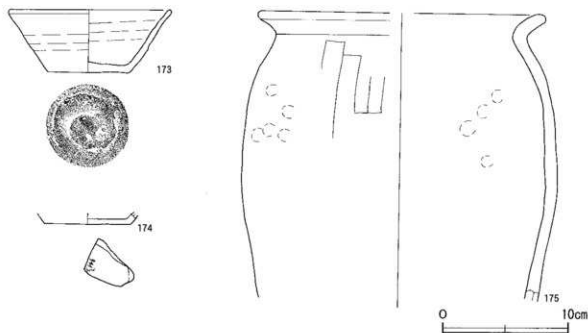
覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

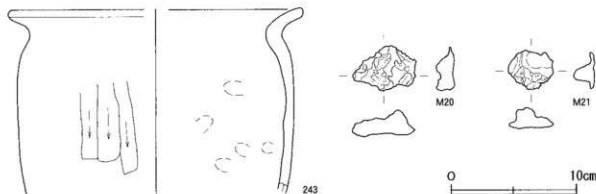
- | | |
|---------------|-----------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子少量 | 3 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子中量 | |

遺物出土状況 土師器片531点（坏類30、高台付坏1、甕類500）、須恵器片47点（坏類33、甕類14）、鉄滓9点が全城から散在して出土している。173・175は中央部の覆土下層、M20・M21は東壁際の床面からそれぞれ出土している。174・243は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 鉄滓が出土しているが、鍛冶工房に伴う遺物等は周辺からも確認できなかった。時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第203図 第56号住居跡出土遺物実測図(1)



第204図 第56号住居跡出土遺物実測図(2)

第56号住居跡出土遺物観察表(第203・204図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
173	須恵器	環	12.8	5.1	6.5	長石・雲母・細礫	灰	普通	内・外面クロナデ 底部凹陥へラ切り	覆土下層	100% 凡29 自然堆積層
174	須恵器	環	-	(1.0)	[6.8]	石英・長石・雲母	灰	普通	体部内・外面ナデ	覆土中	3% 黒書「全」カ
175	土師器	甕	[22.6]	(22.9)	-	石英・長石・細礫	褐	普通	体部外面へラナデ 内・外面指頭痕	覆土下層	40%
243	土師器	甕	[23.2]	(14.7)	-	石英・長石・雲母	にひ・褐	普通	体部外面へラ削り 内面指頭痕	覆土中	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M20	鉄滓	3.6	5.1	2.1	28.3	砂鉄	着磁性別	床面	
M21	鉄滓	3.2	3.7	1.7	18.2	砂鉄	着磁性別	床面	

第57号住居跡(第205・206図)

位置 調査区Ⅱ区のC6f1区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸3.69m、短軸3.51mの方形で、主軸方向はN-5°-Wである。壁高は28~35cmで、直立している。

床 ほぼ平坦で、竈前面から中央部にかけて踏み固められている。壁溝が全周し、断面形はU字状である。

竈 北壁の中央部からやや東寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで100cm、袖部幅は110cmである。袖部は床面と同じ高さの地山に、砂質粘土を含んだローム土で構築されている。火床部は床面を皿状に10cm掘りくぼめた上に、極暗赤褐色土を埋め戻した平坦面を利用している。火床面は火熱を受けて赤変している。煙道部は壁外へ48cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。竈土層断面図の第2層が天井部の崩落土に該当する。

竈土層解説

1 暗褐色	砂質粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量	6 黒褐色	焼土粒子・砂質粘土粒子少量、ローム粒子微量
2 暗褐色	砂質粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土粒子少量	7 暗赤褐色	砂質粘土ブロック中量、焼土粒子微量
3 暗赤褐色	焼土粒子中量、炭化物少量、ローム粒子微量	8 暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子微量
4 極暗赤褐色	焼土粒子中量、炭化粒子少量、ローム粒子微量	9 暗褐色	砂質粘土ブロック・焼土粒子少量
5 極暗褐色	ローム粒子少量	10 極暗赤褐色	焼土粒子中量、ロームブロック少量
		11 暗褐色	砂質粘土ブロック中量、焼土ブロック少量

ピット 深さ24cmで、規模と位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

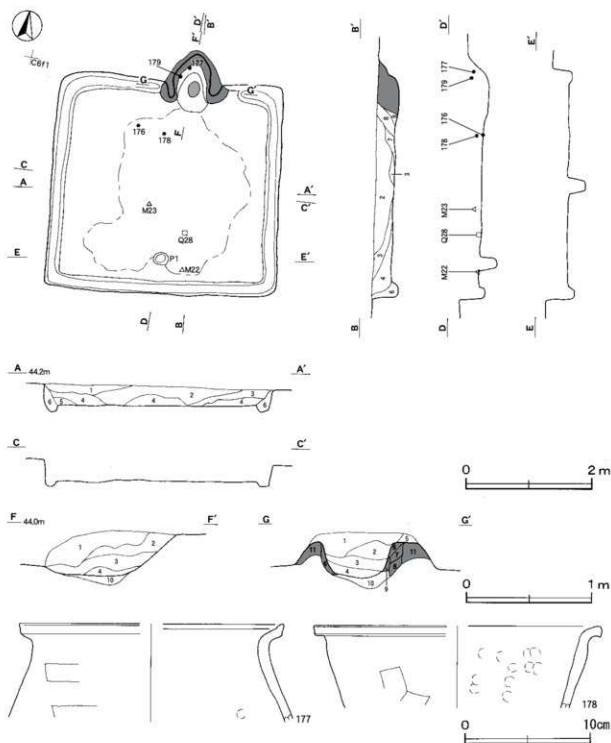
覆土 9層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

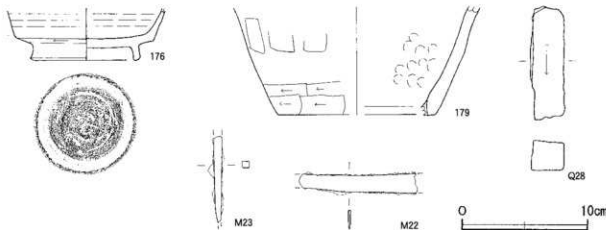
1 黒褐色	ローム粒子少量	6 暗褐色	ローム粒子少量
2 暗褐色	ロームブロック少量	7 極暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
3 極暗褐色	ローム粒子少量	8 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、砂質粘土粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	9 暗褐色	ロームブロック・砂質粘土ブロック・焼土粒子少量
5 極暗褐色	ロームブロック少量		

遺物出土状況 土師器片186点(坏類15, 高坏1, 甕類170), 須恵器片55点(坏類47, 高台付坏2, 甕類6), 石器1点(砥石), 鉄製品2点(刀子1, 釘1)が全域から散在して出土している。176は北部, Q28・M22は南部の床面からそれぞれ出土している。178は竈前面, M23は中央部の覆土下層から出土している。177・179は竈の覆土上層から出土している。

所見 時期は, 出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第205図 第57号住居跡・出土遺物実測図



第206図 第57号住居跡出土遺物実測図

第57号住居跡出土遺物観察表 (第205・206図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
176	須恵器	高台付坪	-	(4.1)	8.3	石英・長石・燧石	普通	普通	内・外面口ロナダ 体部下端へラ削り 底部の底へラ削り 口縁高横ナダ 体部外面へラナダ	床面	30%	
177	土師器	甕	(20.8)	(7.8)	-	石英・長石・雲母	に高い焼	普通	口縁高横ナダ 体部外面へラナダ	内面	燻土上層	5%
178	須恵器	甕	(22.8)	(6.5)	-	石英・長石	灰	普通	口縁高横ナダ 体部外面へラナダ	内面	燻土下層	5%
179	須恵器	甕	-	(8.6)	(12.4)	石英・長石	灰	普通	体部外面へラナダ 体部下端へラ削り 内面削頭部	内面削頭部	燻土上層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q28	砥石	9.1	2.7	2.4	119.5	砂岩	砥面1面	床面	
M22	刀子	(9.5)	1.6	0.2	(12.1)	鉄	刀身部破片 断面三角形	床面	PL36
M23	釘	(6.9)	0.7	0.5	(8.9)	鉄	基部破片 断面四角形	燻土下層	PL36

第58号住居跡 (第207・208図)

位置 調査区Ⅱ区のC5g0区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第83号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.91m、短軸3.60mの方形で、主軸方向はN-2°-Wである。壁高は36~38cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、竈前面から中央部にかけて踏み固められている。壁溝が全周し、断面形はU字状である。

竈 北壁の中央部からやや東寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで104cm、袖部幅は106cmである。袖部は床面と同じ高さの地山に、砂質粘土を含んだローム土で構築されている。火床部は床面を皿状に10cm掘りくぼめ、火床面は火熱を受けて赤変している。煙道部は壁外へ40cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。竈土層断面図の第5層が天井部の崩落土に該当する。

竈土層解説

1	黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量	8	に高い赤褐色	砂質粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量
2	黒褐色	ロームブロック・砂質粘土粒子少量、焼土粒子微量	9	灰褐色	焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量、ローム粒子微量
3	黒褐色	ローム粒子・砂質粘土粒子少量、焼土粒子微量			
4	褐色	ローム粒子・砂質粘土粒子少量	10	灰褐色	焼土粒子少量、ローム粒子微量
5	に高い褐色	砂質粘土粒子中量、焼土ブロック少量	11	暗褐色	砂質粘土粒子中量、焼土粒子少量
6	暗赤褐色	焼土粒子中量、砂質粘土ブロック少量	12	灰褐色	砂質粘土粒子多量、焼土粒子少量
7	灰褐色	ロームブロック・砂質粘土ブロック少量、焼土粒子微量	13	暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子少量
			14	暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子・砂質粘土粒子少量

ピット 深さ26cmで、規模と位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

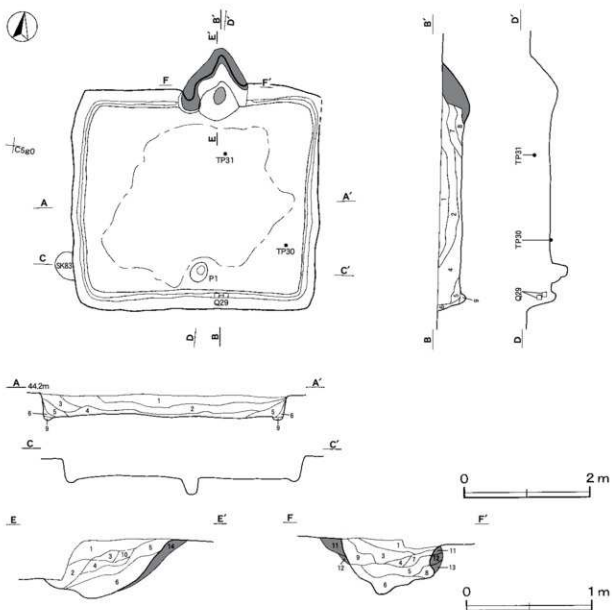
覆土 9層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

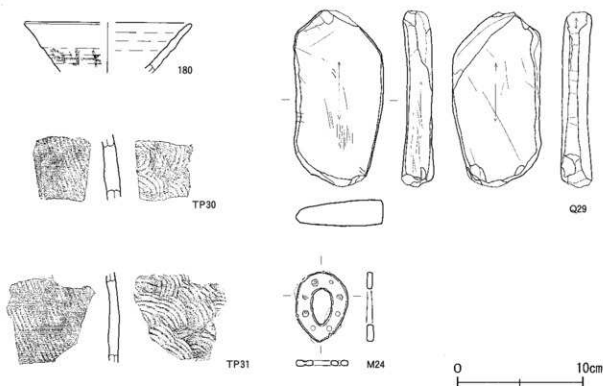
1 暗褐色	ローム粒子微量	7 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量、炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック少量	8 暗褐色	砂質粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック少量
3 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	9 褐色	ロームブロック中量
4 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量		
5 暗褐色	ローム粒子少量		
6 褐色	ローム粒子中量		

遺物出土状況 土師器片164点(坏類22, 甕類142), 須恵器片38点(坏類28, 高台付坏3, 蓋2, 甕類5), 石器1点(砥石), 鉄製品1点(鏝)が全域から散在して出土している。土器片はほとんど細片である。TP30は東部の床面, Q29は南壁際の覆土下層, TP31は北部の覆土中層, 180・M24は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。



第207図 第58号住居跡実測図



第208図 第58号住居跡出土遺物実測図

第58号住居跡出土遺物観察表 (第208図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
180	須恵器	坏	13.2	(4.0)	-	石英・長石	灰黄	普通	内・外面口コロナダ	覆土中	5% PL29 埋藏口大(ホ)
番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴		出土位置	備考		
TP30	須恵器	甕	長石・白色粒子	灰白	普通	体部外面継位の平行明き	内面同心円当て具痕	床面			
TP31	須恵器	甕	長石	灰白	普通	体部外面継位の平行明き	内面同心円当て具痕	覆土中層			
番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考		
Q29	砥石	14.0	7.1	2.5	399.0	片岩	砥面4面	覆土下層	PL35		
M24	鏝	5.6	4.1	0.6	19.6	鉄	孔穴8ヶ所	覆土中	PL36		

第59号住居跡 (第209～211図)

位置 調査区Ⅱ区のC5f9区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第55・68号住居跡を掘り込み、第12号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.85m、短軸3.70mの方形で、主軸方向はN-1°-Wである。壁高は24～34cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、竈前面から南壁にかけて踏み固められている。壁溝が全周し、断面形はU字状である。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで124cm、袖部幅は112cmである。袖部は床面と同じ高さの地山に、砂質粘土を含んだローム土で構築されている。火床部は、床面と同じ高さの平坦面を利用しており、火床面は火熱を受けて赤変している。煙道部は壁外へ50cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。

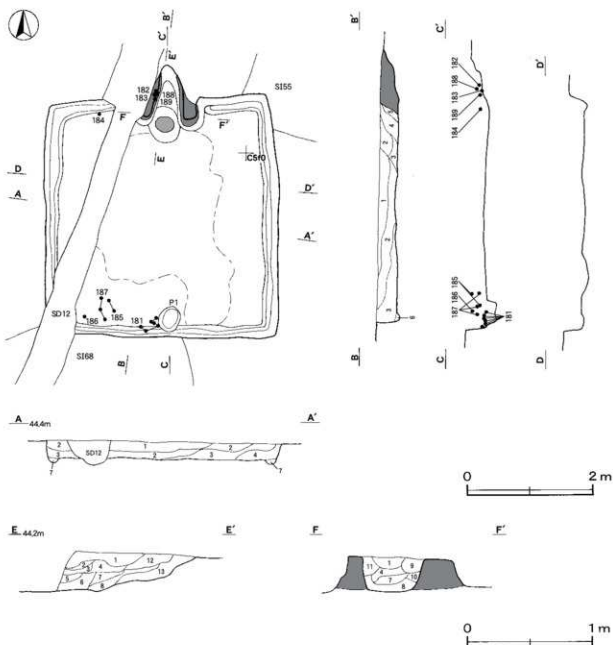
る。竈土層断面図の第9・11層が天井部の崩落土に該当する。

竈土層解説

- | | | | |
|---------|---------------------------|----------|---------------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量 | 9 暗褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量、ローム粒子微量 |
| 2 灰褐色 | 砂質粘土ブロック・焼土粒子少量、ローム粒子微量 | 10 濃い赤褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量、砂質粘土粒子微量 | 11 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子少量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 12 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子微量 |
| 5 褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子・砂質粘土粒子微量 | 13 褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 6 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、ロームブロック少量、炭化粒子微量 | | |
| 7 極暗赤褐色 | 焼土粒子多量、砂質粘土粒子微量 | | |
| 8 濃い赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量、砂質粘土粒子微量 | | |

ピット 深さ18cmで、規模と位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 7層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

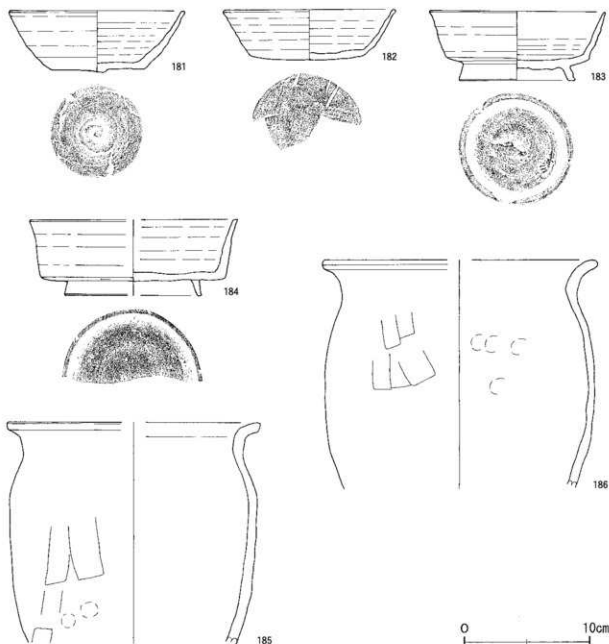


第209図 第59号住居跡実測図

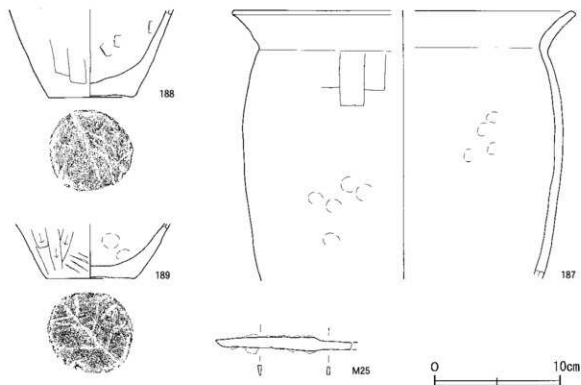
土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	5 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	6 褐色	ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	7 褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
4 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量		

遺物出土状況 土師器片249点（坏類29、高坏1、甕類219）、須恵器片45点（坏類41、高台付坏1、壺1、甕類2）、石器1点（砥石）、鉄製品1点（刀子）が全域から散在して出土している。また、流れ込んだ弥生土器片3点（壺）も出土している。182・183・188・189は竈の覆土下層、184は北部の覆土下層から出土している。181・185～187は南部の覆土中層から下層にかけてそれぞれ出土している。M25は覆土中から出土している。
所見 時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第210図 第59号住居跡出土遺物実測図（1）



第211図 第59号住居跡出土遺物実測図(2)

第59号住居跡出土遺物観察表(第210・211図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
181	須恵器	環	13.7	4.8	7.0	石英・長石	灰	普通	内・外面ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	覆土下層	90% PL30
182	須恵器	環	13.6	4.1	8.5	石英・長石	灰	普通	内・外面ロクロナデ 底部回転ヘラ切り 後一方の削り	覆土下層	60% PL30
183	須恵器	高台付環	14.0	5.6	9.3	長石	灰	普通	内・外面ロクロナデ 底部回転ヘラ切り 後高台貼り付け	覆土下層	80% PL30
184	須恵器	高台付環	16.2	6.1	10.8	石英・長石・黒色 粒子・細砂	灰	普通	内・外面ロクロナデ 底部回転ヘラ切り 高台貼り付け	覆土下層	40% PL30
185	土師器	甕	20.2	(17.7)	-	石英・長石・雲母	に5%黄褐色	普通	体部外面ヘラナデ 指頭痕	覆土中層・ 覆土上層	20%
186	土師器	甕	21.4	(18.2)	-	石英・長石・雲母・ 赤色粒子・細砂	に5%赤褐色	普通	体部外面ヘラナデ 内面指頭痕	覆土中層	15%
187	土師器	甕	27.0	(21.3)	-	石英・長石・雲母・ 赤色粒子・細砂	に5%赤褐色	普通	体部外面ヘラナデ 内・外面指頭痕	覆土下層	10%
188	土師器	甕	-	(7.0)	6.6	石英・長石・雲母	灰褐色	普通	体部内・外面ヘラナデ 底部木葉痕	覆土下層	10%
189	土師器	甕	-	(4.0)	7.0	石英・長石・雲母	に5%黄褐色	普通	体部外面ヘラナデ 内面指頭痕 底部木 葉痕	覆土下層	10%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
M25	刀子	(10.8)	1.1	0.3	(8.7)	鉄	基部欠損	断面三角形	覆土中	PL36	

第60号住居跡(第212~214図)

位置 調査区II区のC5h0区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第2号墓坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.20m、短軸4.11mの方形で、主軸方向はN-10°-Eである。壁高は19~26cmで外傾して立ち上がっている。

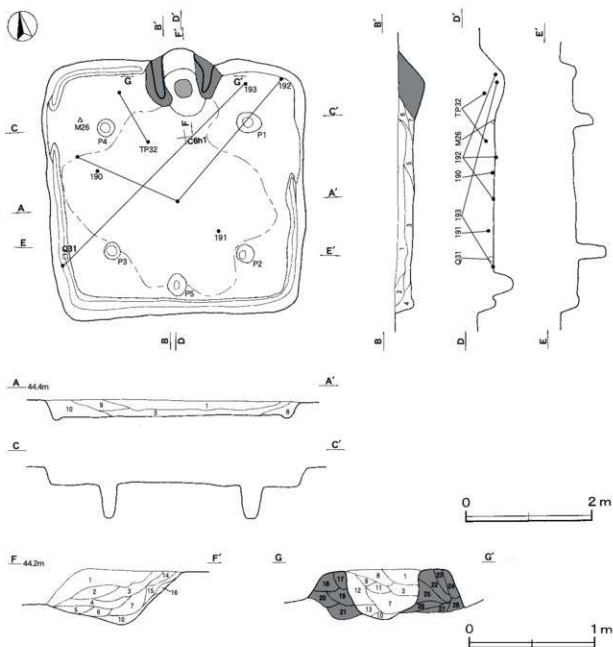
床 ほぼ平坦で、竈前面から中央部まで踏み固められている。壁溝が北東コーナー部を除いてほぼ周回してお

り、断面形はU字状である。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで110cm、袖部幅は124cmである。袖部は床面と同じ高さの地山に、砂質粘土を含んだローム土で構築されている。火床部は床面を皿状に15cm掘りくぼめ、火床面は火熱を受けて赤変している。煙道部は壁外へ30cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。竈土層断面図の第1・2・3・8層が天井部の崩落土に該当する。

竈土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------------------|--------|--------------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・砂質粘土粒子少量 | 6 暗褐色 | 焼土粒子少量、砂質粘土ブロック・ローム粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子少量 | 7 暗褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、ローム粒子微量 |
| 3 暗褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土ブロック・ローム粒子少量 | 8 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量、砂質粘土ブロック微量 |
| 4 暗褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 9 灰褐色 | 焼土ブロック少量、砂質粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 5 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量、砂質粘土粒子微量 | 10 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 |
| | | 11 褐色 | 砂質粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量 |



第212図 第60号住居跡実測図

12	にぶい赤褐色	焼土粒子中量, 砂質粘土ブロック少量	20	種暗褐色	ローム粒子・砂質粘土粒子少量, 焼土粒子微量
13	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量, 砂質粘土ブロック・炭化粒子微量	21	黒褐色	ロームブロック少量
14	にぶい赤褐色	焼土ブロック・砂質粘土ブロック・ローム粒子少量	22	暗褐色	ロームブロック・砂質粘土粒子少量, 焼土粒子微量
15	褐色	焼土ブロック少量, 砂質粘土ブロック・炭化粒子微量	23	にぶい褐色	砂質粘土ブロック少量, ローム粒子・焼土粒子微量
16	褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量	24	黒褐色	ローム粒子少量, 焼土ブロック微量
17	暗赤褐色	焼土粒子中量, 砂質粘土ブロック少量, ローム粒子微量	25	褐色	焼土ブロック・砂質粘土ブロック・ローム粒子少量
18	種暗褐色	ロームブロック・砂質粘土ブロック少量	26	灰褐色	焼土ブロック・ローム粒子・砂質粘土粒子少量
19	褐色	砂質粘土ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子・鹿沼パミス微量	27	黒褐色	ローム粒子少量
			28	暗褐色	ローム粒子・砂質粘土粒子少量

ピット 5ヶ所。P1～P4は深さ30～52cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ30cmで規模と位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

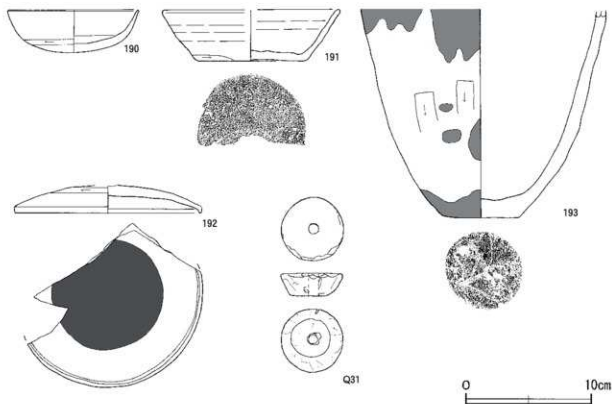
覆土 10層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解読

1	黒褐色	ロームブロック・焼土粒子少量	6	黒褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子・砂質粘土粒子微量
2	黒褐色	焼土ブロック少量, ローム粒子微量	7	暗褐色	ローム粒子少量
3	黒褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量	8	黒褐色	ローム粒子少量
4	黒褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子微量	9	黒褐色	ロームブロック少量
5	暗褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子・砂質粘土粒子微量	10	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量

遺物出土状況 土師器片117点(坏類12, 高坏1, 甕類104), 須恵器片26点(坏類17, 蓋5, 甕類4), 石製品1点(紡錘車), 鉄製品1点(刀子)が全城から散在して出土している。また、流れ込んだ弥生土器片3点(壺)も出土している。190・M26は西部, Q31は西壁際の床面からそれぞれ出土している。192は西部, 中央部, 北東コーナー部の床面, 193は西壁際と北壁際の床面から出土した破片がそれぞれ接合したものである。191は南部, TP32は北部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀中葉と考えられる。



第213図 第60号住居跡出土遺物実測図(1)



第214図 第60号住居跡出土遺物実測図(2)

第60号住居跡出土遺物観察表(第213・214図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
190	須恵器	環	10.4	3.4	-	石英・長石・雲母	灰	普通	体部下堀回転へう削り	床面	40%
191	須恵器	環	14.0	4.1	8.6	長石・雲母	黄灰	普通	内・外面ロクロナマリ 下部回転へう削り 底部回転へう削り後一方向の削り	覆土下層	30%
192	須恵器	蓋	14.8	(2.3)	-	石英・長石・白色 針状鉱物	灰	普通	天上面回転へう削り	床面	60% 転用破
193	土師器	甕	-	(16.6)	6.0	石英・長石・金雲 母	にがい黄橙	普通	体部外面へう削り 底部木葉痕	床面	30% 覆土材付着

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP32	須恵器	甕	長石	オリーブ黒	普通	体部外面縦位の平行明き 内面同心円得て具痕	覆土下層	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q31	紡錘車	5.1	1.8	0.8	60.7	滑石	全面研磨	床面	PL35

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M26	刀子	(8.3)	0.2	0.2	(5.7)	鉄	基部欠損 断面三角形	床面	PL36

第63号住居跡(第215・216図)

位置 調査区Ⅱ区のB419区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第62号住居跡を掘り込み、第7号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸2.87m、短軸2.85mの方形で、主軸方向はN-0°である。壁高は50cmで、直立している。

床 ほぼ平坦で、竈前面から中央部にかけて踏み固められている。壁溝が全周し、断面形はU字状である。

竈 北壁の中央部からやや東寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで90cm、袖部幅は105cmである。袖部は床面と同じ高さの地山に、砂質粘土を含んだローム土で構築されている。火床部は床面を皿状に10cm掘りくぼめ、火床面は火熱を受けて赤変している。煙道部は壁外へ34cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。竈土層断面図の第2層が天井部の崩落土に該当する。

竈土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	6 極暗褐色	ロームブロック・砂質粘土ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
2 灰黄褐色	砂質粘土ブロック多量、焼土粒子少量	7 極暗褐色	焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量
3 にがい赤褐色	焼土粒子多量	8 暗褐色	ロームブロック少量
4 極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、砂質粘土ブロック・炭化粒子微量	9 暗褐色	砂質粘土ブロック中量、炭化粒子少量
5 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量	10 暗赤褐色	砂質粘土ブロック・焼土粒子中量

- 11 灰黄褐色 砂質粘土ブロック多量
 12 灰黄褐色 砂質粘土ブロック多量、焼土粒子微量
 13 極暗褐色 砂質粘土ブロック少量、炭化粒子微量

- 14 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
 15 極暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

ピット 深さ38cmで、規模と位置から出入口施設に伴うピットと考えられる。

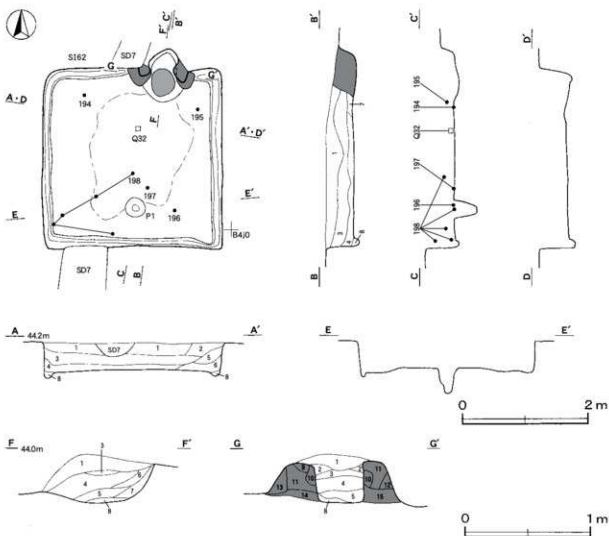
覆土 8層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

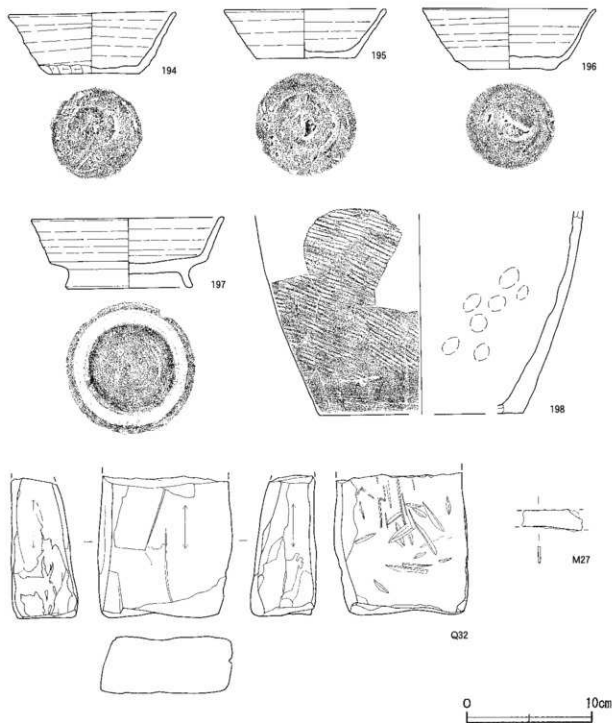
- | | |
|----------------------|-------------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子少量 | 5 極暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック少量 | 6 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量 |
| 3 極暗褐色 ロームブロック少量 | 7 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量 |
| 4 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量 | 8 暗褐色 ローム粒子少量 |

遺物出土状況 土師器片146点（坏類21、甕類125）、須恵器片37点（坏類8、高台付坏1、甕類28）、石器1点（砥石）、鉄製品1点（不明）、鉄滓1点が全城から散在して出土している。また、流れ込んだ弥生土器片5点（壺）も出土している。194は北部、Q32は中央部、196・197は南部の床面から、195は北部の覆土下層からそれぞれ出土している。198は中央部と南部の覆土中層から下層にかけて出土した破片が接合したものである。M27は竈の覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第215図 第63号住居跡実測図



第216図 第63号住居跡出土遺物実測図

第63号住居跡出土遺物観察表 (第216図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
194	須恵器	坏	13.2	4.9	7.3	石英・長石	黄灰	普通	内・外面口クロナデ 下縁手持ちへラ削り 底部回転へラ切り	床面	93% PL.29
195	須恵器	坏	12.8	3.9	7.8	長石	黄灰	普通	内・外面口クロナデ 底部回転へラ切り	覆土下層	93% PL.30
196	須恵器	坏	13.9	4.9	7.0	長石・白色針状鉱物	灰	普通	内・外面口クロナデ 底部回転へラ切り	床面	90% PL.29
197	須恵器	高台付坏	15.2	5.6	9.7	石英・長石・白色針状鉱物	にじみ澄	普通	内・外面口クロナデ 底部回転へラ切り 後高台貼り付け	床面	95% PL.30
198	須恵器	甕	-	(16.0)	[16.0]	石英・長石・黄母・珪藻	暗灰黄	普通	体部斜位の平行叩き 内面指頭痕	覆土中層～上層	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q32	砥石	(11.2)	10.6	5.3	(1030.0)	花岩	砥面4面	床面	
M27	不明	(4.9)	1.6	0.2	(13.8)	鉄	刃部破片 断面四角形	竈層土中	

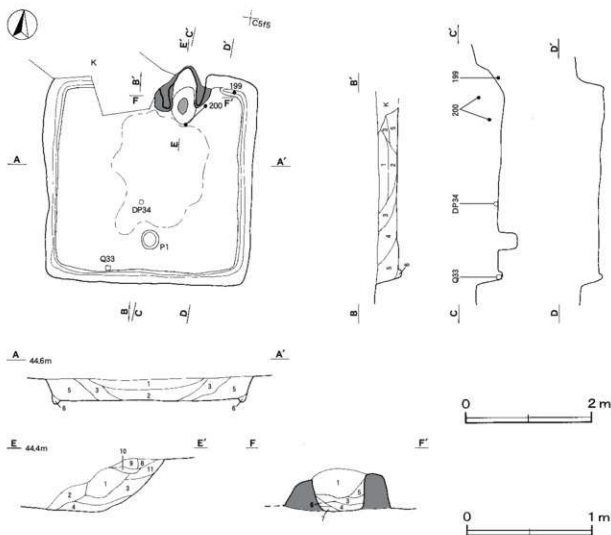
第65号住居跡 (第217・218図)

位置 調査区Ⅱ区のC5f4区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸3.40m、短軸3.35mの方形で、主軸方向はN-5°-Wである。壁高は30~42cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝がほぼ全周し、断面形はU字状である。

竈 北壁の中央部からやや東寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで90cm、袖部幅は88cmである。袖部は床面と同じ高さの地山に、砂質粘土を含むローム土で構築されている。火床部は床面を皿状に10cm掘りくぼめ、火床面は火熱を受けて赤変している。煙道部は壁外へ34cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。竈土層断面図の第3・9層が天井部の崩落土に該当する。



第217図 第65号住居跡実測図

覆土層解説

1 暗 褐色	ロームブロック・砂質粘土ブロック少量、焼土粒子微量	6 暗 褐色	砂質粘土ブロック中量、焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量
2 暗 褐色	ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土ブロック微量	7 暗 赤褐色	焼土粒子中量、ロームブロック少量、砂質粘土ブロック・炭化粒子微量
3 極 赤褐色	焼土粒子多量、ロームブロック・砂質粘土ブロック少量、炭化粒子微量	8 暗 褐色	ローム粒子・焼土粒子少量
4 極 暗赤褐色	焼土粒子中量、砂質粘土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量	9 赤 褐色	砂質粘土ブロック・焼土粒子中量
5 暗 褐色	砂質粘土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子微量	10 褐色	ロームブロック中量
		11 暗 褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量

ピット 深さ30cmで、規模と位置から出入口施設に伴うピットと考えられる。

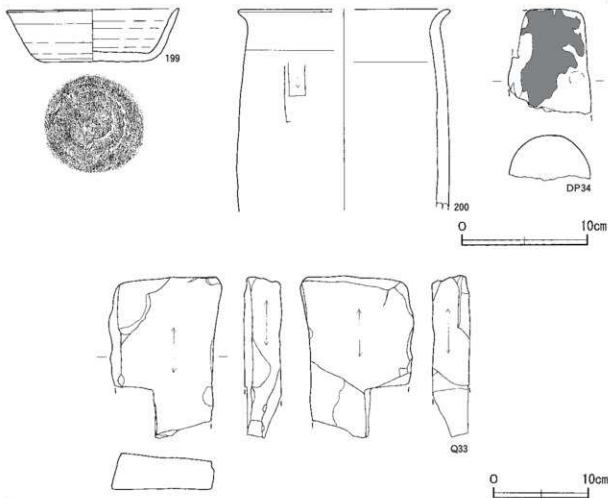
覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

1 極 暗褐色	ロームブロック少量	4 暗 褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗 褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	5 暗 褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗 褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	6 暗 褐色	ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片144点（坏類16、甕類128）、須恵器片11点（坏類9、甕類2）、土製品1点（支脚）、石器1点（砥石）が全域から散在して出土している。199は北東コーナー一部、Q33は南壁際、DP34は中央部の床面からそれぞれ出土している。200は竈前面の覆土上層から中層にかけて出土した破片が接合したものである。

所見 時期は、出土土器から8世紀後葉と考えられる。



第218図 第65号住居跡出土遺物実測図

第65号住居跡出土遺物観察表（第218図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法的特徴	出土位置	備考
199	須恵器	坏	13.6	4.2	7.8	石英・長石	灰	普通	内・外面ロクロナデ 底部回転へつ切り後ナデ	床面	90% PL.29
200	土師器	甕	[16.6]	(16.0)	-	石英・長石・雲母・細砂	にぶい煙	普通	体部外面へつ削り後ナデ	覆土上層・中層	10%

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
BF94	支脚	(8.4)	(6.7)	(3.7)	(174.0)	土製(石英・長石・雲母・黒色粒子)	指頭痕	床面	竈部材付着
Q33	砥石	(17.2)	12.0	3.9	(190.0)	砂岩	砥面4面	床面	

第66号住居跡（第219・220図）

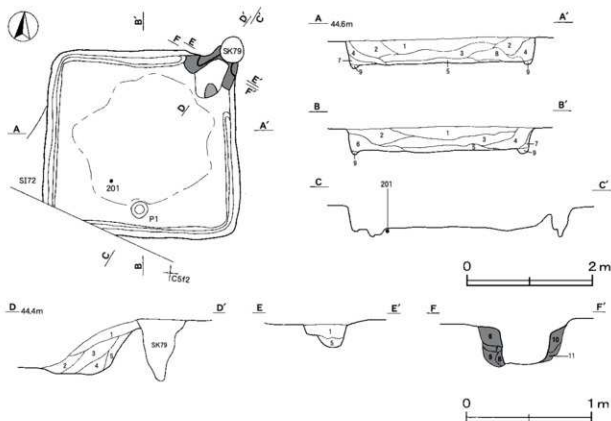
位置 調査区Ⅱ区のC5e1区で、標高44mほどの台地平埒部に位置している。

重複関係 第72号住居跡、第87・89号土坑を掘り込み、第79号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南西コーナー一部が調査区域外であるため、確認できた範囲は長軸3.15m、短軸2.98mの方形で、主軸方向はN-2°-Wである。壁高は35cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝がほぼ全周し、断面形はU字状である。

竈 北東コーナー部に付設されている。煙道部は第79号土坑に掘り込まれている。袖部幅は90cmである。袖部は右袖部の一部が崩壊しているが、床面と同じ高さの地山に、砂質粘土を含んだローム土で構築されている。火床部は床面を皿状に10cm掘りくぼめ、火床面は火熱を受けて赤変している。煙道部は壁外へ推定で30cm掘り



第219図 第66号住居跡実測図

生まれ、外傾して立ち上がっている。竈土層断面図の第1・5層が天井部の崩落土に該当する。

竈土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------------|---------|-------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・砂質粘土ブロック少量 | 6 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | 砂質粘土ブロック・ローム粒子少量 | 7 褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 | 8 褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量、砂質粘土粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量 | 9 にぶい褐色 | 砂質粘土ブロック・焼土粒子少量、ローム粒子微量 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量 | 10 褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子少量 |
| | | 11 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 |

ピット 深さ10cmで、規模と位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

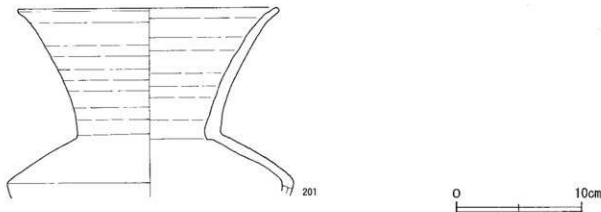
覆土 9層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------------|-------|----------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量 | 6 暗褐色 | ロームブロック・砂質粘土粒子ブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック微量 | 7 褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 8 褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量 | 9 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量、砂質粘土ブロック微量 | | |

遺物出土状況 土器片297点（坏類22、碗2、増2、甕類271）、須惠器片1点（甕類）が南西部を中心に多く出土している。土器片のほとんどは細片である。201は南部の床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。



第220図 第66号住居跡出土遺物実測図

第66号住居跡出土遺物観察表（第220図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
201	須惠器	甕	20.5	(15.0)	-	右巻・長右・黒色 粒子	灰	普通	内・外面口ロナデ	床面	30% P.31 自然軸付着

第69号住居跡（第221図）

位置 調査区Ⅱ区のC5j0区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第81号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 中央部から東部が調査区域外であるため、確認できた範囲は南北軸3.48m、東西軸1.13mである。平面形は方形又は長方形と推定され、主軸方向はN-25°-Eである。壁高は67cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

竈 北壁に付設されている。東半分が調査区域外であるため、焚口部は確認できなかった。左袖部は砂質粘土を含んだローム土で構築されている。火床部は床面と同じ高さの平坦面を利用している。煙道部は壁外へ28cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。

覆土層解説

1 極暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・砂質粘土粒子微量

ピット 2か所。P1・P2の深さは14cm・20cmで、性格は不明である。

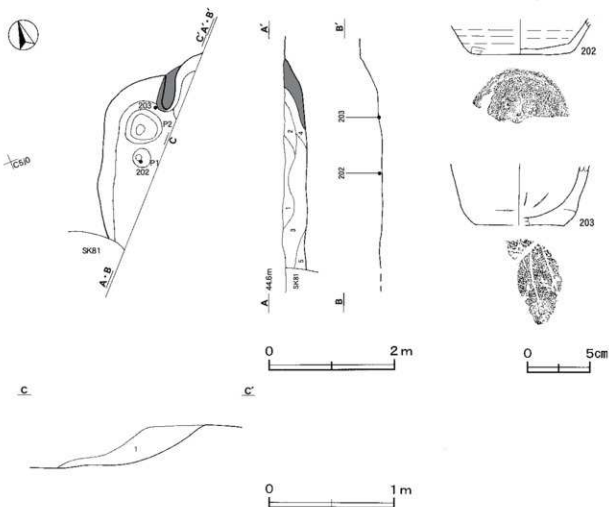
覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------------|-------|------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック微量 | 4 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量 |
| 2 黒褐色 | 焼土粒子少量、ロームブロック・砂質粘土粒子微量 | 5 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 極暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・砂質粘土粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片3点(甕類)、須恵器片1点(坏類)が出土している。202は中央部の覆土下層、203は竈左袖脇の床面からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。



第221図 第69号住居跡・出土遺物実測図

第69号住居跡出土遺物観察表 (第221図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
302	須恵器	坏	-	(2.8)	(8.0)	長石・雲母	灰黄	普通	内・外面ロクロナデ 底部凹陥へツ切り後一方の隅の削り	礎土下層	15%
303	土師器	甕	-	(4.8)	(7.0)	石英・長石	にぶい黄褐色	普通	底部木葉痕	床面	5%

表13 奈良・平安時代竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設			覆土	主な出土遺物	時期	備考(旧→新)		
								注1	注2	注3						
2	B2a0	N-4°-W	方形	5.35 × 5.35	13~25	平組 (貼付)	(全周)	4	1	2	竪1	-	自然	土師器, 須恵器	8世紀初頭	S13→本跡→ S11, SK29-50
6	B4h3	N-7°-E	方形・ 長方形	4.40 × (4.40)	18~27	平組 (注1 全周)	(注1 全周)	4	2	-	竪1	-	自然	弥生土器, 土師器, 須恵器, 鉄鍔, 釘	8世紀中葉	SK43→本跡
7	B4c2	N-1°-W	長方形	4.70 × 3.62	26~33	平組 (貼付)	-	1	-	-	竪1	-	自然	弥生土器, 土師器, 須恵器	9世紀前半	本跡→S81
10	B4f4	N-5°-E	方形・ 長方形	(3.53) × (0.94)	15	平組 (注1 全周)	-	-	-	-	人為	-	人為	土師器, 須恵器	9世紀中葉	S111→本跡
11	B4f3	N-4°-E	方形・ 長方形	2.84 × (1.86)	8~10	平組	(一部)	-	1	-	竪1	-	自然	土師器, 須恵器	9世紀中葉 以前	本跡→S10
18	B4c2	N-14°-E	方形	3.39 × 3.34	15	平組 (注1 全周)	-	1	-	-	竪1	-	自然	弥生土器, 土師器, 須恵器	9世紀中葉	本跡→S30
19	A3a3	N-13°-E	方形・ 長方形	[4.94] × [4.50]	9	平組 (注1 全周)	1	-	2	-	竪1	-	不明	土師器, 須恵器	8世紀初頭	本跡→S12
20	A3b5	N-12°-E	方形	3.42 × 3.36	29	平組	-	1	1	-	竪1	-	自然	土師器, 須恵器, 支 脚	8世紀後半	S121, 23, SK32 →本跡
24	B4c2	N-4°-W	方形・ 長方形	3.26 × (2.32)	41	平組 (注1 全周)	-	1	-	-	竪1	-	人為	土師器, 須恵器	9世紀前半	SK11→本跡
39	B3b6	N-10°-W	方形	4.08 × 4.04	10~22	平組	-	-	-	-	竪1	-	自然	土師器, 須恵器, 土 瓦, 磁石	9世紀前半	S130, 39-40~ 42→本跡→ SK11-14
50	B5h3	N-14°-E	方形	3.01 × 2.93	36~42	平組	-	1	-	-	竪1	-	自然	弥生土器, 土師器, 須恵器, 鉄鍔	9世紀後半	S151→本跡
52	C6e2	N-5°-W	方形	3.24 × 3.02	35~44	平組	全周	-	1	-	竪1	-	自然	土師器, 須恵器, 支 脚, 礎	9世紀後半	
53	C5c8	N-14°-W	方形・ 長方形	3.60 × (2.95)	15	平組	-	3	-	-	竪1	-	自然	土師器, 須恵器, 瓦	9世紀中葉	本跡→S14
54	C5e9	N-7°-W	方形	3.66 × 3.64	32	平組	(全周)	-	1	-	竪1	-	自然	土師器, 須恵器	9世紀前半	本跡→S14・ 5
56	C5d0	N-11°-W	方形	4.42 × 4.10	32~41	平組	(全周)	4	1	-	竪1	-	自然	土師器, 須恵器, 鉄 鍔	9世紀中葉	S155, SK62→ 本跡
57	C6f1	N-5°-W	方形	3.69 × 3.51	28~35	平組	全周	-	1	-	竪1	-	自然	土師器, 須恵器, 磁 石, 刀子, 釘	9世紀中葉	
58	C5a9	N-2°-W	方形	3.91 × 3.60	36~38	平組	全周	-	1	-	竪1	-	自然	土師器, 須恵器, 磁 石, 釘	9世紀前半	SK83→本跡
39	C5f9	N-1°-W	方形	3.85 × 3.70	24~34	平組	(全周)	-	1	-	竪1	-	自然	弥生土器, 土師器, 須恵器, 磁石, 刀子 子, 須恵器, 鉄鍔, 刀 子	9世紀中葉	S155-66→本 跡→S12
60	C5h0	N-10°-E	方形	4.20 × 4.11	19~26	平組 (注1 全周)	4	1	-	-	竪1	-	自然	弥生土器, 土師器, 須恵器, 鉄鍔, 刀 子	8世紀中葉	本跡→第2号 墓坑
63	B4f9	N-0°	方形	2.87 × 2.85	50	平組	全周	-	1	-	竪1	-	自然	弥生土器, 土師器, 須恵器, 磁石, 鉄鍔	9世紀中葉	S162→本跡 →S17
65	C5f4	N-5°-W	方形	3.40 × 3.35	30~42	平組 (注1 全周)	-	1	-	-	竪1	-	自然	土師器, 須恵器, 支 脚, 磁石	8世紀後半	
66	C5e1	N-2°-W	方形	3.15 × 2.98	35	平組 (注1 全周)	-	1	-	-	竪1	-	自然	土師器, 須恵器	9世紀前半	S172, SK61-69 →本跡→SK79
69	C5f3	N-25°-E	方形・ 長方形	(3.48) × (1.13)	67	平組	-	-	-	2	竪1	-	自然	土師器, 須恵器	9世紀前半	本跡→SK81

(2) 土坑

第29号土坑 (第222図)

位置 調査区1区のB2a0区で、標高43mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第2号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 確認できた範囲は長径2.06m、短径2.00mの円形と推定される。深さは46cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

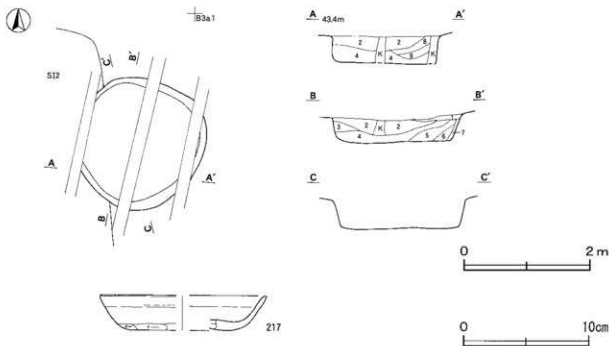
覆土 9層に分層される。ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|----------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量 | 6 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 炭化粒子少量、ロームブロック微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 黒褐色 | 焼土ブロック少量、ロームブロック微量 | 8 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 | 9 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 5 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片52点(坏1, 甕類51)が覆土中層を中心に出土している。217は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀中葉と考えられる。



第222図 第29号土坑・出土遺物実測図

第29号土坑出土遺物観察表 (第222図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
217	土師器	坏	[13.2]	2.9	[7.7]	雲母	灰	普通	内・外面ロクロナデ 体部下端手持ちへうのび	覆土中	30%

第88号土坑 (第223図)

位置 調査区II区のC 5 h8区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第68号住居跡を掘り込み、第12号溝に掘り込まれている。

規模と形状 確認できた範囲は長径0.98m、短径0.76mである。平面形は楕円形と推定され、長径方向はN-32°-Wである。深さは30cmで、底面は皿状である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 4層に分層される。ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

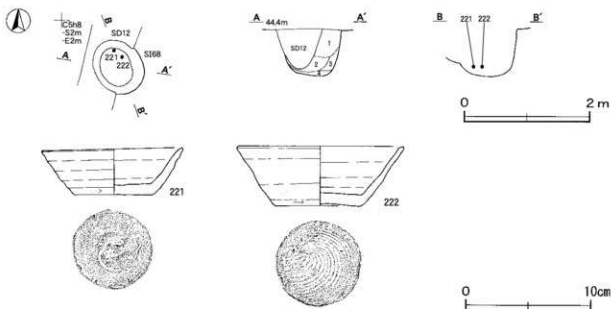
土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|--------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック微量 | 3 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 4 極暗褐色 | ロームブロック少量 |

遺物出土状況 須恵器片18点(坏類5, 甕類13)が出土している。221・222は中央部の覆土下層から出土して

いる。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第223図 第88号土坑・出土遺物実測図

第88号土坑出土遺物観察表（第223図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
221	須恵器	坏	11.1	3.7	6.3	長石・雲母・黒色 粒子・線維	黄灰	普通	内・外面ロクロナデ 底部下端の軌へラ削り 底部の軌へラ削りナデ	覆土下層	80% PL30
222	須恵器	坏	13.1	4.8	6.8	右長・長石・雲母 ・線維	灰	普通	内・外面ロクロナデ 底部下端の軌へラ削り 底部の軌へラ削り	覆土下層	90% PL30

表14 奈良・平安時代土坑一覽表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考(旧→新)
				[長径×短径] (m)	深さ (cm)					
29	B2a0	-	[円形]	2.06 × (2.00)	46	外傾	平坦	人為	土師器	SI 2 → 本跡
88	C518	N-32°-W	[楕円形]	(0.98) × (0.76)	30	外傾	皿状	人為	須恵器	S168 → 本跡 → SD12

4 中世の遺構と遺物

今回の調査で、方形竪穴遺構3軒、墓坑2基が確認された。以下、確認された遺構と遺物について記述する。

(1) 方形竪穴遺構

第1号方形竪穴遺構（第224図）

位置 調査区1区のB2b9区で、標高43mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第2号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 一辺2.26mの隅丸方形で、主軸方向はN-14°-Eである。壁高は50～66cmでほぼ直立している。

床 ほぼ平坦である。

ピット 6か所。P1～P4は深さ21～29cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P5・P6は深さ5cm・20cmで、性格は不明である。

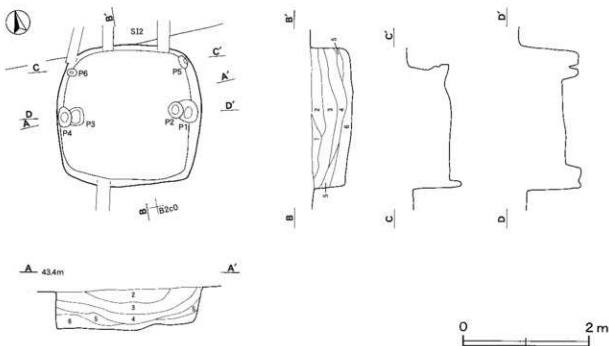
覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量	4 黒褐色 ロームブロック少量、炭化物微量
2 黒褐色 ロームブロック微量	5 黒色 炭化粒子少量、ローム粒子微量
3 黒褐色 ロームブロック少量	6 黒褐色 炭化粒子少量、ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片79点（坏類16，埴1，甕62），須恵器片2点（甕）が覆土中から出土している。土器片はいずれも周囲から流入したものと考えられる。これらは細片のため図示できない。

所見 炉や竈が確認できないため、一般の住居とは異なると考えられ、性格は不明である。また、第2・3号方形竪穴遺構と隣接し、形状も類似している。時期は、遺構の形状や周辺の様相から中世と推測される。



第224図 第1号方形竪穴遺構実測図

第2号方形竪穴遺構（第225図）

位置 調査区I区のA3g3区で、標高43mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第19号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 南東部が調査区域外であるため、確認できた規模は長軸2.25m、短軸2.10mである。平面形は方形と推定され、主軸方向はN-16°-Eである。壁高は23～28cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

ピット 4か所。P1・P4は深さ18cm・56cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P2・P3の深さは24cm・33cmで、性格は不明である。

覆土 2層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

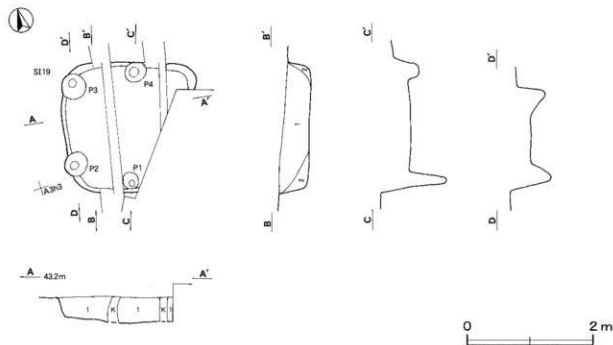
土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化物微量

2 黒色 ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片130点(坏類19, 高坏2, 埴1, 甕類108), 須恵器片3点(蓋2, 甕1)が覆土中から出土している。土器片はいずれも周囲から流入したものと考えられる。これらは細片のため図示できない。

所見 炉や竈が確認できないため、一般の住居とは異なると考えられ、性格は不明である。第1・3号方形竈穴遺構と隣接し、形状も類似している。時期は、遺構の形状や周辺の様相から中世と推測される。



第225図 第2号方形竈穴遺構実測図

第3号方形竈穴遺構(第226図)

位置 調査区1区のA2f9区で、標高43mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 西部が調査区域外であるため、確認できた範囲は南北軸1.60m, 東西軸0.76mである。平面形は方形又は長方形と推定され、主軸方向はN-30°-Eである。壁高は44~56cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

ピット 深さは44cmで、性格は不明である。

覆土 6層に分層される。ブロックを多く含む堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量

4 黒褐色 ロームブロック少量

2 灰褐色 ロームブロック中量、炭化物微量

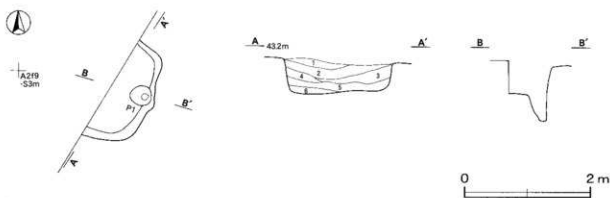
5 褐色 ロームブロック多量

3 黒褐色 ロームブロック少量、炭化物微量

6 暗褐色 ロームブロック中量、炭化物微量

遺物出土状況 土師器片4点(甕類)が覆土中から出土しているが、細片のため図示できない。

所見 炉や竈が確認できないため、一般の住居とは異なると考えられ、性格は不明である。第1・2号方形竈穴遺構と隣接し、形状も類似している。時期は、遺構の形状や周辺の様相から中世と推測される。



第226図 第3号方形竪穴遺構実測図

表15 中世方形竪穴遺構一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	深さ (cm)	壁面	床面	覆土	内部施設				時期	主な出土遺物	備考(旧→新)	
									柱穴	土間	石	土				
1	B219	N-14°-E	隅丸方形	2.26 × 2.26	50~60	直立	平坦	自然	4	-	2	-	-	中世	土師器、須恵器	SI2→本跡
2	A3g0	N-16°-E	[方形]	2.25 × 2.10	23~28	外傾	平坦	自然	2	-	2	-	-	中世	土師器、須恵器	SI19→本跡
3	A219	N-30°-E	[方形・長方形]	1.60 × 0.76	44~56	外傾	平坦	人為	-	-	1	-	-	中世	土師器	

(2) 墓坑

第1号墓坑 (第227図)

位置 調査区Ⅱ区のB-4j8区で、標高45mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第62号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径70cm、短径34cmの長楕円形で、長径方向はN-72°-Wである。深さは22cmで、底面は平坦である。壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

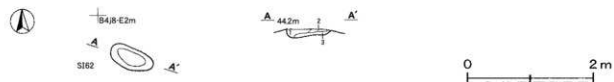
覆土 3層に分層される。焼土ブロック、炭化物、骨粉を含む人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 炭化物少量、焼土ブロック・骨粉微量 3 黒褐色 炭化物中量、骨粉少量
2 黒褐色 焼土ブロック・炭化物・骨粉少量

遺物出土状況 土師器片14点(甕類)が覆土中から出土しており、埋め戻しの際の混入と考えられる。土器は細片のため図示できない。

所見 骨粉が出土したことや炭化物が出土したことから墓坑と考えられる。時期は、周囲の様相から、中世と推測される。



第227図 第1号墓坑実測図

第2号墓坑 (第228図)

位置 調査区Ⅱ区のC6h1区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第60号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径70cm、短径42cmの楕円形で、長径方向はN-0°である。深さは10~20cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

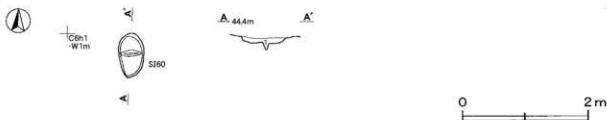
覆土 単一層で、焼土ブロック、炭化物、骨粉を含む人為堆積である。

土層解説

1 黒褐色 炭化物多量、焼土ブロック・骨粉少量、ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片10点(坏類1, 甕類9), 須恵器片1点(坏類)が覆土中から出土しており、埋め戻しの際の混入と考えられる。土器は細片のため図示できない。

所見 骨粉が出土したことや炭化物が出土したことから墓坑と考えられる。時期は、周囲の様相から、中世と推測される。



第228図 第2号墓坑実測図

表16 中世墓坑一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	人骨	主な出土遺物	備考(旧→新)
1	B4e	N-72°-W	長楕円形	0.70 × 0.34	22	緩斜	平坦	人為	有	土師器	SI62→本跡
2	C6h1	N-0°	楕円形	0.70 × 0.42	10~20	外傾	平坦	人為	有	土師器、須恵器	SI60→本跡

5 その他の遺構と遺物

今回の調査では、時期不明の竪穴住居跡4軒、掘立柱建物跡2棟、掘列跡4か所、溝跡13条、井戸跡3基、道路跡1条、土坑68基、ピット群8か所、不明遺構1基が確認された。以下、確認された遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第48号住居跡 (第229図)

位置 調査区Ⅱ区のB4e6区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第49号住居に掘り込まれている。

規模と形状 ほとんどが調査区域外であり、第49号住居の床下から南壁が確認されたため住居とした。確認で

きた範囲は南北軸3.34m、東西軸0.56mである。平面形は方形又は長方形と推定され、主軸方向はN-53°-Wである。壁高は21cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦である。

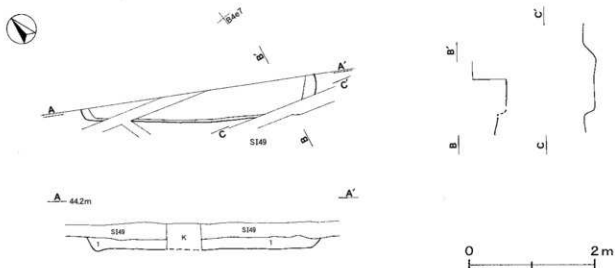
覆土 単一層で、層厚が薄いため堆積状況は不明である。

土層解説

1 褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量

遺物出土状況 土師器片7点（甕類）が覆土上層に散在して出土している。細片のため図示できない。

所見 時期は、出土土器が細片であり、また重複関係からも不明である。



第229図 第48号住居跡実測図

第49号住居跡（第230図）

位置 調査区Ⅱ区のB4 e6区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第48号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 北東部・南部が調査区域外であるため、確認できた範囲は南北軸5.40m、東西軸4.13mである。

平面形は方形又は長方形と推定され、主軸方向はN-17°-Wである。壁高は20cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

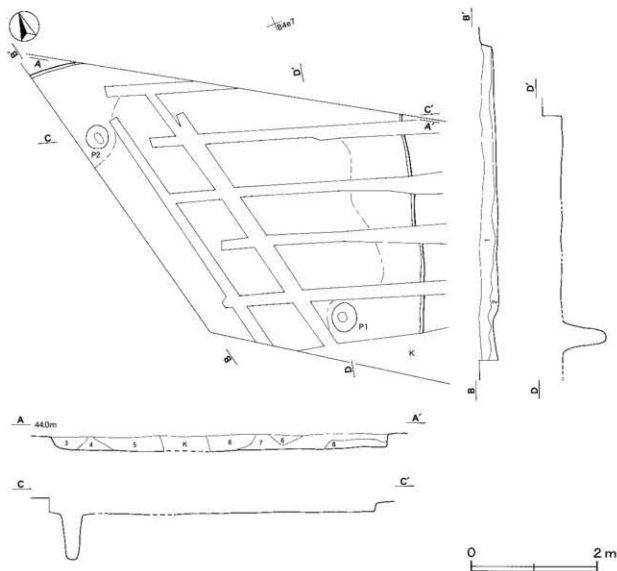
ピット 2か所。P1・P2は深さ68cm・72cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。

覆土 8層に分層される。ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|---------|-------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック微量 | 5 不分明褐色 | ローム粒子中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土ブロック微量 | 6 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック多量、焼土粒子微量 | 7 褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 |
| 4 褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 黒褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 |

所見 時期は、出土土器がなく、重複関係からも不明である。



第230図 第49号住居跡実測図

第70号住居跡（第231図）

位置 調査区Ⅱ区のC 6 g2区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 北東コーナー部以外は調査区域外であるため、確認できた範囲は南北軸0.90m、東西軸0.92mである。平面形は方形又は長方形と推定され、主軸方向はN-10°-Wである。壁高は40cmで、直立している。

床 平坦である。

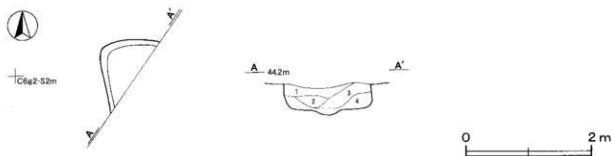
覆土 4層に分層される。ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|--------|------------------|-------|------------------|
| 1 極暗褐色 | ロームブロック微量 | 3 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量 |
| 2 極暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子微量 | 4 黒褐色 | ロームブロック少量 |

遺物出土状況 土師器片4点（坏類3、甕類1）が覆土上層から出土している。細片のため図示できない。

所見 時期は、出土土器が細片のため不明である。



第231図 第70号住居跡実測図

第71号住居跡 (第232図)

位置 調査区Ⅱ区のC 5 19区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 南西部が調査区域外であるため、確認できた範囲は南北軸3.57m、東西軸2.40mである。平面形は方形又は長方形と推定され、主軸方向はN-29°-Wである。壁高は28cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、軟弱である。壁溝が全周し、断面形はU字状である。

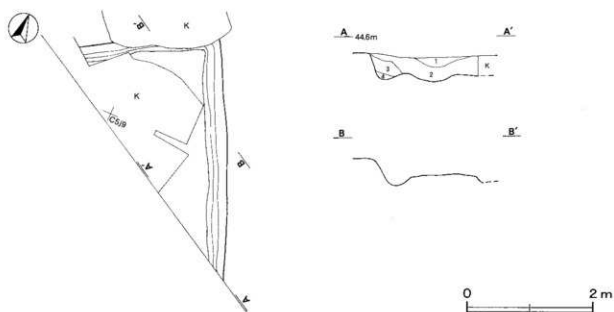
覆土 4層に分層される。ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- | | |
|------------------------|------------------------|
| 1 黒褐色 炭化物・ローム粒子少量 | 3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量 |
| 2 黒褐色 焼土粒子少量、ロームブロック少量 | 4 暗褐色 ローム粒子少量 |

遺物出土状況 土師器片1点(甕類)が覆土上層から出土している。細片のため図示できない。

所見 時期は、出土土器が細片のため不明である。



第232図 第71号住居跡実測図

表17 時期不明整穴住居跡一覧表

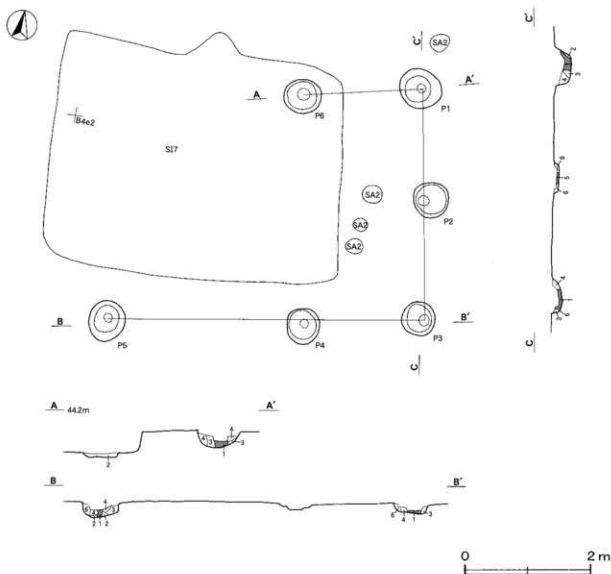
番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設				覆土	主な出土遺物	時期	備考(旧→新)
								柱穴	土間	土間	土間				
48	B 4-6	N-63°-W	[方形] [長方形]	(3.34) × (0.06)	21	平組	-	-	-	-	-	不明	土師器	不明	本跡→S149
49	B 4-6	N-17°-W	[方形] [長方形]	(5.40) × (4.13)	20	平組	-	2	-	-	-	人為		不明	S148→本跡
70	C 6-2	N-10°-W	[方形] [長方形]	(0.92) × (0.90)	40	平組	-	-	-	-	-	人為	土師器	不明	
71	C 5-19	N-29°-W	[方形] [長方形]	(3.57) × (2.40)	28	平組	(全周)	-	-	-	-	人為	土師器	不明	

(2) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡(第233図)

位置 調査区1区のB 4 e3区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第7号住居跡を掘り込んでいる。



第233図 第1号掘立柱建物跡実測図

規模と形状 桁行2間、梁行2間の側柱建物跡である。規模は桁行5.00m、梁行3.65mで、桁行方向をN-81°-Eとする東西棟である。柱間寸法は桁行約1.80~3.15m、梁行1.80mで、面積は18.25㎡である。

柱穴 6か所。平面形は径60~70cmの円形で、深さは8~28cmである。断面形はU字状を呈している。柱痕は、土層断面の第1・5層が相当する。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック微量	4 黒褐色	ロームブロック少量
2 黒褐色	ローム粒子微量	5 暗褐色	ロームブロック少量
3 褐色	ロームブロック中量	6 暗褐色	ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片2点(甕類)が出土している。細片のため図示できない。

所見 時期は、重複関係から9世紀前葉以降と考えられるが、出土土器がなく詳細は不明である。

第2号掘立柱建物跡(第234図)

位置 調査区I区のB3c7区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第43号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 東部は調査区域外に延びており、確認された範囲は南北・東西行とも1間で、桁行方向をN-0°と推定される。柱間寸法は南北行2.30m、東西行1.60mで、東西棟と推定される。

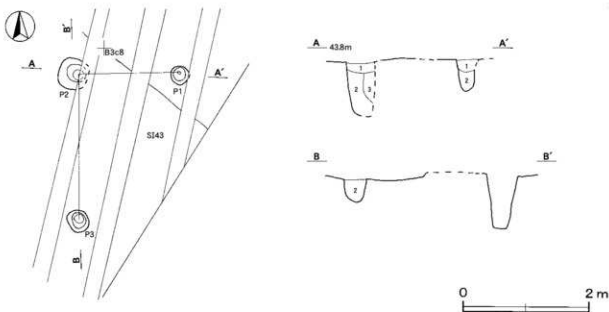
柱穴 3か所。平面形は径30~55cmの円形で、深さは33~85cmである。断面形はU字状を呈している。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック微量	3 暗褐色	ロームブロック少量
2 黒褐色	ローム粒子少量		

遺物出土状況 土師器片4点(坏類1, 埴1, 甕類2)が出土している。細片のため図示できない。

所見 時期は、重複関係から8世紀初頭以降と考えるが、出土土器がなく詳細は不明である。



第234図 第2号掘立柱建物跡実測図

表18 時期不明掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	桁行方向	柱間数 (桁×梁)	規模 (m)	面積 (㎡)	構造	桁行柱間 (m)	梁行柱間 (m)	柱穴平面形	深さ (cm)	主な出土遺物	時期	備考(旧→新)
1	B4e3	N-8°-E	(2)×2	5.00×3.65	18.25	側柱	1.80~3.15	1.80	円形	8~28	土師器	不明	S17→本跡
2	B3c7	N-0°	(1)×(1)	2.30×1.60	-	側柱	2.30	1.60	円形・楕円形	33~85	土師器	不明	S143→本跡

(3) 柵列跡

第1号柵列跡(第235図)

位置 調査区I区のB3g0~B3j9区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長さは12.10mで、方向はN-13°-Eである。柱間寸法は1.40~2.02mである。

柱穴 8か所。径24~43cmの円形又は楕円形である。断面形はU字状で、深さは20~88cmである。覆土は黒褐色で、すべて抜き取り痕と考えられる。

所見 時期及び性格は、出土土器がないため不明である。

第2号柵列跡(第235図)

位置 調査区I区のB4c3~B4e3区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長さは6.10mで、方向はN-12°-Eである。柱間寸法は0.36~2.60mである。

柱穴 5か所。径10~32cmの円形である。断面形はU字状で、深さは12~35cmである。覆土は黒褐色で締まりが弱く、すべて抜き取り痕と考えられる。

所見 時期及び性格は、出土土器がないため不明である。

第3号柵列跡(第236図)

位置 調査区I区のB3g9~B3h9区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長さは6.05mで、方向はN-12°-Eである。柱間寸法が0.34~1.90mである。

柱穴 6か所。径16~45cmの円形又は楕円形である。断面形はU字状で、深さは16~45cmである。覆土は黒褐色で、すべて抜き取り痕と考えられる。

所見 時期及び性格は、出土土器がないため不明である。

第4号柵列跡(第236図)

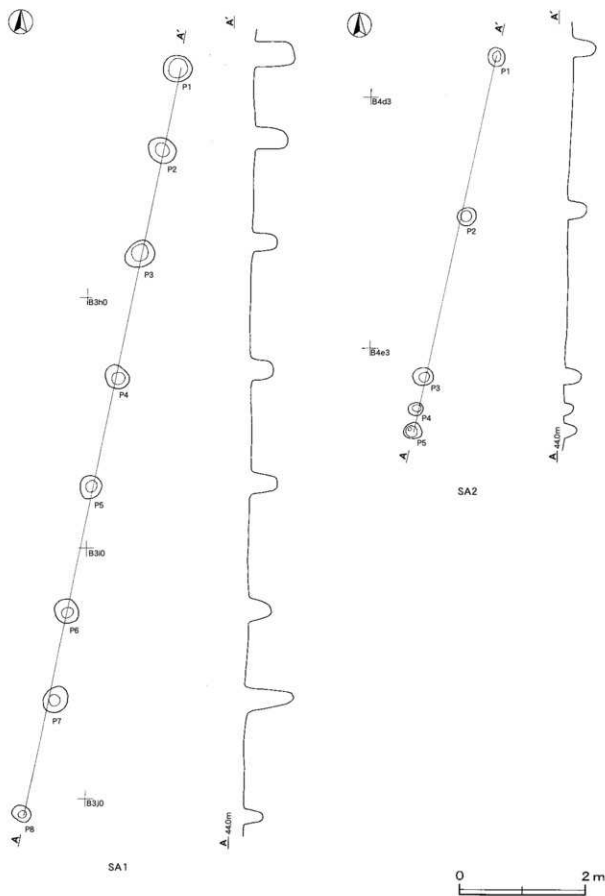
位置 調査区I区のB3c7~B3d7区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第43号住居跡、第42号土坑を掘り込んでいる。

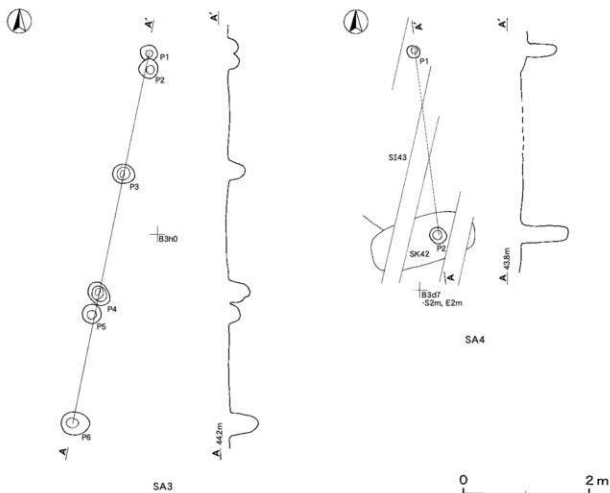
規模と形状 長さは2.96mで、方向はN-7°-Wである。柱間寸法が2.96mである。

柱穴 2か所。径20cm・56cmの円形である。断面形はU字状で、深さは54cm・76cmである。覆土は黒褐色で、すべて抜き取り痕と考えられる。

所見 時期は、重複関係から5世紀後葉以降と考えられるが、出土土器がないため詳細は不明である。



第235图 第1·2号栅列跡実測図



第236図 第3・4号柵列跡実測図

表19 時期不明柵列跡一覧表

番号	位置	方向	柱穴数	柱穴平面形	長さ (m)	柱間 (m)	径 (cm)	深さ (cm)	備考(旧→新)
1	B3g9~B3j9	N-13°-E	8	円形・楕円形	12.10	1.40~2.02	24~43	20~88	
2	B4c3~B4e3	N-12°-E	5	円形	6.10	0.36~2.60	10~32	12~35	
3	B3g9~B3i9	N-12°-E	6	円形・楕円形	6.05	0.34~1.90	16~45	16~45	
4	B3c7~B3d7	N-7°-W	2	円形	2.96	2.96	20×96	54×76	S143,SK42→本跡

(4) 溝跡

時期及び性格が不明な溝跡13条について記述し、土層断面図を掲載する。なお、平面図は遺構全体図に掲載する。

第1号溝跡 (第237・278図)

位置 調査区I区のA3h4~A3j9区で、標高43mほどの尾根状の台地平坦部に位置している。

重複関係 第22号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 A3h4区から東西方向(N-112°-E)へ直線的に延び、北側の調査区域外へと至る。確認できた規模は長さ21.83m、上幅60~120cm、下幅13~40cm、深さ12~25cmである。断面形はU字状を呈し、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

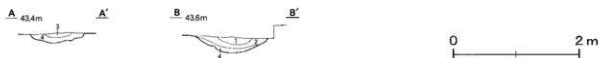
覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量 | 3 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック微量 | 4 褐色 | ロームブロック少量 |

遺物出土状況 土師器片6点(甕類)が覆土中から出土している。土器片はいずれも周囲から流れ込んだもので、細片のため図示できない。

所見 時期は、出土土器がいずれも細片のため不明である。性格も不明である。



第237図 第1号溝跡実測図

第2号溝跡 (第238・278図)

位置 調査区II区のB4g9~B4g0区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第47号住居に掘り込まれている。

規模と形状 B4g9区の調査区域外から南北方向(N-32°-E)に直線的に延びている。確認できた規模は長さ4.30m、上幅16~80cm、下幅8~70cm、深さ4~12cmである。断面形はU字状を呈し、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 単一層で、層厚が薄いため堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 須恵器片1点(甕)が覆土中から出土しているが、細片のため図示できない。

所見 第3号溝跡と並行して北側に延びているが、性格は不明である。時期は、出土土器がほとんどなく不明である。

第3号溝跡 (第238・278図)

位置 調査区II区のB4h9~B4g0区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 B4h9区から南北方向(N-15°-E)に直線的に延びている。確認できた規模は長さ4.12m、上幅20~54cm、下幅14~46cm、深さ6~8cmである。断面形はU字状を呈し、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

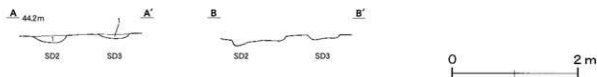
覆土 単一層で、層厚が薄いため堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片18点（坏類1，甕類17），須恵器片1点（甕）が覆土中から出土している。土器片はいずれも周囲から流れ込んだものと考えられ、細片のため図示できない。

所見 第2号溝跡と並行して北側に延びているが、性格は不明である。時期は、出土土器がいずれも細片のため不明である。



第238図 第2・3号溝跡実測図

第4号溝跡（第239・278図）

位置 調査区Ⅱ区のC5b9～C5i7区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第53・54・68号住居跡を掘り込み、第1号道路に掘り込まれている。

規模と形状 C5b9区から南北方向（N-175°-W）に直線的に延び、調査区域外へと至る。さらにC5e8区から南北方向（N-169°-W）に延びている。確認できた規模は長さ14.45m、上幅96～180cm、下幅38～80cm、深さ28～40cmである。断面形は逆台形状を呈し、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

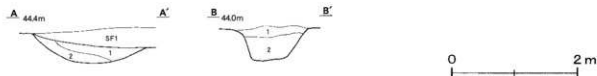
土層解説

1 極暗褐色 ローム粒子微量

2 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 弥生土器片1点（甕），土師器片61点（坏類3，甕類58），須恵器片9点（高台付坏1，甕8）が出土している。土器片はいずれも周囲から流れ込んだものと考えられ、細片のため図示できない。

所見 時期は、重複関係から9世紀中葉以降と考えられるが、出土土器がいずれも細片のため詳細は不明である。



第239図 第4号溝跡実測図

第5号溝跡（第240・278図）

位置 調査区Ⅱ区のC5e9～C5d9区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第54号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 C5e9区から南北方向（N-163°-W）に直線的に延び、調査区域外へと至る。確認できた規模は長さ1.64m、上幅56～72cm、下幅30～40cm、深さ32cmである。断面形は逆台形状を呈し、壁は外傾して立ち

上がっている。

覆土 2層に分層される。レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

1 極暗褐色 ローム粒子少量

2 暗褐色 ロームブロック中量

所見 第4号溝跡と並行しているが、性格は不明である。時期は、重複関係から9世紀前葉以降と考えられるが、出土土器がないため詳細は不明である。



第240図 第5号溝跡実測図

第6号溝跡 (第241・278図)

位置 調査区Ⅱ区のB4h8～C4b7区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第47・62号住居跡、第8号溝跡、第71号土坑を掘り込んでいる。攪乱を受けているため第9号溝跡との新旧関係は不明である。

規模と形状 B4h8区から南北方向(N-165°-W)に直線的に延びている。確認できた規模は長さ13.53m、上幅74～166cm、下幅30～56cm、深さ18～40cmである。断面形はU字状を呈し、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量

3 暗褐色 ローム粒子少量

2 極暗褐色 ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片66点(坏類5、甕類61)、須恵器片9点(坏1、甕8)、鉄滓1点が覆土中から出土している。土器片はいずれも周囲から流れ込んだもので、細片のため図示できない。

所見 北側では第47号住居跡の覆土上層をわずかに掘り込んでおり、形状から第2号溝跡と同一の可能性が有る。また、南側は第61号住居跡の西側で途切れているが、さらに南へ続く可能性がある。第8・9号溝跡との位置関係から区画溝としての性格が考えられる。時期は、重複関係から6世紀後葉以降と考えられるが、出土土器が細片のため詳細は不明である。



第241図 第6号溝跡実測図

第7号溝跡 (第242・278図)

位置 調査区Ⅱ区のB 4h9～C 4a9区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第62・63号住居跡、第9号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 B 4h9区から南北方向(N-168°-W)に直線的に延びている。確認できた規模は長さ11.56m、上幅66～88cm、下幅16～34cm、深さ20cmである。断面形はU字状を呈し、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量

3 暗褐色 ローム粒子少量

2 極暗褐色 ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片7点(環類1, 甕類6)が覆土中から出土している。土器片はいずれも周囲から流れ込んだものと考えられ、細片のため図示できない。

所見 第9号溝跡に隣接していることから区画溝としての性格が考えられる。時期は、重複関係から9世紀中葉以降と考えられるが、出土土器が細片のため詳細は不明である。



第242図 第7号溝跡実測図

第8号溝跡 (第243・278図)

位置 調査区Ⅱ区のC 4a7～C 4b0区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第61号住居跡を掘り込み、第6号溝、第72号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 C 4a7区から東西方向(N-101°-E)に直線的に延び、東側の調査区域外へと至る。確認できた規模は長さ11.46m、上幅46～60cm、下幅18～40cm、深さ10～22cmである。断面形はU字状を呈し、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 単一層で、層厚が薄いので堆積状況は不明である。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

所見 第6号溝と垂直に交わっていることから区画溝としての性格が考えられる。時期は、重複関係から6世紀後葉以降と考えられるが、出土土器がないため詳細は不明である。



第243図 第8号溝跡実測図

第9号溝跡（第244・278図）

位置 調査区Ⅱ区のC 4 a8～C 5 d7区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第64号住居跡、第70・84号土坑を掘り込み、第7号溝に掘り込まれている。攪乱を受けているため、第6号溝跡との新旧関係は不明である。

規模と形状 C 4 a8区から東西方向（N-102°-E）に直線的に伸び、調査区域外へと至る。さらに、C 5 b3区から東西方向（N-115°-E）に直線的に伸び、C 5 c5区東側の調査区域外へと至る。確認できた規模は長さ26.08m、上幅80～210cm、下幅10～90cm、深さ4～22cmである。断面形はU字状を呈し、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

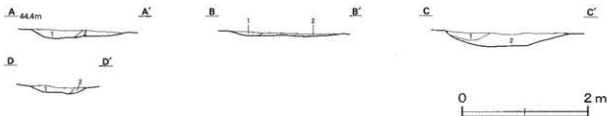
覆土 2層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子微量

2 暗褐色 ロームブロック少量

所見 第6号溝跡との位置関係から区画溝としての性格が考えられる。時期は、重複関係から6世紀前葉以降と考えられるが、出土土器がないため詳細は不明である。



第244図 第9号溝跡実測図

第10号溝跡（第245・278図）

位置 調査区Ⅱ区のC 5 d3～C 5 f2区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第67号住居跡、第76・77号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 C 5 d3区から南北方向（N-172°-W）に直線的に伸び、南側の調査区域外へと至る。確認できた規模は長さ9.97m、上幅39～56cm、下幅11～40cm、深さ10cmである。断面形はU字状を呈し、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 それぞれ単一層で、層厚が薄いため堆積状況は不明である。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量

2 褐色 ローム粒子中量

所見 時期は、重複関係から6世紀中葉以降と考えられるが、出土土器がないため詳細は不明である。



第245図 第10号溝跡実測図

第11号溝跡 (第246・278図)

位置 調査区Ⅱ区のC5b5～C5c7区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 C5b5区から南北方向(N-173°-W)に2.5mほど直線的に伸びたのち、同区内から東西方向(N-105°-E)に屈曲し、東側の調査区域外へと至る。確認できた規模は長さ11.35m、上幅33～108cm、下幅10～40cm、深さは10～12cmである。断面形はU字状を呈し、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

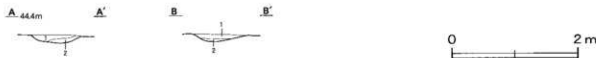
覆土 2層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量

2 褐色 ローム粒子中量

所見 溝の形態から区画溝としての性格が考えられる。時期は、出土土器がないため不明である。



第246図 第11号溝跡実測図

第12号溝跡 (第247・278図)

位置 調査区Ⅱ区のC5e9～C5f8区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第59・68号住居跡、第88号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 C5e9区から南北方向(N-164°-W)に直線的に伸び、南側の調査区域外へと至る。確認できた規模は長さ17.63m、上幅48～82cm、下幅14～36cm、深さ17cmで、断面形は逆台形状を呈し、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子微量

3 極暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量

2 極暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

4 極暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量

所見 溝跡の位置関係から区画溝としての性格が考えられる。時期は、重複関係から9世紀中葉以降と考えられるが、出土土器がないため詳細は不明である。



第247図 第12号溝跡実測図

第13号溝跡 (第248・278図)

位置 調査区Ⅱ区のC5c0区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 C5c0区から南北方向(N-20°-W)に湾曲しながら伸びている。南・北部とも調査区域外へ

と至る。確認できた規模は長さ1.00m、上幅40～50cm、下幅14～20cm、深さ23cmである。断面形はU字状を呈し、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量 3 暗褐色 ローム粒子少量
2 暗褐色 ローム粒子微量

所見 ほとんどが調査区域外にあるため性格は不明である。時期は、出土土器がないため不明である。



第248図 第13号溝跡実測図

表20 時期不明溝跡一覧表

番号	位置	方向	断面形	規模				壁面	覆土	形状	主な出土遺物	時期	備考(旧→新)
				長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)						
1	A3b4～A3j9	N-112°-E	U字状	(21.83)	60～120	13～40	12～25	緩斜	自然	直線状	土師器	不明	SI22→本跡
2	B4g9～B4g0	N-32°-E	U字状	(4.30)	16～80	8～70	4～12	緩斜	不明	直線状	須恵器	不明	本跡→SI47
3	B4i9～B4g0	N-15°-E	U字状	(4.12)	20～54	14～46	6～8	緩斜	不明	直線状	土師器、須恵器	不明	
4	C5i9～C5i7	N-175°-W	逆台形状	(14.45)	96～180	38～80	28～40	外傾	自然	直線状	弥生土器、土師器、須恵器	不明	SI53・54・68 →本跡→SI1
5	C5e9～C5d9	N-163°-W	逆台形状	(1.64)	56～72	30～40	32	外傾	自然	直線状		不明	SI54→本跡
6	B4i8～C4i7	N-165°-W	U字状	(13.53)	74～166	30～56	18～40	緩斜	自然	直線状	土師器、須恵器、鉄滓	不明	SI47・62、SD8、 SK1→本跡
7	B4i9～C4i9	N-168°-W	U字状	(11.56)	66～88	16～34	20	緩斜	自然	直線状	土師器	不明	SI62・63、SD 9→本跡
8	C4a7～C4i0	N-101°-E	U字状	(11.46)	46～60	18～40	10～22	外傾	不明	直線状		不明	SI61→本跡 →SD6、SK72
9	C4a8～C5d7	N-102°-E	U字状	(26.08)	80～210	10～90	4～22	緩斜	自然	直線状		不明	SI64、SK70・81 →本跡→SD7
10	C5d3～C5f2	N-172°-W	U字状	(9.97)	39～56	11～40	10	外傾	不明	直線状		不明	SI67、SK76・ 77→本跡
11	C5b5～C5c7	N-173°-W N-105°-E	U字状	(11.35)	33～108	10～40	10～12	緩斜	自然	L字状		不明	
12	C5e9～C5i8	N-164°-W	逆台形状	(17.63)	48～82	14～36	17	外傾	自然	直線状		不明	SI59・68、 SK88→本跡
13	C5e0	N-20°-W	U字状	(1.00)	40～50	14～20	23	外傾	自然	直線状		不明	

(5) 井戸跡

第1号井戸跡 (第249図)

位置 調査区I区のB3b5区で、標高43mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第25・27号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 径1.34mほどの円形である。壁は外傾して立ち上がっている。遺構確認面から1.42mまで掘り下げたが、以下は湧水のため確認できなかった。

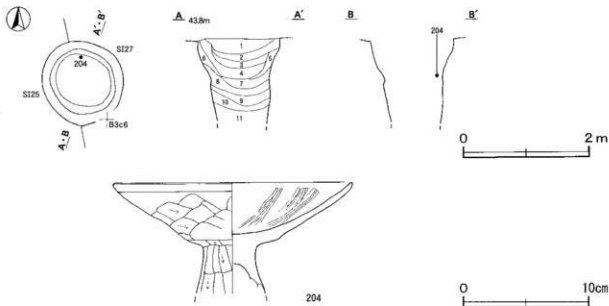
覆土 11層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量 7 黒褐色 ロームブロック中量
2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量 8 暗褐色 ローム粒子少量
3 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量 9 黒褐色 ロームブロック微量
4 黒褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量 10 明褐色 ローム粒子多量、焼土粒子微量
5 黒褐色 ローム粒子少量 11 黒褐色 ロームブロック少量
6 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片86点（坏類9，高坏8，椀2，皿1，甕類66），須恵器片7点（高台付坏1，甕類6）が出土している。204は覆土中層から出土している。

所見 時期は、重複関係及び出土土器から古墳時代後期以降と考えられる。



第249図 第1号井戸跡・出土遺物実測図

第1号井戸跡出土遺物観察表（第249図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
204	土師器	高坏	18.8	(R.7)	-	長石・雲母・赤色 粒子	明赤褐	普通	坏部外面へ有り 内面磨き	脚部へ有り	覆土中層	50% PL27

第2号井戸跡（第250図）

位置 調査区Ⅱ区のC6f3区で、標高45mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.40m，短径1.21mの楕円形で，長径方向はN-15°-Wである。壁は外傾して立ち上がっている。遺構確認面から1.74mまで掘り下げたが，以下は湧水のため確認できなかった。

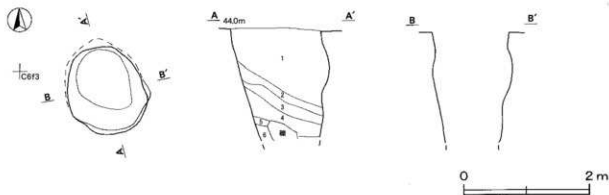
覆土 6層に分層される。ロームブロックを含む不規則な堆積状況や，投げ込まれたと考えられる巨礫が出土していることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子微量	4 褐褐色	ロームブロック中量
2 暗褐色	ロームブロック少量	5 黒褐色	ロームブロック少量
3 黒褐色	ローム粒子少量	6 褐色	ロームブロック多量

遺物出土状況 土師器片46点（坏類1，高台付坏1，埴1，甕類43），須恵器片7点（坏類4，高台付坏1，甕類2）が出土している。細片のため図示できない。

所見 時期は，出土土器から8世紀以降と考えられる。



第250図 第2号井戸跡実測図

第3号井戸跡 (第251図)

位置 調査区Ⅱ区のC5b8区で、標高45mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第68号住居跡・第1号道路跡を掘り込んでいる。

規模と形状 径2.10mほどの円形である。上部は漏斗状に立ち上がり、下部は垂直に掘り込まれている。確認面から1.62mまで掘り下げたが、以下は湧水のため確認できなかった。

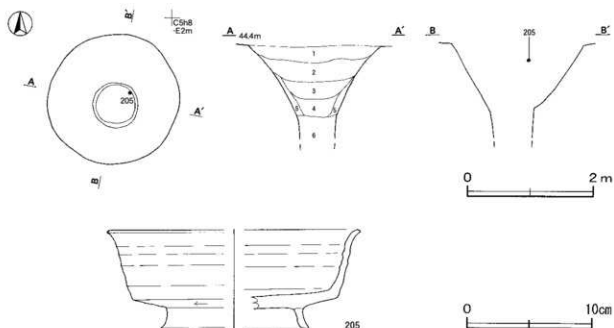
覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- | | |
|--------------------|-------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子微量 | 4 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・炭溶パミス微量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック少量 | 5 黒褐色 ロームブロック少量・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量 | 6 黒褐色 焼土ブロック・ローム粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片19点(坏類1, 甕類18), 須恵器片10点(坏類9, 高台付坏1), 灰軸陶器1点(甕)が出土している。205は覆土上層から出土している。

所見 時期は、重複関係及び出土土器から9世紀中葉以降と考えられる。



第251図 第3号井戸跡・出土遺物実測図

第3号井戸跡出土遺物観察表 (第250図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
305	須恵器	高台付杯	[19.6]	7.9	[11.8]	石英・長石・砂礫	黄灰	普通	体部内・外面口テラナデ 外部下端凹溝へ フ指付 高台原の付?	覆土上層	30%

表21 井戸跡遺構一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	深さ (m)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	時期	備考(旧→新)
1	B365	-	円形	1.35 × 1.28	(1.42)	外傾	不明	自然	土師器、須恵器	古墳後期以降	S125・27→本跡
2	C 613	N-15°-W	楕円形	1.42 × 1.21	(1.74)	外傾	不明	人為	土師器、須恵器	8世紀以降	
3	C 518	-	円形	2.10 × 2.05	(1.62)	傾斜・垂直	不明	自然	土師器、須恵器、灰陶器	9世紀中葉以降	S168・SF 1→本跡

(6) 道路跡

第1号道路跡 (第252・278図)

位置 調査区Ⅱ区のC 5 f8～C 5 i7区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第68号住居跡、第4号溝跡を掘り込み、第3号井戸に掘り込まれている。

規模と形状 確認できた範囲はC 5 f8区から南北方向(N-6°-W)に直線的に伸び、両端部が調査区域外に伸びている。確認できた長さは13.90mで、上幅2.80～3.00m、下幅0.30～1.42m、深さ18～38cmである。地山面が踏み固められている。断面は浅いU字状を呈し、両側は緩やかに立ち上がっている。

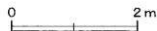
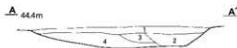
覆土 4層からなる。斜面から流れ込んだ堆積状況を示す自然堆積である。全体的に締まりが強い。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|-------|------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 | 3 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量 |

遺物出土状況 土師器片1(號)が覆土中から出土している。細片のため図示できない。

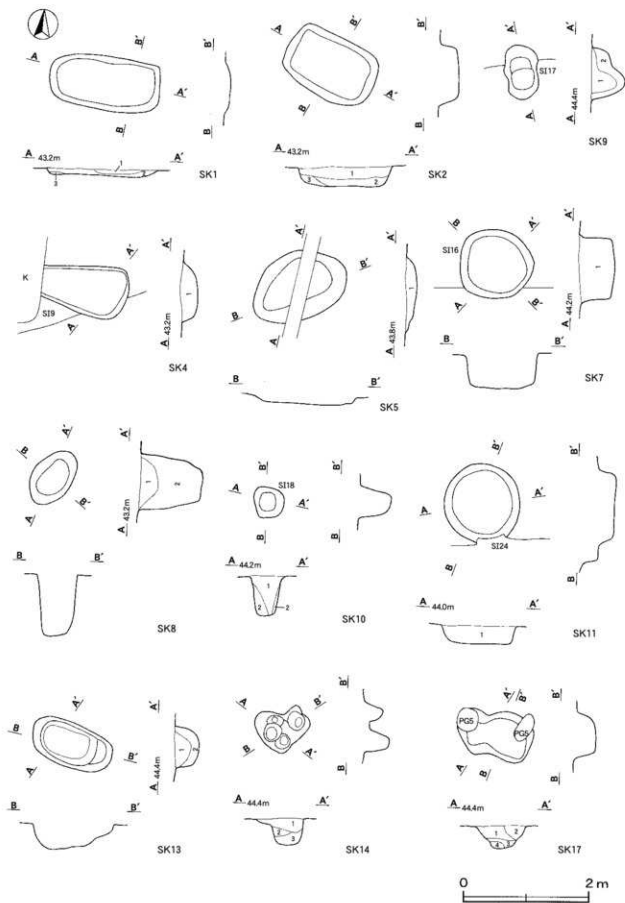
所見 時期は重複関係から、9世紀中葉以降と考えられるが、出土土器が細片のため詳細は不明である。また、第1層の締まりが強いことから、第1層面も路面であった可能性が推測される。



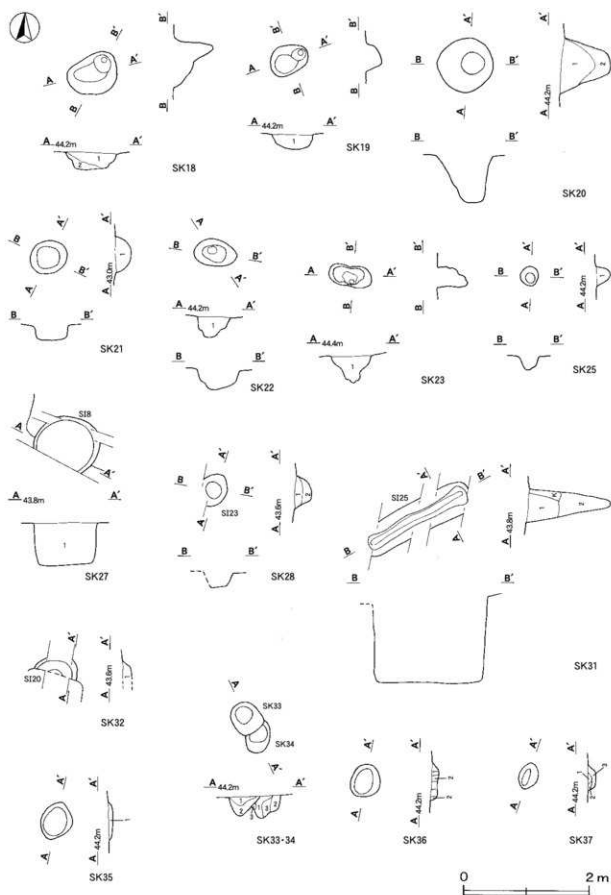
第252図 第1号道路跡実測図

(7) 土坑 (第253～259図)

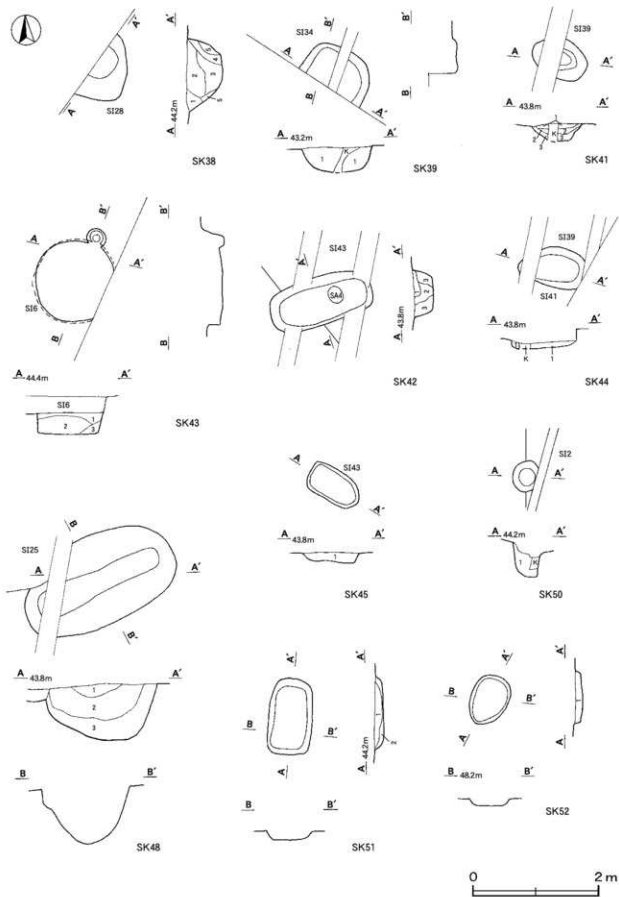
ここでは時期不明の土坑について、実測図と土層解説を記載する。



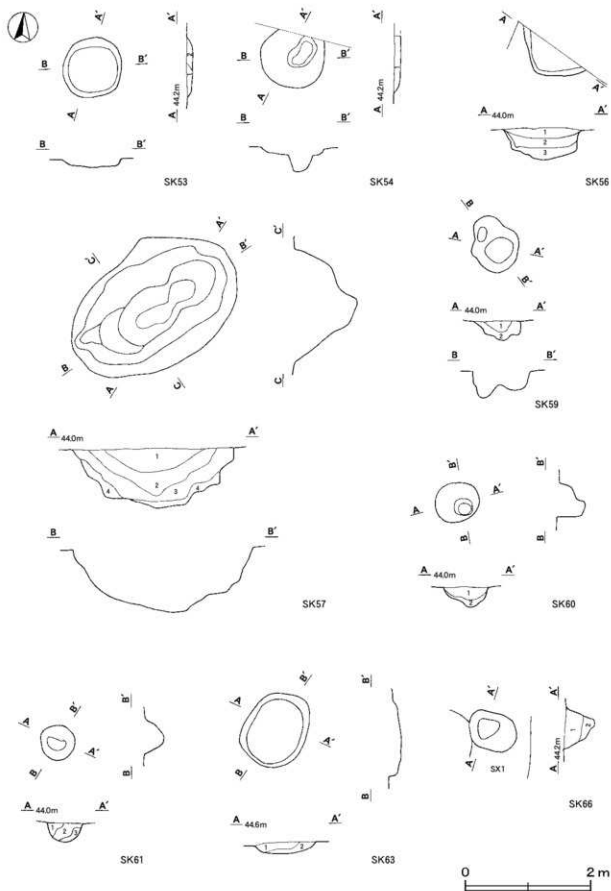
第253图 时期不明土坑实测图(1)



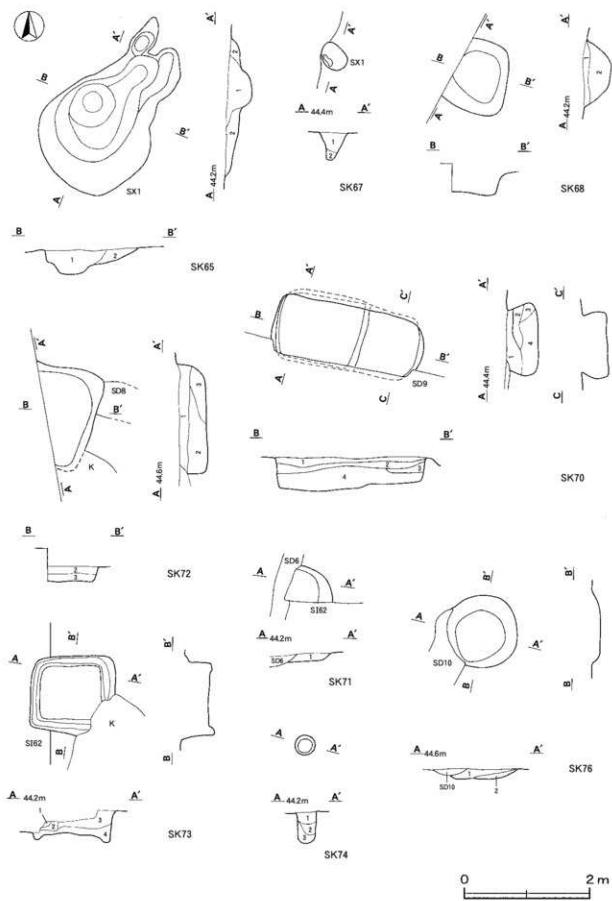
第254図 時期不明土坑実測図(2)



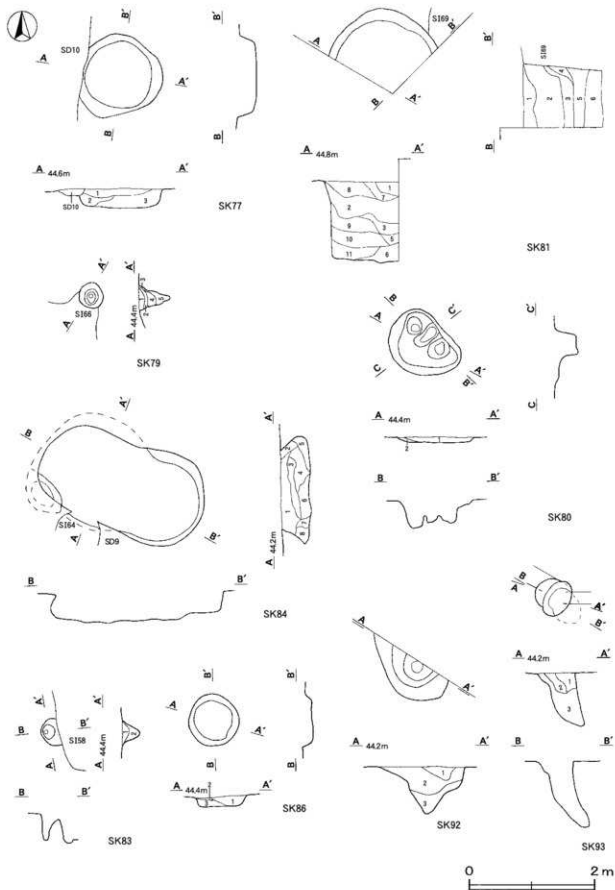
第255图 时期不明土坑实测图(3)



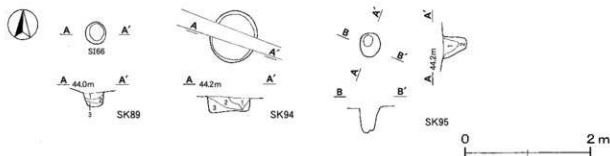
第256図 時期不明土坑実測図(4)



第257图 时期不明土坑实测图(5)



第258図 時期不明土坑実測図(6)



第259図 時期不明土坑実測図(7)

第1号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量、炭化物微量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物微量
- 3 灰褐色 ロームブロック中量、粘土ブロック微量

第2号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量
- 2 暗褐色 ロームブロック多量
- 3 灰褐色 ロームブロック多量

第4号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量

第5号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量、炭化物少量、焼土ブロック微量

第7号土坑土層解説

- 1 灰褐色 ロームブロック多量、炭化物少量

第8号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量

第9号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量、炭化物微量
- 2 灰褐色 ロームブロック多量

第10号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 2 灰褐色 ロームブロック多量

第11号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量

第13号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック多量
- 2 灰褐色 ロームブロック多量

第14号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック多量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量

第17号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック多量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量
- 4 灰褐色 ロームブロック少量

第18号土坑土層解説

- 1 灰褐色 ロームブロック中量
- 2 褐色 ロームブロック多量

第19号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量

第20号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化物少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、炭化物微量

第21号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量

第22号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック中量

第23号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量

第25号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化物少量

第27号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量

第28号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量

第31号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量

第32号土坑土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子少量、ローム粒子微量

第33号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック多量、炭化物微量

第34号土坑土層解説

- 1 灰褐色 ロームブロック多量、炭化物少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック多量

第35号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量

第36号土坑土層解説

- 1 灰褐色 ロームブロック多量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量

第37号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 灰褐色 ロームブロック多量

第38号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量
- 4 灰褐色 ローム粒子中量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量

第39号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量

第41号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土ブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量、鹿沼パミス微量

第42号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子・鹿沼パミス微量

第43号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化物少量
- 2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

第44号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量

第45号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量

第48号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量、炭化物微量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子・鹿沼パミス微量

第50号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック多量

第51号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 極暗褐色 ロームブロック少量

第52号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量

第53号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量

第54号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック微量

第56号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量

第57号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 褐色 ロームブロック中量

第59号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量

第60号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量

第61号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 極暗褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量

第63号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量

第65号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量

第66号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量

第67号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 褐色 ロームブロック中量

第68号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 極暗褐色 ローム粒子少量

第70号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック中量
- 4 褐色 ロームブロック多量

第71号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量

第72号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量

第73号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量

第74号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量

第76号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量

第77号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 3 極暗褐色 ロームブロック少量

第79号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子少量
- 2 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量
- 5 褐色 ロームブロック多量

第80号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量

第81号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、鹿沼パミス微量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子・鹿沼パミス微量
- 4 黒褐色 ローム粒子微量
- 5 黒褐色 ロームブロック・鹿沼パミス少量
- 6 黒褐色 ロームブロック・鹿沼パミス微量
- 7 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 8 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 9 黒褐色 ローム粒子・鹿沼パミス微量
- 10 黒褐色 ロームブロック・鹿沼パミス少量
- 11 極暗褐色 ロームブロック・鹿沼パミス少量

第83号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量

第84号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 2 極暗褐色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 5 黒褐色 ロームブロック少量
- 6 黒褐色 ロームブロック少量
- 7 黒褐色 ローム粒子微量
- 8 暗褐色 ロームブロック少量

第86号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量

第89号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子中量

第92号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量

第93号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量
- 3 極暗褐色 ロームブロック微量

第94号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 極暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量

第96号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック多量

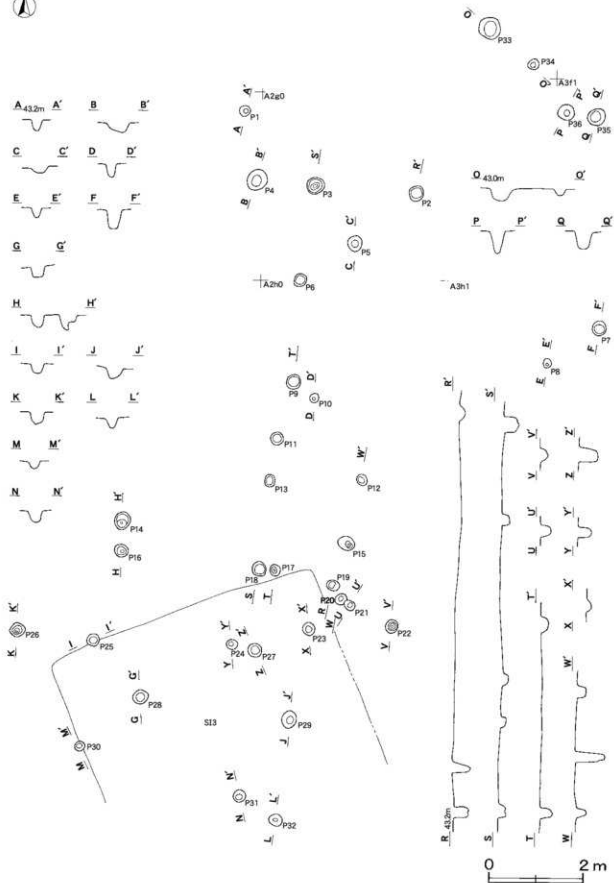
表22 時期不明土坑一覽表

番号	位置	長径(軸)方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考(旧→新)
				長径(軸)×短径(軸) (m)	深さ (cm)					
1	A238	N-5°-E	楕丸長方形	1.8 × 0.86	13	緩斜	平坦	人為	土師器	
2	B269	N-63°-W	楕丸長方形	1.52 × 1.02	34	外傾	平坦	人為	土師器、須恵器	
4	A238	N-82°-W	不定形	(1.40) × 0.84	24	外傾	皿状	-	土師器	S19→本跡
5	B368	N-62°-E	楕円形	1.62 × 1.10	16	緩斜	平坦	-	土師器	
7	B239	-	円形	1.18 × 1.10	54	直立	平坦	-	土師器、鉄製品	S116→本跡
8	A361	N-35°-E	楕円形	0.98 × 0.62	104	直立	皿状	人為		
9	B44h	N-2°-W	楕円形	0.88 × 0.54	54	外傾	皿状	人為		S117→本跡
10	B462	-	円形	0.54 × 0.51	60	直立	皿状	人為	土師器	S118→本跡
11	B44h	-	円形	1.25 × 1.22	30	外傾	平坦	-	土師器	本跡→S124
13	B432	N-68°-W	楕丸長方形	1.34 × 1.20	42	緩斜	皿状	人為	土師器	
14	B411	N-57°-E	不定形	0.76 × 0.74	42	外傾	皿状	人為	土師器	
17	B432	N-67°-W	不定形	1.20 × 0.80	28	外傾	凹凸	人為	土師器	本跡→PG5
18	B339	N-74°-E	不定形	0.84 × 0.64	60	外傾	凹凸	人為		
19	B330	N-70°-E	楕円形	0.62 × 0.46	24	外傾	皿状	-	土師器	
20	B44d	-	円形	0.86 × 0.82	78	外傾	皿状	人為	弥生土器、土師器、須恵器	
21	A370	-	円形	0.58 × 0.53	34	緩斜	皿状	-	土師器	
22	B360	N-82°-W	楕円形	0.70 × 0.40	32	外傾	皿状	-		
23	B432	N-79°-W	楕円形	0.70 × 0.32	48	直立・緩斜	凹凸	-	土師器	
25	B44d	-	円形	0.31 × 0.29	24	外傾	皿状	-		
27	C4a2	-	[円形]	1.06 × (0.74)	80	直立	平坦	-	土師器	S18→本跡
28	B337	N-25°-E	楕円形	0.54 × [0.44]	28	外傾	皿状	人為		S123→本跡
31	B365	N-61°-E	長方形	[1.86] × 0.60	134	直立	平坦	人為		S125→本跡
32	A315	N-77°-W	[楕円形]	0.66 × (0.34)	16	直立	平坦	-		本跡→S120
33	B360	N-25°-W	楕円形	0.54 × 0.48	32	外傾	皿状	人為	土師器	SK34→本跡
34	B360	N-15°-E	楕円形	0.54 × 0.40	34	外傾	皿状	人為	土師器	本跡→SK33
35	B360	N-19°-E	楕円形	0.62 × 0.47	6	緩斜	皿状	-		
36	B330	N-10°-E	楕円形	1.10 × 0.84	10	緩斜	凹凸	人為		
37	B339	N-18°-E	楕円形	0.84 × 0.28	12	外傾	平坦	人為		
38	B44d	N-36°-E	不明	1.20 × (0.95)	58	外傾	平坦	人為		S128→本跡

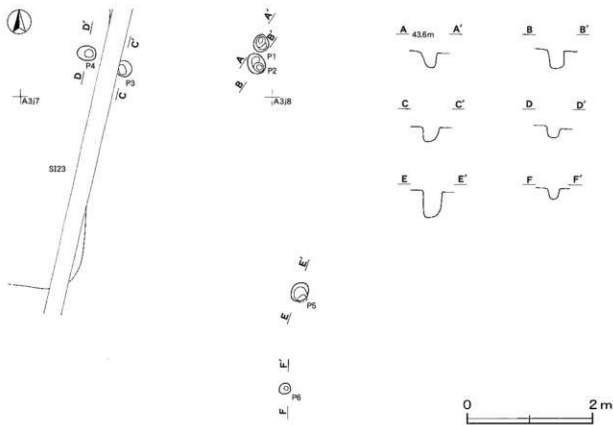
番号	位置	長径(軸)方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考(旧→新)
				長径(軸)×短径(軸) (m)	深さ (cm)					
39	B2b8	N-56°-W	不明	1.14 × (1.16)	40	外傾	平坦	-		S134→本跡
41	B3c6	N-63°-W	楕円形	0.90 × 0.62	28	緩斜	皿状	人為	土師器	S139→本跡
42	B3d7	N-75°-E	隅丸長方形	1.66 × 0.76	30	外傾	平坦	人為		S143→本跡→SA 4
43	B4b4	-	円形	1.30 × (1.16)	32	直立	平坦	人為		本跡→SI 6
44	B3c6	N-87°-W	楕円形	1.10 × 0.66	18	緩斜	皿状	-	土師器, 須恵器	S139+41→本跡
45	B3d7	N-69°-W	隅丸長方形	0.90 × 0.50	18	外傾	凹凸	-		S143→本跡
48	B3c6	N-67°-E	楕円形	2.55 × 1.42	90	外傾	U字状	人為		本跡→S125
30	B2c9	N-9°-E	楕円形	0.50 × 0.40	38	外傾	皿状	-		SI 2→本跡
51	C5a5	N-5°-E	隅丸長方形	1.23 × 0.81	12	外傾	平坦	自然	土師器	
32	C5a5	N-25°-E	楕円形	0.83 × 0.60	11	外傾	平坦	-	土師器	
53	C5a5	-	円形	1.60 × 0.94	12	外傾	平坦	人為	弥生土器, 土師器	
54	C5a6	-	円形	1.60 × (0.92)	10	緩斜	皿状	-		
36	C6d	N-56°-W	不明	(0.75) × (0.70)	50	外傾	皿状	人為	土師器	
57	C6e4	N-54°-E	不整形円形	2.86 × 1.85	95	外傾	凹凸	人為		
39	C6e1	N-37°-W	不定形	0.92 × 0.73	30	外傾	凹凸	自然	土師器	
60	C6e1	N-74°-E	楕円形	0.71 × 0.62	43	外傾	段状	自然		
61	C6d	-	円形	0.56 × 0.55	30	外傾	U字状	人為		
63	C4e8	N-34°-E	楕円形	1.22 × 0.98	18	緩斜	皿状	自然	土師器	
65	B4i7	N-26°-E	不定形	3.00 × 1.84	38	緩斜	段状	自然		SX 1→本跡
66	B4j7	N-73°-W	楕円形	0.80 × 0.60	46	外傾	U字状	人為		SX 1→本跡
67	B4j7	N-45°-W	楕円形	0.48 × 0.36	45	外傾	U字状	人為		SX 1→本跡
68	B4i7	N-19°-E	不明	1.17 × (0.94)	45	外傾	U字状	自然		
70	C4a8	N-77°-W	隅丸長方形	2.42 × 0.96	54	袋状	平坦	人為		本跡→SD 9
71	B4b8	N-82°-W	不明	(0.66) × (0.58)	13	緩斜	平坦	-		本跡→S162, SD 6
72	C4a7	N-14°-E	[方形]	[1.10] × (1.12)	58	外傾	平坦	人為		SD 8→本跡
73	B4i0	N-88°-W	方形	1.36 × 1.25	42	直立	平坦	自然	土師器	S162→本跡
74	B4i8	-	円形	0.32 × 0.31	50	直立	皿状	人為	土師器	
76	C5d3	-	円形	1.29 × 1.19	14	緩斜	平坦	人為	土師器	本跡→SD10
77	C5e3	-	円形	1.34 × 1.23	30	外傾	平坦	人為	土師器, 須恵器	本跡→SD10
79	C5e2	-	円形	0.40 × 0.36	48	外傾	皿状	人為	土師器	S166→本跡
80	C5b4	N-44°-W	楕円形	1.20 × 0.92	43	外傾	凹凸	自然	土師器, 瓦質土器	
81	C5i0	N-89°-E	(楕円形)	(1.70) × (1.30)	154	直立	平坦	人為	土師器	S169→本跡
83	C5d0	N-9°-W	楕円形	0.46 × (0.24)	34	外傾	皿状	自然		本跡→S158
84	C5c5	N-61°-W	不定形	2.70 × 0.90	48	袋状	皿状	人為	弥生土器, 土師器	本跡→S164, SD 9
86	C5d	-	円形	0.82 × 0.80	20	緩斜	平坦	人為		
89	C5e1	-	円形	0.36 × 0.34	22	外傾	皿状	人為		SX87→本跡→S166
92	B4f8	N-57°-W	不明	1.34 × (0.60)	76	緩斜	皿状	人為		
93	B5b1	-	円形	0.60 × 0.56	108	袋状	皿状	人為		
94	B5i2	N-21°-E	楕円形	0.83 × 0.70	24	直立	平坦	人為	土師器	
96	C4a0	N-5°-W	楕円形	0.40 × 0.30	38	外傾	皿状	人為	土師器	

(8) ビット群 (第260～267図)

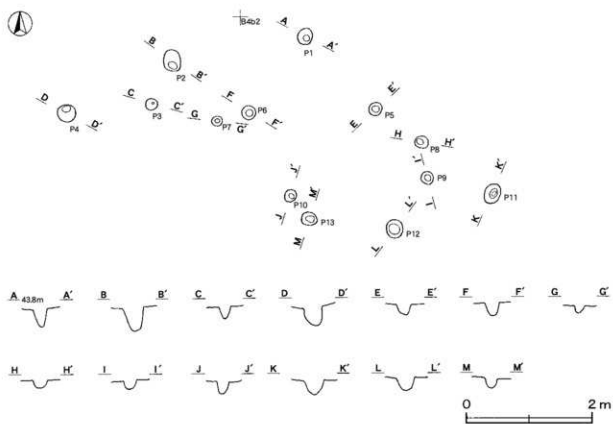
今回の調査では、ビット群 8 か所が確認されている。遺物が出土していないため、時期を判断することができなかった。また、ビット群の配列に規則性が認められないことから、性格を明らかにすることもできなかった。以下、ビット群の平面図及び規模などを一覧表にまとめて記載する。



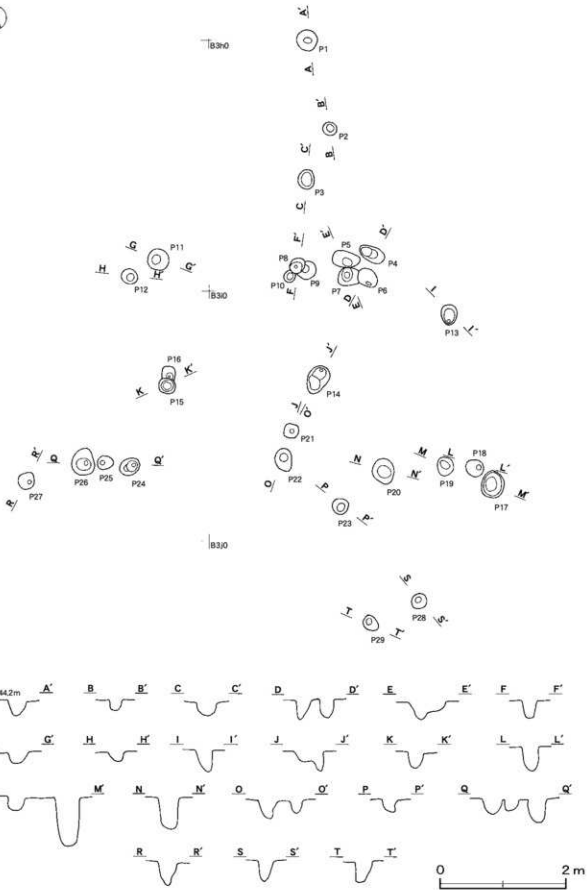
第260図 第1号ビット群実測図



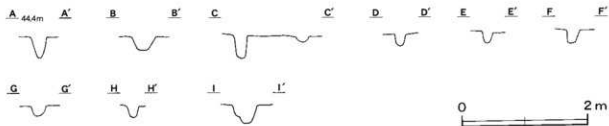
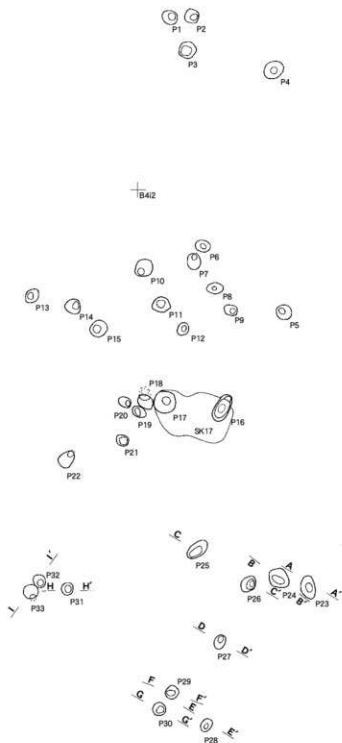
第261図 第2号ピット群実測図



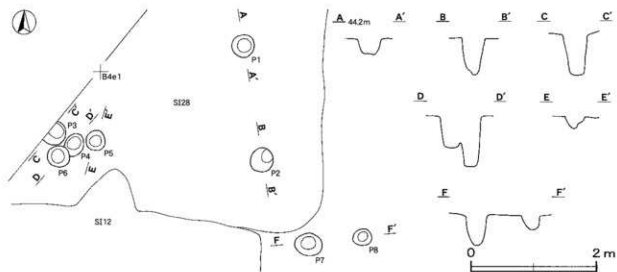
第262図 第3号ピット群実測図



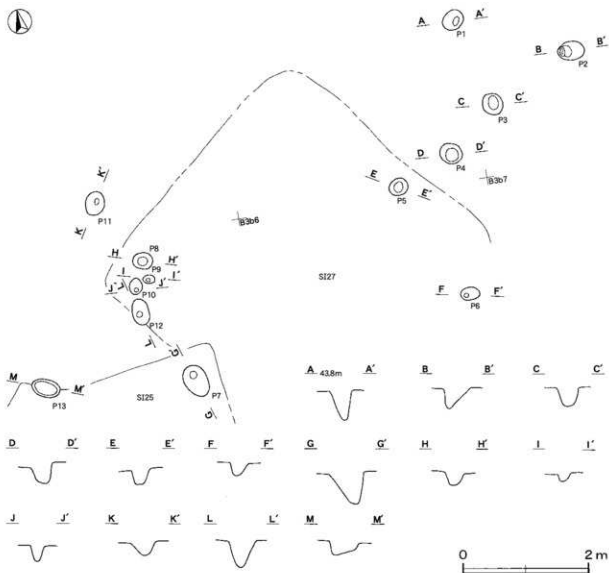
第263図 第4号ピット群実測図



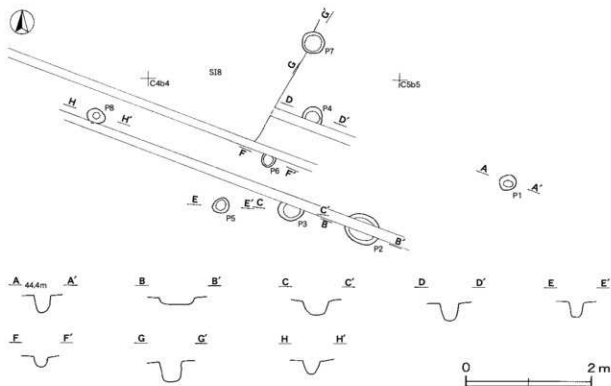
第264図 第5号ピット群実測図



第265図 第6号ビット群実測図



第266図 第7号ビット群実測図



第267図 第8号ピット群実測図

表23 時期不明ピット群一覧表

番号	位置	範囲	柱穴数	柱穴形状	径(cm)	深さ(cm)	主な出土遺物	備考(新→旧)
1	A2g9~A2j0	20.96 × 12.65	36	円形	16~42	10~64		SI3→本跡
2	A3i7~A4a8	5.72 × 3.70	6	円形・楕円形	17~33	16~41		SI23→本跡
3	B4bi~B4b3	3.34 × 7.02	13	円形・楕円形	17~37	14~40		
4	B3i9~B3j0	9.66 × 7.75	29	円形	17~30	16~40		
5	B4b2~C4a2	11.51 × 4.65	33	円形・楕円形	17~46	16~47		SI17→本跡
6	B4d1~B4e2	3.52 × 5.26	8	円形	36~45	19~59		SI28→本跡
7	B3a5~B3b7	6.18 × 8.80	13	円形・楕円形	15~46	15~30		SI25・27→本跡
8	C4i3~C4i5	3.39 × 6.85	8	円形	12~60	12~32		SI8→本跡

(9) 不明遺構

第1号不明遺構(第268図)

位置 調査区Ⅱ区のB4i7区で、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第65~67号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸7.80m、短軸1.82mの不定形で、長軸方向はN-17°-Eである。深さは8cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

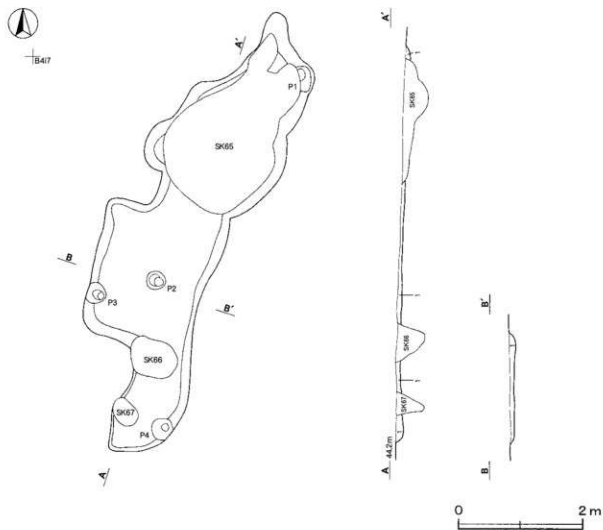
覆土 単一層で、層厚が薄いため堆積状況は不明である。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量

ピット 4か所。P1~P4は深さ12~31cmで、不規則な配置から性格は不明である。

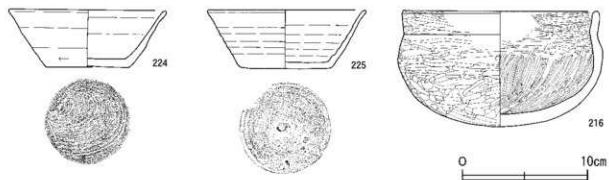
所見 3.9㎡ほどの平場が確認されたが、重複が多く性格は不明である。時期は、出土土器がないため不明である。



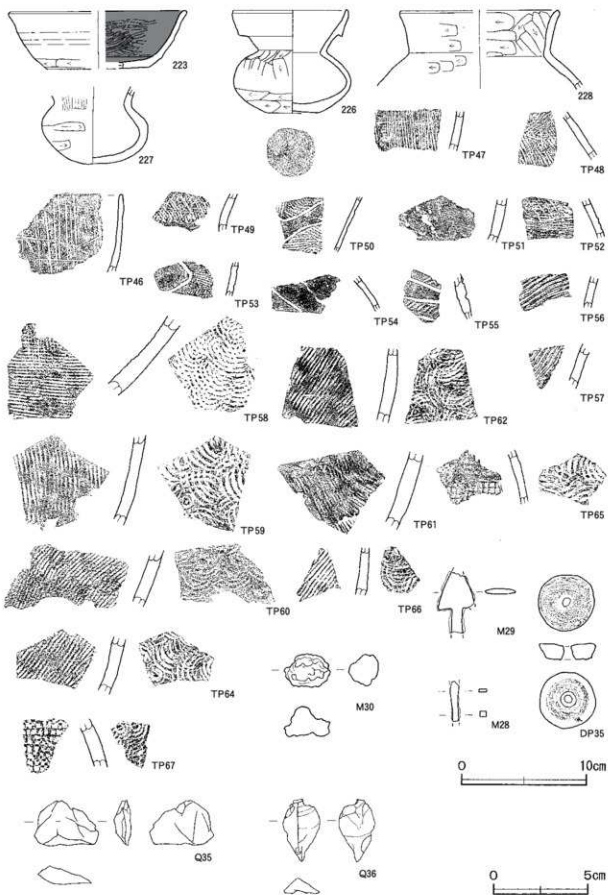
第268図 第1号不明遺構実測図

00 遺構外出土遺物 (第269・270図)

遺構に伴わない遺物について、実測図及び出土遺物観察表に掲載する。



第269図 遺構外出土遺物実測図 (1)



第270図 遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物観察表(第269・270図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
223	土師器	坏	[13.8]	5.0	[8.1]	石英・雲母	にぶい・焼	普通	外面ロクロナデ 内面へら磨き 内・外面ロクロナデ 底部回転糸切り	SD6覆土中	10%
224	須恵器	坏	12.3	4.6	6.7	石英・長石・雲母・細砂	黄沢	普通	外面ロクロナデ 内面へら磨き 内・外面ロクロナデ 底部回転糸切り	表採	60% PL30
225	須恵器	坏	12.4	4.7	7.4	石英・長石・雲母	灰	普通	内・外面ロクロナデ 底部回転糸切り	表採	60%
216	土師器	瓶	[15.4]	9.3	-	長石	灰褐	普通	内・外面へら磨き	S88覆土中	60% PL31
226	土師器	埴	9.0	8.3	4.0	雲母・赤色粒子	にぶい・黄褐	普通	口辺部横ナデ 体部・底部へら削り	表採	80% PL26
227	土師器	埴	-	(6.2)	-	長石	にぶい・赤褐	普通	胴部外面へら調整 体部外面へら削り	表採	70%
228	土師器	甕	[12.6]	(6.2)	-	石英・長石・雲母	にぶい・赤褐	普通	口縁部内・外面、体部外面へら削り	表採	10%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP46	弥生土器	甕	石英・長石	にぶい・焼	普通	胴部横位の条痕文 施文後縦位の条痕文	S63覆土中	PL32
TP47	弥生土器	甕	長石・雲母	黒褐	普通	胴部縦位の条痕文	S84覆土中	
TP48	弥生土器	甕	長石・雲母	にぶい・黄褐	普通	胴部縦位の単節縄文 施文後縦位の条痕文	S84覆土中	
TP49	弥生土器	甕	石英・長石	にぶい・黄褐	普通	胴部縦位の単節縄文 施文後磨き消し	SI24覆土中	
TP50	弥生土器	甕	長石・雲母	焼	普通	胴部充填縄文	SD4覆土中	PL32
TP51	弥生土器	甕	石英・長石・赤色粒子	にぶい・黄褐	普通	胴部縦位及び横位の条痕文	表採	
TP52	弥生土器	甕	石英・長石	灰黄褐	普通	胴部縦位の条痕文 施文後横位の条痕文	表採	
TP53	弥生土器	甕	石英・長石	明赤褐	普通	胴部充填縄文	表採	PL32
TP54	弥生土器	甕	長石	にぶい・焼	普通	胴部充填縄文	表採	
TP55	弥生土器	甕	石英・長石・雲母	にぶい・赤褐	普通	胴部充填縄文	表採	PL32
TP56	弥生土器	甕	長石・雲母	にぶい・黄褐	普通	胴部1Rの単節縄文	表採	
TP57	弥生土器	甕	石英・長石・雲母	にぶい・赤褐	普通	胴部1Rの単節縄文	表採	

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP58	須恵器	甕	石英・長石	黄沢	普通	体部外面横位の平行叩き 内面同心円当て具痕	SD4覆土中	PL33
TP59	須恵器	甕	石英・長石	黄沢	普通	体部外面斜位の平行叩き 内面同心円当て具痕	表採	
TP60	須恵器	甕	石英・長石	灰	普通	体部外面斜位の平行叩き 内面同心円当て具痕	SD4覆土中	
TP61	須恵器	甕	長石	灰	普通	体部外面縦位の平行叩き	SD4覆土中	
TP62	須恵器	甕	石英	灰黄褐	普通	体部外面縦位の平行叩き 内面同心円当て具痕	SD9覆土中	
TP64	須恵器	甕	石英・長石	灰	普通	体部外面縦位の平行叩き 内面同心円当て具痕	SD9覆土中	
TP65	須恵器	甕	長石・雲母・細砂	黄沢	普通	体部外面格子叩き 内面同心円当て具痕	SD6覆土中	PL33
TP66	須恵器	甕	長石	灰	普通	体部外面縦位の平行叩き 内面同心円当て具痕	SD6覆土中	
TP67	須恵器	甕	石英・長石・黒色粒子	灰	普通	体部外面格子叩き 内面同心円当て具痕	表採	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP35	紡錘車	4.5	1.3	1.2	26.8	土製(石英・長石・雲母)	外面へらによる調整	表採	PL34

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M28	織	(3.2)	0.7	0.5	(2.1)	鉄	両端欠損	SI61覆土中	PL36
M29	織	(4.9)	(2.9)	0.4	(10.3)	鉄	織身部片 基部欠損	SD4覆土中	PL36
M30	鉄滓	2.7	3.7	2.4	19.1	鉄	着磁性强	SI15覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q35	剥片	2.4	3.4	0.8	5.2	チャート	横長剥片	SI68覆土中	PL34
Q36	剥片	3.4	2.0	0.8	3.5	チャート	横長剥片	SI68覆土中	PL34

第4節 ま と め

1 はじめに

今回の調査の結果、詳細な時期が判明した住居跡は55軒である。内訳は古墳時代中期（5世紀代）が15軒、古墳時代後期（6・7世紀）が18軒、奈良時代（8世紀代）が6軒、平安時代（9世紀代）が16軒である。

また、弥生時代中期以降と推測される土坑6基も確認されており、遺跡周辺には弥生時代から集落が形成されていたと考えられる。その背景として、桜川流域の台地上は生活の営みに適した地であり、桜川の水運等によって他地域との人々の交流や物資の流通が盛んであったことが推測される。

青木北原遺跡は3,515㎡の調査が行われ、限られた調査区域であることから集落の特徴や変容、特記事項等について十分に解明することは難しいが、ここでは、確認できた遺構、遺物について時期区分ごとに取り上げまとめとする。

2 確認された遺構と遺物

弥生時代から中世までの遺構や遺物が確認されている。特に古墳時代中期から平安時代の集落跡では、5世紀前葉から9世紀後葉までを15期に分けた。

(1) 弥生時代

第12・15・55・69・78・91号土坑が該当する。住居跡は確認できなかった。調査区第Ⅰ・Ⅱ区の境界及び、C5f8区を中心とした他の時代の遺構にも弥生土器片が流れ込んでいることから、調査区域外に弥生時代の集落跡や土坑群がある可能性が推測される。遺構、遺物については別項で述べることとする。

(2) 古墳時代中期（第271図）

5世紀前葉以降からの住居跡が確認されている。住居跡は15軒で、5世紀前葉（1期）が5軒、中葉（2期）が6軒、後葉（3期）が4軒である。当該時期には集落が密集しておらず、1軒ごとに分散、もしくは2、3軒を一単位として住居群を形成しているのが特徴である。出土遺物は、埴、高坏、石製模造品など祭祀に関わる遺物が多く出土している。

1期（5世紀前葉）

第9・22・28・31・51号住居跡の5軒が該当する。調査区Ⅰ区の標高43～44mの位置に集落が形成されたと考えられる。この時期の住居跡は、一部が調査区域外にあるため、住居の形状、規模を明確にできない。第22号住居跡は東西軸が8.30mあり、当期の中心的な住居跡と考えられる。すべての住居跡から埴、高坏が出土しており、各住居にて住居廃棄に対する祭祀が行われた可能性が考えられる。特に、第31号住居跡からは石製模造品は確認できなかったが、大量の高坏や埴が出土している。

遺物の特徴として、第31号住居跡から出土した土師器の坏（第126図66）は、口縁部の下位が最大径となり、底部は平底である。第9号住居跡から出土した埴（第99図16・17）は、口頸部はハケ目調整が施されているが、第28号住居跡から出土した小形埴の口頸部はヘラ削りで調整しており、調整の方法に違いが見られる。壺は球体で、体部はヘラ削りが施されている。

2期（5世紀中葉）

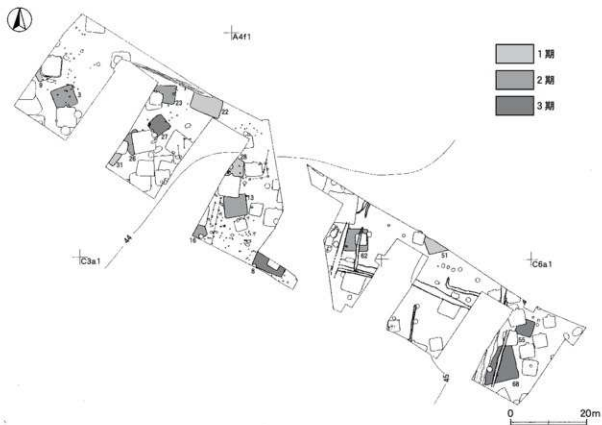
第3・13・16・23・26・62号住居跡の6軒が該当する。集落の分布状況は1期と同じ状況である。

石製模造品が出土しており、これらを用いた祭祀が執り行われたと考えられる。第13号住居跡からは有孔円板とガラス製小玉が各1点ずつ、第26号住居跡からは双孔円板が2点と剣形模造品が1点、第62号住居跡からは剣形模造品1点が出土している。特に第13号住居跡からは石製模造品だけでなく、土師器の埴、高坏、鉄製品（刀子）が全城にわたって出土している。この時期の住居跡の中では、祭祀遺物や鉄製品が他の住居跡よりも多く出土していることから、当期における中心的な住居跡と推測される。また、土師器の坏の特徴は、口縁部の部分が最大径となっている。底部は平底と丸底のものが混在している。

3期（5世紀後葉）

第8・27・55・68号住居跡の4軒が該当する。第68号住居跡は、長軸9.28m、短軸9.22mの方形で、今回の調査した住居跡の中では最大の床面積をもつ大形住居跡である。家屋構造は主柱穴4か所と出入り口ピット1か所、貯蔵穴が1か所である。主な出土遺物としては、土師器（坏）、土製品（支脚）、石製品（砥石）、鉄製品（刀子）がある。

また、住居跡の半分が調査区域外ではあるが、第8号住居跡も一辺が8mを超える大形住居跡と推定される。家屋構造は確認できた範囲で主柱穴が1か所と性格不明のピットが9か所、貯蔵穴1か所で、南西コーナー部に間仕切り溝がある。主な出土遺物として土師器（坏、碗、壺、甕）、石製品（白玉、双孔円板）がある。



第271図 1～3期住居の変遷

古墳時代中期の住居跡は概して床面積が広く、特に一辺が8m以上ある大形の住居跡が数多く報告されている。これらは、主に集落の中心となる者の住居跡であったと考えられ、集落の中心に位置することが多いが、当期の第8・68号住居跡では、家屋構造や出土遺物の器種から性格の相違点がみられる。

第8号住居跡は集落の中心に位置している。この住居跡には、床面に間仕切り溝が確認されている。また、遺物から環などの供膳具や甕などの貯蔵具などの生活用具の他、祭祀用具として使われた石製模造品が出土しており、集落における中心的な者の住居跡という性格が考えられる。

しかし、第68号住居跡は供膳具などの生活に即した遺物は少なく、床面から出土したのは砥石のみである。また、この時期も含め、古墳時代の住居跡が概して桜川周辺の調査区I区に多いことを考えれば、第68号住居跡は集落の端部に位置していたと考えられる。

さらに、炉の使用頻度が少ないことや硬化面の範囲が中央部の狭い範囲だけであり、出土遺物から短期間しか使用されなかった建物と考えられる。

遺物の特徴として高環が第27号住居跡から出土しているが、他の住居跡からは出土していない。埴も流れ込みと思われる土器片のみで、本期をもって消滅すると考えられる。土師器の坏は、口縁部が外反し、内面にヘラ磨きを施した模倣坏である。底部は2期に比べて丸底のものが大半を占めるようになる。

(3) 古墳時代後期 (第272・273図)

6世紀前葉(4期)に該当する住居跡は1軒、中葉(5期)は5軒、後葉(6期)は6軒、7世紀前葉(7期)は4軒、中葉(8期)は1軒、後葉(9期)は1軒である。6世紀後葉の住居跡が最も多く確認されている。大半の住居跡は標高44m付近で、西側の桜川周辺に集中している。しかし、7世紀代に入ると住居跡が減少する傾向が見られる。

7世紀における住居数の減少理由は、一つとして青木地区周辺の古墳群との関連が考えられる。古墳時代後期ごろから岩瀬盆地周辺では、それぞれの地域の有力者が近隣の山腹や山裾に古墳群を構築し始めたと考えられる¹⁾。当遺跡から直線にして南へ約1.5km離れた羽田山麓周辺には青木神社前古墳、青木たてやま古墳、青木古墳群、白山古墳群、羽田古墳群など多くの古墳群が存在しており、青木地区周辺の有力者層は、当地から南下して羽田山周辺に古墳群を構築し、有力者に伴って集落の大半が羽田山麓周辺に移動したのではないかと推測される。

住居跡の形態として、6世紀に入ると当地にも竈が導入され、普及していく傾向がある。7世紀と考えられる住居跡からは須恵器が出土している。この時期はまだ当遺跡周辺では、須恵器生産が行われていないことから、地理的な利便を生かし他地域との交流によって持ち込まれたと考えられる。

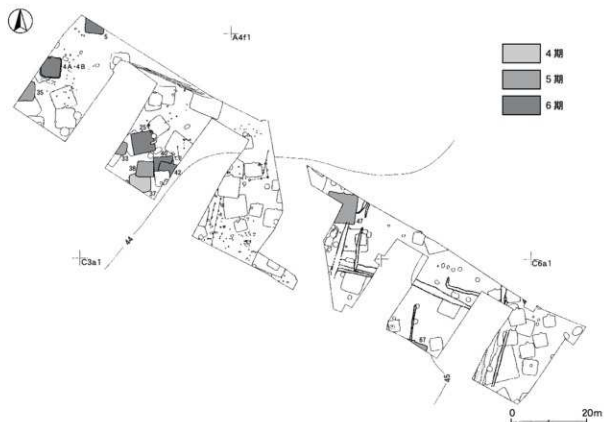
4期(6世紀前葉)

第37号住居跡が該当する。床面から土製の小玉(第136図DP7～DP27)が一か所にまとまって大量に出土している。

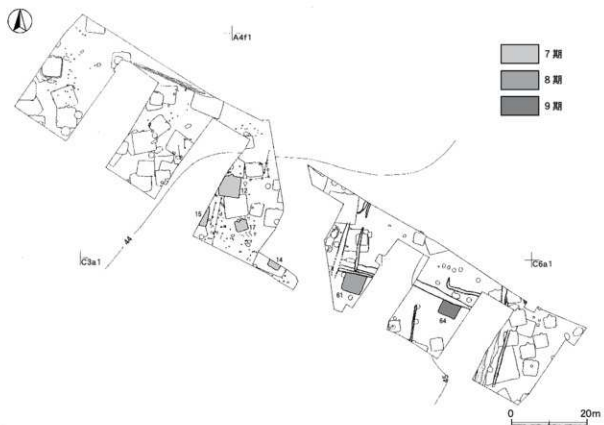
5期(6世紀中葉)

第33・35・38・47・67号住居跡の5軒が該当する。住居跡群は調査区I区の西部及び中央部、2区の西部及び中央部の2群に分けられる。

遺物の特徴としては、竈の導入により甕が長胴化する傾向がみられる。土師器の坏は口縁部下に稜を持ち、口縁部がやや外反し、または直立し、体内・外面には黒色処理が施されている。第33号住居跡からは須恵器の蓋を模倣した土師器の坏(第129図83)が出土している。第35号住居跡から不明の土製



第272図 4～6期住居の変遷



第273図 7～9期住居の変遷

品（第133図DP4・DP5）が出土している。

6期（6世紀後葉）

第4A・4B・5・25・40・42号住居跡の6軒が該当する。調査区第1区の標高44mから西側、桜川寄りの標高43mほどの場所に住居群が形成され、最大の集落数となる。

本期の土器の特徴として、口縁部の下が丸味をおびている土師器の坏が出土するようになる。

7期（7世紀前葉）

第12・14・15・17号住居跡の4軒が該当している。第6期と同様に住居が密集し、1つの住居群を形成しているが、6期と比べ東へと移動している。

第17号住居跡の覆土下層からは、底部にヘラ削りを施している須恵器の坏（第111図40）が出土している。当該期に出土した土師器の坏の特徴として、口縁部の稜が6期に比べてあまり目立たなくなる。

8・9期（7世紀中・後葉）

8期は第61号住居跡が、9期は第64号住居跡が該当する。

第64号住居跡から出土した土師器の坏は7期までと比べて器高が低くなっている。

第61号住居跡の覆土下層から中層及び覆土中から鎌・鍬・釘（第154図M5～M9）が、第64号住居跡から刀子（第160図M10）が出土するなど鉄製品の種類が増え、鉄製品が普及したことが考えられる。

他の地域から流入してきた須恵器が8・9期においても出土している。第61号住居跡の覆土下層から捏鉢（第153図116）が、第64号住居跡の覆土下層から須恵器の蓋（第158図125）と高台付坏（第158図124）が出土している。捏鉢は口縁部下に二本の沈線が施されている。底部はヘラ状工具によって調整されている。蓋は凹状つまみのかえり付きで、器高が低い。高台付坏は器厚が薄く、高台は低く、関東北西部方面との交流があった可能性が考えられる。

(3) 奈良・平安時代（第274・275図）

律令体制が確立し、当地は真壁郡伴部郷に編入される。7世紀に引き続き住居数は少なく、8世紀初頭（10期）に該当する住居跡が2軒、中葉（11期）に該当する住居跡は2軒、後葉（12期）に該当する住居跡は2軒と少ない。9世紀には住居数は増加し、9世紀前葉（13期）の住居跡は7軒、中葉（14期）の住居跡は7軒、後葉（15期）の住居跡は2軒である。

住居跡の規模は10期を除けば一辺が4m以下と縮小化する。

7・8世紀と少なかった住居数が、9世紀に入ると増え始める。この理由の一つとして律令体制の変化に関連があると考えられる。古墳時代後期に羽田山麓に移動したと考えられる集落は、律令体制下において引き続き生活を営んでいたと考えられる。ところが9世紀になり、公地公民制が揺らぎ始め、私有地の開発など奨励されるようになり、新たな開発の地として再びこの地に集落が形成されたと考えられる。

もう一つの理由として、桜川対岸の辰海道遺跡（新治郡坂門郷）の存在があると考えられる。辰海道は当時において他地域の物資が持ち込まれるだけでなく、当地で生産された須恵器や鉄製品、特産物など周辺地域の物資の集積地となっており²¹、桜川対岸の当地も流通の影響を受けたと考えられる。

今回の調査では10世紀以降の住居跡は確認できなかった。中世以降の方形竈穴遺構や墓坑が確認されたことから、10世紀以降は集落が消滅もしくは移転し、中世以降は住居域でなく、墓坑域又は耕地へと変化したことが考えられる。

10期（8世紀初頭）

第2・19の2軒が該当する。調査区第Ⅰ区の西部から中央部にかけて集落が形成されていると推測される。

第19号住居跡から出土した須恵器の蓋（第186図146）は、9期で出土したものとは形状が異なり、器高も低く、口径も大きくなっている。また、内面のかえりも消えている。

11期（8世紀中葉）

第6・60号住居跡の2軒が該当する。堀ノ内窯が操業され、当遺跡にもたらされる傾向にあり、9世紀後葉以降まで供膳具として須恵器が使用される。底部は回転ヘラ切りで、一部の須恵器は一方に削られたり、ヘラナデが施されている。

第6号住居跡から二次加工を施した紡錘車（第179図Q26）、第60号住居跡から須恵器の蓋を転用した碗（第213図192）が出土している。

12期（8世紀後葉）

第20・65号住居跡の2軒が該当する。この時期から住居跡の規模は縮小し、家屋構造も南壁際に入り口ピットと考えられる1か所だけの住居跡が多い傾向にある。出土遺物では須恵器の底部径が次第に縮小するとともに器高が高くなっていく傾向にある。また、高台付坏が出土している。

13期（9世紀前葉）

第7・24・39・54・58・66・69号住居跡の7軒が該当する。調査区Ⅰ区の東部、調査区Ⅱ区の中央部から東部と住居群が2分され、住居跡が1か所に固まって形成されている。住居構造は12期と同じである。

14期（9世紀中葉）

第10・18・53・56・57・59・63号住居跡の7軒が該当する。住居跡は標高44mほどの調査区Ⅰ区・Ⅱ区の境界と、標高45mほどの調査区Ⅱ区東部の2群に分かれている。特に調査区Ⅱ区の東部に形成された住居群は13期よりも密集して形成されている。住居はさらに縮小化の傾向にあり、一辺が3m程度となる。

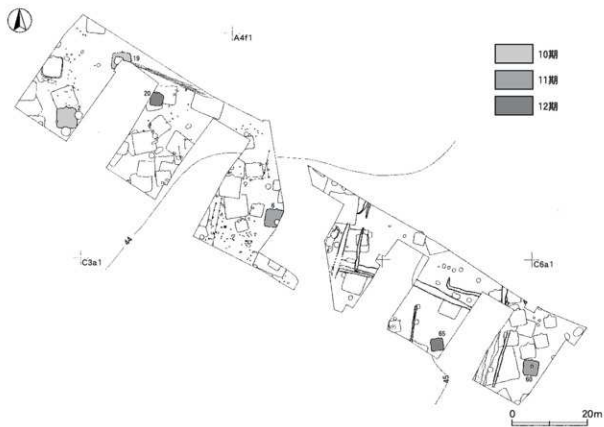
第53号住居跡の竈前面から瓦片が出土しており、袖部の構築材として使われた可能性があると考えられる。辰海道遺跡では8世紀中葉には瓦を竈の構築材として使用しており、その後徐々に北西部の金谷遺跡や当遺跡などの周辺地域で使用されていく傾向を考えれば³¹、当地においても瓦を構築材として竈を構築している可能性が考えられる。

第56号住居跡の床面からは鉄滓（第204図M20・M21）、第57号住居跡からは砥石、刀子、釘（第206図Q28・M22・M23）、第59号住居跡からは刀子（第211図M25）が出土している。今回の調査では鍛冶工房と思われる遺構は確認できなかったが、集落周辺に鍛冶施設があったとみられる。

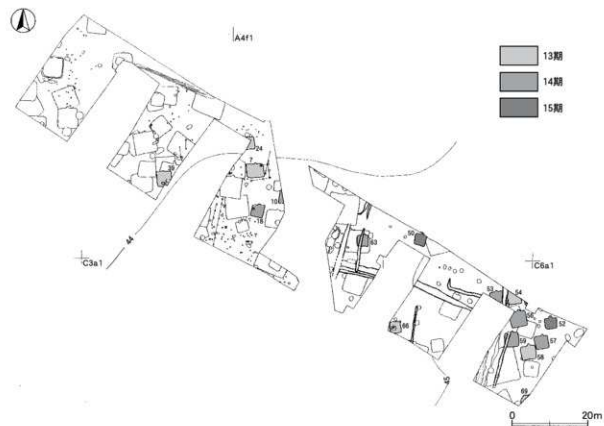
当該期の須恵器の高台付坏は、高台が直立した状態になっていく。第88号土坑から出土した2点の須恵器の坏（第223図221・222）は底部の切り離し技法がそれぞれ違っており、221は回転ヘラ切りで、222は回転糸切りであり、胎土から221は堀之内窯と考えられ、222は三鑫窯など西部方面の窯で生産されたものと考えられる。

15期（9世紀後葉）

第50・52号住居跡の2軒が該当する。14期までのまとまった住居群を形成した状況から、単独で分散する傾向になる。須恵器の坏が減少し、内面黒色処理後に磨きを入れた土師器の坏、高台付椀の割合が増えてくる。



第274図 10～12期住居の変遷



第275図 13～15期住居の変遷

3 弥生土器と土坑について

(1) 青木北原遺跡における出土分布と土器の文様の特徴について

今回の調査では、弥生時代中期と考えられる6基の土坑が確認されている。土坑以外の遺構は確認できなかった。しかし、土器片が弥生時代以外の遺構に流れ込み、かつ広範囲に出土している(第276図)。土器片の分布状況は、大きく2群に分けることができる。1群は標高44mほどの台地平坦部の調査区Ⅰ区とⅡ区の境界周辺で、第12・15・69・78・91号土坑が確認されている。2群は標高45mほどの台地平坦部の調査区Ⅱ区の東側に位置する一帯で、第55号土坑が確認されている。

土器文様の特徴として条痕文、単節縄文、磨き消し、半截竹管状工具による沈線、充填縄文の5種類に分けられる。表24からも、当遺跡全体で、条痕文及び磨き消しの文様が多いことから、第15号土坑出土の壺と同型のものが複数あったことが推測される。2群では単節縄文、充填縄文の割合が1群より多く、土坑の規模や形状から時期差があったと考えられる。

弥生時代のこれらの文様の持つ時期は中期前半から後半と考えられており、県内において出土例は少ないものである。

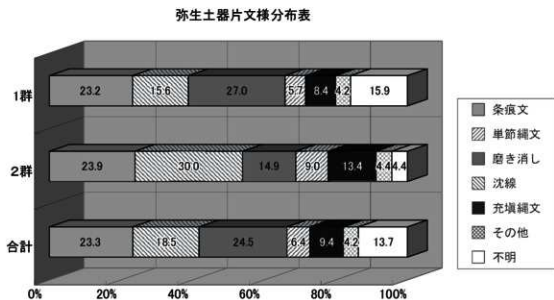
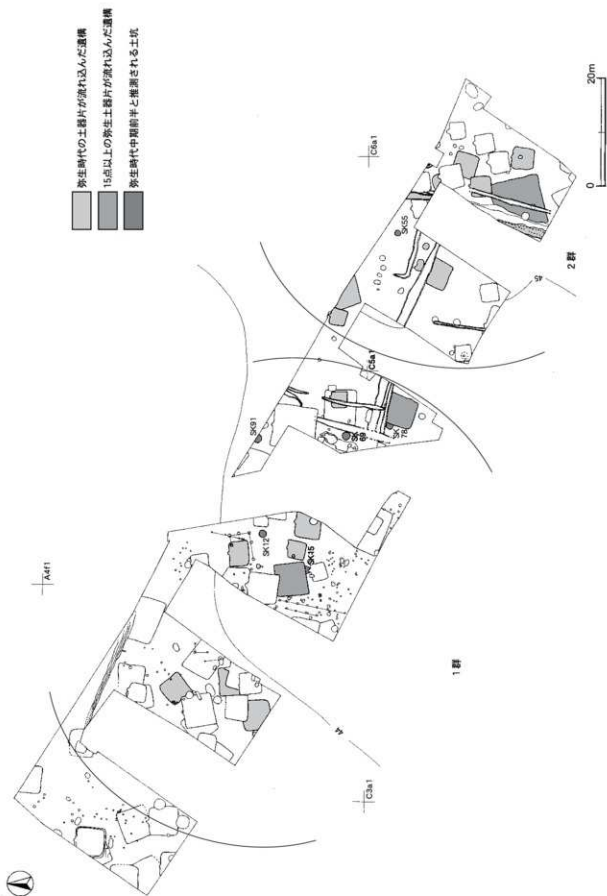


表24 青木北原遺跡出土弥生土器片の文様の割合

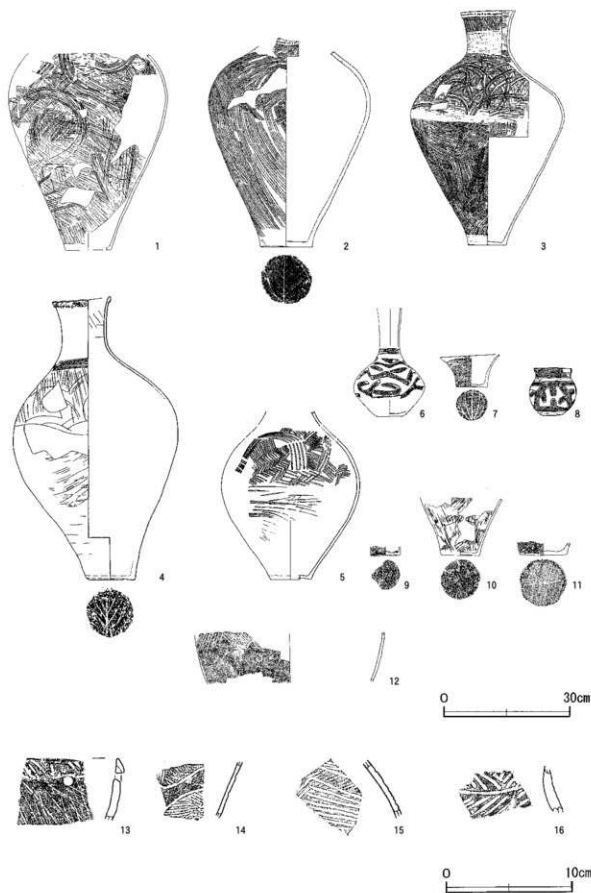
第15号土坑と第91号土坑から出土した破片が接合し、頸部から底部までが確認できた1個体分の壺を中心に文様の特徴を述べたい。

接合した壺(第277図1)は、胴部の最大径が中位より上部にあり、胴部上部は肩を張った細頸壺と考えられる。文様は、胴部を条痕文施文の後、上部を鋭利な弧線の櫛描文が連続して施文されている。弧線は下向きと横向きが主であり、一部縦位の櫛描文状も施されている。下部は条痕文を施文後、磨き消しを施している。ただし、底部は小片のみで、痕跡は不明である。

第12号土坑出土の壺(第277図9)の胴部下部は、単節縄文を施し、底部は木葉痕を残している。第69号土坑から出土した壺(第277図10)の胴部下部は縦位及び斜位に条痕文が施されており、底部は木葉痕を残している。第78号土坑から出土した壺(第277図12)は胴部のみで、斜位に条痕文を施文した後、半



第276図 青木北原遺跡弥生土器片分布図



第277图 青木北原遺跡(1·9~16),北原遺跡(2·3·8),女方遺跡(4·5),堂ノ込遺跡(6·7)出土弥生土器

截竹管状工具による鋭利な沈線が施されている。第75号土坑から出土した壺（第277図11）の胴部下端には磨き消しが施され、底部は網代痕を残している。

それ以外の土器片では、第15号土坑から出土した土器片は口縁部が肥厚で、外側から内側へ刺突文を施している（第277図13）。その他、流れ込んだ住居跡の覆土中および遺構外の土器片ではあるが、特色ある文様として、充墳文様を施した土器片（第277図14）、単節調文施文後沈線を施したもの（第277図15）、横位及び斜位の沈線を施したもの（第277図16）が出土している。

(2) 青木北原遺跡出土の弥生土器と周辺遺跡との関連について

当遺跡から出土した弥生土器の型式と年代について周辺の遺跡と関連させながら考えていきたい。

直線距離にして約20km西方に女方遺跡（筑西市・旧下館市）が所在している。

女方遺跡は鬼怒川左岸の標高40mほどの台地上にあり、河川との比高は約5mである。調査によって20m四方の調査範囲から、土坑41基と敷基の埋爿及び土器包含地が確認されている。土坑は径80cmの円形又は隅丸方形で、ローム層を10～20cmほど掘り込んでいる。土坑からは最も多いもので10個体、少ないもので2個の土器が出土している。第11号土坑から、壺の口縁部に人の顔をモチーフにした「人面付土器」と呼ばれる土器が出土している。

女方遺跡の第9号土坑から出土した壺形土器（第277図4）は、胴部の最大径が中位よりやや上位にある倒卵形の長胴壺である。口縁部は複合口縁を呈し、ヘラ状工具による斜位の条線が描出されている。下端部には、ヘラ状工具による三角形のキザミが施されている。胴部は、上半部が縦位のハケ目を施した後、弧状のハケ目及び下半部は粗く斜位のハケ目がそれぞれ施されているほか、頸部と胴部の境には、横位のハケ目が施されている。底部には木葉痕を残している。

第3号土坑から出土した壺（第277図5）は、口頸部を欠くが細頸壺とみられ、胴部上半部には、単線による上向きの連弧文を数単位描き、その内外に同じ施文具による陵杉文を描出している。胴部下半部には、ヘラ状工具による右下がりの条線が施されている⁴¹。

ここで紹介した土器は一部であるが、女方遺跡から出土した土器を「女方式土器」と呼んでおり、群馬県を中心とした岩櫃山式土器や、栃木県南部を中心とした出流原式土器と共通の要素をもっている。

筑西市（旧協和町）三郷字北原にある北原遺跡は、女方遺跡と当遺跡の中間点にある。北原遺跡は、桜川上流にあたる支流の観音川の台地の縁辺部、標高39mに位置し、発掘調査は行われていないが、耕作土中から30個体前後の土器が確認された遺跡である。

北原遺跡から出土した壺の中から次の2点について述べたい。第277図2の壺は口頸部を欠き、現存高は49.2cm、胴径38.5cmをはかる大形細頸長胴形の粗製壺である。頸部は無文で、胴部は櫛歯状工具による条痕を施している。胴部最大径の上下で条痕の走行が逆転して横羽状となる。頸部と胴部の境に竹管状刺突列を1条巡らし、その上方に刺突列で構図を描いているが遺存部が少なく判然としない。肩部にも条痕文地に1か所を刺突で円形を描き出し、底部には木葉痕を残している。

第277図3の壺は、高さ55.2cm・胴径36.5cmの細頸で肩が張る長胴形の粗製壺である。頸部以下には条痕文施文後に1.5cm幅で肥厚する口縁部が作られる。この肥厚口縁部とその直下に、竹管状円形の刺突列が土器を巡り、頸部から胴下部まで全面細密に条痕文を施した後、頸部下半で約5cmの幅、底部側面を約2cm幅で条痕を磨き消している。さらに、胴上部は同じ施文具で大振りの弧線を重ねているが、浅い施文で目立たない。底部は無文で磨き消が施されている⁵¹。

これらの土器は条痕文を主流としており、東海地方の水神平式土器の流れをくむものと考えられる。

2群で割合が多かった充墳文様の土器片は北原遺跡出土の変形工字文構図を施した小形精製壺(第277図8)や市内(旧岩瀬町)の堂ノ入遺跡出土の細頸壺(第277図6)と文様が共通している点が多い。第277図7の鉢形土器は全面に縄文を施しており、第277図9・11と同形な土器と推測される。充墳文様を主とした文様は南東北の大洞A¹式土器の流れをくむものである。

以上の点から、当遺跡出土土器と女方遺跡及び北原遺跡出土土器の共通する特徴として5つ挙げられる。

- 1) 肩が張り、細頸壺であること
- 2) 胴部の最大径が中位よりやや上部にあること
- 3) 胴部から底部にかけて斜位の条痕文を施している
- 4) 胴部下が条痕文施文又は縄文施文後磨き消しを施している
- 5) 底部は木葉痕又は網代痕を施している

今回の調査によって女方遺跡、北原遺跡、堂ノ入遺跡、青木北原遺跡が同時期の遺跡で、いずれの遺跡も住居跡等の遺構は確認できなかったが、茨城県西部の小貝川中流域を中心に弥生時代中期前半における生活圏があったと推測される。

また、石川日出志氏は北原遺跡出土の弥生土器について「在地の伝統と特色を強くもちながらも、東海・関東地方以西・福島・仙台平野の各方面の資料との関連が指摘できる。(中略)そうした複数系統の同居・複合が本遺跡の弥生土器の特徴とみなせる」と述べている⁶⁾。当遺跡出土の弥生土器に関しても同様の様相が考えられる。

(3) 土坑の性格について

次に、弥生時代と比定した土坑の性格について考えてみたい。

一般的に関東地方や南東北地方の弥生時代中期前半と比定される土器は「再葬墓」に使われた土器と言われている。再葬墓は、縄文時代晩期から弥生時代中期にかけて行われ、死骸を一時埋葬もしくは風葬によって白骨化させ、洗骨の後、骨の一部を壺に収めて埋葬する方法である。副葬品として管玉が出土する例もある。

茨城県内では女方遺跡、常陸大宮市(旧大宮町)の小野天神前遺跡、同じく泉坂下遺跡、稲敷市(旧桜川村)の殿内遺跡などから再葬墓の遺構及び壺が出土している。栃木県内では佐野市の出流原遺跡、野木町の清六Ⅲ遺跡、宇都宮市の野沢遺跡で確認されている。

当遺跡で確認された弥生時代中期の土坑は「再葬墓」としての性格はあったのだろうか。

今平昌子氏は栃木県内で出土している弥生時代の土坑の性格について大きく5分類に分別している。

- I類・・個体となる土器が出土(いわゆる再葬墓)
- II類・・壺が上層より確認される
- III類・・粘土が確認される
- IV類・・土器の破片・その他の遺物が出土する
- V類・・遺物なし

今平氏は、この5つの分類のI類からIII類に土坑墓の可能性があると述べている⁷⁾。

女方遺跡や小野天神前遺跡等に関して言えばI類に該当する。これらの遺構の特徴として、一つの土坑から複数の壺形土器が出土していることである。小野天神前遺跡の場合土坑の数は20基で、土器片が確認

できなかった土坑が1基、小破片のみの土坑が4基で、残り16基の土坑には壺形土器が1～12個置かれていた。第15号土坑では土器片が多数出土したが、1個体としての出土量ではないため再葬墓の可能性は低いと思われる。

また、他の5基の土坑を今平氏の分類に当てはめればⅢ・Ⅳ類が該当する。Ⅲ類は底面にわずかな粘土が残る第69号土坑が該当する。今平氏は、棺を固定する施設の可能性があると述べているが、当遺跡第69号土坑の粘土は底面の壁際にわずかに残っているだけでその性格は不明である。Ⅳ類は第12・15・55・78・91号の5基が該当する。

再葬墓の形状に関しては円形、楕円形、不定形と様々である。これは小野天神前遺跡のみならず、女方遺跡や殿内遺跡でも同様の様相である。規模も小野天神前遺跡の場合は、大形土坑で1.60m以上、小形の土坑で0.60m以下である。女方・殿内両遺跡の土坑の径はすべて1m以下である⁸⁾。

当遺跡の土坑は、1群では径が1.50mほどで、壁面は直立し、人為堆積である。2群は第55号土坑のみであるが、1群の土坑に比べると径が小さく、壁面も外傾し、自然堆積である。

以上の点から、土坑墓も含めた埋葬としての性格を判断することはできない。また、住居跡が確認されていないため、住居外貯蔵穴とも言えない。

今回の調査で土坑の性格を判断するには、確認された遺構や遺物からでは不十分である。しかし、今平氏が分類の対象とした遺跡には弥生時代中期の住居跡が確認されている場合が多い。当遺跡では弥生時代中期前半の住居跡は確認できなかったが、一定のエリア内に土器片が集中していることから調査区域外に弥生時代の遺構や土坑群が存在すると推測される。さらに、「大和村史」の中で堂の入地区周辺から女方式土器と思われる土器が発掘されたことと記述されている⁹⁾ことから、青木地区周辺には弥生時代中期の遺構や遺物が存在する可能性が高いと考えられる。土坑の性格に関していくつかの可能性が考えられ、今後の調査成果によって青木地区周辺における弥生時代中期の集落の様相が解明されることを期待したい。

4 青木北原遺跡出土の石製模造品及び土製模造品等について

(1) 遺物の出土状況と遺構との関連

石製及び土製模造品は古墳の墳丘上や祭祀遺構、住居跡などから出土しており、祭祀とは密接な関係があると考えられる。大平茂氏は「石製模造品が初期には首長層の墳墓の副葬品（供献品）や首長層の神まつりの祭祀具であったように、古墳時代前期・中期の被葬者は神であり、首長層の祭祀具と想定するのが自然であろう。そして、この後古墳時代中期中葉になると生活様式の変化などに伴い、住居内の竈祭祀に見られるような民衆のまつりに使用されるものである。併せて、石製模造品もこの時期に民衆の祭祀具となっていくのである」と述べている¹⁰⁾。

今回の調査では、石製模造品として剣形模造品3点、有孔円板1点、双孔円板4点、白玉1点、管玉1点の計10点が出土している。土製模造品は21点ですべて小玉である。その他ガラス製小玉が1点出土している。

時期毎では石製模造品は2期が5点（第13・26・62住居跡）、3期が3点（第8号住居跡、第3号土坑）、5期が2点（第33・38号住居跡）で、土製模造品は4期の第37号住居跡から21点出土している。

つぎに、石製模造品が出土した2～5期を中心に、遺物の出土状況と遺構の関連について考えていきたい。

石製模造品が出土しなかった1期では高坏や埴が祭祀の中心となっており、これらの遺物は住居の南部

又は中央部の覆土下層から出土している。すべての住居跡が人為堆積である。

2期の第13号住居跡からは、有孔円板とガラス製小玉がそれぞれ1点出土している。有孔円板(Q6)は西部の覆土下層から、ガラス製小玉(G1)は覆土中から出土している。出土土器として、坏、碗、埴、高坏、甕が覆土下層を中心に出土している。

第26号住居跡からは、双孔円板2点と剣形模造品1点が出土している。双孔円板のうちQ8は西部の床面、Q7は覆土上層、剣形模造品(Q9)は南部の床面から出土している。土器は坏、碗、埴、鉢、甕が覆土下層を中心に出土している。

第62号住居跡からは、剣形模造品1点(Q20)が、北部の覆土中層から出土している。土器は高坏が覆土中層から出土している。3軒の住居跡すべてが人為堆積である。

3期の第8号住居跡からは白玉1点と双孔円板2点が出土している。白玉(Q2)は南壁際の床面から、双孔円板のうちQ4は西部の床面、Q3は覆土中から出土している。土器は坏、碗、壺、甕で床面を中心に出土している。堆積状況は人為堆積である。

4期の第37号住居跡出土の小玉(DP7~DP27)は東壁中央部の床面からまとまって出土している。5期の第33号住居跡の南部床面からは管玉(Q10)が出土している。第33号住居跡と同じ時期と考えられる第35号住居跡からは不明の土製品2点(DP4・DP5)が出土している。DP5は南東部のP4覆土上層から、DP4は覆土中から出土している。この土製品の特徴は断面が楕円形で両端が欠損しているが、環状を呈する遺物であると推測され、土製模造品の可能性が考えられることから、6世紀も、5世紀に引き続き住居の廃棄に際しての儀礼的な行事が執り行われたと考えられる。堆積状況は、第33号住居跡は自然堆積、第35・37号住居跡は人為堆積である。

以上の点から、次の3点が考えられる。

- 1) 住居跡には遺物の出土状況や堆積状況が一定の規則性をもっていることから、住居の廃棄の際に行った儀礼的な祭祀行為が行われたと考えられる。
- 2) 1期から祭祀は行われたが、2期に入ると滑石製の石製模造品を用いた祭祀が執り行われた。ただし、同時期の住居跡でも住居群1群につき1軒の割合で石製模造品が出土している。大平氏の主張を当てはめれば在地の首長クラスから家父長に相当する者に石製模造品が分配され、祭祀が執り行われた可能性が考えられる。
- 3) 6世紀代に入ると石製模造品から土製模造品へと変わっていく。

祭祀遺物に関しては、一般的に5世紀中葉以降盛行した石製模造品は6世紀の前半から中頃にかけて、次第に数量が減少する傾向を見せ始め、土製模造品が少数ながら出現する。そして6世紀後半にはほとんど消滅し、以後土製模造品と手捏土器が中心となる。古墳時代後期と考えられる第46号土坑から手捏土器が出土しており、当遺跡周辺でも使用されたことが考えられる。

今回の調査から当遺跡では、古墳時代を通して石製模造品から土製模造品、手捏土器と祭祀遺物が変化しながらも、祭祀の習慣を守り通してきたことが考えられる。

(2) 岩瀬盆地周辺の祭祀儀礼の比較

ここでは、岩瀬盆地周辺遺跡における住居内儀礼について比較してみた。

当遺跡から桜川上流に位置する真山遺跡では、5世紀中葉の第4号住居跡から管玉、双孔円板、剣形模造品が、5世紀後葉から6世紀前葉にかけての第1・12・17・28号住居跡から有孔円板、剣形模造品、管

玉、土製勾玉が出土している¹⁰⁾。

他の遺跡では、辰海道遺跡で6世紀の住居跡を中心に石製模造品が出土している¹¹⁾。金谷遺跡では5世紀の住居跡から床面全体に白玉やガラス製小玉が出土している¹²⁾。当向遺跡では6世紀末から7世紀初の第111号住居跡から剣型模造品1点が出土している¹³⁾。犬田神社前遺跡では石製模造品は確認できなかったが、7世紀初頭の第150号住居跡から土製模造品が出土している¹⁴⁾。遺物出土状況から金谷・当向・犬田各遺跡の集落では石製模造品を用いた住居内祭祀儀礼は盛んではなかったが、当遺跡や辰海道、裏山など桜川沿い近隣では他の地域よりも早い時期に石製模造品を使用した祭祀儀礼が行われ、これらの地域を中心に盛んであったことが考えられる。

5 小結

青木北原遺跡は桜川左岸の台地縁辺部に位置している。桜川の水の恵みは、絶え間なく集落が続く源となった。そして、この川の流れを介して先進的な文化が岩瀬盆地地区の中でも早く伝わる地域であったと考えられる。

また、羽田山、雨引山、長辺地山、加波山、筑波山が当遺跡の周りにそびえ立ち、山岳を神聖な場所として崇められてきた。当遺跡周辺には大国玉神社や雨引観音などの信仰施設も多くあるが、これらも太古からの祭祀や信仰を受け継ぎ、独自の信仰を育んできた。今回の調査報告が地域の歴史解明の一投石になれば幸いである。

註)

- 1) 岩瀬町史編さん委員会『岩瀬町史』1987年3月
- 2) 榊雅彦・小林健太郎「辰海道遺跡3 一般国道50号(岩瀬1C)改築事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第235集 2005年3月
- 3) 本書第3章4節参照
- 4) 茨城県史編集会『茨城県史料 考古資料編 弥生時代』茨城県 1991年3月
- 5) 石川日出志「茨城県北原遺跡再探墓の研究」『明治大学人文科学研究紀要』54 2004年3月
- 6) 5と同じ
- 7) 今平昌子「栃木県内における弥生時代の土坑について—山崎北遺跡の土坑群の検討から—」『研究紀要』第9号 財団法人とらぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2001年3月
- 8) 4と同じ
- 9) 飯島光宏「大和村史」1974年11月
- 10) 大平茂「土製模造品と形式文化」『季刊 考古学』第96号 雄山閣出版 2006年4月
- 11) 黒沢秀雄「裏山遺跡 一般国道西小塩真岡線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第73集 1992年3月
- 12) 芳賀友博「辰海道遺跡出土の石製模造品について—岩瀬盆地内における石製模造品の傾向—」『年報23』茨城県教育財団 2004年10月
- 13) 青木仁昌他「金谷遺跡2 北関東自動車道(協和～友部)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書XII」『茨城県教育財団文化財調査報告』第254集 2006年3月
- 14) 小澤直雄・小野克敏「当向遺跡1 北関東自動車道(協和～友部)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書III」『茨城県教育

財団文化財調査報告』第224集 2004年3月

- 15) 鴨志田祐一・早川颯司「大田神社前遺跡2 北関東自動車道（協和～友部）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第248集 2005年3月

参考文献

- ・協和町史編纂委員会「協和町史」1993年3月
- ・杉原荘介「栃木県出流原における弥生時代の再葬墓群」『明治大学文学部研究報告考古学』第8冊 1981年3月
- ・山岸良二「原始・古代日本の墓制」同成社 1991年3月
- ・佐藤政則「家屋内出土の祭祀遺物」日立市郷土博物館紀要2 1982年3月
- ・竹内理三編「祭祀遺物—模造品の変換—」『古代の日本2 風土と生活』角川書店 1971年3月
- ・平岩俊哉「古墳時代集落祭祀の一考察」『研究紀要』第12号 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1995年3月
- ・寺沢知子「祭祀の変化と民衆」『季刊考古学』第16号 雄山閣出版 1986年3月



第278図 青木北原遺跡遺構全体図

写 真 图 版
当 向 遺 跡 2



調査区Ⅲ区全景

PL 1

調査区Ⅱ区
調査前風景



第224号住居跡
完掘状況



第224号住居跡
遺物出土状況





第224号住居跡
遺物出土状況



第237号住居跡
完掘状況



第237号住居跡
遺物出土状況

PL 3

第 238 号 住居 跡
完 掘 状 況



第 246 号 住居 跡
完 掘 状 況



第 222 号 住居 跡
完 掘 状 況





第223号住居跡
竈完掘状況



第225号住居跡
完掘状況



第255号住居跡
竈遺物出土状況

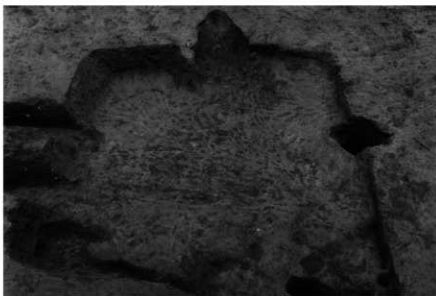
第228号住居跡
完掘状況



第231号住居跡
完掘状況



第232号住居跡
完掘状況





第 233 号 住 居 跡
完 掘 状 況



第 234 号 住 居 跡
完 掘 状 況



第 236 号 住 居 跡
完 掘 状 況

PL 7

第243号住居跡
完掘状況



第244号住居跡
完掘状況



第1号炭焼窯跡
完掘状況





第2号炭焼窯跡
完掘状況



第3号炭焼窯跡
完掘状況



第4号炭焼窯跡
完掘状況



SI 224-725



SI 246-740



SI 224-726



SI 224-729



SI 237-735



SI 237-733



出土土師器 (坏, 小壺, 甕, 甌, 手捏土器)



SI 237-734



出土土師器 (坏), 須惠器 (坏)

PL11



遺構外-799



遺構外-800



遺構外-798



SI 233-769



SI 222-742 [+]カ



SI 223-749



SI 233-770



SI 228-757



SI 232-766



SI 228-756

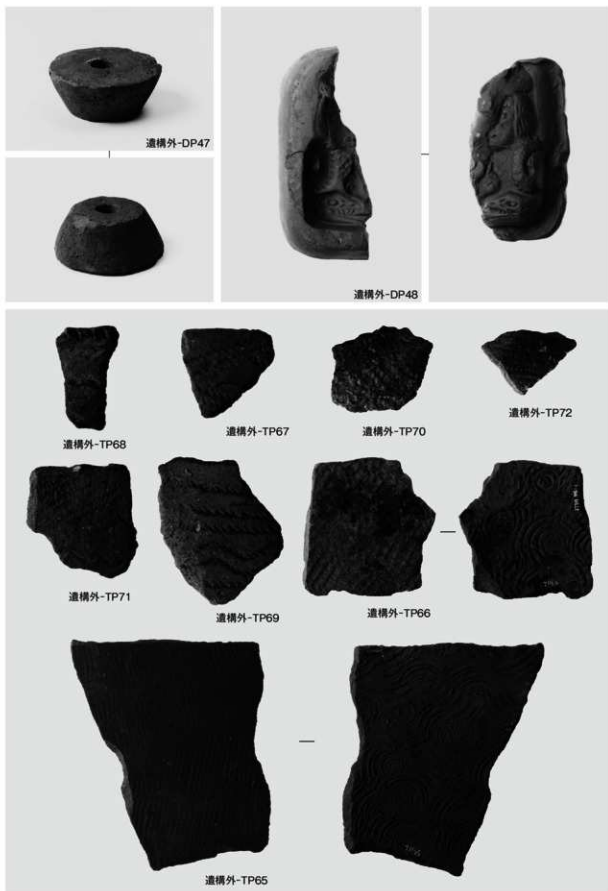


SI 225-754

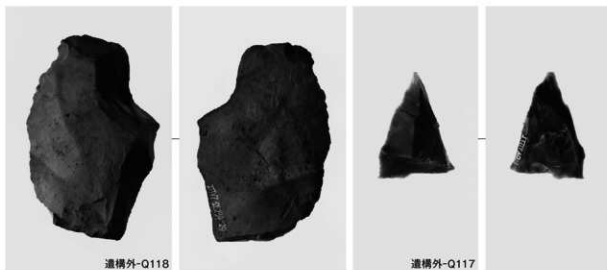
出土土師器 (坏・高台付椀), 須惠器 (坏・高台付坏), 土師質土器 (小皿)



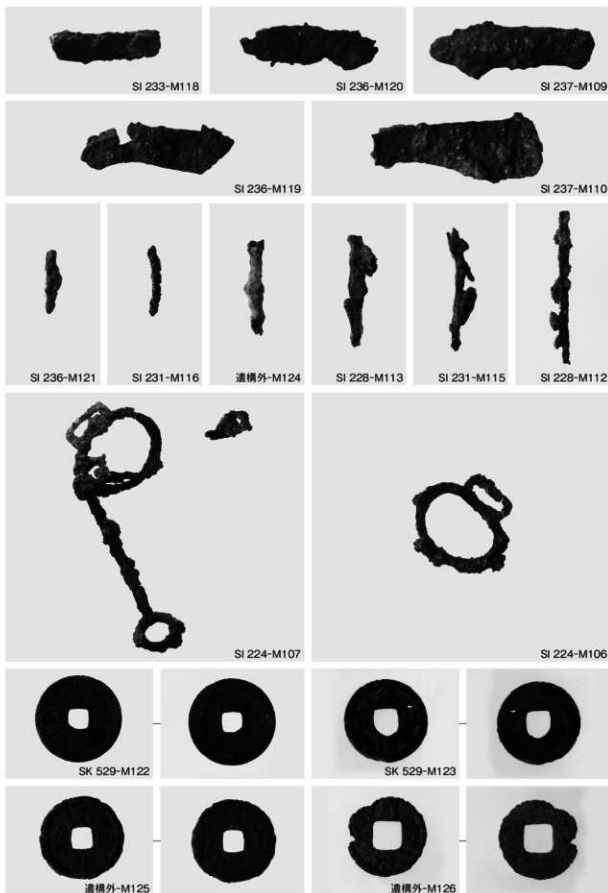
出土土師器 (甕), 須惠器 (蓋・高盤・甕)



出土土製品（紡錘車・炆型），縄文土器（深鉢），須恵器（甕）



PL15



出土金属製品 (刀子・鎌・釘・釦・古銭)



写 真 図 版

青木北原遺跡



調査Ⅱ区から筑波山方面を望む

PL 1

調 査 I 区
西 部 全 景



調 査 I 区
中 央 部 全 景



調 査 II 区
全 景 (東 西 側 从 ち)





調査II区
全景(東側から)



調査II区
西側全景



調査II区
中央部全景

PL 3

調査区
東部Ⅱ
全景



第5号住居跡
完掘状況



第8号住居跡
完掘状況





第12号住居跡
完掘状況



第13号住居跡
完掘状況



第13号住居跡
遺物出土状況

第14号住居跡
完掘状況



第16号住居跡
遺物出土状況



第17号住居跡
完掘状況





第22号住居跡
完掘状況

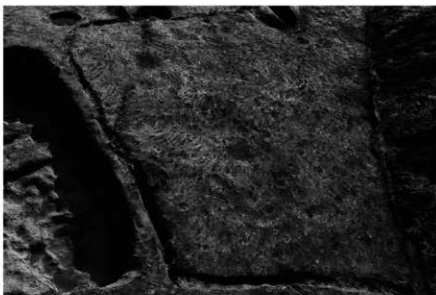


第23号住居跡
遺物出土状況



第26号住居跡
完掘状況

第28号住居跡
完掘状況

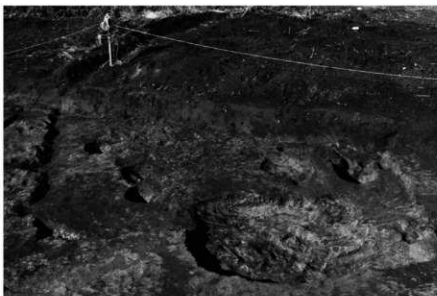


第31号住居跡
完掘状況

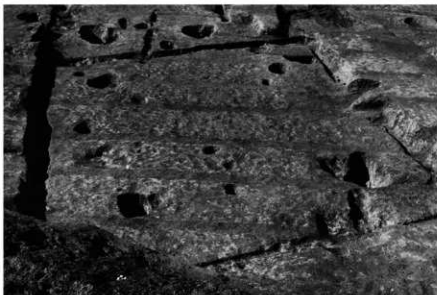


第31号住居跡
遺物出土状況





第35号住居跡
完掘状況



第40号住居跡
完掘状況



第51号住居跡
完掘状況

第55号住居跡
完掘状況



第61号住居跡
完掘状況



第64号住居跡
完掘状況





第64号住居跡
遺物出土状況



第64号住居跡
完掘状況



第68号住居跡
完掘状況

PL11

第68号住居跡
遺物出土状況



第2号住居跡
完掘状況



第6号住居跡
完掘状況





第7号住居跡
完掘状況



第18号住居跡
完掘状況



第20号住居跡
完掘状況

PL13

第20号住居跡
遺物出土状況



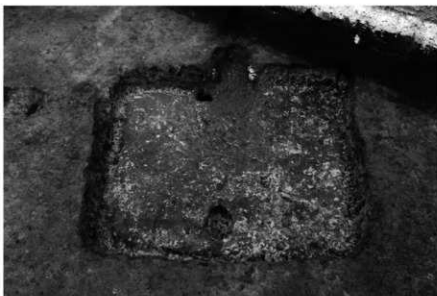
第24号住居跡
完掘状況



第50号住居跡
竈完掘状況



PL14



第52号住居跡
完掘状況



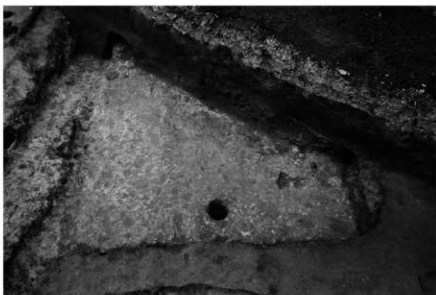
第52号住居跡
遺物出土状況



第53号住居跡
完掘・遺物出土状況

PL15

第54号住居跡
完掘状況



第56号住居跡
完掘状況



第57号住居跡
完掘状況





第59号住居跡
完掘状況



第59号住居跡
遺物出土状況



第60号住居跡
完掘状況

第63号住居跡
完掘状況



第63号住居跡
遺物出土状況



第65号住居跡
完掘状況



PL18



第66号住居跡
完掘状況



第66号住居跡
遺物出土状況



第1号方形竪穴遺構
完掘状況

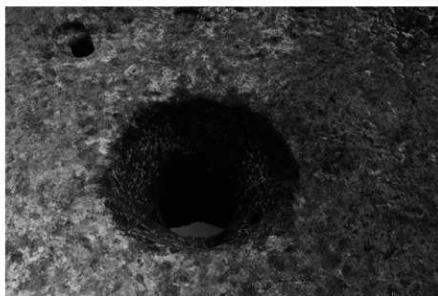
第 1 号 井 戸 跡
完 掘 状 況



第 2 号 井 戸 跡
完 掘 状 況



第 3 号 井 戸 跡
完 掘 状 況





第 15 号 土 坑
遺 物 出 土 状 况



第 3 号 土 坑
遺 物 出 土 状 况



第 88 号 土 坑
遺 物 出 土 状 况

PL21



SK15-207



出土弥生土器（壺）



SI 33-83



SI 17-40



SI 33-82



SI 25-51



SI 42-95



SI 64-120



SI 47-102



SI 47-101



SI 35-85



SI 13-20



SI 61-111



SI 68-130

出土土師器 (坏), 須惠器 (坏)

PL23



SI 35-86



SI 4A-3



SI 17-38



SI 8-9



SI 31-66



SI 23-48



SI 42-96



SI 13-21



SI 8-8



SI 26-61



SI 13-22



SI 26-55

出土土師器 (坏・鉢)



SI 61-113



SI 13-26



SK 3-209



SI 23-49



SI 16-33



SI 13-27



SI 26-57



SI 8-11



SK 3-210



SI 13-25

PL25



SI 61-118



SI 64-127



SI 9-15



SI 31-68



SI 31-69



SK 46-213



SI 13-24



SI 67-129



SI 26-60



SI 61-115

出土土師器 (碗・鉢・手捏土器)



出土土師器（埴），須惠器（高台付杯・蓋）

PL27



SI 61-116



SE 1-204



SI 31-72



SI 31-71



SI 16-34



SI 31-80



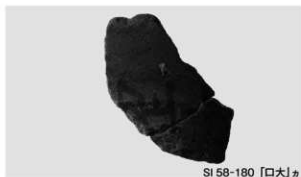
SI 22-45



SI 17-41

出土土師器 (高坏・甕・小形甕), 須恵器 (捏鉢)





SI 58-180 「口大」カ



SI 50-156 「升」カ



SI 52-160 「廣方」カ



SI 50-154



SI 20-147



SI 65-199



SI 63-196



SI 56-173



SI 63-194

出土土師器（墨書土器），須恵器（坏）



PL31



SI 52-162



SI 52-163



SI 52-161



遺構外-216



SI 50-159



SI 52-165



SI 66-201



SI 52-171

出土土師器 (高台付皿・高台付碗・碗・甕), 須恵器 (甕)



SK 78-TP42

SI 68-TP20

SI 61-TP13

SI 50-TP28

遺構外-TP55



遺構外-TP50

遺構外-TP53

SI 61-TP14

SI 55-TP11



SI 64-TP17

SI 18-TP24

SI 18-TP25



SK 15-TP34

SK 15-TP33

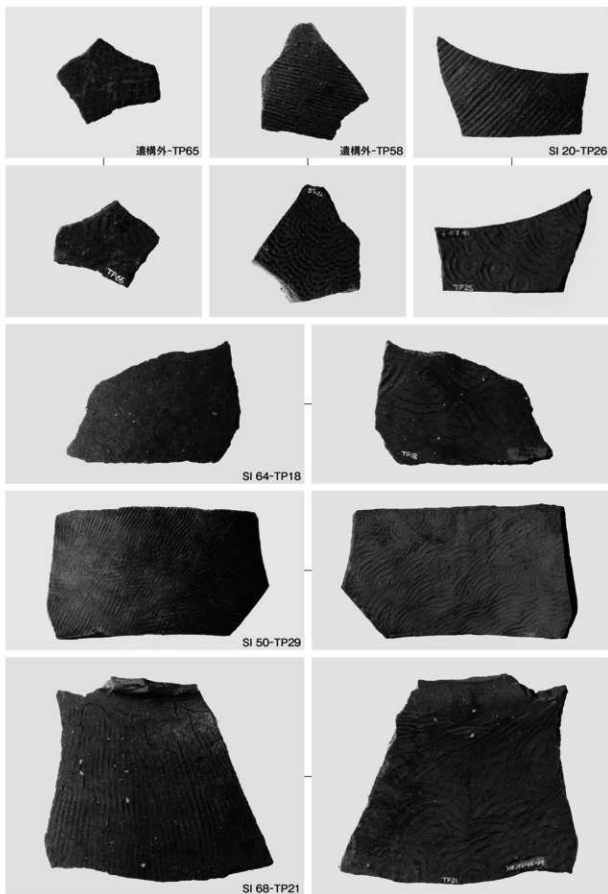
SI 40-TP3



遺構外-TP46

SI 64-TP16

PL33



出土須恵器 (甕)



SI 39-DP32



SI 37-DP7 ~ DP27



遺構外-DP35



SI 61-DP29



SI 35-DP3



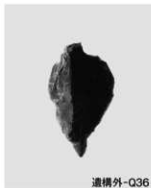
SI 26-Q9



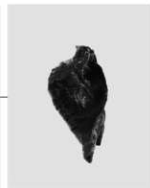
SI 62-Q20



SI 38-Q12



遺構外-Q36



遺構外-Q35

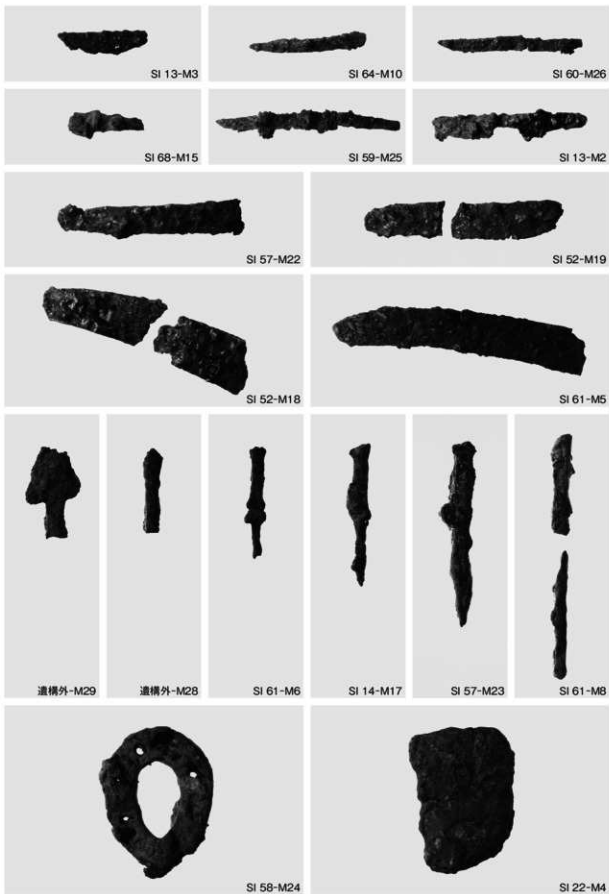


出土土製品（土玉・小玉・紡錘車・支脚），石製品（剣形模造品），石器（剥片）

PL35



出土石製品（管玉・白玉・有孔円板・双孔円板・紡錘車）、石器（砥石・磨石）、ガラス製品（小玉）



出土鉄製品 (刀子・鎌・鋸・釘・鈎・鉄磁力)

茨城県教育財団文化財調査報告第271集

当 向 遺 跡 2
青 木 北 原 遺 跡

北関東自動車（協和～友部）建設
事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ

平成19（2007）年3月19日 印刷

平成19（2007）年3月23日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587

印刷 山三印刷株式会社
〒311-4153 水戸市河和田町4433の33
TEL 029-252-8481

付 図

茨城県教育財団文化財調査報告第271集

当向遺跡遺構全体図



付図 当向遺跡遺構全体図 「茨城県教育財団文化財調査報告第271集 当向遺跡2」